乾山焼　画讃様式の研究（二）
草花・竹木・その他

リチャード・ウィルソン
小笠原　佐江子

はじめに
乾山焼作品：画讃様式
一、花鳥画
（一）中国：花譜・画譜
（二）日本：乾山焼との関わり
二、主題別考証
（一）草花木
（二）竹木・その他

はじめに

花は自然の恵み、生命力、鳥は神霊の象徴である。

花は静、鳥は動、花は生きるために鳥や虫の活動を必要とする。古くは豊穣の予祝を花、神の乗りものを鳥としたが、花・鳥の使者を問うならば詩人・歌人・画人こそがそれであろう。

花は季節を飾り、鳥は音色を以って問いかける。自然の美、習俗、文学や芸術のほか、人の気性や品性、倫理、道徳などの表徴となるが、日本では花といえば世阿弥の「花」が思われる。花は散るもの、失せるもの、それ故にこそ時の移りの儚さを伝え、愛でる心に哀れを誘う。時分の花、眞の花、本居は無我無心にこそあるとするが、花は事物にあるのではなく、人の心にあるという。

日本の美の真髄は、花の文化に随うともいえる。富貴栄華、隠逸野趣、いづれにしても花・鳥は心の友、四時をめぐり、咲き、うたう。

乾山焼作品

一、花鳥画

（一）中国

「花鳥画」は花木、草虫、鳥、魚藻、蔬果を組み合わせたもの、「花卉画」は草花、虫や犬猫などの小動物を混じえたもの、「折枝画」は花枝を切り取り、「一枝画」は花枝一枝に集中したものに分けられる。

鳥類は先に「山水・人物・禽獣画」（同誌四七号）に述べたこともあり、ここでは乾山焼画讃様式花鳥画に関係して草花・竹木図を主体とした。

花鳥画は六朝時代南朝に萌芽、唐代に成立、宋代に至って本格的な画題となる。詩宴・遊宴を盛んに催す上流社会に基盤があり、貴族間に流行した宮体詩のもと、花は女性の美しさ、唯美的な趣きに捉えられるなど、手にした扇に描かれた蝉や雀、芙蓉や牡丹図などをはじめとする。『宣和画譜』は絵画中最も人気を得ていた画題であったことを伝えるが、細密描写・形似美から、やがて気韻・写意など花の本質、詩人・画人の精神を写し出すものへと進展、暗示的な描写は詠物詩（題詠詩）、画面の構図・構成は山水画などの画法・技法が影響を与えたとする。

植栽、花を供することはメソポタミア・ペルシャ地方に早く、ギリシャ・地中海、ヨーロッパではイタリア・フランス・イギリス・ドイツへと拡散する。西洋でも花の歴史は上流階級の嗜好によるが、豪奢な暮らし、広大な土地、苑内の名花・珍花は、権力・富・名誉・繁栄に無縁であった下層階級のものではない。

中国では、花鳥文様は新石器の彩陶器、殷周代の青銅器、漢代の墳墓の画像石・壁画などに現れる。「聖人之於道　猶葵之興日也」（『淮南子』）など、常に葵花が太陽に向かうが如く、文学同様、画にも聖人の道に対する誠実な志、勧戒の意を含ませたが、初期花鳥図は一つに装飾、二つに勧戒、三つに魔術的な意味合いが込められていた。

神仙思想の影響もあり、古代中国では鳥は花に先立ち文様化されていた。四世紀、六朝時代に仏教の渡来とともに、パルメット（棕櫚）文様が伝播、花の意匠が大きく変わる。パルメットは仏教以前の古代エジプト、ギリシャ、インド思想を反映する唐草様式の文様である。仏教に先立ち、蓮の華を万物創造の根源とした神話に起因、中国では鳥文様と併合するなど、独自の唐草意匠へと変容させるが、ここに花鳥文様の起源があり、七世紀、西域との交易を深めた唐代、それは更に複雑化した法相華文様へと進展する。

六朝代梁の張僧繇（生没年不詳）は、インド渡来の暈染法を習得、明暗、深浅の技法を以って立体感のある草花「凹凸花」を描く。花の画題は、詩文の盛行、その詩文に花枝を添えて贈る風習、盆栽、花木の観賞など

の流行する盛唐時代に確立する。徳宗代（七七九―八〇四）辺鸞（生没年不詳）は花鳥画の始祖となるが、「花鳥」の語は張彦遠著『歴代名画記』（八二五？―？）に始まるとされ、彦遠は絵画を人物・屋宇・山水・鞍馬・鬼神・花鳥の六種に分類、豪華と野趣、彩色と無彩色（水墨画）、形似美とその精神を写す二様態のあったことを呈示した。工芸品は多くインド、中近東の花鳥文様を応用するが、画は辺鸞、滕昌祐（生没年不詳）、刁光胤（生没年不詳）など、五代十国後蜀の黄筌（九〇三頃―六五）は昌祐、光胤に学び、鉤勒填彩、輪郭線と色絵具を用いて華麗、豪華な花鳥画を描く。北宋代、翰林図画院に招かれ黄筌画は初期画院様式として定着するが、他方、南唐代（九三七―七五）、鐘陵（江西省）に徐熙（生没年不詳）が現れる。写生を重視、写意を貴び、濃墨により対象物の相を捉え、その技法は「落墨花」、輪郭線のないところから没骨法と称された。絹面よりは紙面を好み、野趣を尊重、のち黄筌との対比から「黄筌高貴」「徐熙野逸」と評されたが、ともに作品は伝世せず、宋代の模写によれば細密彩色画の黄氏体、水墨淡彩の徐氏体の二様がわかる。宮廷では黄筌息黄居寀（九三三―？）の活躍もあり、黄氏体が専らとなるが、画院は隆盛、両様式を折衷し、趙昌（？―一〇一六頃）、呉元諭、崔白らは、形似を超越、徐々に内から外へと対象物の精神を写す画法へと深行させる。

宋代はこれらの院体画に対し、士大夫画、禅僧の墨戯が盛行、花鳥を描き、文同（一〇一八―七九）、蘇軾（一〇三六―一一〇一）は墨竹、釈仲仁（一〇五一？―一一二三）、揚補之（一〇九七―一一六九）、は墨梅、趙子固（一一九九―一二六四）は蘭図などを得意とした。詩歌に倣い事物・人物に仮託、寓意を寄せることも特色となり、花は世の中を明るくし、人の精神に調和を与えると考えた（『宣和画譜』）。『詩経』には多くの鳥獣草木の名がみられる。四季、栄枯のさまも詠じられたが、士大夫、画人はそれを範に、花鳥画にも文学の教養、詩人の如き表現技巧を提唱した。形似の美から対象物の内なるものへと生意を探り、作者の意思、気韻を尊重、詩画一致の理念が生ずる。詩人に順い画題も身辺の常事へと移行するが、花鳥画では牡丹・芍薬、鳳凰・孔雀を描いて富貴の情、松竹梅菊、鴎鷺雁鶩を描いて閑にして慎しみ深く、鶴を描いて俗を離れ格調高い精神を維持、鷹は鋭い戦闘心をもって描くことを大事とした。対象物の本質を知り、画面に向かう。結果、自然の景物に心は融合、浄化された心境が絵画に反映、人を刺激、善導すると考えたが、繰り返し古典を学び、本性、その心を捉えて絵画と成すこと、ここに文学、詩歌と絵画の結びつきが明確になり、画中の詩、詩中の画の意が合点される。壁画、巻物・軸物のほか、この頃から画帖、扇面画も人気を集め、花鳥図も草・花・木一種のみで構成する折枝画が親しまれてゆく。

南宋代は再興された画院において細密かつ豪放、静に動を加えた李迪（生没年不詳）・李安忠（生没年不詳）、後期に至り在野画人・画僧らが活躍する。西湖六通寺画僧牧谿法常（？―一二八〇頃）もその一人、山水画、花鳥画を得意とし、石恪や梁楷の画法を継承、心象表現、抽象・具象を混合した独自の絵画様式を創り出す。斬新な構想、景物を片側に集める辺角構図・構成、描法なども南宋画の特色であるが、花枝を切り取る折枝画は異民族に国を奪われ苦悩した南宋人の政治観に繋がりをもち、「露根蘭」など

亡国の情を示す意とされた。民間では寺院壁画・墓室、地方の建造物の絵画制作、宮廷の徴用にも応ずるが、各種画事、工芸品の製作・絵付けなどにも携わり、印刷技術の発展から挿図制作、デザイン、さらに一般化した掛物の仏画、道釈画、肖像画、年画を描くことにも関与する。絵画売買の行商もあり、定期市の開催もあったとされる。

初期画院の定まらなかった元代は、専ら在野画人の活躍となり、文人画は大きな進展を遂げる。写意に深い趣きが加えられ、画の巧みは書の巧みとした書法・画法の一致論が盛行、銭選（一二三九―一三〇一）、王淵（生没年不詳）、李衎（一二四五―一三二〇）、王冕（一二八七―一三五九）など、蒙古人の支配下、教養人を自負、詩書画の結びつきを強くする。花鳥画も山水・人物画に並び絵画の主要分野として認識、装飾的な宋代黄氏体への回帰のほか、墨戯は士大夫精神を反映、文学性を加味、民族の誇りと故国宋への憂情を託し墨蘭・墨菊・墨梅図、苦難に耐える松竹梅・歳寒三友、孤高、隠逸の思想をもとに四君子などが画題となる。明代には画院も復活、画人層も拡大した。宋・元の院体画、線描・色彩・装飾的な花鳥画様式を継承、宮廷には辺文進（一四〇〇―四〇頃）・呂紀（一四七七―？）など、写意・水墨の画法では林良・范暹、野にあっては江蘇省の沈周（一四二七―一五〇九）、浙江省の徐渭（一五二一―九三）らは写意派を継承。詩書画を友とし、水墨、没骨法による花卉・鳥獣、雑画などに心を寄せる。花鳥画は巧麗、文人画では志気を重んじ、生命感のある画人の技が尊重されたが、一つに高踏的なその精神を反映、二つに吉祥・縁起という世俗の願いを取り入れるなど、雅俗二重の意味を蔵する。

―花譜―

花の文化は、民族の思想・風習・嗜好などを反映、上流階級の庭園造営、園芸趣味に支えられ培われた。

花譜は貴族文化の繁栄した六朝代に始まるが、花の記録、四季折々の草花木を纏め、図示、論を交えた書物である。後世には画譜に重なるが、『南方草木状』（嵇含）・『魏王花木書』（散逸）、花譜ではないが『古今注』（崔豹）ほか、隋代には『種植法』（諸葛颖）、唐代には花卉栽培が進むとともに花園が出現。花の販売、観賞なども行われ始め、『百花譜』（賈耽）・『園庭草木疏』（王方慶）・『平泉山居記』（李徳裕）、類書では『初学記』（徐堅）・『酉陽雑俎』（段成式）などに草花関連の事項が取りあげられた。宋代は観賞も盛行、生産者・販売者も増大するが、花の市場が出現し、徽宗代には梅園・梨園・薬草園、温室栽培も活発化。移植技術の進展は南方の植物を北方へ、東方から西方へと移植するなど、運搬には特殊な船団も作られたという。書物も多く、儒教理念に結びつけられ、人物の比喩、寓意、思想の表徴となり、花に関する紀要・雑著・詩詞を集成した『全芳備祖』（陳景沂）、また『洛陽花木記』（周師厚）・『桂海虞衡志』（范成大）、類書では『太平御覧』（李昉）、専門書には、梅：『華光梅譜』（仲仁）・『范村梅譜』（范成大）・『梅花喜神譜』（宗伯仁）・『松斎梅譜』（呉太素）等、菊：『范村菊譜』（范成大）・『菊譜』（劉蒙）・『菊譜』（史正志）・『百菊集譜』『菊史補遺』（史鋳）等、蘭：『王氏蘭譜』（王貴学）・『金漳蘭譜』（趙時庚）等、海棠：『海棠譜』（陳思）等、牡丹：『洛陽牡丹記』（歐陽脩）・『天彭牡丹譜』（陸游）・『陳州

牡丹記』（張邦基）・『牡丹栄辱志』（丘濬）等、芍薬：『芍薬譜』（劉攽・貢父）・『揚州芍薬譜』（王観）・『芍薬譜』（孔武仲）などが掲げられる。明代はさらに商品化、各地の特産物も拡大するが、牡丹と菊の栽培は著しいとされ、花卉業者も成長。花の保存・加工法を記した『五雑俎』『学圃雑疏』（王世懋）、『遵生八牋』（高濂）・『汝南圃史』（周文華）・『羣芳譜』（王象晋）など種々の園芸書、専門書、文人書が刊行された。

―画譜―

画譜は、絵画の手本となるものを集成、画を学ぶ者の指南書である。技法においては描法・墨法・色彩法、構成では構図、対象物の組み合わせ方、伝統と称するものの道筋を教示、古典と称されるものを繰り返し学び、技を究めつつそこから定型を突き抜ける力を養う。画譜には絵本・教本、名画集（複製）、詩画集、教本と名画集を兼ねたものがあり（小林宏光『中国の版画』）、南宋代に始まり、画家人口や鑑賞者が増加する明代には大流行、文人趣味が盛行し、彼らの評価、理論、歴史の解釈などが本居となった。

宋代、文学と絵画の関連が緊密となる。印刷技術の進歩もあり、筆致、構図、絵画理論や図解のまとめなどが出版されたが、元代は通俗小説、大衆芸能が流行。版画、諸本の挿絵とその転用からやきものなどへの絵付けが始まり、詩の視覚化、物語や故事・逸話の内容理解のための補助となる。花鳥画譜には『華光梅譜』・『梅花喜神譜』・『松斎梅譜』ほか、『竹譜詳録』（李衎・元代大徳三年編・一二九九）、明代には嘉靖年間（一五二二―六六）に『竹譜』『蘭譜』『菊譜』『梅譜』『翎毛譜』、萬暦年間に『図絵宗彞』（三五年刊・一六〇七）・『詩余畫譜』（四〇年跋・一六一二）、その他『十竹斎畫譜』（胡正言・天啓七年刊・一六二七）・『芥子園畫傳』（李漁・康熙一八年刊・一六七九）・『八種画譜』（草花関係：『梅竹蘭菊譜』『大本花鳥譜』『草本花詩譜』）などが刊行。画法を示し、理を述べ、図解、関係する詩句を添える。画を表に、詩をその裏また別頁に記載するなど、著名な詩人・詩句を集成、表現には異なる書体・書法、余白の活用、散らし方にも変化、工夫が凝らされる。ここに乾山焼画讃様式の着想が結びつくが、当時日本へは明代の畫譜・版画が多く移入、江戸期はそれらの翻刻も盛んになり、画譜は好事家、素人に加え画家も重要視、『八種画譜』は寛文一二年（一六七二）・宝永七年（一七一〇）、『図絵宗彞』は元禄一五年（一七〇二）、『芥子園畫傳』は寛延元年（一七四八）に和刻化された。おそらく乾山の蔵書には全て加えられたものと考えるが、乾山焼画讃様式の一つの典範がここにあり、市井における漢詩・漢文への興味と知識欲、その熟成度を承知した乾山の洞察力、時代を読む力が明らかとなる。

（二）日本

日本の花鳥画は、一つにこれら漢画様式、宋・元・明代に定着した文人的見解・画論・画法、二つに大和絵形式、日本本来の自然観と伝統的な見方を合わせた様式に分けられる。着色、水墨の二様体がある。

古くは実用植物、稲・粟・麦、蓮や桜・椿などが身近にあり、躑躅・山吹・菫などの野の花を愛でることも行われていた。が、梅・桃・葵・橘・梨・棗・柳などが渡来、食用、薬用、染料、繊維・木工・細工物の素材となるほか、遣唐使により花の文化が伝えられると、中国同様日本でも貴族中心の王朝文化に組み込まれてゆく。和歌に詠われ、屏風に描かれ、調度品の意匠となるが、日本では和歌の盛行が絵画の発展を促した。

中国では詩文は「載道」、政治、思想を載せる器であった。が、和歌は人の情を語る法、四季の変化や景物、風情、人事などを伝えるための手立てであり、花鳥は人の性情、品位、倫理の代弁者。小色紙に描かれた和歌とその意は小景画となり、屏風などの大画面に貼り付けられる。日本の生活、建築様式に密着し、襖・屏風、調度、趣味や娯楽、工芸品匠に応用されるが、一つに万葉以来の自然観、二つに大和絵などの平明かつ細密な表現技巧、書芸における空白美の尊重など、さらに梅に雀・藤に鶴・流水に千鳥ほか複合的な構成は、平安後期、日本の意匠構成の本拠となる。鎌倉期は大陸的な思想・学問・文事・芸事を広く受容、禅人・武人が中心となり形似を超えて写意、直截、簡明な表現を好しとした。造園も山水画に似て「尺寸の間に千岩万壑」を演出するが、南北朝期は建築、庭園、園芸、栽培にも力が注がれ、和歌の復興した室町期には花に纏わる美意識、感性などが深められる。品種改良も大きく進展、花の文化が定着するが、苑・園には名花・名木、鳥魚が飼われ、自然を抽象化、幽玄枯淡の趣きなども培われる。が、明日の命を期すことのない戦国時代、それは今生きること、余情を切り捨て現実をみる通念に切り替わる。大名の城館、菩提寺などには金碧濃彩の花鳥画が出現。一方で黒・灰色、「清寂」も提唱されるが、大胆な片身替りや空間対比の文様配置、他方において並び連ねる古来の構成、精神性、詩情、物語性などは姿を消す。が、花鳥画は人の心を和ませる主題・画題、つねに主流を占めており、江戸期は家康をはじめ将軍家の花好みが大名家、臣家、富裕町人らの庭へと進展。元禄時代、花の文化は公家・武家・寺社・庶民間に根を下ろし、身分制度の最下位にあった商人は富を以って浮世にはかない人間解放の花を咲かせる。菊人形、花見行事など行楽も一般化。絵画は幕府御用絵師となった狩野一派、宮中御用絵師の土佐一派が中心となる。

―乾山焼との関わり―

唐詩と比肩、平淡、理知的、激情を抑えた作詩態度が宋詩である。

貴族好みの花鳥風月、諷刺・不遇・悲憤を訴える様式から、庶民士大夫中心となる宋代は、装飾性をきらい、日常些事、到達した静かな心境を詠ずる態度へと移行する。詩は人格とした通念が支配、深い情趣を旨としてしみじみ心に訴えかける。宋詩の基礎を固めた一人梅堯臣（聖愈・一〇〇二―六〇）は「陶工」と題した五言絶句を残しているが、

陶尽門前土　屋上無片瓦
十指不霑泥　鱗鱗居大廈

日夜働く陶工の屋根上には一枚の瓦もない。が、泥に触れることすらない人の豪邸には鱗の如くに屋根瓦が並ぶと詠う。賃仕事の労苦を伝え、陶工の地位の低さ、暮らしの貧しいことを物語るが、中国でも報いられ

ることのなかった職業がやきもの師である。が、国変わり、時代も遷り、意識も変化、経済力を蓄えた富裕町人が実力を示し始めた元禄期、日本にそのやきもの師に挑戦した人物が現れる。緒方深省乾山である。富裕の出自、求めて隠棲、独り志を養うなど、当然、結果は従来のやきものに相異、用の器は芸の器、培った教養人・隠者・文人の理趣・情致が入り込む。

茶の湯が盛行、市場にはさまざまな陶磁器が出廻っていた。文物は溢れ、江戸期はやきものも陶土、釉薬、形状などの賞玩から、装飾性、意匠性、器物に用途以外の風情、特質を求める時期に入る。乾山は時代を先取、目に楽しく、手に取って面白く、さらに判じ絵的な遊び心を誘い出す。扱う者は和漢の知見を必要とし、対する側も同じである。使い捨て、無名であったやきものに作者を明かし、落款、花押や印を押捺する。土を用いて土とはかけ離れた要素を活用、陶の規範を打ち破り、雅味、高尚、土に異なる風韻をしのばせる。巷間には町人詩人・歌人・画人も多く、茶会・句会・演芸披露会なども盛んであった。俵屋宗達（生没年不詳）、尾形光琳（一六五八―一七一六）も町絵師である。明快な判断と確かな技術、在来の典型を脱し、新たに絵画と工芸の接点を創り出すが、町人は嗜好においても自由であった。出版物も掌り、市井の需要に応えるべく、専門書・手引書・娯楽本ほか、即席にして知識を充足、古典の断章、名句・名言、成語などを拾い出し、誰もが即座に理解のできる文芸世界を提供した。

「高く心を悟りて俗に帰るべし」とは芭蕉の言である。通俗化した俳諧を文学の高みへと導くが、「高い」ことはただ文学的、芸術的では持ちまわれない。乾山はそれを陶の分野に試みるが、時代は、連歌・俳諧・小説など個人の活動、個人作家の意識も旺盛、育んだ才知・才能を開花させる。出入りの許された和歌の家二條綱平、光琳の画技、仁清窯、父から譲られた蔵書も拠り所、何より自身の書の実力、経済力、独照禅師に導かれた精神力が要であったと推測する。

乾山焼の画讃様式は、多く和漢の文学に関係する。和においては和歌、謡曲、俳諧の世界が垣間みられる。漢詩においては唐代から明代に至る詩人と詩句、用いたものは流布していた作詩、鑑賞の手引書『圓機活法』『詩學大成』、個人の詩集が掲げられる。西鶴、近松、芭蕉らもそれを応用、作品には自然に融け込み、劇場では客を喜ばせ、茶会、句会では新境地開拓の一助を担ったものと考える。

草花竹木図では、四言・五言・七言句、百花・百果・百草・竹木・樹木門が中心である。現存する作品からは梅・菊・蘭・竹・松・柳など、一つには乾山の意図・嗜好を反映する文人趣向、二つに牡丹・芍薬など、富貴・吉祥・縁起など巷間の求めに応じた画題に分けられる。画讃様式は詩・書・画の関わり、質・形式に繋がりをもち、乾山窯の陶技・陶法に結びつく。これこそ真贋判定の基準となるが、乾山焼は山城国の土産となった。当初をはじめ、文化・文政時代、明治時代へと模倣は継続。作品か製品か、模倣品の総体には必ず不備・不整な箇所が現れる。乾山は、奥義「其処」に至り（至ったが故）、能役者・書家・儒者・仏者・やきもの師にはならなかった。乾山の前また後に乾山焼の現れなかった証しであるが、真似の世の中、が、真似るためには真似るだけの強さが要る。

「墨花（墨菜）」の出典とその変遷

中国：草花図・図巻・刊本

図・図巻

芙蓉図　牧谿　一三世紀

茄子図　牧谿

写生巻　伝牧谿
台北故宮博物院

花卉巻　趙衷元
（一三六一年）
クリーブランド美術館

刊本・画譜

梅図　『松斎梅譜』

蘭花図　『図絵宗彝』

菊図　『八種画譜』

竹図　『芥子園画伝』

中国刊本・画譜出版年代
『松斎梅譜』元末一四世紀中頃刊
『図絵宗彝』万暦三五年（一六〇七）刊
『八種画譜』天啓年代（一六二一―二七）編纂
『芥子園画伝』康熙二八（一六七九）刊

日本：草花図・縮図・模本・画稿・刊本

図

蘭竹図　伝鉄舟徳済

蘭竹図（部分）　玉畹梵芳

茄子図　伝松花堂昭乗

中国では宋代、草花図は二つの伝統、鈎勒法、没骨法のもとに発展した。写生を重視、画院における重彩鈎塡、写実的な描写、対するは唐代に始まる水墨画、写意重視の描法である。寓意を潜めることも特色であったが、南宋代杭州六通寺の牧谿法常（生没年不詳、一二八〇年頃没か）は形似を求めず、粉飾を去り、物の真意を的確に表現。絵画は日本に渡来するなど、本朝水墨画の成立に大きな影響を与えてゆく。禅においては無準師範門、入宋した聖一国師とは同門であり、帰国に際し国師は牧谿画を持ち帰ると伝承。画法は一四世紀後半、同じく禅門鉄舟徳済、玉畹梵芳ら画僧が継承、足利家同朋衆相阿弥ら阿弥派一派が取り入れる。

室町期は禅寺の書院形式をもとに書院造りも成立していた。座敷には床・違棚・付書院（書見のための室）が考案されるが、大広間には飾り法式が制成。折から盛行した茶会、会所飾りの法式をもとに床の間には双幅・三幅の掛物、その前に香炉・花瓶・燭台をおき、棚には香合、机上には硯箱、文房具などを陳列した。巻物や帖の書・画は断ち切られ、掛物として表装、茶掛と称し茶の湯において多用されたが、静寂かつ簡素な表現は茶の理に合致、牧谿画は多

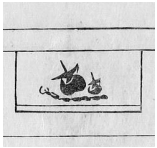
図・縮図・模本

茄子図・梅図・菊図

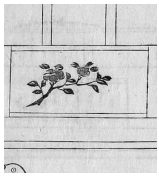
「縮図」狩野探幽

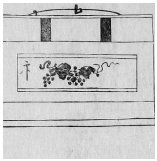
蘭図・竹図『唐絵手鑑』狩野常信

刊本・茶掛図

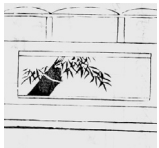


茄子図・椿図・葡萄図・梅図『雪月集』（元禄五年刊・一六九二年）



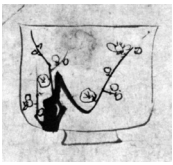


竹図『古今茶道全書』（元禄七年刊・一六九四年）



光琳：下絵・画稿

茄子図・竹図・蘭図　光琳画稿（小西家文書）



光琳　梅図茶碗絵手本

刊本：画譜『画筌』

菊図・蘭図・芙蓉図・竹図『画筌』（享保六年刊・一七二一年）

『画筌』は狩野派絵師林守篤の著した和漢折衷の画譜である。狩野幽元に師事、その粉本を基にした図録とされ、初学者に対し基本を教示した書である。

く禅寺に伝来するなど、やがて長谷川等伯、松花堂昭乗、俵屋宗達らの水墨画を招くことになる。幕府御用絵師狩野派は権威を誇り、一派の基礎固めの一手としても中国絵画、室町漢画に通ずることを特権とした。探幽（一六〇二―七四）は宋元画の縮図を描き、注釈を添付。甥常信（養ト・一六三六―一七一三）は『唐絵手鑑』『唐画巻』など小品写しの画帖を作成、粉本・模本・大画面のユニットとして活用される。やがてそれらは日本における画譜制作への関心を促すが、画譜は教本・絵本、知識と娯楽が混在しており、京都、江戸、明版、和刻版ともに流通する。元禄期、乾山は当然それらに目を通すことができたであろう。狩野一派が抵抗したとして、出版熱は醒めやらず、享保年間には遂に日本の画譜・絵本、橘守國による『繪本写寶袋』（享保五年・一七二〇）、林守篤の『画筌』（享保六年・一七二一）が刊行される。狩野派様式の画題、画法が明らかになり、寸法、筆致、解説の添書によって他工芸への転用も容易となるなど、絵師、画の修行者のみならず、数寄者・趣味者へと広がりをみせる。尾形乾山もその一人。画譜・絵本から得た構想、兄光琳の助力もあり、自らの能書はもとよりのこと、隠棲した習静堂園中の樹木草花一つ一つも支えとなり、画讃様式が準備された。

乾山焼　草花・竹木画讃様式

平面作品：角皿・額皿類

京都：鳴滝時代

乾山焼画讃様式角皿箱と箱書（藤田美術館）

（箱表）乾山角皿・貳拾枚之内・拾枚

（貼紙）光琳・乾山合作画賛四方平鉢・拾枚

製作年代（寶永辛卯歳・一七一一）の証明（角皿裏面）

平面・立体作品：角皿・香合・茶碗・鉢・火入類

鳴滝から二条丁子屋町時代

江戸：入谷村時代

江戸：佐野逗留時代

山水・人物・禽獣画につづき、ここでは乾山焼画讃様式、花卉・一枝画中、規範となるもの、画題、様式、乾山自らの手跡の確認できる作品を集成した。藤田美術館にはこれらを代表する光琳・乾山合作角皿一〇枚、それを収めた箱・箱書付けが現存する。合作作品の確認、貼紙によれば角皿は四方平鉢とあり、硯蓋に限定されていなかったこと、人物・禽獣図を含めこれら角皿は組物製作であった可能性。が、箱書は乾山自筆ではなく、入手者が好みに従い適宜組み合わせたことも考えられる。箱蓋内側には梅・菊・福禄壽・真向福禄壽・竹雀・人物・竹（寂明書入）・竹（賛四字）・芦鶴・布袋・恵比須・大黒ほか、墨で消去した作品名もあり、合計一六枚が蔵されていた。一方、「享保九甲辰閏四月吉日　ふくむら」（一七二四年）とした銹絵絵替角皿八枚、それを収めた箱も伝世。これらには光琳銘はなく、様式・書・落款・印なども相異。製作者、時代の異なりを推測するが、窯元・購買者、いづれにしても時代は事物の取り合わせ・組み合わせが一種の流行であった折りである。

梅・菊・松・竹・柳などが描かれ、乾山の嗜好、巷間の需要に応えたものと考えるが、画讃様式は乾山焼の商標となる。そこでそれらの多量生産、定型化、簡略化に踏み切るが、折しも暖簾は次代尾形猪八の手に渡った時期である。

乾山は江戸へ下向、頼る工人も少なく、自ら習得した技術を本居に、好みとする和漢の主題、創始した色絵具を自由に活用、陶工乾山個人の腕と技術はここにおいて明確となる。

絵師渡邊素信（上）・正徳年代の作風（下）

江戸入谷村における製作とその年代

佐野における製作年代と同地の素封家大川丈人、須藤杜川丈人らとの交流

二、主題別考証

（一）草花木：梅・桃・菊・蘭・牡丹・芍薬・芙蓉・水仙・椿（山茶花）・蔦・葵・薔薇・海棠・百合・辛夷（木筆花）・燕子花・蓮・石竹

梅

—中国—

一、生態

梅は薔薇科の落葉高木、原産地は中国。漢名は梅、和名は漢音、朝鮮語の音に由来、烏梅・梅、西洋名プラムはラテン語の李の古名に基因する。花は春、果実は夏を代表し、野種、栽培種など三〇〇種を超えるという。平均樹齢は三〇〇年、ごつごつとした幹に勢いよく伸びる新枝、古枝には棘のような小枝、老樹は苔むして地面を這うものもある。早春に白色・淡紅色の五弁の花を咲かせるが、単葉、千葉、落花してのち楕円形、縁には鋸歯のある葉をつける。果実は六月頃に熟するが、食用、薬用、文芸には六朝時代に現れるとされ、白梅は早く、次いで紅梅、賞玩も紅梅は唐代以後のこととされる。異名には花魁・羅浮仙子・好文木・玉骨氷姿・雪魄氷魂など、擬人化して「清客」「清友」（松は「蒼官」、竹は「此君」）。日本へは奈良朝以前に渡来、風待草・毛吹草・初名草・藻塩草・香散見草などの異称がある。

二、故事・逸話・図像化

一、梅といえば古くは果実を表した。投果の習俗があり（『詩経』）、桃李と同じく神に供する呪物、神霊、樹木崇拝の対象にもなるが、「太極花」「太極枝」など天地未分の時代から存在した花木とされる。

二、寒中芳香を放ち敢然として咲く梅は、中国文人の最も好んだ花の一つである。艱難に耐え枯枝に花を咲かせる姿には老いた者への敬意が潜み、古きものは佳きものとする精神が背後にある。

二十四番花信風　始梅花分終楝花（『荊楚歳時記』南朝梁・宗懍撰）

とあり、早春から初夏にかけて吹く花信の風を受けて花は咲くが、小寒（現一月五日）から穀雨（現四月二十一日）までの四ヵ月間五日ごとに一番の風、合計二四番の風が吹き、小寒には梅・山茶・水仙、大寒には瑞香（沈丁花）・蘭・山礬、立春には迎春（黄梅）・桜桃・望春（辛夷）、雨水には菜花（菜の花）・杏花・李花、驚（啓）蟄には桃花・棣棠（山吹）・薔薇、春分には海棠・梨花・木蘭、清明には桐花・麦花・柳花、穀雨には牡丹・酴醿（頭巾薔薇）・楝花（栴檀）が開花。梅はその魁け、異名「花魁」「花兄」の語源となる。

三、晋代には武帝（在位二六五—九〇）に因む「好文木」の逸話が伝承。学問に親しむ折りには四時庭前の梅花が開き、怠れば開花しなかったなど、南朝宋武帝（三六三—四二二）の女壽陽公主には「梅花粧」「壽陽有粧」の故事があり、人日に含章簷の下、臥した公主の額に梅花が落下、葩五弁の払えども落ちなかった逸話を基とし、のち宮中では婦人の額に梅花を貼ること、紅白粉をもってそれを真似る化粧、梅枝を髪にかざす風習などが流行したという。

四、文芸には六世紀頃から定着、梁代（五〇二—五七）詠物詩が流行し、独詠からサロンにおける詩の競い合いが盛んになる。物の名称、主題を定め、それを美的、多角的に表現する題詠詩であるが、予め主題を設定、賛美・賞揚・評価などの主観を交え、作者の知識・見識、表現技巧を競い合う。結果、梅についてもその生態、種類、特質などが明確となり、霜雪に耐えて膨らむ蕾、百花に魁け花を咲かせる力強

さ、楚々とした淡麗な佇まいなど、梅は高士、婦人の美に喩えられ、ともに短い命を生きるものと愛玩された。花弁の淡い色こそ、君子の交わりの淡きことの教えに叶い、本来貴族のあるべき色と解釈されたが、南朝宋の鮑照（四一三頃―六六）は「梅花落」、梁の簡文帝（五〇三―五一）は「雪裏覓梅花」「春日看梅花」を著した。

五、漢詩にはいくつかの約束事がある。主題・型・韻律・用語など、そのためには定型化した古典に倣うことを本文とするが、梅にも多くの詩語・成語・逸話が伝承。先人詩人の解釈をもとに、

（一）江辺の梅を江梅、嶺にあるものを嶺梅、野にあるものを野梅、官中にあるものを官梅と称すること

（二）詩語：白梅を水晶・玉蕊・白玉・雪萼・雪香・霜葩・氷艶・素面、紅梅を紅粧・絳英・絳臉・醉臉・朱唇・臙脂・蜀錦など

（三）成語：梅枝と芳香を「疎影」「横斜」「暗香」、花中一番に開花する意「百花魁」「花兄」、諸花一番に香を発する意「第一香」、清く潔いことの喩として「氷魂」「玉骨氷肌」「玉蕊瓊枝」「無一點塵」、潔白なことを賢人に擬えて「伯夷」「花中儒者」、香の微かな雅の意「清香幽艶」、南枝からほころび春の訪れを知らせる「南枝信」、花姿や香を雪中の高士・月下の美人に喩え「高士臥美人来」「羅浮夢」、散る花を雪に擬え「飛瓊冒雪」「雪是梅花」「千點雪」、紅梅を描き「春風臉紅」「粉額洗粧」「巧含春色」ほか

（四）故事：晋武帝「好文木」、壽陽公主「梅花粧」「壽陽有粧」、南朝宋陸凱の逸話を基に「贈一枝春」「江南春」、袁曹邸の六本の梅樹から「袁曹蔽風」、南朝梁何遜の梅下吟詠・彷徨から「何遜彷徨」、隋代趙師雄羅浮山中酒家における「羅浮夢」「師雄惆悵」ほか

（五）畳字：點々・疎々・淡々・英々・片々・芬々・郁々・粲々など、

（六）賞翫と詩歌の影響：端緒は漢代諸發の「一枝梅を執り梁王に遺る」、六朝代は宋陸凱（生没年不詳）の五言古詩「贈范蔚宗詩」があり、北伐のため陝西省隴山に遠征した友の范曄（生没年不詳・『後漢書』著者）宛て、長安北方隴山の頭では春の訪れも遅かろうと詩に添えて梅花一折を贈るが、

折花逢驛使　　寄興隴頭人
江南無所有　　聊贈一枝春

と、長江下流建康（南京）には友に贈るべき何もない。が、ただ咲き誇る一枝の春があるとして成語「一枝春」「江南春」の魁けとなる。唐代柳宗元（七七三―八一九）は陸凱の詩をもとに五言律詩「早梅」、張九齢（六七八―七四〇）は玄宗の命を受け広東省南嶺山脈大庾嶺に新道を切り開き梅樹を植えるが、梅嶺の異名とともに探梅の名所として知られてゆく。大庾嶺は嶺南、流刑地への入口でもあった。宋之問・韓愈・蘇軾など、嶺を越える流謫の旅、白居易は「大庾嶺上の梅、南枝落ちて北枝開く」と、南北の山の気候の相異、「南枝北枝」の慣用句を生むが、唐末五代初期には江陵の釈斎己（衡岳沙門・八六四？―九四三？）が「孤根」「獨回」など、梅の孤高、貞節、冷気に堪える美しさを表現。が、梅花はしだいに桃や牡丹を好む風潮に押されてしまい、再び顧みられるようになったのは宋代を迎えてからのことである。

宋代、杭州西湖孤山に隠棲した林逋（九六七―一〇二八）は「山園小梅」と題した七言律詩を著した。梅花の文字を一字も用いず容姿、風情、芳香を伝え、梅花絶唱と評されたが、寒中凛として咲く梅は、艱難を怺えて生きる隠者、詩人の孤高な精神にも喩えられ、成語「疎影横斜」「暗香浮動」、形象・心象、多くの事項が固定化するなど、ここに一つの梅花の詩の典型が成立する。蘇軾はさらに「羅浮山の下梅花の玉雪を骨と爲し氷を魂と爲す」と詠じ、「玉骨」「氷魂」、梅の具象化、

観念の表現化に大きな影響を与えるが、南宋代、陳興義（一〇九〇―一一三八）は「和張矩臣水墨梅五絶」（題画詩）を著し、宣和五年（一一二三）徽宗皇帝の目にとまるなど、「粲粲」「玉妃」、現実の梅を思わせる水墨梅の造化の功は（「造化功成秋兎毫」・其四）、梅花題画詩の典型として賞された。

南宋期、梅は文人にとり不可欠の主題となる。北宋亡び、杭州臨安に都を定めた南宋代、徽宗・欽宗両皇帝、后妃、君臣三千余人が捕虜に捕られ、夷狄（金朝）に対する深い恨みと憤り、宋朝への変わらぬ思慕と忠誠心がぶつかり合う。夷狄単于の奏する笛の音（「梅花落」）は中華の梅を凋ませるもの、散るを促す曲であると、笛曲「梅花落」（楽府）は異民族による中国制覇の暗示となるが、国破れ花と散った忠臣を、慮り、遺民詩人謝翺（一二四九―九五）は絶えることのない亡魂を梅花に託す。梅こそ彼らの象徴であるとし、月下夷狄の羌笛に凋れる梅花に呼びかけるが、

吹老單于月一痕　　江南知是幾黄昏
水仙冷落瓊花死　　秖有南枝向返魂

水仙、瓊花は零落する。が、江南を指して伸びる南枝の梅は死者の魂を呼び返し花を咲かせると訴える。ここに遺民の憂情が梅花に託され、隠逸花の色彩を濃厚にするが、かつて南北朝期、梅は北方から南へ流れた貴族のはじめて見た清らかな花であった。江南の地、梅花こそは六朝文化の故地とする懐古の情に結びつくが、次いで離れた友に贈る懐友の花。やがて冬を凌ぎ百花に魁け春を知らせる花、潔白にして節度ある素質が賞され、孤高、艱難に堪える花の意などが加えられる。梅花は詩人・画人の心に照らし捉えられたが、唐代までは姿・容、宋代になり香気が加わり（『鶴林玉露』）、痩せた枝は玉、ひそかな芳香は品格高く、処士の趣き、君子の象徴、南宋期には国に殉じた烈士の亡魂、遺民の苦悩、悲哀などを表徴する。禅林でも好んで梅花を取りあげたが、詩歌、絵画、この風潮が鎌倉期の日本へと波及、禅門社会を中心に室町時代、かなりの水墨梅図が描かれた。

『梅譜』（「范成大梅譜」『古今図書集成』）は梅の総体、種類を述べた初の花譜である。「梅天下尤物　學圃之士必先種梅」など、園芸を学ぶ者の先ず植樹する花木とされ、呉（蘇州）では当時梅を種えることが盛行。『長物志』は先人の故事・逸話、批評を借り、品位ある文人、雅・俗の基準を認め、梅は白色一点、寒を破って魁ける緑萼梅こそ品位随一、梅といえば白梅であり、紅梅はそれに比していくらか俗とする傾向を決定づける。『倭漢三才図会』（寺島良安著）には梅の「貴」四事が記されている。稀なるを貴び繁を貴ばず・老いたるを貴び嫩いものを貴ばず・痩せたるを貴び肥えたものを貴ばず・蕾を貴んで開いた花を貴ばずとあり、繁花、若木、満開を迎えた花はすべて俗と見なすが、この美意識、感性こそが詩歌、東洋美の根底を流れるものとなる。

絵画、工芸文様としても賞玩されたが、林逋の名吟を図にした人物が釈仲仁（一〇五一？―一一二三）である。北宋末期湖南省衡州華光山妙高寺の住持（一〇九三年）仲仁は、自然の景物、浄化された心境を融合、はじめて水墨一色による梅花を描く。方丈の庭前には数本の梅樹があり、花の時には樹下に臥し終日吟詠。月下窓間に映ずる横斜疎影に蕭然として絵筆を執るが、繰り返し描くうちに煩悩は去り（『華光梅譜』）、奥義の得道はやがて世に知られる所となる。親交深い黄山谷はただ香を欠くのみと賞したが、墨梅、墨竹、墨蘭など、南宋以後士大夫、文人、画僧らの墨戯として盛行、仲仁の画法は弟子僧から江西省南昌の文人揚補之（无咎・一〇九七―一一六九）へと伝承する。補之は仲

仁の得意とした暈かし・點墨技法を花の周囲に線描を用いる圈線手法（圈花点萼）に変化させるが、逃禅老人・清夷長者・紫陽居士と号し、水仙・蘭・竹図などを描き、仲仁とともに墨梅図の創始者となる。元末期には浙江省諸暨に王冕（元章・一二八七？―一三五九？）が現れた。繁花を描き「萬蘂千花」を得意としたが、画院においては花は白色、五弁の花片、葉は鋸歯のある楕円形に描くことを基本とした。梅花図は唐代に萌芽、題画としては北宋期の水墨画が本居となるが、詩・書・画は融合、梅図では成長する花木の様態や変化、象徴となるものを集成。笑う・沈む・媚びるなど、人間の様相に倣い、比喩・暗喩、明代には墨梅・墨竹・葡萄図など文人気質を象徴するものとして盛行した。「梅鶴高士」「雪後看梅」（鶴を伴い梅を看る）・「山谷看梅」（黄山谷は観賞用蝋梅の発見者）・「羅浮神仙」（梅林に坐臥する高士）・「喜報早春」（早春の意を伝える梅、竹、霊芝、小禽を描く）・「喜占春魁」（魁けの梅花、機をみて素早く行動する鵲）・「歳寒三友」（友として賞すべき寒気霜雪に耐える松竹梅）・「歳寒二友」（梅と菊、「歳寒二雅」梅と竹）・「雪中四友」（玉梅・蝋梅・山茶花・水仙）・「四君子」（元代に始まり、梅は林逋と孤高の精神。菊は落英を食すとする屈原、陶淵明の東籬、蘭は孔子の王者たるべき香、竹は黄帝の桐木に宿り竹実を食した鳳凰、王陽明の竹に君子の道ありなど）・「四友」（梅蘭竹松）・「四愛」（梅菊蘭蓮）などの画題が知られる。画梅は、唐宋以後、鉤勒着色法（輪郭線を描き、自然に従った色彩を加える）・没骨法（輪郭線を用いず、直接絵具を用いて対象物を描く）・水墨画法（絵具を用いず、墨一色の濃淡により対象物を描く）・水墨圈線法（輪郭線を用い、彩色せず墨一色によって描く）の四法を以って展開する。

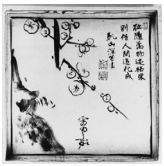
―日本―

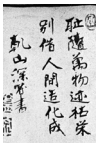
日本の梅は、詩・画ともに古来の観賞態度による大和絵的、宋代士大夫らにより定着した文人的・漢画の見方に分けられる。

奈良朝以前、中国から「烏梅」が渡来。燻べ梅とも呼ばれるなど、山地には野生化した梅もあるが、薬用、食用、観賞用、樹皮は染料、堅固緻密な木質は算盤玉や細工物、建築用の柱に用いられた。

四世紀末、百済の王仁は「なにはづにさくやこの花冬ごもり　いまははるべとさくやこの花」と詠じ（『古今集』序文）、天平一〇年（七三八）、聖武天皇は臣下に宮殿の梅の作詩を命じたとある（『続日本紀』・『倭漢三才図会』）。『懐風藻』（七五一序）には天智天皇孫葛野王の五言古詩があり、花といえば古来日本でも梅花を表した。平安以後は桜に代わるが、『万葉集』（七九〇頃成立）にも百首を超える歌があり、霜雪に耐える可憐な姿、月・柳などを配した雅趣、中国故事・逸話を蹈襲した様式が主流となる。唐風の影響下、烏梅・宇梅・干梅、梅といえば白梅を表したが、平安以後は梅・牟女などの仮名書き、紅梅が親しまれ、雪にみたて香を愛で、組み合わせにより春の景物、人物に結びつけて恋歌などにも歌われた。「筑紫飛梅」（菅公に纏わる逸話。「東風ふかば匂ひをこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれそ」『大鏡』『古今著聞集』）・「鶯宿梅」（貫之娘。「勅なればいともかしこし鶯の宿はととはばいかが答へむ」『大鏡』）・「箙梅」（一ノ谷・生田森の合戦に梶原源太景季が箙に挿した梅枝。「吹く風を何いとひけむ梅の花散りくる時ぞ香はまさりける」）・「軒端梅」（謡曲「東北」和泉式部の種えた軒端の梅。「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるる」）などの画題があり、単葉の梅（一入梅・見帰り梅・身延梅・玉井梅・軒端梅・冬至梅）、千葉の梅（鞍馬梅・難波梅・浅香山・豊後梅・越中梅・未開紅・源氏紅梅・叡山紅梅・関東紅梅）などがある。江戸期は非常食として各藩が梅干作りを奨励、全国に梅林も広がり、梅の実のなる頃の雨は「梅雨」。文様には梅花文・裏梅・向梅・梅鶴文などが考案された。

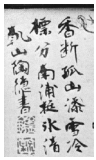
恥隨萬物迹枯栄　別借人間造化成
香断孤山添雪冷　標分南浦挺氷清





恥隨萬物迹枯栄　別借人間造化成
乾山深省書（印）乾山、尚古・陶隠
寂明光琳

恥隨萬物迹枯栄　別借人間造化成
乾山深省書　印なし
法橋光琳（花押）「寿」型
（裏）家兄法橋光琳听畫真筆聊無疑
惑者也　乾山深省（花押）巾着型



【読み下し】
萬物に隨いて枯栄迹することを恥じ別に人間造化を借りて成る　香断ちて孤山の雪の冷きを添へ　標分かれて南浦氷の清きを挺つ　（四時雅淡皆春意　千載炎涼、世情ならず　留め得たり枝頭の三五實　主人長く仰ぐ羹を調う可きことを）

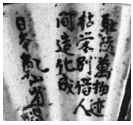
【出典】
恥隨萬物迹枯栄　別借人間造化成
香断孤山添雪冷　標分南浦挺氷清
四時雅淡皆春意　千載炎涼不世情
留得枝頭三五實　主人長仰可調羹
王肇基詩「書畫門・畫梅」『圓機活法』十八
『詩學大成』二十

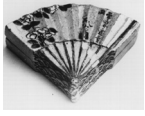
【大意】
万物に従い枯れ茂ることを恐れ、ここに人間の造化の力を借りて成る。芳香は孤山の雪に断ち切られ、枝は南浦の凍った水面にすっくと伸びる。自然の理による枯栄の事実、が、人力を借り書画に生き返るなど画者の巧みな技をいう。

【語釈】
萬物　天地間のあらゆるもの。
枯栄　枯れたり茂ったり。栄枯盛衰。
迹　理・跡・歩み・従う。
恥　「恥」の俗字、恥じる。
人間　人間世界・社会。
造化　天地創造の自然の理。道家は天地間には一定不変の秩序があり、その間に万物は生み出されてゆくと説く。意志は無く自らそうなる仕組みをいうが、中国では自然的創造化育天命と解し、『荘子』にみられる。宋代蘇軾らが好んで用いた語であるが、ここでは絵師の力を借り現実の天地自然の造化を移すとした意になる。
香　香り。梅の芳香。香は流謫の人の苦しみを表すとし、「氷姿」「氷魂」「玉骨」などに結びつく。
一點梅花藥　三千世界香
一枝梅花和雪香　梅只雪霜先
花猶風雨後
など、禅林では雪中一心に香を放つ梅花を賞し三千世界に香る妙趣、香は大千界を蔽うとして、人物に喩えて節操の固く高いことをいう。「畫梅香芬々」は画中梅が匂うばかりなど、絵師の筆の巧みな技を形容する。
孤山　浙江省杭州西湖に浮かぶ湖中最大の島。古来景勝地として知られ、唐代以後詩跡となる。宋代詩人林*逋が隠棲、「山園小梅」を詠じ梅花の真髄を表したが、西湖には「白堤」「蘇堤」と称する堤があり、唐代杭州に刺史として赴任した白居易、宋代太守となった蘇*軾はともに西湖の土砂を浚い、堤防造営に尽力した。
標　枝。ここでは梅枝。
南浦　南に面した西湖の水辺。『楚辞』「九歌・河伯」に初出、「送美人兮南浦」とある。
挺　抜きん出る・聳える。
氷清　氷の如く透き通るほどに清淡の意。

【参考】
1、出典は王肇基の畫梅を詠じた七言律詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。
2、梅は自然の力に随い枯栄するが、妙趣はすぐれた絵師の筆の力によって生き返る。はじめは大自然の摂理、そして人の手により春でなくとも春を迎える意となるが、画人は先ず眼前の

＊林逋（九六八―一〇二八）宋代詩人、浙江省杭州の人。字君復、林和靖、西湖に浮かぶ孤山に隠棲、梅と鶴を愛し、「放鶴図」「雪後看梅図」「彈琴図」などの画題のほか、「梅妻鶴子」はこの故事から詩作に興ずる風流な生活の形容となる。梅花は林逋自身を表すものとも考えられ、「西湖処士」は蘇軾の称した異名という。
林逋結廬西湖孤山
不娶無子　多植梅畜鶴
因謂妻梅子鶴　（『宋史隠逸傳』）
不見西湖林處士
一生受用只梅花　（『禅林句集』）





扇面型香合
「恥隨萬物迹枯栄　別借人間造化成」日本乾山（印）
尚古

香断孤山添雪冷　標分南浦挺氷清
乾山陶隠書（印）乾山、尚古・陶隠
法橋光琳（花押）「寿」型

右頁上段梅図角皿拡大図

光琳筆とする梅図である。主幹と若枝による構成であるが、どっしりと切り立つ巌上の梅樹を想像、「繁香石」に倚るとした情趣を伝える。

梅を眺める。やがて心の働きにより作者の心中に己れの解した梅花が宿る。その万象を画法に託し写し出せば、絵師の力を借りることにより現実の自然の造化を移すことになるという。本質は自ずから造化の理に適い、道という万物の根源に合致するが、老子はその造化の力を「道」とした。

3、寒山も万物は天地造化の力によって存在すると解したが、『寒山詩』には造化について以下のようにあり、

天高高不窮　地厚厚無極
動物在其中　憑茲造化力

と、高い天、厚い地、生きるものは全て天地造化の力によるとした。

4、画院と墨戯、形似と写意、色彩画と水墨画に大別すれば、目に見えるものに色をつけるのは人間の知覚の技、道を学び禅を修めた人物はそれをもう一歩前進させ、物中の本質を探りあてることができるという。色もなく、耳で物を見、目で聞き分ける感覚が働くとし、物の真髄を描くことが可能であるとする。

5、梅花詩の典型の一つは二〇年の歳月を山に籠もり、栄利を求めず、妻なく梅を愛し、鶴に親しんだ林逋の詩である。「不見や西湖の林處士　一生の受用只梅花」と蘇軾、梅堯臣、さらに後世の詩人文人に追慕されたが、画の典型は釈仲仁、揚補之とする。孤山、西湖、羅浮山などは梅の名所として知られ、梅花の五弁は五福を表し、福の象徴、工芸意匠に多く用いる。

6、乾山焼角皿は銹絵の陶法、扇面香合は色絵。角皿には光琳銘、光琳花押（「寿」字型）がある。

＊蘇軾（一〇三六―一一〇一）字子瞻・和仲、号東坡、四川省眉山縣の人。嘉祐二年（一〇五七）の進士。王安石ら新法党と衝突、左遷、投獄、死刑の危機に遭遇するが、詩書画にすぐれ、梅の名所羅浮山は五九歳広東省恵州に流罪となった蘇軾の詩により詩跡化されたという。

＊王墨基に関することは不明である。

＊『松斎梅譜』は元代画家呉太素著、梅図に関する技法書である。呉太素（生没年不詳・一四世紀中頃活躍）は字季章、号松斎、会稽の人。画法は揚補之の流れを汲み、『梅譜』には梅の成長と変化、風情、画法などを示し、墨梅画家の小伝を述べる。

梅の描法は周易の象に擬し陰陽二相、生成変化することを根底におくとする（『梅譜』）。

清淡横斜

清淡横斜
乾山省書（花押）巾着型
（裏）寶永辛卯歳三月五日造之

清淡横斜
清淡横斜「書畫門・畫梅」
『圓機活法』十八『詩學大成』二十

【大意】
月に和する香と水に映る影。梅の香と容姿を表徴する。

【語釈】
清淡　梅花の色淡く清らかこと。
横斜　斜めに伸びた梅の枝振り。水面また窓辺に映るその影。「横斜」は梅の異名となる。

【参考】
1、出典は畫梅の大意、四言句。『圓機活法』『詩學大成』所収。
2、「清影横斜」は『松斎梅譜』にあるが、宋代、士大夫らに親しまれた林逋の七言律詩『山園小梅』（『帰田録』）を基とする。

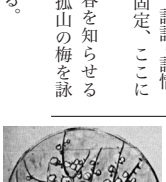
衆芳搖落獨喧妍　占盡風情向小園
疎影横斜水清浅　暗香浮動月黄昏

粉蝶知合斷魂　幸有微吟可相狎
不須檀板共金尊

とあり、衆花散り果て梅花のみがひっそりと咲き、淡い月光のもと水面に映る疎らな影、和してどこからともなく漂い来る暗香など、梅花の文字を一字も用いず風情を描く美意識に、後世、同詩は梅花の絶唱と評されたが、以後寒中凛として咲く梅花は、艱難を怺えて生きる隠者、詩人の孤高な精神に喩えられ、姿、容、加えてその芳香にも心が向けられる。詩語・詩情、形象・心象、その他多くの事柄が固定、ここに一つの梅花の典型が創られる。

3、梅は「喜報早春」、率先して春を知らせる花、陶淵明は梅と隠逸、白居易は孤山の梅を詠ずる。

4、乾山焼角皿は銹絵の陶法である。



光琳　梅図画稿（小西家文書）

造化功成烋（秋）兎毫

（含章簷下春風の面）造化功を成す烋（秋）兎の毫（意足りて顔色の似るを求めず　前身は相馬の九方皐）

含章簷下春風面
造化功成秋兎毫
意足不求顔色似
前身相馬九方皐

陳簡齋詩云「書畫門・畫梅」『圓機活法』十八『詩學大成』二十「和張規臣水墨梅五絶」其四『陳輿義集』四『須溪先生評點簡齋詩集』他

よき秋兎の筆を以って自然の造化さながらに梅花を描く。真景にまさり筆先の梅は見事だぞとし、兎毫の筆を以って造化の功を奪うとした意。画者の手並みの優れたことをいう。

（芸術は有限なる人間が、無限なるものに連なってゆく道という。無は存在するが認識できないもの、相対的な有無を超越した絶対的な無。有を生ぜしめる無と解釈される。）

【語釈】

含章　内に美・徳を含む。「章」は美の意。模様・彩り・法式・手本など、首尾揃って意義の纏まりのあることをいう。

簷下　軒・廂の下。

面　向かう・まみえる。

造化功　自然創造。人間の作為の加わらない宇宙無限の働き。「化」は陰陽二気の万物を変化させる作用、「造化」は創造の無限連続、天地万物を生じさせる力をいう。ここでは人間技とは思われない画家のすぐれた手並みを賞する意。

秋兎毫　秋に生え代わる兎の毛で用いた筆。獣類は多く夏に体毛が抜け秋になって新しく細毛が生ずるが、秋毫とは獣類の秋の細毛のことである。筆毫は秋兎の毛を最上とし、漢代天子への献上品に使われた記録が残る。

天子筆管以錯寶爲跗
毛皆以秋兎之毫（『西京雑記』）

動物の細毛。筆の穂、転じて筆をいう。

【参考】

1、出典は宋代陳*輿義の「和張規臣水墨梅五絶」（其四）と題した七言絶句。『圓機活法』『詩學大成』『陳輿義集』『全芳備祖』、画譜『松斎梅譜』他所収。

2、技法妙技の形容として、最上の筆を用いて神の造化の技を盗むほどによい作品のできたことをいうが、唐代方*干の五言律詩「陳式水墨山水」には「造化有功力　平分帰筆端」とあり、すでに山水画におき詩語「造化功」は用いられていた。

蘇軾の「喜雨亭記」にも「造物は自ら以って功を爲さず、之れを太空に歸す」とあり、道家、仏家の思想を結び、萬物を創造する造化の神は功を誇らず大空の力に帰するとして、無と空の相通する理とされる。

3、文房四寶のうち筆は舜帝、墨は那夷、硯は仲由、紙は蔡倫によって作られたという（『物原』）。秦始皇帝も兎毫筆を献上されたと伝承、筆は漢代筆匠李仲甫の名が残り、蔡邕の賦によりこの頃から筆毫に兎の毛の好まれたことがわかる。晋代には秋八、九月、崇山の兎毛を活用（『筆陣図』）、宣州中山（安徽省）の兎毫の愛用が記録があり（『筆経』）、柔らかく腰も強く長持ちする秋兎の毛は筆に最適であったことが認められる。鼠の鬚、鹿や狐、羊、狸の毛なども使われたが、書家王羲之*は鼠鬚筆を用いて「欄亭集序」を書いたと伝承、書家は鼠鬚の筆を珍重、蘇軾息蘇叔黨（過）は「鼠鬚筆」と題し五言古風の短編を残す。

磔肉飼餓猫　分髯雜霜兎
挿架刀槊健　落紙龍蛇驚

とあり、龍・蛇の馳せる如く勢いよく書けるなど、鼠鬚筆を賞したが、「終に兎毫の耐うるに如かず」と秋兎毫に名を譲り、白居易は七言詩に以下のように詠じ、

毎歳宣城進筆時　紫毫之価如金貴

朝廷への筆の献上が盛んな折り、宣州中山の紫毫（兎毫）の値段は黄金の如く貴くなったと述べている。唐代歐*陽詢息通は狸毛を軸に兎毫で覆い、象牙の管の筆のみを用いたとするが、鶏、雉、鴨など鳥類の毛も使われ、植物では竹木、荻や茅、一般には羊毛が最も多かったという。

4、筆には「尖・斉・円・健」の四徳がある（『泥古録』）。製筆の秘訣とされるが、尖は穂先の鋭さ、斉は穂先が揃い不純の毛のないこと、円は穂先

＊陳輿義（一〇九〇―一一三八）北宋末から南宋初代詩人・文学者。字去非、号簡齋、河南省洛陽の人。翰林学士。靖康の変の後、参知政事に至ったが、北宋滅亡後は流亡生活、混乱した時代に生き、南宋への過渡期における重要詩人である。『簡齋集』が伝えられる。

＊画譜は、種々の主題、それに関する諸事、事柄を列挙、記録したものである。図のあるもの、ないものに分けられるが、ないものは宋代の『宣和画譜』、あるものは宋代仲仁『華光梅譜』、南宋代嘉熙二年（一二三八）編『梅花喜神図』（宋伯仁）、元代になり『松斎梅譜』、大德三年（一二九九）『竹譜詳録』（李衍）が古い例である。『松斎梅譜』は現存する書は中国になく、日本に四冊が伝わるとされる（島田修二郎『松斎梅譜』）。

＊方干（八〇九―八八）唐代詩人。字雄飛、号玄英、睦州青渓・淳安（浙江省建徳）の人。進士に落第、会稽の鏡湖に隠棲。詩にすぐれ、『玄英先生詩集』が残る。

文人画

徽宗皇帝は墨梅を好み「意さえよければ姿はよし」とした言を残す。一つの名言として伝承、これによって宋代文人画は専門画家の絵画より好しとする風評が定着するが、画の真髄は画家の気韻、意思の完足にあると考えた。「意、筆先にあれば、画尽きれども意は在り」と、陳簡斎も詩中に相馬名人、九方皐の目利きを例に、筆一本、墨一色の力によって梅の精髄を描き出した画家を褒める。

九方皐は馬の鑑定師である。君命により栗毛の牝の良馬を求めるべき所、黒駒の牡の駿馬を求めたが、その理由を毛色、雌雄などを問うよりも、馬はその本性、駆けることを第一に見極めたとし、真理、本質を問う貴さをいう。

「意足りては顔色の似んことを求めず」など、梅花を写して彩色に頼らず墨一色によって梅の精神を描くことこそ大事とした。

が締まって円錐状になっていること、健は穂先の中心に堅い毛の支えのあることをいう。筆管は金・銀・象牙・鼈甲・陶磁などが用いられた。

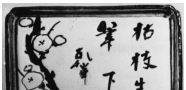
「筆」は「竹」と「聿」からなる合字である。聿はふでの意、戦国・秦代に竹軸を用いたことによるとされ、多くは白竹・斑竹・棕櫚竹などを使用した。梁の元帝は筆に三品有りとして、忠義孝行、文章の秀れた者の記録には金管、徳行精粋な者には銀管、文章贍逸な者には斑竹管を用いて名を記したという。近年は竹管に雅があるとして大半が竹軸である。

5、陳輿義の梅詩（「題画詩五首」）其三には、

粲粲江南萬玉妃　別來幾度見春歸
相逢京洛渾依舊　唯恨緇塵染素衣

とある。春に汴京（開封）で江南の梅（水墨梅）に再会、変わらぬその清らかさに対し、都の塵に黒く染まった己れの衣を振り返る。江南を懐かしみ、都の暮らし、世俗の煩わしさを嘆くが、同詩は宣和五年（一一二三）、徽宗皇帝の目にとまり、後世広く膾炙されるところとなる。「粲粲」「玉妃」、現実の梅を思わせる水墨梅は造化の功を奪う筆の巧みさなど、「造化功成秋兎毫」（其四）は、梅花題画詩の一つの典型を形づくる。

6、乾山焼茶碗は銹絵の陶法である。



枯枝生筆下

枯枝生筆下　乾峯　印なし

枯枝筆下に生じ
（窮蘆毫端に發す）

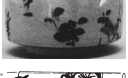
枯枝生筆下　芳蘆發毫端

「書畫門・畫梅」『圓機活法』十八
『詩學大成』二十

筆を下せば梅枝が生じ、穂先からは馨しい梅香が漂う。
入角四方皿は銹絵陶法である。

「枯枝」は葉の落ちた枝。梅は葉の生ずる前に花が咲き、葉のない枝に蕾をつける、枯枝に花咲くの意となるが、「筆下」は筆先、筆を下すこと、筆を使って描くことを「生筆下」というが、心が筆の先に顕れることである。

筆には書き記す、文章の意もあり、李白は「夢筆生花」と筆先に花を生ずる夢を見て天下の詩人となり、杜甫も「讀書破萬巻　下筆如有神」と詠じ、詩文を作れば神の助けがあると自負したという。「芳蘆」はしべ、花の意も潜み、芳しい香りを放つ花、梅花を表す。「毫端」は筆先・毛先。極めて微細なこの喩であるが、「發」は花の咲く意である。明代、詩・書・画にすぐれた沈周（一四二七―一五〇九）も『石田先生集』を残し、「筆下珠光湿春露」（「竹堂寺探梅」）と詠じている。



（枯枝）生筆
（下）銘なし
港区潮留遺跡
出土

枯枝生筆下
銘なし　印
不明　新宿
区尾張藩上
屋敷遺跡出
土

枯枝生筆下
銘なし
新宿区南山
伏町遺跡出
土

生筆下
銘なし　新
宿区南町遺
跡

乾山風陶器出土例

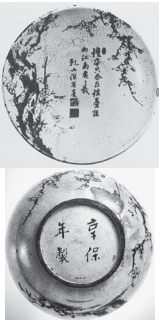
＊王羲之（三〇三―六一）東晋代書家。字逸少、琅邪郡臨沂県（山東省）の人。右軍将軍、会稽内史となり、書を先人の名跡に学び、魏以来の古風を一新、典雅、品格ある書体を大成、書聖と仰がれる。

＊蘇叔黨（蘇過）は宋代蘇軾の子、名過、官職は中山府通判。詩文に優れ、『斜川集』が残る。蘇軾の海南島追放に同行した。

＊歐陽詢（五五七―六四一）唐代書家。字信本、潭州臨湘縣（湖南省長沙）の人。太子率更令、弘文館学士などを歴任。書に優れ、南北両朝代の書風を融合、虞世南、褚遂良、薛稷と共に初唐四大家の一人となる。『藝文類聚』の著者である。

『松斎梅譜』呉太素
元代末期

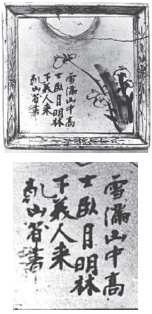
瓊姿只合在瑶臺　誰向江南處々栽
雪満山中高士臥　月明林下美人來



瓊姿只合在瑶臺　誰向江南處々栽
乾山深省亳（印）乾山、尚古・陶隱
（裏）享保年製

誰向江南処々栽
乾山省昼（印）
乾山

雪満山中高士臥　月明林下美人來
乾山省書　印不明



瓊姿只瑶臺に在る合に　誰れか
江南に向て處（処）々に栽ゆ　雪
満ちて山中高士臥し　月明らか
にして林下美人來たる

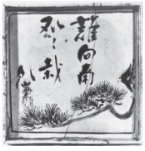
【出典】
瓊姿只合在瑶臺　誰向江南處處栽
雪満山中高士臥　月明林下美人來（以下略）
学士高啓「百花門・梅花」『圓機活法』二十『高太史大全集』『廣群芳譜』『佩文斎詠物詩選』下

【大意】
玉の如き美しい梅花は仙女の居る立派な宮殿にあるべきものを、江南ではあちらこちらにみることができる。満開の花は山中に降る雪の如く、大雪のなか独り草屋に臥した袁安の逸話、目を閉じれば月下林中趙師雄の故事に随いそっと佳人（梅香）が訪れる。高士は梅樹、佳人は梅の芳香に擬えるが、雪中に匂う梅花の風情、天真の妙趣をいう。

【語釈】
瓊姿　玉のように美しい姿。梅の喩。
瑤臺　玉で飾った楼台・立派な台。仙女の住居。『楚辞』「離騒」には、望瑤臺之偃蹇兮　見有娀之佚女とあり、四方の展望が望めるように築かれた高殿・高楼をいう。
合　まさに云々すべし・必ず。
江南　揚子江下流南側一体の地方をいう。江蘇省南部から浙江省北部に至るが、美しい自然と温和な気候、豊かな土地に恵まれ、古くから文化・経済の中心地の一つであった。中国五山を筆頭に禅刹が集中、梅の名所としても知られるが、梅花一枝を以って江南の春を報じた六朝代陸凱の五言古詩以来「江南に一枝春」（王安石）は広く膾炙された詩句である。北部の早に比し、江南には大水の苦難があった。
高士　志高く、人格高潔、官に仕えず節義を重んずる人物。在野の隠君子。梅の別名。
臥　臥すのほかに、潜む・隠れるの意がある。
林下　林中。官を退いて隠居する意。
美人　賢人・佳人。ここでは梅の芳香の喩。

【参考】
1、出典は明代高*啓の「梅花九首」と題した七言律詩。『圓機活法』『高太史大全集』『廣群芳譜』『佩文斎詠物詩選』他所収。
「学士高啓」とあり、学士とは学者、学問に従事する人、のち官名、翰林学士の意に用いられた。梅の気高く清雅な性・容姿を雪中の高士、芳香を月下の美人に喩えるが、源流には隋代趙師雄「羅浮之夢」がある。
2、羅浮山は広東省恵州市（増城縣博羅）にある羅山と浮山の二峰からなる山である。六朝以来梅の名所として知られるが、世を逃れた道者、隠士らの好む処となっていた。開皇年間（五八一―六〇〇）趙師雄は羅浮山に遊び、日暮れて美人に導かれて林間の旗亭に入る。飲酒酩酊、目覚めてみれば身は梅林にあり、淡い月光のもと梅花が浮動、淡粧素服、芳香の美人はすでにおらなかったという逸話である。虚ろなままにさては梅の精ではなかったかと惆悵するが、以来高士と美人、梅花の結びつきは羅浮の夢として語り継がれ、多くの物語に登場する。
3、絵画では故事人物に添えて描くことが多く、顔輝筆「袁安臥雪図」、高士図には「高士観月」「高士観瀑」「高士聴泉」「高士騎驢」では驢馬に跨る杜甫や蘇東坡、しばしば人物は後向きに描かれるが、故郷、任地ほか慣れ親しんだ土地への去り難い想いを表現する。
4、乾山焼大鉢、入角四方長方皿、額皿は銹絵の陶法である。

＊袁安（?―九二）後漢代政治家。字邵公。河南省汝南汝陽の人。厳格、清廉、孝行の人物として知られ、「大雪に人皆餓ゆ、宜しく人に干むべからず」と自ら門を閉ざし死を選んだとする逸話が伝世（『後漢書』『汝南先賢傳』）。『蒙求』には「袁安倚頼」の逸話が残り、天子・大臣の信任も厚く、死には朝廷痛惜すると記された。
＊趙師雄（生没年不詳）隋代開皇年中の人とされる。
＊高啓（一三三六―七四）明代の詩人。文学者。字季迪、号槎軒・青丘子。江蘇省蘇州の人。南京へ招かれ、元史編集に参加、のち王蒙とともに謀反の容疑によって処刑された。



誰向（江）南処々栽
乾峯　印不明

高苍（花）玉質照窮臘
破雪数枝春巳多

高苍玉質照窮臘　破雪数枝春巳多
乾山省書（印）尚古
高花玉質窮臘に照やき
雪を破りて数枝巳（巳）に春多る

【出典】
高花玉質照窮臘　破雪數枝春巳多　①
一時傾倒東風意　桃李争春奈晩何
「梅花」『陳輿義集』五『須溪先生評點簡齋詩集』三

【大意】
寒中、梅花が玉のような蕾をつけた。雪に耐えてはやや数枝が春を告げる。

【語釈】
玉質　美しい容姿。「玉」は美称・最上の意。
窮臘　陰暦十二月の祭りの日、年の暮。大意に、破臘傳春　先臘破
など、冬末から花を咲かせ春を知らせる。
破　花の咲くこと。歳寒の寂寞を破り百花の魁として開花する。「破蕾新」は蕾を破って初めて花を咲かせること。
巳　以って・はなはだ。

【参考】
1、出典は宋代陳輿義の梅花を詠じた七言絶句。『陳輿義集』『須溪先生評點簡齋詩集』他所収。翻刻には「已・巳」①の異字があり、長方皿では「巳」としている。
2、雪中凛然として寒気を昌して開く梅花極致の風趣を詠じたもの。梅の美しさは道士・逸人の高潔さに喩えられる。
3、額皿・長方皿は銹絵の陶法である。

梅図額皿

高花玉質照窮臘　破雪数枝
春巳多　乾山省書（印）乾
山、尚古・陶隠

清香幽艶（豔）

清香幽艶　銘なし　印なし
清香幽豔　乾山陶隠製　印なし

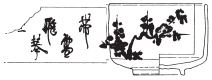
【読み下し】
清香ありて幽かに艶（豔）やかなり

【出典】
清香幽艶
「百花門・梅花」『圓機活法』二十『詩學大成』八
「花木門・花総論」『詩林良材』後六

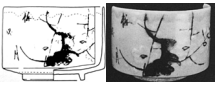
【大意】
雅やかな白梅の香と品格の高さをいう。

【語釈】
清香　清い香り。ここでは深みのあるひっそりとした梅の香気。
幽艶　梅花の微かに雅やかな姿をいうが、「幽」は隠れる・潜む。「艶」は「豔」の俗字。豊満好美の容色をいうが、表出したものではなく、本来は心に描かれた美の意である。「素艶」は白花、白梅。「冷艶」は雅の極致、奥深い艶なる美、冷えて寂びた情趣の美をいう。

【参考】
1、出典は梅花の大意、四言句。『圓機活法』『詩學大成』所収。しばしば中国では酒家を知らせる酒旗、茶坊を知らせる茶旗に記されたが、「清香幽艶」「香塵」「清風」「氷肌玉骨」「松籟」「喫茶去」など、詩語は禅味を含み、風雅な趣きを伝えるものに限られていた。屋外に吊す旗は横一尺、縦一尺三寸余り、屋内用はその半分が基準、多くは竹の縁に布を用いて作られたという。
2、「清香幽艶」「冷香幽艶」は梅、「幽香清艶」は菊の大意に多くみられる。
3、額皿は銹絵陶法、裏面に讃、茶碗は地色赤、銹絵陶法、讃は見込みに記されている。



帯雪飛琴か
銘なし
新宿区尾張藩上屋敷跡出土

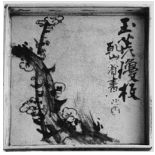


梅月吹か
銘なし
港区白金館址出土

四方薫春風

四方薫春風　乾山印なし
春風四方に薫ず（出典不明）。春風にのって一面に梅香が漂うの意。「春風」は春吹く風・東風。万物の発生するところから教育、また和らぎ暖かであることから深い恩恵の喩となる。「薫風」は温和な南風、四方は東西南北・周囲。薫は香気を発する・薫る意である。

玉蕋瓊枝



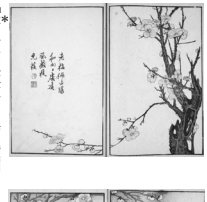
玉蕋瓊枝
乾山省書　印不読（尚古・陶隱か）

玉蕋瓊枝（ぎょくずいけいし）
玉蕋瓊枝　「百花門・梅花」
『圓機活法』二十『詩學大成』八

玉（ぎょく）の如き透きとおる清潔さ、梅花の清楚なことをいう。

【語釈】
玉蕋　「蕋」は「蘂」の俗字。花の蘂（しべ）。「玉蕋」は梅の美称・異名。神仙の食すもの。
瓊枝　「瓊」は玉、美しいものの喩。「瓊枝」は玉にて造る枝、優れたものの喩であり、称美して同じく梅の異名に用いられる。

【参考】
1、出典は梅花の大意、四言句。『圓機活法』『詩學大成』所収。『五燈全書』に「將園林樹木變作玉蕊瓊枝（しょうえんりんじゅもくへんさくぎょくずいけいし）」「韓昌黎策馬不前　孟浩然尋梅無路　慧可因之堅立　元亮因之高臥」など、韓愈、孟浩然、慧可*、陶淵明らの名と逸話があり、『四溟詩話』*には「玉蘂瓊枝長不老」とある。
2、「瓊枝玉葉」は皇家子孫の喩にもなるという。
3、角皿は銹絵の陶法である。



『芥子園畫傳』*徐熙画を学ぶ・柳耆卿詞

『芥子園畫傳』*徐禹功画に擬す・蘇軾詩

右図は、康熙一八年（一六七九）刊『芥子園畫傳』に掲載された梅図である。教本として『十竹斎書畫譜』（一六二七刊）とともに二大画譜とされたが、元禄年間に初集が舶載、中国絵画の画題、構図・構成などを学ぶ手引書となり、日本の画譜制作を促す基となる。「芥子園」は南京沈心友の庭園名、李漁による序文がある。

＊慧可（えか）（四八一―五九三）臨済宗禅僧。名神光、姓姫、河南省洛陽武牢の人。四〇歳の折り崇山少林寺に達磨を訪い、左臂を切断して求道の赤心を示し随侍、心印を得て二祖となり、諡普覚大師という。
＊『四溟詩話』（しめいしわ）明代謝榛（しゃしん）（一四九五―一五七五）の著した詩話。字茂秦（もしん）、号四溟山人（しめいさんじん）。山東省の人。詩・詞曲にすぐれ、生涯野にあり李攀龍（りはんりゅう）、王世貞（おうせいてい）らと「後七子」を結社、『四溟集』『四溟詩話』を残す。
＊『芥子園畫傳』（五巻）清代初期南京において刊行された色刷りの画譜。第二集に花卉画を掲載、梅に関しては華光仲仁、揚補之らの画法があり、古今諸家による図画がみられる。

冷蕋輕裁玉　寒梢細點瓊

冷蕋輕裁玉
乾山省昻
（印）尚古・陶隱

寒梢細點瓊
乾山省昻
（印）乾山・深省

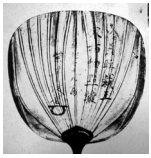
冷蕋輕く玉を裁す　寒梢細かに瓊を點（てん）ず

【出典】
冷蕋輕裁玉　寒梢細點瓊　①
「百花門・梅花」『詩學大成』八『圓機活法』二十

【大意】
凛とした蘂が軽やかに揺れ梅花と判るが、葉のない細枝・蕾の清淡さはまさに玉の如くだ。

【語釈】
冷蕋　清らかなしべ。「冷」には冷やか、寒い清々しい、寂しいなどの意がある。
裁　決める・計る・見分ける。
寒梢　「寒枝」に同じ。葉のない枝。梅は花が咲き尽したのち果実、葉を付ける。寂しい枝、枯れ枝。
細點　細かい点。ここでは梅枝に珠を連ねたような蕾や花のさま。「點」は天地の心。
瓊　玉、また美しい玉の輝き。

【参考】
1、出典は梅花を詠じた五言詩。『詩學大成』『圓機活法』所収。両書には「蕋・葉」①の異字がある。「冷蕋」「寒梢」は熟語としてしばしば南宋代の詩歌にみられる。
2、中国では「十二神」など花には各々花神があるとし、それが花の命、成長を掌るとした。
3、長方額皿、長方皿ともに銹絵の陶法である。



梅図団扇　「冷蕋輕裁玉　寒梢細點瓊」

寒梢細點瓊　乾山省昻
（印）乾山・深省

暗香断續來風（風）外
疎影横斜傍水涯

暗香断續來風外
疎影横斜傍水涯
乾山省㫖（印）
陶隱（三点とも）

暗香断續來風外
乾山省㫖（印）
尚古・陶隱

疎影横斜傍水涯
乾山省㫖（印）
陶隱

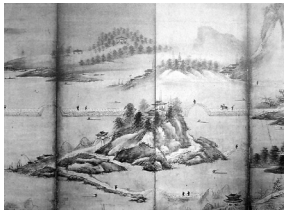
暗香断続して風外に來たり
疎影横斜水涯に傍う

【出典】
不辭屐齒印蒼苔　爲訪浦仙幾日來
一種孤芳氷作態　十分瘦臉粉匀腮
暗香断續來風外　疎影横斜傍水涯
分付児童和雪折　擔頭桃得幾枝回
丘瓊山詩「百花門・探梅」『圓機活法』二十
『詩學大成』八

【大意】
風に任せて何処からともなく梅香が漂い、岸に沿って水辺に疎らな枝が影を落とす。

【語釈】
暗香　何処からともなく漂う芳香。多くは林逋の詩句をもとに闇に漂う梅香をいう。
断續　途切れたり続いたり。
風外　風に乗って・風に任せて彼方から。
疎影　疎らな影。水辺（窓間）に映る梅枝。「疎影横斜」は水に映る花影、月に和する香。
横斜　斜めに横たわる。梅の異名。
水涯　水辺・汀・岸。「傍水」は水に沿って。

【参考】
1、出典は明代丘*濬の梅花を詠じた七言律詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。「探梅」は、早咲きの蕾を探し賞翫することであるが、氷・冬の意を含み、春の訪れを探す意となる。
「暗香・疎影」は林逋の詩以来一つの典型となるが、類似の詩句には以下がある。
澄江千頃浸流璃　疎影横斜映水涯
自是一般精透骨　寧知世路有多岐
「百花門・瓶梅」『圓機活法』二十
2、梅香は潮の満干の如く風にのって漂い引くが、王安石の五言絶句「梅花」には、
牆角數枝梅　凌寒獨自開
遥知不是雪　爲有暗香来
とあり、寒中咲く梅花を遠目からは雪かと思うが、漂う芳香が梅と伝えるなど、雪と梅の冷艶なる美が一つの典型となり愛された。
3、乾山焼には同讃を施した四方火入が三点ある。ともに梅図と丘濬「梅花」の詩讃、松図に厳介谿の七言律詩「畫松」「四時長見布清陰」の詩句があり、同句は松図重色紙皿、絵画作品にもみられる。痩せた枝を必死に伸ばし雪や霜を凌いで咲く梅、四季の変化に衰えもせず緑の陰を布く松など、ともに君子の危難にあって凋まぬ心の喩えに用いられる。
4、乾山焼梅図、松図は多く光琳画稿の構図を基本とする。「小西家文書」には写実的、意匠化・図案化した梅、紋章形式の梅花図など、松は若松、老松、雪松、松林などの図が残る。乾山焼には光琳様式の筆画のほか、梅花と梅枝、白化粧を巧みに用いた影絵的な梅文様、松はこんもりとした笠松、松林、写実に近い唐松形式が基本となる。図柄の変化を色絵、銹絵、銹絵染付とそれぞれに陶法を変え組み合わせる。



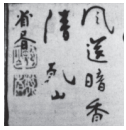
西湖図

西湖孤山は、詩語「暗香・横斜」、容姿・芳香に心を寄せ、梅花の心象、形象、風情に一つの典型を示した林逋の居所とした所である。林逋は小舟に乗り近辺の島々の寺を訪うことを楽しみにしたという。

＊柳耆卿（？―一〇五三？）宋代詩人・詞人、字耆卿、名三変・永、福建省崇安の人。景祐元年（一〇三四）の進士。生涯地方職に留まるとされるが、歌詞にすぐれ、朝鮮『高麗史』にもみられるという。『樂章集』が残る。
＊徐禹功（一二四一―？）南宋代の画家。号辛酉人。梅・竹図も長じ、揚補之の門人とされる。
＊丘濬（一四一八―九五）明代の学者。字仲深、号深庵・瓊山先生・瓊臺、諡は文莊、広東省瓊山の人。景泰五年（一四五四）進士に及第、翰林学士、文淵閣大学士となるが、朱子学に精通、『大学衍義』『家禮』ほか、多くの著書を残す。宋代にも同名者がおり、字道源、号は迂愚叟、天聖年間（一〇二三―三二）の進士である。『牡丹栄辱志』一巻を著した。

四時長見布清陰　乾山省㫖（印）尚古・陶隱

風送暗香清



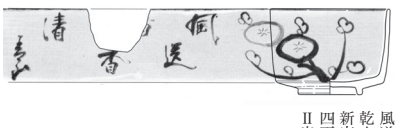
風送暗香清
乾山省旱（印）乾山・深省

（水揺らして疎影痩せ）風送って
暗香清し
水揺疎影痩　風送暗香清
『圓機活法』二十『詩學大成』八

【大意】
風が吹き、水面に映る梅枝が揺れ、芳香が漂うとした意。

【語釈】
疎影　疎らな梅枝の影。梅の異名。
痩　痩せる。ここでは梅の細い枝。
暗香　微か・密やかな香り。闇に漂う梅の芳香。

【参考】
1、出典は梅花を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。
2、「疎影」「暗香」は梅の姿と香の清らかさを象徴、堅い信念、隠者の自負に結びつき、俗を離れた品格ある人物の比喩となる。禅林では「煙霞、梅香を遮らず」と、隔てなく煙や霞を透して匂う香は、心の通ずるところ遮るものの何もない意に用いられる。
3、唐末五代初期、釈斎己（衡岳沙門・八六四？—九四三？）は、
萬木凍欲折　孤根煖獨回
前邨深雪裏　昨夜一枝開
風遞幽香出　禽窺素艶來（以下略）
と、「早梅」を詠じ、万木が凋落して猶梅は独りその根幹に陽気を保ち、絶えることのない春を伝えるとした。「孤根」「獨回」の詩語を用いて孤高、貞節、冷気に堪える美しさを表現したが、梅の香気を賞翫することは北宋から南宋にかけてのこととされる。王安石の詩句にも、
遥知不是雪　為有暗香來
とある。「香雪」「紅雪」は花の落ちることをいう。
4、長方額皿は銹絵の陶法である。



風送□香清
乾山か
新宿区四谷
四丁目遺跡
II出土

暗香清入座（座）

暗香清入座　乾山　暗香
省旱（印）尚古　乾山　印なし

暗香清くして座に入る（疎影痩せて窓に横とう）
暗香清入座　疎影痩横窓
『圓機活法』二十『詩學大成』八

【大意】
仄かな梅香が座に入り、（疎らな細枝が窓に影を落とす。）

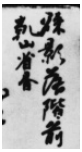
【語釈】
暗香　密やか香り・幽香。どこからともなく漂う芳香・闇に漂う花の香。一説に琴の名手、陳郡荘氏の女の名とも伝承、梅花曲を奏する度に暗香を発するなど、その琴の名をいうともする。
入座　座敷に入る、漂い来たるの意。「座」は「座」、坐るところ・敷物などの名詞に用い、「坐」は土の上に二人が対坐する形状から、留まる・坐るの意を表す会意文字として動詞に用いる。意味はそぞろ・何とはなしに・罪に陥るなどの意である。
疎影　疎らな影。多くは窓・水面に映る梅枝をいう。「暗香」「疎影」は梅の形容・異名。
痩　痩せる・細い。雪中寒を凌ぎ花を咲かせる意。「開痩枝」「凌雪痩」などがある。

【参考】
1、出典は明代李*漁の「墨梅圖」と題した五言律詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。
「庭空月無影　夢暖雪生香　歲寒冰雪裡　獨見一枝來　暗香清入座　疏影痩横窗　色連千嶂月　香散一簾風」とある。
2、闇中仄かに漂う梅香は林逋の七言律詩、詩意を図にした僧仲仁の絵画が基本。梅香、容姿はこれらが一つの典型となって伝世した。
3、「暗香」は「暗香隨風輕」など桐を詠じた白居易の詩にもあり、梅花に限らず、香は闇夜も明夜も、距離も人の心も隔てなく訪れる。
4、重色紙皿は銹絵、茶碗は楽焼陶法である。

暗香清入座
乾山省旱
（印）尚古・
陶隠

*李漁（一六一一—八〇）
明代末期の文学者・劇作家である。名は仙侶、字は謫凡、号は天徒、有笠道人・芥子園主人などと自称。浙江省蘭溪の人。科挙に失敗、杭州に移り、芥子園書舗を開くなど書籍の刊行、劇団を結成、詩・物語・戯曲を残す。

疎影落階前



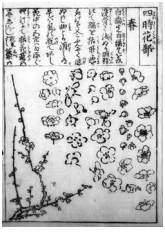
疎影落階前
乾山省㫖　印なし

（清芬竹外に来たり）疎影階（堦）
前に落つ
清芬來竹外　疎影落堦前
「百花門・梅花」『詩學大成』八

【大意】
月下清らかな香が漂い、階段には梅枝が疎らな影を落とす。

【語釈】
清芬　清い香り。徳行の意もある。
竹外　竹林の外。
疎影　疎らな影。月光のもと池水に映る梅の影。
階　宮殿の階段。中国では多く家の入り口に石煉瓦の階段があった。「堦*」は「階」、「階前」は階段の前、杜甫には「明月落階前」の詩句がある。「堂*前」は座敷の前庭をいう。

【参考】
1、出典は梅花を詠じた五言詩。『詩學大成』所収。「疎影横斜」は林逋の梅花詩を本居とする。
2、角皿は銹絵の陶法である。



梅図
「四時花部」『画筌』（享保六年刊・一七二一）

『画筌』（『畫筌』五巻）は、筑前隠士林守篤（魯軒）の著した画譜である。正徳二年（一七一二）序、師は狩野探幽門人法橋幽元とあり、筑前黒田家絵師尾形守房である。手本・粉本を図録として纏めたものであるが、画論・描画手法、構成などを提示。画事を余技とする者、修行中の者に対し手引書、画作の参考書として著したという。画派に捉われず和漢の画題を集成、花鳥部門も中国を模し細部に渉る図解を示した。初代以後の乾山焼草花図への影響を推定する。

獨古人間第一香

獨古人間第一香
乾山省㫖（花押）
「爾」字型

獨古人間第一香
乾山省㫖（花押）「爾」字型

【読み下し】
（信に知る天上（てんじょう）無雙（むそう）の品（ひん））獨り古（いにしえ）より
（占（し）む）人間第一（じんかんだいいち）の香（か）（春）

【出典】
信知天上無雙品　獨占人間第一春
「百花門・早梅」『圓機活法』二十『詩學大成』八

【大意】
梅はこの世に並ぶもののない花。萬花に先立ち第一番に香を発する（春を告げる）。

【語釈】
信　「人」と「言」の合字。真を意味し信ずるの意。疑いの無いこと。
無雙　二つと無い、対比するもののない意。
獨　独り。独り云々のみとして限定の意。
人間（じんかん）　世の中・人間世界。「人間第一香・第一花・第一人」などすぐれた事物、人物の意。

【参考】
1、出典は早梅を詠じた七言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。「牡丹」品題には皮*日休の七言律詩として以下がある。
落盡殘紅始吐芳　嘉名号作百花王（左図牡丹）
競誇天下無雙艶　獨占人間第一香（以下略）
詩句には「独占人間第一香」とあり、やきものとは「古・占」「春・香」の異字がある。
2、面取り四方皿は銹絵、筒向付は銹絵染付の陶法である。

乾山焼牡丹図角皿
落盡殘紅始吐芳
嘉名号作百花王
乾山深省（印）乾山・尚古・陶隠　光琳（花押）「寿型

＊堦は階段、また踏み石。階段は三段から一〇段まで高いほど古風とし、自然石、江蘇省太湖周辺に産する太湖石を好しとした。そばには「りゅうのひげ」また草花数本を添え、枝葉の繁り合うを楽しむという（『長物志』）。
＊堂は屋敷の主屋、表座敷である。堂奥を室と称し、裳階・中庭を設け四壁は塼（せん）また白壁（白漆喰）にするとされる。
乾山の習静堂も大方これに倣い、堂・室・仏堂・橋・茶室・浴室などを構えたものと考える。

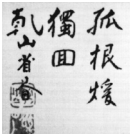
千点　銘なし　新宿区市谷薬王寺町遺跡出土

讃不明
銘なし
新宿区尾張藩上屋敷跡出土

風吹夜香　銘なし　萩藩毛利家屋敷跡

孤根煖獨囲（回）

孤根煖獨囲
乾山省扈（印）尚古・陶隱



孤根煖獨囲
乾山省扈（印）乾山・深省

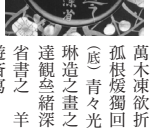
（萬木凍りて折れんと欲す）孤根煖（暖）獨り囲（回）る
萬木凍欲折　孤根暖獨回
前村深雪裡　昨夜一枝開
「百花門・早梅」『圓機活法』二十
萬木凍欲折　孤根煖獨回
「百花門・梅花」『詩學大成』八

【出典】
萬木凍欲折　孤根煖獨回　前邨深雪裏
昨夜一枝開　風送幽香出　禽窺素艶來　①
明年如應律　先發映春臺
斎己・衡嶽沙門「早梅」『佩文斎詠物詩選』下『全芳備祖』『廣群芳譜』『歴代花鳥詩』『全唐詩』

【大意】
寒季、多くの草木が凋落する。梅花のみ根を暖め雪中に花を咲かせる。

【語釈】
萬木　数多の木・多くの木。
凍　氷以外の物の凍ること。
孤根　本の根・根本。寒気に耐えて花を咲かせる力強い梅の精髄。孤高なさまは隠士の精神に喩えられる。
煖　「暖」に同じ。暖か・暖める。
独　独り云々のみの意。
囲　巡らす・回り帰る。

【参考】
1、出典は唐末五代初期、斎己*の早梅を詠じた五言律詩。『圓機活法』『詩學大成』『全芳備祖』『廣群芳譜』『佩文斎詠物詩選』『全唐詩』他所収。省略したが、翻刻には詩中「送・遞」（①の異字がある。
2、江陵の釈斎己は、たとえ天地が万木を殺すとも、梅は独りその根幹に陽気を保ち春を伝えると詠じたが、「根」「獨」など孤根、獨回の意をもとに、梅の孤高、貞節、冷気に堪える美しさを表現した。詩僧、書家として知られ、唐朝滅亡後衡山に隠棲、乞われて湖北省江陵の竜興寺の住職となるが、僧位より、独り静夜詩作にふけることを楽しみにしたと伝承、『白蓮集』が残る。が、唐代は豊かな国家権力、繁栄を誇りとし、草花でも梅花よりも桃、牡丹を好む風潮が生じ、再び梅花が顧みられるようになったのは北宋から南宋にかけてのこととされる。
3、「根・独」は、斎己に先立ち唐代朱*慶餘が「天然根性異　萬物盡難陪　自古承春早　嚴冬鬬雪開」と梅の厳格にして孤高の趣を表した。松・竹と合わせて歳寒三友も詠じられ始めるが、斎己によって雪裏に一枝開く早梅の香が捉えられ、同詩には師の鄭*谷により早梅に「数枝」は背き、「一枝」が好いと改められた逸話が残る（『和語圓機活法』）。鄭谷も「江梅」と題した五言律詩を著すが、蕾を膨らませ、寒に堪える早咲きの梅は孤高、潔く、林逋の詩とともに広く文人に膾炙された五言詩である。画法において梅を描く場合、枝の並生を嫌うという。
4、梅花の詩にはしばしば「孤」が用いられる。孤高清雅の品格を表徴、
「全」という欠所のない・不可欠に対する孤
「庶」という俗に対する孤
「群」の群れ・仲間に対する孤
「萬」のよろず・数多に対する孤
「多」の蔽い・勝るに対する孤
などの意が含まれる（『三才図会』『倭漢三才図会』）。
5、長方皿、長方額皿は銹絵の陶法である。

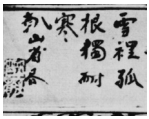


梅図蒔絵　原羊*遊斎

萬木凍欲折
孤根煖獨回（底）青々光
琳造之畫之
達観巠緒深
省書之　羊
遊斎寫

＊斎己（八六四？―九四三？）名徳生、姓胡、号衡岳沙門、湖南省益陽縣の人。幼くして孤児、出家して曹洞禅・雲門禅を修業、湖南同慶寺から衡山東林に隠棲、唐滅亡後湖北省荊南竜安寺に住し僧正となる。書にすぐれ、詩作を好み唐末五代初の詩僧として鄭谷・貫休・方干・曹松らとの交友が知られる。『白蓮集』一〇巻が残る。
＊朱慶餘（生没年不詳）字可久・慶緒・行、浙江省（越州）の人。唐代寶暦二年（八二六）の進士。秘書省校書郎、張籍、賈島らとの交遊が知られる。
＊鄭谷（八五一？―九一〇？）字守愚、江西省宜春の人。唐代光啓三年（八八七）の進士。「鷓鴣」の詩があり、詩集『雲台編』が伝えられる。
＊原羊遊斎（一七六九―一八四五）は江戸琳派の蒔絵師である。神田に生まれ、松平不昧（一七五一―一八一八）、酒井抱一（一七六一―一八二八）らとの交流が知られ、抱一下絵による軸盆他が伝世する。武家御用を勤め茶道具、一般向けとする印籠・櫛・盃などが種々残る。

雪裡孤根獨耐寒



雪裡孤根獨耐寒
乾山省昻（印）乾山・深省

（群芳落ち尽して歳將に残らんとす）
雪裡の孤根獨り寒に耐う

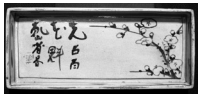
【出典】
群芳落尽歳將残　雪裡孤根獨耐寒
況是幽人風味別　夜深宜向静中看
「百花門・雪梅」『圓機活法』二十

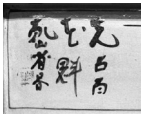
【大意】
百花散り果て、独り梅のみ雪中に花を咲かせる。孤高、梅の力強さを隠士の精神に寓意する。

【語釈】
群芳　多くの花・群がる花。
歳　一年・年月・生涯。穀物の実りの意にも用いられる。
將　まさに云々とす・すべしと読む副詞の再読文字。やがて・もうすぐ何々になるの意。助字として「はたまた」の意もある。
雪裡　「雪裏」に同じ。雪中。「雪裏清香」は未だ雪の残るうちから花開く梅の異名。
孤根　ただ一本の根、枝。孤立して助けのないことをいうが、孤高、高雅、梅の本質・精髄を表し、隠士の喩。

【参考】
1、出典は早梅を詠じた七言絶句。『圓機活法』所収。
2、たとえ万木が凋落しても、梅は独りその根を暖め陽気を保ち、絶えようとして絶えることのない春を伝えるが、「孤根」「獨回」など梅の孤高、貞節、冷気に堪える美しさを表現した。唐代は梅花よりも桃や牡丹が好まれ、梅が再び顧みられるようになったのは宋代を迎えてからのことである。
3、長方皿は銹絵の陶法である。

先占百花魁





先占百花魁　乾山省昻（印）陶隠

（未だ三白の後を經らざり）先んじて百花の魁を占む
未經三白後　先占百花魁
「百花門・早梅」『圓機活法』二十

【大意】
未だ三白の雪を見ないまま百花に魁け梅花が開く。（新春を迎える前に開花、梅ははや春を知らせる。）

【語釈】
三白　臘（冬至後第三の戌の日に行う祭）の前に降る雪・正月の三ヵ日に降る雪。
百花魁　多くの草花に先立ち花を咲かせる。花中梅は魁けとなることから花魁。「花魁」はうかれめ・花魁。「花洛人」は宮人。

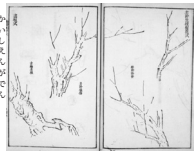
【参考】
出典は早梅を詠じた五言詩。『圓機活法』所収。「十二令花神賦」には「正月花神柳夢梅春風先占百花魁」とあり、『梅花百詠』（秦観）には開花・景物・観賞など梅に関する百様がある。「二月の雪」は春の盛りに降る雪、梅花の散ることをいう。長方皿は銹絵の陶法である。

家空歸（帰）海燕

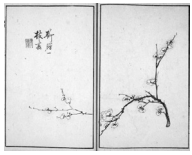
家空歸海燕　銘なし　印不読
新宿区市谷薬王寺町遺跡出土

家空にして海燕歸る（人老いて江梅發す）
家空歸海燕
人老發江梅
劉*長卿「酬秦系詩」『全唐詩』

人去り、空家、が、燕は帰る。人老い、が、河のほとりの野梅は花を咲かせる。「空」は空しい・ひっそりとした意、「海燕」はうみ燕・千鳥、「江梅」は梅の一種、野梅をいう。出典は唐代劉長卿の五言律詩。『全唐詩』他所収。



『芥子園畫傳』「書根式」

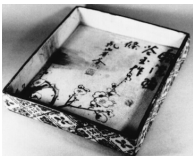


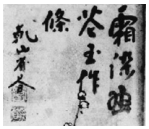
『芥子園畫傳』「趙子固画を模す・陸凱句」

図は、梅花の根の描法、「聊贈一枝春」の詩意を描いたものである。百花魁、春の訪れを梅花一枝に托した六朝代陸凱の五言古詩を基とする。

＊劉長卿（七二六？―八六？）唐代詩人、字文房、安徽省宣城？また河北省河間縣の人。開元二一年（七三三）の進士、若くして晴耕雨読、讒言に遭い浙江省へ左遷、湖北省刺史として生涯を終える。山水を詠じた詩が多く、『劉随州集』『隆長卿集』が残る。

霜染幽苔（花）玉作條





霜染幽苔玉作條
乾山省㫖（印）乾山・深省

霜幽苔（花）を染めて玉を條と作す（半は村路に臨み半は溪橋）

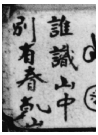
【出典】
霜染幽花玉作條　半臨村路半溪橋
移栽東閣堪吟玩　一任清香檻外飄
「百花門・移梅」『圓機活法』二十

【大意】
霜がおり梅枝が白玉のようだ。（半ば村の小道に、半ば谷川の橋の傍らに咲く）

【語釈】
霜　氷点下空気中の水蒸気が地面や物に接し白色の細かな氷になったもの。古来中国では露が凝って霜になり、露はよく物を育てるが、霜は物を殺し凋落させるとし（*『本草綱目』）、「霜染」は霜雪の寒気を含む中の意。
幽苔　奥床しい花、ひっそりと隠れて咲く花。
玉　美称に用いる。「玉條」は玉で作られた美しい枝。
半　半分・中程・片端。
村路　村里の路。田舎道。
臨　臨む・及ぶ・見下ろす。
溪橋　谷川に架かる橋。

【参考】
1、出典は梅花を詠じた七言絶句。『圓機活法』所収。「移梅」は山中にある梅を、庭園などいづれの処にか移し栽える意。
2、古来中国では霜や露は天にその気が満ち、天から地上へ降るものと考え、その気配を「寒気」という。詩中「東閣」とあるのは東向きにある小門を表し、李商隠の詩には「早歳思東閣爲邦屬故国」とある。
3、角皿は色絵の陶法である。

誰識山中別有春



誰識山中別有春
乾山（印・裏）乾山・深省

（諸公袞袞として風塵に混ず）
誰れか識らん山中別に春有るを

【出典】
諸公袞袞混風塵　誰識山中別有春
外物不侵君復願　幾披風雪夜深歸
「百花門・山中梅」『圓機活法』二十

【大意】
春の訪れも遅い山中、誰にも知られずひっそりと梅花が香を放つ。

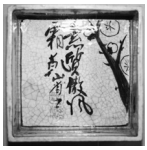
【語釈】
諸公　多くの公・諸君。山中に比して風塵にまみれた都の意もある。
袞袞　後から後から塵などの生ずるさま、また大水の流れる様子などをいう。「袞」は天子・三公の礼服であり、龍の縫取り文様が施されていた。俗に政権を握る勢位ある当局者を「袞袞諸公」という。
風塵　風に起つ塵、兵乱、旅中の辛苦を表すこともある。俗吏の職務官途、俗世俗事、讒言などの意もある。
誰識　誰か知らん。「誰」はたれ・たがと読み、人について問う。

【参考】
1、出典は山中の梅を詠じた七言絶句。『圓機活法』所収。「山中」「雲中」には根底に道家の思想があるとし、広東省恵州羅浮山は梅の名所、趙師雄「羅浮夢」として知られている。羅山・浮山の二奇峰から成り、晋代以来、道士・仏者、隠逸者の俗を避ける處とされていた。
2、趣味人は梅・桃樹など紅花は山中に苔のついたものを探し、屋敷の植え込みや林の中に点景として置くという（『長物志』）。
3、入角四方皿は銹絵の陶法である。

---

*『本草綱目』（五二巻）は、明代医師・本草学者李時珍（一五一八―九三）が二七年間を費やし、薬用となる植物・動物・玉石などを挿図とともに著した本草学書である。本草学は漢代『神農本草経』に礎石がある。六朝・唐・宋代と進展、明代になり時珍は凡そ一九〇〇種の品目を八項目に分類、名の考証、産地註解、製造、気味・主治・発明、正誤などを纏め、萬暦二四年（一五九六）に刊行。日本へは江戸初期に渡来、寛永一四年（一六三七）和刻本を版行。儒者貝原益軒（一六三〇―一七一四）は『大和本草』（二五巻）、自然療法、養生を説く『養生訓』（八巻）を著したが、日本では綱吉時代、元禄期には薬草探求が活発化。吉宗時代は採薬使が全国の山野を渉猟、小石川薬園では栽培、育成も行われたと伝承する。京都では鷹峯に御薬園があり、二條家出入り、乾山とも知己であった「御医師、御薬園預」藤林道壽、玄常（『御役所大概覚書』）、尾形本家では医師元安、儒者宗中ら屋敷にも薬園のあったことが考えられる。

素質傲風霜



素質傲風霜
乾山省昼（印）
乾山・深省

素質傲風霜
乾山省昼（花押）「爾」字型

【読み下し】
（餘香龍麝を壓し）素質風霜に傲る

【出典】
餘香壓龍麝　素質傲風霜
『百花門・梅花』『詩學大成』八

【大意】
（微かに匂う梅香は龍麝香にも勝り、）その性は厳しい風や霜にも屈しない強さを誇る。

【語釈】
餘香　遠くから漂い来る微かな香り・残香。
龍麝　「龍」「麝」ともに香の名。龍は鯨の精液を乾燥させ粉末にした「龍涎香」、麝は麝香鹿の腹中にある強い香気をもつ塊状の皮腺「麝香」をいう。古くから香料や薬用に使われた。
壓　抑える・降す・崩す。
素質　本質・素から具有している性質、能力。
風霜　風と霜。年月。艱難辛苦を恐れないの喩。
傲　傲る・誇る。「傲霜」は菊や松の形容に用いられ、寒風霜雪の厳しさにも屈しない本質を賞していう。

【参考】
1、出典は梅花を詠じた五言詩。『詩學大成』所収。類似の詩句に宋代裘萬頃の七言律詩「次洪内相梅亭」（『広群芳譜』）に以下のようにある。
　那得紅簾捲朱戸　細看素質傲清霜
2、「老枝傲霜雪」（『松斎梅譜』）は、梅花にも松にもあり、乾山焼では菊図長方皿にも「素質傲風霜」と同じ詩句がある。
3、角皿は銹絵、茶碗は銹絵染付の陶法である。

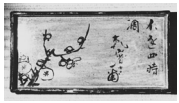
素質傲風霜
乾山省昼（印）陶隠

乾山省昼（花押）「爾」

不逐四時凋

不逐四時凋
乾山省昼（印）
乾山・深省

乾山省書（印）乾山・深省



乾山省昼「爾」
（印）乾山・深省

【読み下し】
（能く萬象の主と為って）不逐四時の凋を
（四時を逐って凋まず）

【出典】
有物先天地　無形本寂寥　能為萬象主
不逐四時凋①『居士傳』七『朱子語類』一二一
能為萬象主　逐四時不凋
『禅林句集』『五燈會元』二『點鐵集』十七

【大意】
外境の束縛を受けないことをいうが、心は動的、それ自体を捉えることはできない。悟りすら固定的なものではない。

【語釈】
能　立派にできる・及ぶ・才量。
萬象　宇宙に存在するあらゆる物。森羅万象。
主　所有者・あるじ。根本・要。
逐　遂げる・従う。「凋」は凋む・衰える。

【参考】
1、出典は『居士傳』『朱子語類』『五燈會元』『點鐵集』他所収。『「不逐四時凋」「逐四時不凋」①の相異がある。
2、『五燈會元』（二〇巻）は、インドから中国に及ぶ六代五家七宗の列祖を網羅した仏書である。南宋代大川*霊隠普濟が『景德傳燈録』『天聖廣燈録』『建中靖國讀燈録』『聯燈録』『嘉泰普燈録』の五燈録を抄録、宝祐元年（一二五三）刊行したが、「会元」は五燈を会要、一書としたことによる命名である。一説に普濟門下慧明首座の撰ともされ、元代兵火に焼失し、日本には五山版をはじめ、室町、寛永本が残るという。
3、角皿、筒向付は銹絵の陶法である。

*大川霊隠普濟（一一七九―一二五三）は大慧派禅僧、『五燈会元』の編者とされる。中国五山杭州北山景徳霊隠寺の住持であった。

不逐四時凋　乾山省昼（印）
尚古・陶隠（二枚とも）

梅含鶏舌兼紅氣

梅含鶏舌兼紅氣
銘なし（印）尚古・陶隠か

梅は鶏舌を含みて紅氣を兼ねたり（江は瓊花を弄びて緑紋を散ず）

【出典】
款款春風澹澹雲　柳枝低作翠櫳裙
梅含鶏舌兼紅氣　江弄瓊花散緑紋
帯霧山鶯啼尚少　穿沙蘆筍葉纔分
今朝何事偏相覓　撩亂芳情最是君
元稹「早春尋李校書」『元氏長慶集』

【大意】
紅梅は鶏舌香を口に含んだように、香り高く、鮮やかな紅色を帯びる。（春風が水面の梅花を揺らし、緑の水紋を散らす。）

【語釈】
鶏舌　「鶏舌香」と称する名の香。インドシナ、交趾産の香名。かつて皇帝に対する時はこれを口に含んで応対したとされる。
紅氣　紅の美しい色・めでたい気。「気」は生まれつき・意気。万物は気の集積と展開によって造られるが、非凡なものほど気は集積、凡庸なものは少ないとする。
瓊花　美しい姿の形容。仙郷の花、梅花をいう。

【参考】
1、出典は唐代元稹*の「早春尋李校書」と題した七言律詩。『元氏長慶集』所収。本朝でも『和漢朗詠集*』に掲載されたが（緑紋・碧文）の異字）、鶏舌香は日本でもよく知られた香であった。香料の「丁子」をいうか。
2、『栄華物語』根合巻には後冷泉天皇の中宮章子の女房が、同句に因み、五節の装束をしたとある。梅花の織物、香染、紅梅、緑の衣、唐衣の紐とされる。
3、長方皿は銹絵の陶法である。

華形都似酒　紅梅沈醉白梅醒

華形都似酒　紅梅沈醉白梅醒
乾山省（印）尚古

華形都て酒に似たり、紅梅（蓮）は沈醉、白梅（蓮）は醒（酣）なり

【出典】
西風初日小溪帆　旋織波紋縐浅藍
行入閑荷無水面　紅蓮沈醉白蓮酣
范成大・石湖「立秋後三日泛舟越来溪」『歴代花鳥詩』荷花『佩文斎詠物詩選』上

【大意】
酒に似て紅梅は酔、白梅は醒めて迷いの晴れた雅淡の色。

【語釈】
酒　八月黍が実ると水を混ぜて醸成、古くは黄帝*に「酒漿」の語があり、『説文』によれば周代杜康がはじめて酒を造るとする。三国時代に曹操が禁酒令を出すと法を犯して飲む者が続出。酒に隠語を案出して清酒を「聖人」、濁酒を「賢人」と称したという。
醒　酒の酔いが醒める。心の迷いが晴れるなど、道理を弁え理性の明なることをいう。たけなわ・盛ん。酒を飲んで楽しむの意。
酣

【参考】
1、出典は不明。類似の詩句には南宋代范成大*の荷花を詠じた七言絶句がある。「蓮」「梅」、「醒」「酣」の相異はあるが、「紅蓮」「白蓮」はともに美人の酔態を象徴、一様に妖媚な姿の喩とされる。これを梅花に擬したものか。
2、晋代竹林七賢人以来、酒は憂いを解くもの、文人・隠者の涙としたが、酔うことは落涙すること、現実逃避、俗世（官僚社会）に対する抵抗手段と考えた。詩歌には白梅は早く、紅梅は唐代以後に詠まれるようになったという。
3、片口は銹絵の陶法である。

＊元稹（七七九―八三一）唐代詩人。字微之、河南省洛陽市の人。貞元九年（七九三）一五歳で科挙に及第、が、屢々左遷、左拾遺・中書門下平章事、のち節度使として湖北省に没する。白居易との交流、詩の応酬、新楽府運動が知られ、両者の詩風を「元白体」という。『元氏長慶集』六〇巻が残る。
＊『和漢朗詠集』（二巻）は藤原公任撰、藤原行成筆を基とする。王朝人の愛唱した漢詩、和歌の断章を集めた詞華選であるが、当時流行した屏風歌に関わりがあり、歌人には菅原文時・道真・源順・小野篁ほか、詩人には白居易・元稹・許渾・劉禹錫らの詩が多くみられる。
＊黄帝は伝説上の人物。中原民族の祖とされ、性は姫。『史記』では中国の歴史の始まりとする。
＊范成大（一二二六―九三）南宋代の詩人。字致能、号石湖居士、江蘇省蘇州の人。早くに両親を失い、二九歳で進士に及第、礼部員外郎から起居舎人となる。金への特使を勤め交渉に尽力、要職を歴任したのち晩年は石湖に隠棲。『石湖居士詩集』を残す。

桃

―中国―

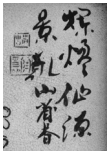
桃は薔薇科の落葉小高木、原産地は中国黄河上流の高原地。漢名は桃、和名は果実の細毛「毛毛」によって桃、西洋名のピーチはラテン語に由来する。夏に果実、秋には葉が散り、寿命は一〇年余の短命花であるが、白・淡紅色の五弁の花、単葉・千葉、葉は楕円形、縁には鋸歯があり、果実は色や形、季節によって白桃・紅桃・黄金桃・銀桃・烏桃・碧桃、早桃・秋桃・冬桃。仙木・仙卿・福孫夕ほかの異名がある。

容姿の美、災いを除く樹木（『左傳』『禮記』）、「西王母」は中国西方崑崙山に住む仙女西王母の故事に因みつけられた仙果名である。三千年に一度実をつける「仙桃」は延年長寿を主り、邪気を押さえて百鬼を制すと信じられたが、桃符と称し、二枚の桃の板上に百鬼を喰らう神荼・鬱塁神の二神を描き門に貼って門神とすること、地に打ち込み地鎮とすることなどの習わしが伝承する。上巳節会、曲水宴、脱俗的、理想郷への憧れとして陶淵明の「桃花源詩并記」が知られるが、俗界と理想郷を隔てたものは桃林である。桃が楽園に結びつく由縁であるが、画題「武陵桃源」「桃花流水」は桃源郷に基づき、宋代院体画に多く、徽宗皇帝の桃鳩図・桃花小禽図、徐熙の白桃小禽図などが伝世する。

―日本―

桃は弥生時代の遺跡に種子が残る。早くから食用・薬用・観賞用として栽培、『万葉集』では娘子に喩え、平安期には三千年の故事に因み永遠性に関連させる。文字も毛桃から桃となるが、江戸期には品種改良、交配なども本格化、樹木は工芸品に細工される。異名には真実・燃実・三千代草・三千年草・御酒古草などがある。

爛熳仙源景



爛熳仙源景

乾山省昏（印）尚古、陶隠

爛熳たり仙源の景（繁華上國の春）

爛熳仙源景　繁華上國春

「百花門・桃花」『圓機活法』二十『詩學大成』八

【大意】

桃花爛漫、まさにこの世の景色とは思われない。

【語釈】

爛熳　爛漫。光輝くさま・花の咲き乱れるさま・豊かな水の形容など。「熳」は「漫」、六朝時代に誤って熳になったという。

仙源　神仙の居所。「仙」は山に入り不老不死の術を得た人、梵行を修めて神通力を得た人格者。仏家では悟りの中にあること。

繁華　草花の繁る意から、賑わい栄える意。

上國　中国の自称。また川の上流にある国・都に近い国。

【参考】

1、出典は桃花を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。陶淵明*の詩記、王維、韓愈*らの桃源郷が土台である。秦代乱を逃れた人々は武陵の桃源郷に別世界を築く。一人の漁夫が道に迷い、舟は洞窟を抜け源泉地に辿り着くが、其処は別天地、里人は自ら楽しみ自ら耕し、世の興亡も知らず平和に暮らす。数日間ほど酒食を共にし、漁夫は辞去に際して他言を禁じられる。が、故郷に戻り戒めを忘れ太守に報告。探索すれども行く所、遂には桃源郷に到らなかったとする物語である。

2、西王母は崑崙山の半獣半人の女神であるが、兎は従者、西王母のため長寿、不死の仙薬を搗くという。誕生日には八仙人が海を渡り崑崙山の居所瑤池へと祝いに赴くとされていた。

3、桃の花は観賞用、実は食用、種子の仁は熱・排泄・皮膚・血液の巡行を調え、未成熟の実（桃梟）、葉は乾燥させ皮膚病の治療に用いられる。

4、角皿は銹絵の陶法である。

＊陶淵明（三六五―四二七）東晋代詩人。字元亮、名潛、号五柳・謚靖節先生、江西省九江西南の人。四一歳官を辞し帰隠、深い思索と平明な詩は広く詩人・文人に親しまれた。

＊韓愈（七六八―八二四）唐代文学者・詩人。字退之、謚韓文公、河南省河陽の人。二五歳で進士に及第、監察御史・国子博士・刑部侍郎を務めるが、二度の左遷、没後に礼部尚書を贈られた。古文運動を実践、『昌黎先生集』が残る。

菊

―中国―

一、生態

菊は菊科の湿草類一・二年草、多年草、原産地は東洋である。花弁を米に見立てたことから、漢名は菊、和名は漢名の音読み、花の形状が掬す手の形に似るとして菊、西洋名のクリセントマムは古代ギリシャ名が語源とされる。季節は秋を代表し、園芸品種は一〇〇種を超えるが、花の大きさ、咲く季節により大・中・小菊、夏・秋・冬菊などに大別される。二月に植え夏に株分け、秋開花する秋菊を最佳とするが、霜雪に耐えて開花する潔さは人物の節操に喩えられる。茎は根元に向かって木質化、株型・蔓型の二種があり、葉は羽状、縁には鋸歯、大小・尖禿・厚薄などの相異がある。花は白・黄・紅・紫・混合色の単葉・千葉、唐代までは菊といえば黄菊を表し、宋代になり観賞用に白・紅・紫菊が加えられた伝承する。九華・冷香・延年・重陽花・隠君子などの異名がある。

二、故事・逸話・図像化

一、菊花は古来長寿延命、武運長久の瑞祥花、君子を表徴。鞠は黄花（『禮記』）、五行説では開花の時期が「金」に当たり、金は黄色、黄色は正色、中央・純和を表す色である。「重陽には茱萸を佩び、蓬餅を食し菊華酒を飲めば人をして長寿ならしむ」（『西京雑記』）とあり、『神農本草経』には「菊華を服すれば延年の効あり」とある。

二、菊酒の風習は「採菊帖」（王羲之）によれば六朝期中頃、九月九日薬草菊花を摘む風習に関連するという。花や葉、茎を採って米や黍と混ぜて醸すことに始まるが、しだいに簡略化、酒に花弁を浮かべることに転じたとする。周代穆王に寵愛された菊慈童（『枕慈童』）、魏の文帝の菊花評なども伝承、菊酒は延年・延寿の酒となる。菊月（重陽）には邪気を払い延命長寿を祈願、菊酒を振るまい、酒家の入口は菊花で飾られ、盃を交わし、詩詞を詠じて楽しんだという。白菊は唐代以後の賞玩花であるが、宋代には色とりどり、辟邪、辟病の霊力が信じられ、髪に飾る風習、盆菊と称し鉢植えなどの栽培も盛んになる。

三、「隠逸花」は戦国時代、屈原の憂苦が端緒となる。『楚辞』には、

朝飲木蘭之墜露兮　夕餐秋菊之落英　（「離騒」）

とある。讒言により国を追われ各地を放浪、楚が秦に亡ぼされるや祖国に殉じて湘水汨羅に身を投ずるが、屈原は憂国の士、君子の象徴として久しく士大夫・文人らの憧憬するところとなる。晋代、陶淵明は「帰去來辞」を著し、人間の真、自らの来し方を吐露、園田人境に居を構え、庭の東籬に菊花を植えて悠然と南山（廬山）をみる。籬の菊、悠然と山に対する隠者の態度は、君子の節操ある姿を表象、花辨を忘憂物に浮かべるなど、忘憂物とは酒であり、

酒能祛百慮　菊解制頽齢

と、酒と菊に忘れ難い世俗の情、衰えゆく身の延命長寿を願うとある。

宋代には周茂叔（周敦頤・一〇一七―七三）が「愛蓮説」を著した。

水陸艸木之花　可愛者甚蕃
自李唐來世人甚愛牡丹
濯清漣而不妖　香遠益清亭亭淨植
予謂　菊花之隠逸者也
蓮花之君子者也
蓮之愛同予者何人

晉陶淵明獨愛菊
予獨愛蓮之出淤泥而不染
中通外直不蔓不枝
可遠觀而不可褻翫焉
牡丹花之富貴者也
噫菊之愛陶後鮮有聞
牡丹之愛宜乎衆矣

菊花は隠逸花として膾炙されるようになるが、淵明の心中を汲み、

「予謂菊花之隠逸者也」とある。水陸に草木花は多い。が、晩秋風霜に耐えて咲く菊花は尋常ではない。牡丹は富貴、俗世の花、泥中にあり泥に染まらぬ蓮こそ君子の徳と説くが、三者を対比、菊はその生命力の強さも愛された。范成大も『范村菊譜』を著すが、寒季姿を変える草花のうち、菊花は節操正しく自らを保ち気高い幽人・逸人のようだとした言を残す。

四、明代、呉（蘇州）では菊の頃好事家たちは五色の菊花を高低揃え列と為し賞玩したと伝えられる（『長物志』）。奇種を求めて一、二本を鉢植えにして机辺に置くともあるが、室内に置き座臥して賞玩、野菊は籬に植えると述べている。古代は黄菊、北宋代には白・紅・紫菊が一般化、明代には九〇〇種ほどの品種が栽培されていたという。隠逸花の概念も定着、士大夫、文人、詩人らは隠逸人の仲間とされた。

画家には楊寵（生没年不詳）、馬隣（生没年不詳）、高九萬（生没年不詳）らの名が残り、墨菊は画僧萬公を魁けとする（『逸老堂詩話』）。歴史、文学上の故事・逸話、生態などから君子・隠逸の象徴となるが、題画には、延年不老の壽を表し「甘谷延年」「杞菊萬年」「草中寿栄」など、陶淵明の故事に因み「東籬佳色」「東籬餘興」、梅花を添えて「歳寒二友」「芳信先傳」、その他「四愛」「四君子」「五友」などがある。宋代は刊行物が盛行、范成大著『范村菊譜』、劉蒙著や史正志著『菊譜』、沈競著『菊名篇』、史鋳著『百菊集譜』などが著された。

本朝では後鳥羽天皇が紋章とし、明治四年天皇家の「十六弁表菊花」、宮家「十四弁裏菊」が定められた。文様は染織・漆芸・陶芸など種々の工芸分野に活用された。

―日本―

一、日本へは奈良期、百済から仁徳天皇代（在位三一三―九九）、青・黄・赤・白・黒（紫か）五色の花の種子が贈られたという。平安期には観賞用として園芸栽培も始まるが、籬、垣根に添えて栽植することは禅門との交流も深い鎌倉期武家間において流行、薬用・食用・観賞用、日本においても多くの品種が作られた。

二、『古事記』には「久久」、『懐風藻』には菊酒、『万葉集』にはみられないが、平安以後和歌、日記、随筆、物語などに取りあげられる。

重陽の節会、菊花の宴は天武天皇代に始まるとされ、菊酒は邪気を払い延命長寿、花に真綿を被せる被綿行事は、夜露、菊の芳香を移し取り、翌朝その綿で身体を拭い、老を取り去り長寿を保つためと考えられた。『延喜式』には献上品の産地として四国讃岐・阿波国、若狭、近江、下野などが掲げられている。大衆文化の隆昌する江戸期になり観賞用の大輪の花、役者人形を菊花で飾る菊人形などが考えられた。

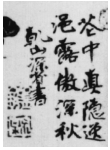
三、菊花は金・水の精英を蔵するという。雅趣、吉祥、霜雪を凌ぐ操の気高さは衆花の及ぶ所ではないとするが（『倭漢三才図会』）、中華思想をそのまま踏襲、江戸時代には文人詩人の最も好む一花となる。

嵐雪の句に「黄菊白菊その外の名はなくもがな」とある。

日本の菊はかわらよもぎが原産という。各地方に生育し、野に咲く野菊、枝はなく葉が茎にまとわりつく仏頭菊、浜菊の類、産地は筑前博多・山城貴船・鞍馬の菊、加賀の紫衣菊などが知られている。

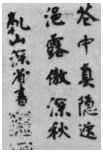
異名には河原艾・長月草・勝草・残草・齢草・隠君子・隠逸花・拒霜花などがあり、その年の最後の花が菊であり、翌年に咲く最初の花が梅である。

苍（花）中眞隱逸　浥露傲深秋

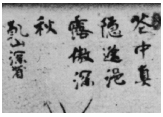


苍中眞隱逸　浥露傲深秋
乾山深省書（印）乾山、尚古・陶隱
光琳斎

苍中眞隱逸　浥露傲深秋
乾山深省書（印）尚古・陶隱
光琳（花押）「寿」型



苍中眞隱逸　浥露傲深秋
乾山深省毫（印）乾山、尚古・陶隱
光琳書



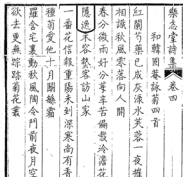
【読み下し】
苍（花）中眞（真）の隱逸（いんいつ）
露に浥（ゆう）うて深秋（しんしゅう）に傲（ごう）る（出典不明）

【大意】
数多（あまた）の花中菊こそ真の隱逸花、晩秋の寒にも耐えて花を咲かせる。菊は晩節に開花するものを佳とし、風雅、吉祥、群花の持ち得ぬ霜を凌ぐ性が称賞される。

【語釈】
隱逸　世俗を離れて山中などに隱れ住むこと。
　隱逸花は菊花の異名。
浥　「潤」に同じ。潤う・浸る。
傲　誇る・屈しない。「傲霜」は菊花の形容。
　「傲霜濯露」は霜露に凋むぬ本性をいう。

【参考】
1、出典は不明。明末清代李*明嘗の七言絶句に「此是花中真隱逸」（清代『樂志堂詩集』）とあり、『圓機活法』『詩學大成』大意に「浥露傲霜」とある。同讃、五言詩句は見当たらないが、「真隱逸」「浥露傲」は明代に多い成語である。晩秋霜枯れに耐え香り高く咲く菊花の潔い姿を隱逸の人に喩えるが、独り隱士の身を清くする姿にも比する。
2、寓意は陶淵明の詩・記、周*茂叔（敦頤）の『愛蓮説』に因るが、李*東陽の「惟菊為隱逸之稱」（『周原已席上題十月賞菊卷』『広群芳譜』）、「隱逸花」は菊花の異名として『撫州府志』（『本草綱目啓蒙』小野蘭山口述）に現れる。「古人把菊花比　作花中的隱士」とあり、菊花の異称と捉えている。菊は幽人、梅は烈士、ともに風雪に耐えるが、標格に相異があるとする。
3、陰暦九月九日重陽節句を「菊花節」というが、丘など高所に登り、頭に茱萸（かわはじかみ・呉茱萸）を挿し、菊酒を飲んで厄払い、長寿を祈る風習が南北朝以来あったという。茱萸は秋に実をつけ、この枝を頭に挿せば疾病など邪気を退けるとされていた。角皿類は銹絵陶法である。

＊李明嘗（一六四四前後在世）明末清代、浙江省嘉興の人。詩に巧み、著述を以って知られるという。
＊周茂叔・敦頤（一〇一七―七三）宋代理学者・思想家。字茂叔、湖南省道縣の人。宋学の先駆者であり、「太極図説」「通書」を著した。門人程顥、程頤兄弟はその学説を継承、朱熹が大成。朱子学は学問究明、道徳実践を本居に自己完成を目指すなど、江戸期日本の儒学・漢学の基礎となった。
＊李東陽（一四四七―一五一六）明代文学者。字賓之、号西涯、謚文正、湖南省の人。天順七年（一四六三）進士に及第、要職を歴任。詩壇では茶陵派を結成、杜甫を敬し律詩にすぐれ、『懐麓堂集』が残る。



『樂志堂詩集』（巻四）「和韓固庵詠菊四首」と題した七言絶句である。「此是花中真隱逸」とある。

『八種画譜』（上）「梅竹蘭菊」・（下）「名公扇譜」にみられる菊図と讃である。乾山焼画讃様式の構想、表現に関連する。

苍中眞隱逸　浥露傲深秋
乾山深省毫（印）尚古・陶隱

苍中眞隱逸
乾山省扇（印）乾山・深省

浥露傲深秋（以下四点）
乾山省扇（印）尚古・陶隱

乾山省扇（印）乾山・深省

乾山省扇
印なし

輪花皿か
大阪府難波宮遺跡出土

嫩蕋輕栖露　寒枝勁傲霜

嫩蕋輕栖露　（上）乾山省（印）乾山・深省　（下）乾山省扈（花押）「爾」字型（印・裏）乾山・深省

寒枝勁傲霜
乾山省（印）
乾山・深省

【読み下し】
嫩（嫩）蕋輕く露栖り　寒枝勁く霜に傲る

【出典】
嫩蕋輕栖露　寒枝勁傲霜　①
「花木門・菊花」『詩學大成』九『圓機活法』二十

【大意】
咲き始めた菊花に露が宿り、寒に耐え、枝は霜にも負けない。

【語釈】
嫩　「嫩」の俗字。若い・弱い。
蕋　「蕊」の俗字。花のしべ。「嫩蕋」は柔らかな花の蕊、ここでは菊花を表す。
輕露　軽やかな小露。菊花は古来身を軽くし気を益して人の壽を延ぶるという。「風露」は風に吹かれて滴り落ちる露のこと。
寒枝　葉の落ちた枝・枯枝。「寒花」は菊。
勁　弛みなくぴんと張る・強い・健やか。
傲霜　霜にあっても勢いがよい。菊花の形容。

【参考】
1、出典は菊花を詠じた五言詩。『詩學大成』『圓機活法』所収。両書には「嫩・細」「栖・濡」①の異字がある。「傲霜」は蘇軾の七言絶句「初名作贈劉景文」が初出とされ、
荷盡已無擎雨蓋
菊殘猶有傲霜枝
と、失った六人の兄を荷に喩え、杭州で民兵を率いる劉景文*を菊とし、荷は枯れても菊には霜に耐え抜く強い茎が残るとその奮起を促した。
2、禅林では『槐安國語』『禅林句集』などに採録、現成底の妙趣とする。
3、角皿・長方皿・扇面皿などがある。

香清殿衆葩

香清殿衆葩　華洛乾山　印なし

（種異にして孤秀を成し）香清くして
衆葩に殿る
種異成孤秀　香清殿衆葩
「菊」『圓機活法』二十『詩學大成』九

【大意】
衆花に異なり、独り遅れて気高い香を放つ。

【語釈】
孤秀　独りずば抜けて優れ、一線を画す。
衆葩　たくさんの花。「衆」は多くの物・人。「葩」は花びら・花・盛んなことをいう。
殿　貴人の居所、政務を司る所の意であるが、ここでは殿、後ろの意である。

【参考】
1、出典は菊花を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。
2、四季の終わり、晩秋に独り開花、清く香る菊花は、風情と力強さを愛でられ、己れの節操を守る君子の風貌に喩えられる。
3、輪花鉢（栗鉢*）は色絵、丸皿は銹絵陶法である。

枝上寒氷潔

枝上寒氷潔　欄邊白雪香
枝上寒氷潔　欄邊白雪香
「百花門・白菊」『圓機活法』二十
輕盈枝上寒氷潔　馥郁　籬辺
白雪香　①「詩學大成」九

白い寒菊、外気に負けない力強さと清しさをいうが、「寒氷」は氷や寒気。「欄邊」は欄干・囲い、「輕盈」はか弱い、たおやかさの形容。「籬辺」は柴や竹で編んだ粗末な垣根の周辺をいう。
出典は白菊を詠じた五言・七言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。両書には「輕盈」「馥郁」の有無、「欄邊・籬辺」①の異字がある。「東籬餘興」など陶淵明故事が念頭にある。「東籬佳色」角皿は未見、銹絵陶法と推測する。

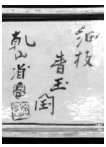
寒枝勁傲霜
乾山省扈（印）尚古・陶隱（二枚共）

香清殿衆葩　乾山省（印）
尚古・陶隱

＊劉景文（一〇三三―九二）字景文、名季孫、河南省開封詳符の人。将軍劉平末子、六人の兄は早逝、蘇軾は彼を朝廷に推挙、唱和詩によれば菊の時節は一年の好景、最も味わい深い季節と励ました。

＊栗鉢は、水栗を入れる鉢である。朝鮮の風習ともいわれ、毒消し、口中の清めのため会席料理の最後に供されたという。乾山焼輪花鉢箱書には「栗鉢」とある。

細枝青玉潤　繁蕋碎金香



細枝青玉潤　乾山省㫖
（印）尚古・陶隠

繁蕋碎金香
乾山省㫖（印）乾山・深省

【読み下し】
細枝青玉潤い　繁蕋碎金香し

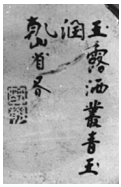
【出典】
細枝青玉潤　繁蕋碎金香　①
「百花門・菊」『圓機活法』二十『詩學大成』九
可訝東籬菊　能知節候芳　細枝青玉潤
繁蕊碎金香　爽氣浮朝露　濃滋帶夜霜
汎杯傳壽酒　應共楽時康
僧廣宣「九日菊花詠應詔」『佩文斎詠物詩選』下

【大意】
黄菊の細枝が露に潤い、砕けた黄金の欠片のように風に揺れ芳香を放つ。

【語釈】
青玉　青い玉石、露の喩。竹・桐の異名。
繁蕋　たくさんのしべ。「繁蕚」は千葉に同じく八重の花、「繁枝」は繁った枝。
砕金　砕けた黄金のかけら、菊の称。「金」は美称。「金華」は黄色の菊。「金英」は菊華の芯の黄色のもの。黄菊の咲き乱れるさまは草むらに黄金をばらまいたようだとする意。「金英玉蕋」は菊花の色をいう。

【参考】
1、出典は唐代僧廣宣*の「九日菊花詠應詔」と題した五言律詩。『圓機活法』『詩學大成』『廣群芳譜』『佩文斎詠物詩選』他所収。「潤・閏」①の異字がある。
2、「蕋」は「蕊」の俗字。「蕋香」は花の香、「蕊蕊」は草むらをいう。
3、角皿、筒向付は錆絵陶法である。

玉露洒叢青玉潤



玉露洒叢青玉潤
乾山省㫖（印）乾山・深省

【読み下し】
玉露叢に洒いで青玉潤い（金風蕋を折りて碎金香し）

【出典】
玉露洒叢青玉潤　金風折蕋碎金香
「百花門・菊」『圓機活法』二十

【大意】
玉の如き露が滴り、秋風に黄菊が揺れて芳香を放つ。禅林では寒風に遭い折れて悟りの窩が砕かれる意とする。

【語釈】
玉露　玉のように美しい露。秋の景物。
叢　群がる・茂み。「叢菊」は群がり咲く菊。
洒　「灑」に同じ。洗う・散らす。「洒落」はさらりと早く落ちる意から、あっさり、気のきいたなどの形容に用いる。
青玉　青い玉石。露の美称。竹・桐の異名。
潤　「潤」は門構えの中は「王」である。乾山焼では「玉」に作ることが多い。瑞々しく美しいさまをいう。
金風　秋風。陰陽五行説では秋は金に当たる。
碎金　砕けた黄金のかけら。ここでは秋風に揺れる黄菊の芳しいさまをいう。

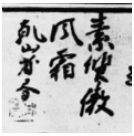
【参考】
1、出典は菊花を詠じた七言詩。『圓機活法』所収。「玉露」「金風」はともに秋の景物を表す詩語である。『圓機活法』「秋日」の部門にある。
2、「青玉」は竹の異名、秋風に揺れる菊花に対して竹葉に滴る露の瑞々しさと解釈する。
3、丸皿は錆絵陶法である。

繁蕋碎金香　乾山省㫖
印なし

光琳　菊図下絵（小西家文書）

*廣宣（生没年不詳）
唐代元和・長慶年間（八〇六―二四）の僧侶。俗姓廖、蜀中の人とされ、劉禹錫らとの交友が伝えられる。

素質傲風霜



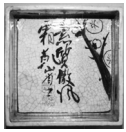
素質傲風霜
乾山省㫖（印）陶隱

（餘香龍麝を壓し）素質風霜に傲る
餘香壓龍麝　素質傲風霜
「花木（百花）門・梅花」『詩學大成』八

【大意】
（漂う菊香は龍涎香や麝香にも勝り、）その性、風霜にも屈しない強さを誇る。

【語釈】
餘香　遠くから漂う微かな香り、残香。龍麝は「龍涎香」と「麝香」。古く貴人に接する折りに用いたという。
抑える・降す・崩す。
壓
素質　「素」は白・白地の意。もとから具有している性質・本質。「素花」は白い花、「素軒」は飾りのない白木の車をいう。
風霜　風と霜。年月。艱難辛苦を恐れないこと。
傲　傲る・誇る・軽んずる。「傲霜」は霜の寒さにも屈しない菊の形容。

【参考】
1、出典は梅花の五言詩（菊花ではない）。『詩學大成』所収。「傲霜」は宋代蘇軾の七言絶句が初出とされ、南宋代裘萬頃*の七言律詩にも以下のようにある「那得紅簾捲朱戸　細看素質傲清霜」（「次洪内相梅亭」『広群芳譜』二十三）。
2、風には八風があるとし、①東風：明庶風・滔風・（條風）、②東南：清明風・熏風・恵風、③南風：景風・巨風、④西南：涼風・凄風、⑤西風：閶闔風・飂風・醪風、⑥西北：不周風・厲風・麗風、⑦北風：廣莫風・寒風、⑧東北：條風（調風）・炎風。
　また回風は秋のつむじ風・激しい風、暗風は暗闇から吹く風をいうとする。人心を煽動する八種には哀・利・毀・誉・称・譏・苦・楽がある。
3、長方皿、角皿は銹絵陶法である。



素質傲風霜　乾山省㫖
（印）乾山・深省

＊裘萬頃（？―一二一九／一二二二）字元量、号竹斎、江西省南昌（新建）の人。南宋代淳熙一四年（一一八七）の進士。大理寺司直のち西山に退隠。『竹斎詩集』三巻が残る。

風飄霜冷豔　露潤雪姿鮮

風飄霜冷豔
乾山省㫖
（印）尚古・陶隱

露潤雪姿鮮
乾山省㫖
（印）乾山・深省

【読み下し】
風飄りて霜冷豔（艶）（艶冷）なり
露（霜）に潤うて雪姿鮮なり

【出典】
風飄霜冷艶　露潤雪姿鮮　①
「花木門・白菊」『詩學大成』九
風飄霜艶冷　霜潤雪姿鮮　②
「百花門・白菊」『圓機活法』二十

【大意】
風に翻り霜にあっても凛として美しい。白菊は露（霜）に潤い雪のように清く潔い。

【語釈】
飄　翻る・舞い上がる・飛ぶ。
冷豔　「豔」は「艶」に同じ。冷やかな美しさ。白花や雪などの形容に用いる。
潤　潤う・湿る。
雪姿　雪のように清らかな姿。「氷姿」は氷の如くに清しい姿。梅花の形容に多い。
鮮　鮮やか・潔い。

【参考】
1、出典は白菊を詠じた五言詩。『詩學大成』『圓機活法』所収。両書には「冷艶・艶冷」「霜・露」①②の異字がある。乾山焼とは「露」と「霜」の相異がある。
2、白菊の凛とした気高い風趣、隠逸人の心意気を表すが、菊の性は風霜、風露にも屈しない強さにある。漢詩の多くは日本では『和漢朗詠集』などによって広く知られた。
3、長方皿、角皿は銹絵陶法、丸皿は銹絵染付の陶法である。

露潤雪姿鮮　乾山省㫖
（花押「爾」字型）

霜潤雪姿鮮　乾山省㫖
印なし

不染塵埃色　堪同氷雪姿

不染塵埃色
堪同氷雪姿
乾山省昻（印）
乾山・深省

不染塵埃色　堪同氷雪姿
乾山省昻（花押）「爾」字型

【読み下し】
塵埃の色に染まず　氷雪の姿に同ずるに堪う

【出典】
不染塵埃色　堪同氷雪姿
「花木門・白菊」『詩學大成』九『點鐵集』三

【大意】
世俗の汚れに染まらず、菊花の清潔なこと、寒に耐える不屈の精神を賞する意。

【語釈】
塵埃　世の中の汚れ。転じて現世。
色　色や形、状勢や趣に現れた一切のもの。
不染　泥にも染まらず凛とした白菊の清らかなこと、俗世に汚れぬ君子の人格の喩。「不染塵埃」は俗語に近いとされている。

【参考】
1、出典は白菊を詠じた五言詩。『詩學大成』『點鐵集』他所収。類似の詩句には晋代袁山松の五言古詩「霊菊植幽崖　擢頴凌寒飈　春露不染色　秋霜不改條」（『佩文斎詠物詩選』『広群芳譜』『歴代花鳥詩』）がある。氷雪に耐える菊花を、同じく人世の寒に耐えつつ、やむにやまれず俗世を離脱せねばならなかった隠士の姿に擬えるなど、根底には陶淵明の「帰園田居」がある。道人は白菊の花汁と丹（鉱物）を混ぜ、紫菊を食すれば五百年の若々しい顔色を保つことが出来るとした（『和漢朗詠集』）。
2、禅林では「不染」を「実際理地不染一塵」など、真如の本体には一塵の汚れもない意とする。
3、角皿は色絵、長方皿は銹絵、茶碗は銹絵染付の陶法である。

不染塵埃色　乾山省昻（印）尚古・陶隠（二枚とも）

堪同氷雪姿
乾山省昻（印）
尚古・陶隠

仙人披雪氅　素女洗紅粧

仙人披雪氅　乾山省昻（印）乾山・深省

素女洗紅粧
乾山省昻
（印）乾山・深省

仙人雪氅を披き　素女紅粧を洗う

【出典】
仙人披雪氅　素女洗紅粧　①
「百花門・白菊」『圓機活法』二十『詩學大成』九
『佩文斎詠物詩選』『芥子園畫伝』他

【大意】
白菊は仙人が白衣を披げ、妓女が化粧を落としたように清らかだ。（素女は紅粧ぜずの意）

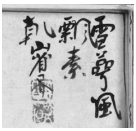
【語釈】
仙人　道士の理想的人物。離俗して山奥に住し、不老不死の術を修業、変幻自在の神仙術を得て遂には天上へ飛昇するという伝説上の人物。ここでは白菊の喩。
雪氅　白い毛衣。鶴に似た水鳥の羽で作り、鶴氅衣とも称し仙人の白衣、白菊をいう。
素女　伝説中の神女、「玉女」、妓女。白菊の喩。
紅粧　「粧」は「妝」の俗字。紅白粉・化粧。

【参考】
1、出典は唐代劉禹錫の「和令孤相公玩白菊」と題した五言排律。『圓機活法』『詩學大成』『廣群芳譜』『佩文斎詠物詩選』『芥子園画伝』他所収。翻刻には「厭洗」「粧・妝」①の異字。「厭」は「不」の意、黄菊がもて囃されるなか白菊の清楚な気品を神仙に棲む仙人と素女に喩えて賞揚するが、塵芥に満ち溢れた俗世において汚れに染まらぬ隠者を称える意も含まれる。
2、「雪氅」は白居易の詩に「雪は鶩毛に似て飛んで散乱、人は鶴氅を披げて立って徘徊する」とあり、晋代簡文帝従事謝万が白い頭巾と鶴氅衣を着し、王恭が鶴氅衣を身に纏い雪中を歩き「仙中衣」と評された逸話などが残る。「対君洗紅粧」とすれば妻の貞節を表す意となる。
3、筒向付・入角四方皿は銹絵陶法である。

＊袁山松（？―四〇一）東晋代歴史・音楽家。名袁崇、八家『後漢書』著者の一人。
＊劉禹錫（七七二―八四二）唐代詩人。字夢得、河南省洛陽の人。貞元九年（七九三）の進士。左遷を繰り返したが、晩年は洛陽における白居易との交遊が知られる。

（仙人）
披雪氅
銘なし
萩藩毛利
家屋敷跡
出土

雪萼風飄素



雪萼風飄素
乾山省㫖（印）乾山・深省

雪萼風素きを飄し（瓊枝雨酥を滴つ）

【出典】
雪萼風飄素　瓊枝雨滴酥　①
「百花門・白菊」『圓機活法』二十『詩學大成』九

【大意】
雪のように白い菊花が風に揺れる。（雨に打たれて酥のような露が滴り落ちる。）

【語釈】
萼　「萼」の俗字。（「蕚」は「蕊」の俗字）花弁また花弁の外側の萼をいう。花冠や蕊を保護するもの。多くは緑色、中には花冠と同色もある。
素　白色・本質。「素萼」は白い花萼、白花。
風飄　風に翻る・風に乗って漂う。
瓊枝　玉の生ずる珍しい木。瓊枝玉葉など優れたものの喩。
酥　牛や羊の乳を精煉した飲料。酒の異名にも用いられる。
滴　滴る雫。僅かなものの喩。

【参考】
1、出典は白菊を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。両書には「萼・蕚」①の異字がある。「華萼」は花と萼、兄弟の睦まじいことの喩えとなるが、ここでは清楚な白菊の風趣を表す。「一盞寒泉」は菊の意である。
2、謡曲には、不老長寿を願う菊の露を主題として「菊慈童」「枕慈童」がある。菊児童は中国の仙人彭祖とも伝承、童形、菊に依って長寿を保つと伝えられるが、周の穆王代罪を得て酈縣の深山に流される。菊の下葉に溜まる露を飲み延命長寿。魏の文帝代の物語である。
3、長方皿は銹絵陶法である。

晩香霜凛冽　暁意露凄涼

晩香霜凛冽　暁意露凄涼
乾山省㫖（花押）「爾」字型

晩香霜凛冽　暁意露凄涼（涼）
晩香霜凛冽　暁意露凄涼　①
「百花門・残菊」『圓機活法』二十

【出典】
晩凋霜凛冽　暁逐露離披　②
「花木門・残菊」『詩學大成』九

【大意】
菊は夜半の厳しい霜に耐え、夜明けの冷たい露を浚いで芳香を放つ。

【語釈】
晩香　暮れ方に漂う香。「晩香」「寒花」は菊を表す詩語である。
凛冽　「凛烈」に同じ。身に凍み透って冷たく、厳しい寒さをいう。「凛」はぞっとする。
暁　明け方。「暁露」は朝つゆ。
意　心・趣き・思うに。
凄涼　物寂しい・うら寂しい。「凄」は凄まじい・寒いなどの意。

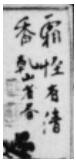
【参考】
1、出典は残菊を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。両書には「意・逐」「凄涼・離披」①②の異字がある。
2、朝夕の寒気にも負けず花開く菊花の理趣をいうが、一般には夜の露、暁の霜を趣きとする。
3、日本の菊花は野生の「かはらよもぎ」が元であるというが、今日の菊花は多く中国から渡来、栽培、品種改良などを繰り返し、豊かな色彩、大輪の菊花が生まれたとする。花中幽艶なるものを集めて菊・梅・竹・蘭・蓮を「五友」と称し賞玩したが、元禄期は菊栽培の流行期とみられ、乾山の活躍時代、菊花に関する多々の書物が著された。
4、六角火入は銹絵染付の陶法である。

＊謝方（生没年不詳）江南に移住した貴族東晋代政治家謝安（三二〇―八五）の弟。武・書にすぐれる。
＊王恭（生没年不詳）晋代の官僚。字孝伯、容姿態度が美しく、「王恭衣鶴氅雪中行　時人謂之神仙中人」と評されたという。

雪萼風飄素
乾山省㫖
（印）乾山・深省か

＊菊花に関する書物
①貞享三年（一六八六）『菊譜百詠図』（恭斎点訓）（明代徳善斎著『菊譜百扁』和刻版とされる）
②元禄年中『きくの百花』（伝土佐光起）
③元禄三年（一六九〇）『菊ノ画譜』（伝武林唯七）
④元禄四年（一六九一）『画菊』（建仁寺潤甫）
⑤元禄一二年（一六九九）『千代見草』（『菊の道志留辺』）（西京園丁編）
⑥元禄一七年（一七〇四）『百菊図巻』（三仲斎蘭窓画）

霜怪有清香



霜怪有清香
乾山省昼（印）尚古・陶隠

（月は嫌う幽艶の色）霜は怪しむ
清香有ることを
月嫌幽艶色　霜怪有清香
「百花門・白菊」『圓機活法』二十

【大意】
月下に幽艶な花は適さない。白菊こそがよく、霜に芳香があるようだ。

【語釈】
幽艶　奥床しく艶やかな美しさ。
霜　霜は露の凍ったものと考えられたが、白いもの・冷たいものの喩となり、ここでは白菊を表徴する。
怪　訝る・不思議・常に反したこと。
清香　清い香り・芳香。

【参考】
1、出典は白菊を詠じた五言詩。『圓機活法』所収。「三蹊」は、前漢代蔣詡*が庭に三徑を作り、松・竹・菊を植えた故事に基づき、隠遁者の門庭を表す成語である。
2、「五柳先生三逕を憶う」とした陶淵明の園田に帰る一節に「三逕荒に就けども、松菊猶お存せり」とある。松菊は高士としての決意を象徴。その三逕の一つに菊を植えたが、月下に霜かと見紛うところ、仄かに芳香の漂い来たり白菊とわかるとした風趣をいう。
3、同じような表現には『陶工必用』の割印（割判）「山水有清音」がある。
4、額皿は銹絵陶法である。

還驚雪有香

還驚雪有香　乾山省昼　印なし

（若し比すれば瓊艶無し）還って
驚く雪の香有るかと
若比瓊無艶　還驚雪有香　①
「百花門・白菊」『圓機活法』二十
『詩學大成』九

【出典】
清淡暁凝霜　疎枝殿顕商　自知能潔白
誰念獨芬芳　豈爲瓊無艶　還驚雪有香
素英浮玉液　一色混瑤觴
邵雍・安楽先生「和張二少卿丈白菊」『廣群芳譜』

【大意】
白菊は雪に香があるかと見紛うほどに清楚で美しい。

【語釈】
瓊　『漢書』「揚雄傳」によれば「精瓊靡與秋菊兮」とあり、瓊は玉のように美しい秋菊をいうとしている。
艶　容色の艶やかにして豊満好美なこと。花であれば牡丹などの表現に多い。
還　また・再び。「還驚」はまた驚く。

【参考】
1、出典は白菊を詠じた宋代邵雍*の五言律詩。『圓機活法』『詩學大成』『廣群芳譜』他所収。「若・豈」「比・爲」①の異字がある。
2、雪に香があるのかと思うほど、薫り高い清楚な白菊を表すが、邵雍は人の心の欲が消えてはじめて実相が捉えられるとし、何気ない表現の内の哲理をいうとした解釈もある。
3、鎌倉期後鳥羽院は「御印」として菊花を紋章としたが、室町将軍足利義政、義輝も菊花を賞美、義輝は庭園に百種の菊花を栽えていたことが伝えられる（細川藤孝覚）。江戸期には栽培も本格化、元禄年間には菊の展示・品評会なども開催されたという。
4、角皿は銹絵陶法である。

＊蔣詡（生没年不詳）
前漢代兗州刺史。字元卿、京兆社陵の人。廉直を以って知られ、王莽の摂政に伴い退官、郷里に戻り、屋敷内の竹林に三つの小径を開き、世俗を断ち、友の隠士・車作りの求仲、羊仲とのみ交遊した逸話が残る。

＊邵雍（一〇一一―七七）
宋代の道学者・詩人。字堯夫、号安楽先生・伊川翁、謚は康節、河北省范陽の人。王安石の新法に反対、仕官せず隠居所を安楽と名付けたが、道学・歴史・哲学ほか、『易経』にも精通、「先天図」を描いて宇宙発生の基本を説く。『皇極経世書』『伊川擊壤集』などを著し、生涯を在野の学者として終わる。司馬光、富弼、呂公著ら政治家との交流が伝えられる。

対花陶靖節　飧蕋楚灵均

対花陶靖節　乾山省㬰　印なし

飧蕋楚灵均
乾山省㬰（印）
尚古・陶隠

飧蕋楚灵均　乾山省（花押）
「爾」字型

飧蕋楚灵均　乾山省㬰（印）乾山

花に対（對）す陶靖節　蕋を飧（餐）う楚の灵（靈）均

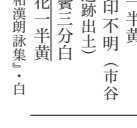
對花陶靖節　飧蕋楚灵均　①

『花木門・採菊』『詩學大成』九
『圓機活法』二十

【大意】
菊花に向かえば陶淵明を思い、楚の屈原の無念をかみしめる。（菊花は顔齢を制する花、蘭は芳香、身に帯びることができる。）

【語釈】
陶靖節　陶淵明。諡を靖節先生と称したことからのちに陶靖節とも呼ばれた。姓名陶潛・字元亮・号五柳先生という。
「蕋」の俗字。花のしべ・芯。
「餐」に同じ。夕食。朝食を饔、昼食を餔という（『倭漢三才図会』）。仏家では朝食を斎、夕食を非時というが、旦を天の食事、午を法の食事、夕を畜生、夜を鬼神の食事と定めており、午以後の畜生鬼神の食事を非時と称してかつては持戒僧は何も食べなかった決まりによる。（『毘羅三昧経』）。
楚　春秋・戦国時代の国名。揚子江中流洞庭湖周辺の国であるが、今の湖南・湖北・安徽・江蘇・浙江省と四川省の一部。言語風俗が異なり漢民族は蛮夷とみなした。
灵均　「灵」は「靈」の異体字。楚の政治家・詩人屈原の号である。姓を屈・名を平・正則・字を原・号を霊均という。

【参考】
1、出典は菊花を詠じた五言詩。『詩學大成』『圓機活法』所収。「灵・靈」①の異字がある。
菊花は陶淵明の所行に結びつくが、淵明は二君に仕えずとして彭沢の縣令を辞し故郷潯陽柴桑に隠居した。菊と酒を愛し、家辺には五株の柳があり、五柳先生の名の由来となる。率直かつ節操の高い詩文が残る。
2、屈*原は戦国時代、楚国、王族の出生である。名は平・正則、字は原、号を霊均という。博聞強志、治乱に明達して懐王に仕え三閭大夫となるが、妬まれて漢水北方へ追放、さらにその子襄王によって長沙（湖南省、洞庭湖の南）に遷せられた。湘水一帯を放浪したのち楚が秦に滅ぼされたことを知り五月五日石を抱いて汨羅の淵に身を投ずるが、『楚辞』の「漁父」「離騒」は屈原の詩賦である。生い立ちから人の讒言によって楚の朝廷を追われ、失意のうちに死を決意するまでの憂愁を述べた自伝的長編叙事詩である。詩中には「朝飲木欄之墜露兮　夕餐秋菊之落英」とあり、朝に香り高い木欄の露をすすり夕には秋菊の花片を摘み取って食するとし、菊は気力を充実、寿命を延ばす効用があるとした。
3、菊酒は、花片を乾燥、麹に混ぜて発酵、また葉・茎を糯米に混ぜて醸した酒などをいうが、花や葉の雫、花弁などを酒に浮かべて飲むことも延命長寿を願うためと伝承する。
4、角皿・長方皿・向付は銹絵陶法である。



露菊新花一半黄

露菊新花一半黄
銘なし　印不明（市谷薬王寺町遺跡出土）

霜蓬舊鬢三分白
露菊新花一半黄
（菊）『和漢朗詠集』・白居易「九月八日酬皇甫十見贈」『全唐詩』

「霜蓬の舊鬢は三分白し・三露」露菊の新花は一半黄なり」とあり、鬢の毛は霜にうたれた蓬のように三分白いが、新咲きの菊花は露に湿り半分ほど黄色だの意。九月九日重陽前日に詠じた詩である。「黄花」は黄菊のことである。

＊屈原（前三四三―前二七七）は戦国時代の政治家・詩人である。湖北省の出身とされ、楚の王族に属したという。名は平・正則、字は原、号は霊均。『楚辞』は漢代劉向が、屈平の辞賦及び屈平を模してその門下また後世の人々が詠じた辞賦を編集したものである。屈原への追弔、思慕が基であるが、自由かつ浪漫的な詩の形式、句法は騒体形式として中国詩歌の一つの様式となっている。「漁夫」「離騒」は屈原自らの作とされる。
＊『楚辞』は前漢代劉向の編した書。戦国時代の屈原・宋玉、前漢の賈誼・東方朔・劉向らの辞賦を集成。後漢代王逸が『楚辞章句』として「九思」を加える。中国最古の詩集『詩経』と並び最古の辞賦集とされる。
＊菊は本来黄菊が主体。黄花といえば黄菊をいうが、「三伏」を過ぎると、炎暑が去り人々は喜ぶが、頭髪・鬢には白い物が増したなど、年老いることには気づかないと白居易は詠じている。

蘭

―中国―

蘭は蘭科の多年草、東洋蘭の原産地は中国である。漢名は蘭、和名は漢名の音読みから蘭、西洋名のオーキッドはギリシャ語が語源とされる。季節は秋を代表し（時期により春蘭と秋蘭）、葉は単葉、茎を包み、花は萼片三枚・花弁三枚、唇弁という花弁一枚の形状が相異する。一茎一花、紫・白色の花、産地・色彩・形状・香により千種余りがあるとされ、一茎数花、蘭に似た芳草に蕙蘭・蕙草がある。山中に生育するが、屈原以来唐代までは葉に香のあるもの、北宋以降花と香を賞玩する蘭が流行、近世の蘭花は古の蘭草とは異なるという（『本草綱目』）。異名は国香・王者香・芳友・幽客・幽草など、日本では薫草、藤袴の類としたが、芳香、品格ある形状から中国では国香と称え、楚の宮殿、皇后宮、堂舎などの名に用いられた。秋蘭を繋ぎ佩と為すと詠じたのは屈原である。古来花枝を接ぎ身に帯びることはこの故事に随うが、

君子之道　或出或處或默或語
二人同心其利斷金　同心之言其臭如蘭　（『易経』）

など、君子の道、心情の正しさは不変であり、正しき者が二人心を合わせるならば、鋭利なこと金鉄をも断ち切り、語る言葉は蘭香の如くに芳しいという。古代から君子の交わりの淡く清きこと、友情の堅きこと、節操の高きことを蘭の芳香に結びつけたが、

與善人居如入芝蘭之室　久而不聞其香即與之化　（『孔子家語』）

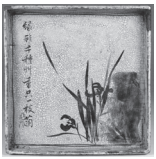
ともあり、善人に交われば知らぬ間に善に化するなど、君子の交わり無二の至交を蘭交、善き友人を蘭客とした。孔子は「芝蘭生於深林」として隠谷に独り芳香を放つ「王者香」と評したが、君子と蘭、その香の結びつきは紀元前の古代から唐代、宋代へと継続、黄山谷は『書幽芳亭』を著し、蘭・蕙草を人物に喩え「その才徳は同じからず。世は罕に能く之を別つ。予は江湖に放浪するの日久しく、乃ち尽く其の族を知る」と香り高い一茎一花の蘭に対し、香の足らざる一茎数花の蕙を比較、一対十の存在とし、蘭は君子、蕙は士大夫の品格に擬える。栽培、観賞は南宋代から流行、絵画化は北宋以来画僧、文人らが描き始め、僧仲仁、雪窓普明（？―一三四九）、楊補之、趙孟堅らの名が残る。鄭思肖（一二四一―一三一八）は根のない蘭を描き、国土を元朝に奪われた哀しみ、悲憤、故国を思う高潔な精神を表徴する。

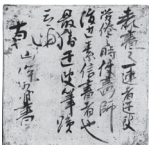
いかなる色彩も映ずる影は黒一色である。禅思想を背景とし、白・紫は高貴の色、直なる葉は平常心、墨画は、蘭に限らず禅林では悟道のための手立であった。蘭は花葉ともに直截簡明を貴ぶ禅の気風に合致するが、日本においても禅門中心、頂雲霊峰、鉄舟徳斎、玉畹梵芳らは墨蘭図の名手。題画には「幽人贈佩」「君子之風」「懐王愛蘭」「山谷愛蘭」「幽谷佳人」「空谷幽芬」「国香」「三香」などがあり、王貴学は蘭花の花弁三片を、松に葉あれど香に劣り、竹は節あれど花に劣り、梅は花あれど葉に劣ると蘭花のみ香・花・葉ともに併せもつと述べた。

―日本―

中国からの渡来時期は奈良時代と推定、香草は賢人の比喩など、日本でも中国の蘭草とその道理をそのまま踏襲、鎌倉期から室町期に観賞用の栽培が始まるという。江戸時代、花圃や畦、鉢植えにもなるが、本草書、草花専門書、画譜の出版も盛行、蘭花に纏わる故事、逸話、詩歌なども広く知られ、文人間には憂国の士、その精神を自らの心として君子の香を貴しとした。蘭草・藤袴を蘭としたが（『倭漢三才図会』）、もとより蘭とは相異があり、一説に葉の類似から蘭（峯蘇方）と推定、異名には千金草、漢名から幽客・幽草・国香などが伝えられる。

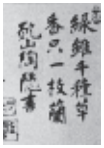
緑雖千種艸　香只一枝蘭



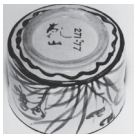


緑雖千種艸　香只一枝蘭
（印）尚古・陶隠か
（裏）表書之一連者迂叟労倦之時使
　　畫師渡辺素信書者也　最勝迂
　　叟筆蹟云爾　乾山深省書

緑雖千種草　香只一枝蘭
乾山陶隠書（印）乾山、尚古・陶隠



緑雖千種草　香只一枝蘭
乾山陶隠（印）乾山、尚古・陶隠（底）
乾山



【読み下し】
緑に千種の艸（草）ありと雖も　香は只一枝（株）の蘭のみ（唯）

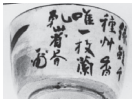
【出典】
緑雖千種草　香只一株蘭　①
程先・東隠『東隠録』『続傳燈録』『五燈會元』『禅林語句鈔』

【大意】
草花は種々ある。が、幽香を放つのは只蘭花。

【語釈】
艸　「草」の異体字。草の総称。
雖　雖も・ではあるけれどもなど逆接の意を表す接続詞。既定の条件を表す語。
只　「唯」に同じ。ただ何々のみの意を表す。
株　草木を数える数詞。幹の最下部。

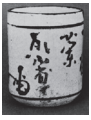
【参考】
1、出典は宋代程先*（東隠）の五言詩。『東隠録』『続傳燈録』『五燈會元』『禅林語句鈔』他所収。乾山焼とは「艸・草」「唯・只」「枝・株」①の異字がある。屈原の故事を基とし、凡愚を重用、忠臣、誠のある者を疎外、雑草の如くに扱うことの憂いをいうが、古来蘭には「善人は蘭の如し、王者の香あり」とする。
2、南宋代以来根のない蘭図は移民を暗示する。詩人鄭思肖*は土根のない墨蘭を描くが、「地は番人に奪い去らる。汝猶知らざるか」と問うたという。蘭に石（寿石・太湖石）を配し、蘭の芳香と石の堅質を寓意、節操の高い喩、幽香をもつことから君子・賢人、脱俗の志を表徴する。
3、角皿・額皿・茶碗は銹絵、中段筒向付類は色絵、銹絵染付の陶法である。
　上段、渡辺素信画蘭図角皿の裏面には乾山の證があり、同焼画者の一人がわかる。

同讃作品



緑雖千種草
香只一枝蘭
乾山省旦（花押）「爾」字型

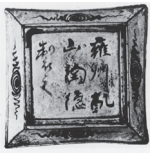
緑雖千種草
乾山省旦（花押）「爾」字型



香只一枝蘭
乾山省旦（花押）「爾」字型

蘭図額皿

蘭図額皿裏面落款



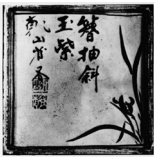
乾山焼額皿、蘭図と裏面底部の落款である。讃はないが、蘭図は中国伝統の構図であり、日本では狩野元信などの画風に似る。中央に蘭図、縁に唐草、裏面縁にはぐりぐり文様を施すが、形状・意匠などはすでに絵高麗、明末古染付・南京赤絵、漆芸品などに例がある。蘭は四君子の一つである。石を配して不変不動、君子之風を表すが、裏面底部には「雍州乾山陶隠製之」とあり、製作者陶隠乾山、その手跡を明白にした一品である。文人陶工の自負心を表す。

＊程先（一〇〇二―一六九）宋代僧侶。臨済宗黄龍派の祖。俗姓章、黄龍慧南と称し、東隠と号した。江西省玉山の人。一一歳で出家、のち廬山に入り雲峯文悅に師事。行脚帰院、堂の火災後黄檗に退くが、公案を多く用いた黄龍派は、湖北・湖南・江西省一帯へと広められる。北宋代徽宗帝大観四年（一一一〇）、普覚禅師と追諡された。『黄龍南禅師語録』がある。

＊鄭思肖（一二四一―一三一八？）南宋代詩人、字所南、号憶翁、福建省連江の人。宋滅亡後は蘇州に隠棲、蒙古の侵略に対し、墨蘭画に地面を描かず、土地を異民族に奪われた意とした。詩画に長じ、『心史』『所南翁一百二十図詩集』などがある。

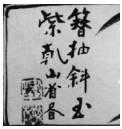
豈構平か　銘なし
京都大学付属病院遺跡出土

簪抽斜玉紫



簪抽斜玉紫
乾山省㫖（印）乾山・深省

簪抽斜玉紫
乾山省㫖（印）乾山・深省



簪抽斜玉紫
乾山省㫖（花押）「爾」字型

簪は斜玉を抽きて紫に
（花は断金を吐きて黄なり）

【出典】
簪抽斜玉紫　花吐断金黄
『百草門・蘭』『圓機活法』十八

【大意】
簪を抽き蘭を挿す。官を辞して隠者となり徳行を積む。

【語釈】
簪　簪（冠挿）、笄（通簪）。中国では仕官する者は必ず髪を束ね冠を被る慣わしがあり、その冠を髪に留めるものをいう。「抽簪」は簪を抜く意から転じて官を辞すること。「玉簪」は玉の簪の意から隠者になることを表す。

斜　傾く・斜交い。一通りではないの意に用い、「斜玉」は立派な官職に着いた者、その者のみに許された冠挿の意か。

紫　蘭花の表徴。隠者になることをいう。

断金　友情や交わりの堅いことを表すが、金属をも断ち切るほどに厚い交情を表す。

黄　地の色・日の色。中国では正色とされる。

【参考】
1、出典は蘭を詠じた五言詩である。『圓機活法』所収。蘭は、

君子之道、　或出或處　或出或處　或默或語
二人同心　其利断金
同心之言　其臭如蘭
（『易経』「繫辞上傳」）

とある。君子の道は、朝廷に仕えまた野に下り、黙して語らずまた大いに語るなど、形は時に応じ変化するが、常に心情の正しさを重んずるなど、正しき者が心を一つにするならばその鋭さは金鉄をも裁ち切り、言葉の芳しさは蘭の香の如くに気高いと孔子は説いた。君子と蘭の結びつきの背景である。

2、蘭の香は節操の高い君子の象徴、襟に挟んで飾りとし、秋菊を食する故事など、戦国時代の屈原に遡るが、髪に翳すことを「簪花」と称した。

3、「結髪」は、成人男子二〇歳、女子一五歳になり髪を調え、男は冠、女は笄を挿す慣習をいう。笄は古代女媧の娘が荊木と竹を用いて作るとし、堯帝代には銅、舜帝代には象牙を用いたとするが、三寸余ほどの長さのものに穴を数カ所あけ、気の通るようにしたものを通簪と称し、暑中農夫らの作業に用いたことが伝えられる。

4、中国では正色を黄色とするが、

緑兮衣兮　緑衣黄裏
心之憂矣　曷維其已　（『詩経』「邶風」）

と、妻の形見となった衣を祀りその霊を鎮める招神儀礼の歌がある。黄色の裳は高位の人の礼服であるが、君子の纏う「黄裳」を基とし、陰陽五行説、天地間の大地の色、中央の色を表徴。黄色の裳を身に着けることは、内なる徳が充ち溢れた君子中庸の心を表し、長い上着に隠されて黄色の裳は見えないが、裏には美しい色を秘め道理に通暁、精神の美徳へと結びつけられた。

黄裳元吉　（『易経』「上坤」）

ともあり、乾山焼の詩讃も内に隠れる美徳を表すものと考える。

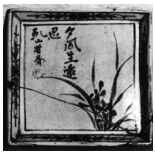
5、角皿・長方額皿は銹絵、向付は銹絵染付の陶法である。

簪抽斜玉紫　乾山省㫖
（印）乾山・深省

簪抽斜玉紫
銘なし
新宿区河田町遺跡出土

＊『易経』は『周易』ともいう。占筮書であるが、西周前期に成立。八卦を軸とし、先人の生み出した概念を基に人事の吉凶を告げるが、注釈書には『周易注疏』『周易集解』『周易述』『周易古経今注』などがある。

夕凪（風）生遠思



夕凪（風）生遠思
乾山省㫖（印）尚古・陶隠（三枚とも）

【読み下し】
夕凪（風）遠思を生ぜしむ（秋露中林を洒ぐ）

【出典】
夕風生遠思　秋露洒中林　①
「百草門・蘭」『詩學大成』十一
秋蘭遁初馥　芳意満冲襟　想子空斎裏
凄涼楚客心　夕風生遠思　晨露灑中林
頗意孤根在　幽期得重尋　②
朱熹・晦庵「秋蘭一首」『廣群芳譜』『朱子大全』
『佩文斎詠物詩選』下『全芳備祖』『歴代花鳥詩』

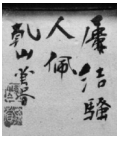
【大意】
夕風が芳香を運び遠く先人（屈原）を偲ばせる。

【語釈】
夕風　夕方に吹く風。ここでは蘭を吹く風「蘭風」の意であり香気をいう。
遠思　遠く思いやる。遙かに偲ぶ。
秋露　秋の露。凝れば冬木を枯らすという。
洒　洗う・注ぐ・散らす。

【参考】
1、出典は南宋代朱熹*の「秋蘭」一首と題した五言律詩。『詩學大成』『朱子大全』他所収。翻刻には「秋露・晨露」①「意・憶」②の異字がある。蘭の芳香、楚客屈原への想いが根底にある。
2、角皿・額皿・長方皿・筒向付は銹絵陶法である。

絵画　蘭図
「夕風生遠思」

屡（屧）結騒人佩



屡結騒人佩
乾山省㫖（印）乾山・深省

【読み下し】
屡（屧）騒人の佩を結び（時に飄る鄭國の香）

屡結騒人佩　時飄鄭國香
「百草門・蘭附蕙」『圓機活法』十八『詩學大成』十一

【大意】
蘭はしばしば文人詩人の帯を飾る。（時に翻り鄭国の香を漂わせる。）

【語釈】
屡　「屧」は俗字。しばしば。
騒人　「騒客」に同じ。文人・詩人・風流を解する人。屈原、宋玉ら一派の文士をいう。「騒人墨客」詩書画を嗜む風雅の士。
佩　帯に付ける飾り玉・腰に着ける佩び玉。「秋佩」は君子の佩を表し、『楚辞』「離騒」には次のようにある。
「扈江離與辟芷兮　紉秋蘭以爲佩」
屈原は香草を身に纏い秋蘭を繋ぎ合わせて佩としたが、身を修め潔白な上に博く衆善をとって更に善くするの喩となり、香り高い蘭草の帯飾りは幽人隠士の高潔な志の象徴とされた。「辟芷」は鎧草（芹科の多年草）。
飄　翻る・漂う・さ迷うなど風の吹くさま。
鄭國　春秋時代の国、戦国時代の韓の人物か。

【参考】
1、出典は蘭を詠じた宋代丁謂*の五言律詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。
2、古の君子はみな帯に玉を佩び、歩くたびに其の玉の触れ合う音をもって小走りに歩く趨歩の節を心がけたという。音の大きく鳴ることを恥としたが、冠と玉帯は高位高官の服飾品であり、各官位を表したものという。
3、角皿は銹絵陶法である。

乾山省㫖
「爾」

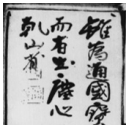
夕風生遠思

＊朱熹（一一三〇―一二〇〇）南宋代理学者、字元晦・仲晦、号晦庵・遯翁・紫陽、死後に文公と諡される。江西省婺源、また福建省尤溪の人ともいう。一九歳で進士に及第、四年後には官を辞して研究生活を送る。のち地方官を歴任、宝謨閣学士を贈られた。道理を極め内省と真理探究、それによって自己の知恵を高める「格物致知」、「居敬窮理」を理念として、北宋以来の宋学を推進、朱子学に至る。詩書楽に長じ、古典の注釈書を著すなど、『四書章句集注』『朱子語録』『詩集傳』他が残り、同学は日本の五山僧、徳川幕府の儒学政治化の支柱となった。

屡結騒人佩

乾峯　印
不明（扶桑・乾峯か）

雖爲通國寶　而有出塵心



雖爲通國寶　而有出塵心
乾山省（印）尚古・陶隱

通國の寶（宝）爲りと雖も而も出塵の心有り

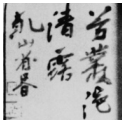
【出典】
雖爲通國寶　而有出塵心
「百草門・蘭附蕙」『圓機活法』十八
趙汝談*・南塘（宋）「蘭花」『全芳備祖』

【大意】
蘭は国花として愛玩されても、世俗の汚れに染まらぬ気高さを保つ。

【語釈】
通国　国中を通じて・国中全体。
雖　何々ではあるがの意。確定条件を表す接続詞。
而　しかも・しかるにの意。文の初めにおいて強調、主に逆接の意味を表す接続詞。
出塵　世を遁れる・脱俗すること。迷いの塵垢を捨てて悟りを得ることをいう。

【参考】
1、出典は南宋代趙*汝談の蘭を詠じた五言詩。『圓機活法』『全芳備祖』所収。
2、人の世に揉まれながらなお気高く節操を失わない文人を蘭の美しさに喩えるが、蘭香に関しては正しい者の心二つ合わせれば金鉄をも断ち切るなど（『易経』）、「金蘭」は真の友情の証し、友の交わりを称し、「金蘭譜」はその堅き交わりを誓う者の交わす冊子とされる。「戴宏正毎的密友一人　則書於簿簡　焚香告祖考」（『雲仙雑記』）とあり、親友を得るごとく名を簿に留め祖先の霊に告げたという漢代戴宏正の「金蘭簿」に始まるという。
3、「雖爲通」「而有出塵心」は、天台宗など仏教関係の詩歌に使われることが多いとされる。
4、上段重色紙皿二枚はともに銹絵陶法である。

芳叢浥清露



芳叢浥清露
乾山省昏（印）尚古・陶隱

（涼）葉恵風吹く）芳叢清露に浥う

【出典】
涼葉吹恵風　芳叢浥清露　深谷不逢人
幽香暗中度
劉基*「百草門・蘭附蕙」『圓機活法』十八

【大意】
南風が葉を揺らし、芳しい蘭の叢が露に潤う。

【語釈】
涼　涼しい。晒すまた風に当てるの意。
恵風　南風。物を生長させる恵みの風。広く行き渡ることを喩えて君の恩恵の意。
芳叢　花の咲いている草むら。ここでは蘭叢。
清露　清らかな露・濁りのない澄み切った露。

【参考】
出典は元末明初代劉*基の蘭を詠じた五言絶句。『圓機活法』所収。

輕香含露潔

輕香含露潔　乾山省（花押）
「爾」字型　輕香露を含んで潔し（紫艶霞に映じ鮮やかなり）
輕香含露潔　紫艶映霞鮮
「百草門・蘭附蕙」『圓機活法』十八

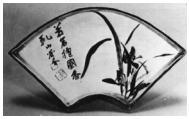
出典は唐代李*徳裕、蘭を詠じた五言古詩。『圓機活法』『佩文斎詠物詩選』『全唐詩』所収。翻刻には「霞・渠」の異字、結句「紫艶映霞（渠）鮮」が反対である。霞に映える鮮やかな紫蘭、露を含み香気を増すとした意であるが、「輕香」はほのかな香り、「含露」は湿りを受けてなお花の香気が増すこと。「紫艶」は美称、「霞」は淡い霧の日などに空中に浮遊する水滴が日の光を受けてぼんやりと棚引くもの。陶法は銹絵染付。

---

*丁謂（九六六―一〇三七）宋代政治家。字謂之・公言、蘇州長州の人。淳化三年（九九二）の進士。官僚となり大理評事以後要職を歴任、機敏、智謀にして音律に長するという。
*趙汝談（？―一二三七）南宋代詩人、字履常、淳熙二一年（一一八四）の進士である。『南塘先生』『介軒詩集』などがある。
*劉基（一三二一―七五）明代政治家、文学者、字伯温、号文成、浙江省青田の人。劉青田とも呼ばれるが、元代に進士に及第、明太祖洪武帝朱元璋（一三二八―九八）に従って初の諸制度策定に参画。弘文館学士となる。経史に精通、詩文、散文に長じ『誠意伯文集』を残す。
*李徳裕（七八七―八四九）唐代政治家、字文饒、河北省趙縣の人、『元和郡県図志』を著した李吉甫の子である。元和年間（八〇六―二〇）宰相となり国政を執るが、牛僧孺と相入れず、宣宗代に潮州司馬に左遷、海南省崖州の任地に没する。詩に長じ『李衡公文集』がある。

芳名擅國香

芳名擅國香
乾山省㬰（印）
尚古・陶隱



芳名擅國香
乾山省㬰（印）
尚古・陶隱

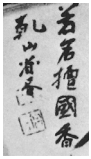
（孕秀芝室を怜れみ）芳名國香を擅にす

【出典】
孕秀怜芝室　芳名擅國香
『百草門・蘭附蕙』『圓機活法』十八『詩學大成』十一

【大意】
蘭の芳香は国中の誉れを欲しいままにする。（国香は芳名のほまれのとおりだ。）

【語釈】
秀　花また一年に三度花咲くめでたい霊草をいう。『楚辞』「山鬼」には、
　采三秀於山間　石磊磊兮葛曼曼
とあり、山の精霊山鬼の伝説から三秀は芝草、紫芝の意とされる。
芝室　「芝蘭之室」、君子の交わりを芝蘭之室に入るとし、孔子は以下のように述べる。
　與善人居如入芝蘭之室　久而不聞其香即與之化矣
芳しい蘭の香る室に入ればその香に親しみいつの間にかその香を忘れる、善人に交われば自ずと善に従う人の心をいう。
怜　憐れむ・賢い・聡い。
國香　蘭の香気を賞していう。国中で最もよい香。蘭・梅の異名。「國」は「国」の本字。
擅　欲しいまま専らにする・占有する。

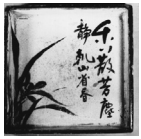
【参考】
出典は蘭*を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。長方皿・扇面皿はともに銹絵陶法である。



上段扇面皿讃拡大図「芳名擅國香」

香散芳塵静

香散芳塵静
乾山省㬰（印）
尚古・陶隱



香散芳塵静
乾山省㬰
印なし

香散りて芳塵静かに（花清くして白露垂る）

【出典】
香散芳塵静　花清白露垂　①
『百草門・蘭附蕙』『圓機活法』十八『詩學大成』十一

【大意】
幽香が漂い、清楚な花に清らかな露が宿る。

【語釈】
香　気高い蘭の幽香、君子・賢人、脱俗の意。
芳塵　蘭は芳しき名のある草。「芳埃」。
静　清い澄んだ意にも使われる。
白露　清澄な露。陰暦秋八月、陽暦九月八日頃。

【参考】
1、出典は蘭を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。両書には「露・雪」①の異字がある。脱俗して静かに隠棲生活を送ることをいうが、楊萬里（誠斎）の「風蘭」には、
　幽香空自秘　風豈秘幽香
とあり、蘭の芳香と同じくして、逃れても逸人の高徳は風に乗って静かに散り来たるという。
2、角皿・長方皿は銹絵陶法である。

長福萬壽

長福萬壽　乾山（花押）巾着型
長福萬壽（出典不明）久しい幸福と生命の長久を祝う意。「長福」は永久の幸福。吉祥語であり、長福神は福徳神。「萬壽」は「萬歳」に同義、生命の長久なることを祝す語である。

---

*蘭には春蘭（蘭）、建蘭（蕙）があり、春蘭は香り高く、建蘭は福建省に自生するが、蕙草（香り草）と呼ばれ、葉は細長く対生、花は赤く実は黒いという。古人は根を焚いて香を立て、葉を帯びて悪気を避けたと伝承する。
『圓機活法』には蘭・蕙の大意として「國香秋佩」「芳聲秀質」「出艶芳叢」「清露秋風」「深林幽谷」などがある。蕙は一茎数花、花多く紫花を咲かせる。
初期、蘭図は禅門中心、中国画僧雪窓普明の描法は、日本において頂雲霊峰、鉄舟徳斎、玉畹梵芳へと受け継がれた。

風清香縹渺・風清香旖旎

風清香縹渺
乾山省㫖（印）
乾山・深省

風清香旖旎
乾山省㫖（印）
尚古・陶隱

【読み下し】
風清くして香縹渺（香旖旎）（日麗わしくして影参差）

【出典】
風清香縹渺　曰麗影参差
「百草門・蘭附惠」『圓機活法』十八
風清香旖旎　曰麗影参差
「百草門・蘭」『詩學大成』十一

【大意】
清しい風にのり芳香を放ち、（陽に照らされて不揃いな影を落とす。）

【語釈】
縹渺　遠く微か、遙かに広いさま。俗世間とかけ離れた世界をいうこともある。何処からともなく蘭香の来たる意。
旖旎　旗の靡くさまや雲の棚引くさまなど風に従って動く様子をいう。
麗　麗らか・麗しい・光輝く。
参差　不揃いなさま・長短様々。「参」は三つ「差」は二つのものが混じること。

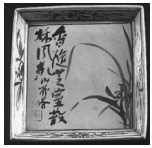
【参考】
1、出典は蘭を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。風に乗って広がる蘭の香の芳しいことをいう。「第一香」は蘭の意。
2、一般に芳香を放つ蘭は一茎一花・春蘭、孔子花、幽蘭などの異名をもつ。「室に蘭あらば香炷かず」とされ、古来から香のすぐれた草花の代表であり、品格、美徳、俗を離れた賢人の比喩となる。
3、長方額皿・長方皿は銹絵陶法である。

夜使入か
銘なし
新宿区尾張藩上屋敷跡出土

夜使入か
銘なし
新宿区市谷本村町遺跡出土

「夜使入陰聽之」『通俗誌』（十九「神鬼」か。

質伴菊籬堅晩節　香隨芝室散烝風



質伴菊籬堅晩節
乾山省㫖（印）
尚古・陶隱

香隨芝室散烝風
乾山省㫖（印）
尚古・陶隱

質は菊籬に伴うて晩節を堅うし香は芝室に隨つて烝（秋）風に散ず

【出典】
謝庭分植兩三叢　天下何花與比同　①
質伴菊籬堅晩節　香隨芝室散秋風
屈原援入離騒裏　燕姑移居佩服中　②
一種國香同衆草　托辭曾入孔絲桐
「百草門・蘭附惠」『圓機活法』十八
舒芬詩「百草門・蘭」『詩學大成』十一

【大意】
性は霜雪に耐える堅い節操、香は君子の美徳に随って秋風に飛散する。陶淵明、屈原の逆境においてなお高く持した信念の貴さをいう。

【語釈】
菊籬　籬の菊。「采菊東籬下」と詠じた陶淵明の故事に因る。
晩節　晩年・末年、また晩年の節操。「晩節香」は菊の異名。
芝室　芝蘭之室。香草のある室、善人の徳。君子、佳良の子弟の喩を「紫蘭」という。
烝　「秋」の本字。

【参考】
1、出典は明代舒芬*の蘭を詠じた七言律詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。両書には「同・中」①「佩・風」②の異字がある。
2、額鉢は銹絵陶法である。

＊舒芬（一四八四―一五一七）明代の人。字國裳、正德一二年（一五一七）の進士、状元となる。

牡丹

―中国―

牡丹は毛茛科の落葉灌木、原産地は地中海周辺。漢名は古代ギリシャ語のボタネの音訳から牡丹（「牡」は盛ん、「丹」は赤）、和名は漢の音読みから牡丹、季節は夏を代表する。燥地を好み、古木に芽が生じそれが伸びて新枝となり、晩春初夏に花をつける。秋冬に接ぎ木、春に苗葉、三月頃から開花が始まり、葉は複葉、三尖から五尖、花は単葉・千葉、白・淡紅・黄・紫色の八弁ほど、雄蘂・雌蘂、数個の子房、五弁の萼が花を支える。根は薬用となる。花王・百花王・国色・富貴草・百両金などの異名があり、春を飾る最後の花、国を代表する国華となるが、六朝期頃から牡丹の名が生じ、北斉代（五五〇―七七）に観賞用の栽培も始まるという。隋代煬帝（五六九―六一八）は宮殿西苑、洛陽に牡丹を植栽（『事物紀原』）、唐代には則天武后（六二四―七〇五）、玄宗皇帝（六八五―七六二）が沈香亭に植えるなど、宮中、やがて民間競って牡丹の花を愛賞した。白居易の「買花」には以下のようにある。

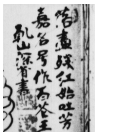
帝城春欲暮　喧喧車馬度　共道牡丹時
相隨買花去　貴賤無常價　酬直看花數

春暮、長安の都は牡丹を求めて狂奔し、わづか一群の牡丹花が中流階級の家十軒分の税金に当たるとした。二十日草・百両金の異名もあり、牡丹こそは花中第一の誉れ「花王」、第二の芍薬は花の宰相「花相」と呼ばれ（『埤雅』）、宋代には長安から洛陽にも熱気は伝播。栽培技術も画期的な進歩を遂げ、草花に関する固定概念も拡散、詩歌、牡丹記、牡丹譜などの専門書が著された。『洛陽牡丹記』『陳州牡丹記』『天彭牡丹譜』『牡丹栄辱志』などがあり、貴賤を問わず宮中、邸宅、古寺など、池の辺りに幔幕を張り、音楽を奏し、花見を楽しむとされた（落花とともに行事は終わる）。洛陽の牡丹こそは天下一品と誇りにしたが、初期牡丹には名は無しという。薬用として書物に載り、枝は薪として使われたが、六朝期すでに観賞花となっていた芍薬の名を借り木芍薬と称されるなど（『通志』）、唐代に色彩、艶麗さから富貴の花として称賞、宋代以後に世俗を代表する花となる。明代には夜間灯をともして照らし見るなど、梅花に代わり、国華となり（一九二九年）、新年を祝う花となる。六朝期北朝斉代の楊子華（五五〇―七七）は彩色極細、牡丹図を描き、唐代には辺鸞（『歴代名画記』）、元代には銭選、明代には呂紀、徐渭らが筆を執る。「百花王」「富貴図」「天香国色」「富貴国香」「富貴長春」「玉堂富貴」「富貴長年」「不老富貴」「富貴平安」「富貴萬代」などの題画があり、文様化は隋・唐代観賞の盛行に伴って発展する。

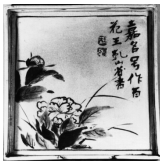
―日本―

牡丹は奈良時代に中国から渡来した。初期には薬用として栽植、聖武帝代（七二四―四九）観賞花となり（『倭漢三才図会』）、諸国の富者は競って移植、各地に流布したという。産地には山城、大和国の名が知られ、『万葉集』にはないが、『枕草子』には「ほうたん」、『詞歌和歌集』には白居易の詩句を基に「二十日草」の名がみられる。江戸期寛永頃には盛んに栽培、元禄頃には大流行をみたというが、詩歌・物語、園芸の専門書や手引書類、画譜にも取りあげられ、日本においても富貴の花として珍重、衆人の挙って愛玩するところとなってゆく。異名には皇花・深見草・富貴草・二十日草・名取草・洛陽花・花王などがある。

落盡残紅始吐芳　嘉名号作百苍(花)王　獨占人間第一香



落盡残紅始吐芳　嘉名号作百苍王
乾山深省書（印）乾山、尚古・陶隱
光琳（花押）「寿」型



嘉名号作百花王
乾山省書（印）
尚古・陶隱

乾山省昼（印）不明（陶隱か）

【出典】

落盡残紅始吐芳　嘉名号作百花王　①
競誇天下無雙艶　獨占人間第一香
醉態迎風嬌欲語　妖姿含露濕啼粧　②
閑花浪蕊君休看　足稱栽培向畫堂
皮日休詩「百花門・牡丹」『圓機活法』十九

落盡残紅始吐芳　佳名喚作百花王
競夸天下無双艶　独立人間第一香　③
皮日休・醉吟先生「牡丹」『歴代花鳥詩』

【大意】

衆花に遅れ芳香を放つ、その名は花の王者牡丹である。

【語釈】

残紅　散り遅れた紅の花。当時は深色・濃色の牡丹が珍重された。
落盡　落ち尽くす・落とし尽くす。
吐芳　よい香りを発散する。
嘉名　「嘉號」に同じ。よい評判。瑞花の意。
号　唱える・告げる・叫ぶ。
百花王　幾百もの花のうち随一と評されること。極上の美しさ。
無雙　並ぶものがない。「無雙艶」は牡丹の意。
嬌　愛嬌、声や色の好いさま。
妖姿　妖容・艶めかしいさま。
啼粧　目の下のみ白粉を薄くし涙を流したように見せる化粧法。愁うる姿に化粧することをいう。
閑花　淑やかに閑雅に咲く花。
浪　震わす・戯れる・波立つ。「浪花」は実を結ばない徒花をいう。
畫堂　絵の描いてある室。後に広く一般の堂舎を表す。

【参考】

1、出典は牡丹を詠じた唐代皮*日休の七言律詩。『圓機活法』『詩學大成』『歴代花鳥詩』他所収。翻刻には「嘉・加・佳」「号・號・喚」①「姿・婆」②「占・古」などの異字があり、乾山焼では「嘉・号」とした。「嘉名・百花王・天下無双・人間第一香」など牡丹の賞句が鏤められ、同詩は後世牡丹の詩の根拠、土台として認識される。

禅林では妄念を飲み尽くし、脱落の妙境に入ることを以下のようにいう。

一口吸盡江西水
洛陽牡丹新吐蘂*

2、牡丹は唐代玄宗皇帝の開元・天宝年間頃から観賞花として好まれた。長安の都を中心に貴族、官僚らに愛玩され、花といえば牡丹を表し、白居易も当時の風潮を詩に詠ずるが、宋代には周茂叔により菊は隠逸、蓮は君子、牡丹は富貴の花として美しさ、吉祥、世俗の花とした認識が定着する。「富貴花」、洛陽の牡丹は特に名高いところから「洛陽花」、「洛花」などと称された。

3、角皿・重色紙皿は銹絵陶法である。

光琳　牡丹図画稿
（小西家文書）

牡丹図『光琳百図』上

獨占（占）人間第一香
乾山省昼（花押）「爾」
字型

＊皮日休（八四一？―八三？）唐代詩人、字逸少・襲美、号鹿門子・酒民・醉吟先生、湖北省鹿門山に隠棲、「間気布袋」と称した。襄陽の人。咸通八年（八六七）の進士。太常博士、翰林学士となるが、詩と酒を友とした生活を送り、一説に黄巣の乱に参加、誅せられたと伝承する。『皮子文藪』が残り、江戸時代に日本でも流布したという。

＊玄宗（六八五―七六二）唐朝六代皇帝李隆基。「開元の治」など善政を布き、唐の全盛期を築くが、のち驕慢、楊太真を貴妃とし、安禄山の乱を招く。

嘉名號成百苍（花）魁

嘉名號成百苍魁
乾山省旱（印）陶隠か
嘉名號して百苍（花）の魁と成る
（出典不明）

【大意】
季節の魁けとなり開花、衆花随一の艶を誇る。

【語釈】
嘉名　「嘉號」。よい評判、瑞花。
魁　魁け・頭。物事の初めとなる。梅の異名。南宋代王貴學の『蘭譜』によれば蘭の異名にも用いられる。

【参考】
1、出典は不明。「二十四番花神風」において第一候に開花、魁け、美しきこと瑞花とされる。類似の詩句には次のような七言詩がある。
開晩要當三月勝　艶高宜作百花魁
「百花門・牡丹」『圓機活法』十九
2、清代順治年間（一六四四―六一）造、青花（染付）花瓶にも類似の詩讃が認められる。
3、長方皿は銹絵陶法である。

豔麗隨朝露

豔麗隨朝露
乾山省旱（印）尚古・陶隠
豔（艶）麗朝露に隨い（馨香曉風を逐う）

【出典】
艶麗隨朝露　馨香逐曉風　①
「百花門・牡丹」『圓機活法』十九『詩學大成』九『全唐詩』

【大意】
朝露に湿り、牡丹の花が一段と華やかだ。

【語釈】
豔麗　「豔」は「艶」の本字。容色の豊満好美をいう。「紅艶」は艶やかな赤い牡丹の意。
馨香　好い香り。遠く香の及ぶことから、転じて徳化の及ぶことの喩となる。
逐　追いかける・当てもなく行く・競う。

【参考】
1、出典は牡丹を詠じた唐代殷*益「看牡丹」と題した五言律詩。『圓機活法』『詩學大成』『全唐詩』所収。翻刻には「馨・大」①の異字がある。
2、長方皿は銹絵陶法である。

輕風襲暖香

輕風襲暖香
乾山省旱（印）なし（落日明艶を含み）輕風暖香を襲う
落日含明艶　輕風襲暖香
「百花門・牡丹」『圓機活法』十九
『詩學大成』九

明代王*原采（王叔英）の牡丹を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』『全芳備祖』他所収。朝露に湿って美しさを増し、微風が芳しい香りを運ぶとした意。「落日」は夕日、「明艶」は輝き・明るく麗しい。「輕風」はそよ風・微風。「暖香」は暖か、また柔らかな気の香り。香名にもある。「襲」不意打ちを掛ける・及ぶ。
角皿は銹絵陶法である。

玉臉笑輕風

玉臉笑輕風
乾山省旱（印）　乾山・深省
（氷肌暖日に融り）玉臉輕風に笑む
氷肌融暖日　玉臉笑輕風①
「花木門・白牡丹」『詩學大成』九
『圓機活法』十九

白牡丹を詠じた五言詩。『詩學大成』『圓機活法』所収。両書には「笑・咲」の異字がある。「臉」は顔、「臉」はまぶた、「側臉」「玉臉」「紅臉」などいづれも「笑」（口を開けることから花の咲く意）に結びつき、牡丹、芍薬、芙蓉の喩に多い。南の風を受け美人の紅臉のように牡丹が開き、玉のような花片がそよ風にやさしく揺れるとした意であるが、「氷肌」は透き通るほどに清らかな肌、ここでは白牡丹の喩。角皿は銹絵陶法である。

＊王貴学（生没年不詳）南宋代淳佑七年（一二四七）『王氏蘭譜』（『蘭譜』）を著すが、古代中国では日本の藤袴を蘭と称し、宋代以降、今日の蘭に定まるという。『蘭譜』にはおよそ五〇種の品種が記録されている。

＊王原采（王原父）・王叔英（？―一四〇二）名元採、号静學。浙江省黄巌の人。明代洪武年間（一三六八―九八）に活躍。建文元年（一三九九）翰林修撰となる。

＊殷益（八八五―九五八）唐代詩僧。五家七宗、法眼宗祖文益法眼禅師とされ、浙江省余杭の人。七歳にして剃髪、浙江省開元寺におき具足戒、育王寺にて律を学び、儒教、詩文に親しむという。江蘇省金陵報恩禅院、清涼寺に住したと伝承。『全唐詩』に「看牡丹」と題した詩が残る。

國色千般媚　天香一種奇

國色千般媚　乾山省㫖
(印) 尚古・陶隱

天香一種奇　乾山省㫖
(印) 尚古・陶隱

國色千般の媚び　天香一種の奇

【出典】
國色千般媚　天香一種奇
「百花門・牡丹」『圓機活法』十九『詩學大成』九

【大意】
かぐわしい千般の牡丹花、その艶麗、芳香はこの世のものとも思われない。

【語釈】
國色　一国において並びなき美人。牡丹の類なき艶麗の喩。
千般　千種・さまざま。
媚　眉目好い・艶めかしい。
天香　秀れて佳い香り、この世ならぬ芳香。新年や節句などに香を焚き天を敬することの意。「國色天香」は絶世の美女の寓意。
奇　抜きん出る・異なる。

【参考】
1、出典は牡丹を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。艶麗芳香を第一として「国色天香」「天香国色」「百花王」などの呼称があり、「國色・天香」は唐代玄宗が程修己に牡丹詩の伝唱を問うたところ、李*正封の次の五言詩（『全芳備祖』）を掲げたという。

國色朝酣酒　天香夜染衣

2、古来富貴の牡丹、寒冷に耐えて咲く梅、四季に渡って緑を保つ松は権力者の御殿を飾るものであったという。日本では、桃山から江戸期には絵画に描かれ、刊本には『牡丹名寄』（貞享五年刊・一六八八）など専門書・栽培書が種々出版された。
3、長方皿・角皿は銹絵陶法である。

國色千般媚　乾山省
(印) 乾山

國色千般媚　乾山省㫖
(印) 尚古・陶隱

妖嬈凝雪色　淡泊噴天香

妖嬈凝雪色　乾山省㫖
(印) 乾山・深省

淡泊噴天香　乾山省㫖
(印) 尚古・陶隱

妖嬈雪色を凝らし　淡泊天香を噴く

【出典】
妖嬈凝雪色　淡泊噴天香
「百花門・白牡丹」『圓機活法』十九『詩學大成』九

【大意】
白い牡丹は雪の塊、色淡くしてこの世ならぬ芳香を放つ。

【語釈】
妖嬈　美しく艶めかしい・妖艶。
雪色　雪また雪のように白い色。
凝　凝り固まる・凝縮。「凝雪」は雪のように白くて美しいものをいう。
淡泊　「淡白」に同じ。あっさりしている。さっぱりして執着心がない。
天香　秀れて佳い香り。この世ならぬ芳香。
噴　吐く・吹く。「噴顔」は香りを放つ・非常に芳ばしいの意。

【参考】
1、出典は白牡丹を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。牡丹花中、白牡丹の妖艶にして清らかな風情をいう。白さは雪が芳香を放つかと、香は天から降るかと思うほどに芳ばしいと称えるが、「窈窕妖嬈」は美人の大意（「麗人門・美人」『圓機活法』十一）、牡丹の形容に多くみられる。
2、図像化には牡丹の風に揺れる風趣を描き「好風乾雨」、石を添えて「春暉暁艶」、海棠や白木蓮（玉蘭）を配して「玉堂富貴」などの題画がある。
3、角皿・長方皿は銹絵陶法である。

妖嬈凝雪色　乾山省㫖
(印・裏) 乾山・深省

＊李正封（七七一―八四四）唐代詩人。字中護、京兆の人。元和二年（八〇七）の進士。監察御史、中書舎人などを歴任。詩にすぐれ、牡丹詩は広く人々に膾炙された。

芍薬

―中国―

芍薬は毛茛科の多年草。原産地はアジア大陸東北部、中国北方とされる。漢名は芍薬、和名は漢名の音読みから芍薬、西洋名のピオニーはギリシャ神話のパイアンに因む。季節は夏を代表し、茎は一株から数本が直立、葉は複葉無毛、牡丹に似るが細長く光沢があり、緑色五萼が一〇弁ほどの単葉・千葉の花を支える。山芍薬（小形の品種）は温帯地、日本では中部以西九州地方に生育、晩春に花を咲かせるという。「好爲花王作花相」（楊萬里）とあり、牡丹は花王、芍薬は宰相の異名をもつが、芍薬は多年草、牡丹は落葉灌木、両花の相異は草と木の違いである。異名には草芍薬・梨食・余容・赤勺・将離などがある。

芍薬は六朝代、牡丹は唐代になり観賞花となった。すっきりと立つ芍薬に対し、牡丹は枝を横に広げる特色があり、両花は花中の両絶と賞玩された。江蘇省揚州は古くから芍薬の産地として知られる。『揚州芍薬譜』（王観）・『芍薬譜』（劉貢父）・『芍薬譜』（孔武仲・江西省清江の人）などが著され、絵画では玄宗と楊貴妃に因む「醒酒花図」、黄筌の芍薬・禽獣図、黄居寀・徐熙・趙昌らの芍薬図がある（『宣和画譜』）。

―日本―

日本へは中国から平安時代に薬用として渡来。『万葉集』にはないが、『延喜式』にあり、観賞用は江戸期延宝頃から栽培されたと伝えられる。信濃、伊勢・丹波が産地（『倭漢三才図会』）、薬用は山地に生育、観賞花は五〇〇種余りに及ぶという。庭木・鉢植えなども親しまれた。異名には夷草・芍薬・貌好草・貌吉草・山牡丹などがある。

媚態迎風笑

媚態迎風笑
乾山省旱（印）尚古

媚態風を迎えて笑み（芳心雨を著い（着）て愁う）

【出典】
媚態迎風笑　芳心著雨愁　①
「百花門・芍薬附櫻子芍薬」『圓機活法』十九
「花木門・芍薬花」『詩學大成』九

【大意】
牡丹が春風を迎えほころび始めた。（雨に湿り愁うる姿が美しい。）

【語釈】
媚態　艶麗なる容色。牡丹をいう。
芳心　親切心・美しい心。美人の形容。
著　「着」に同じ。思う・知る。「着雨愁」は花が雨にあい愁うる如くに垂れるさま。
愁　愁える・悲しむ。容貌を変える意にも。

【参考】
1、出典は芍薬を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。両書には「著・着」①の異字ある。下段乾山焼茶碗には「笑・媚」②の相異がある。
2、芍薬は六朝時代から代表的な観賞花となる。風雅の人の友となり詩にも詠じられたが、唐代には牡丹に代わられ、宋代になり蘇軾らは江蘇省揚州の芍薬を「揚州に芍薬天下の冠たり」と賞玩、宋代王観は『揚州芍薬譜』を著した。揚州人は役所に芍薬庁を設置、花を陳列、夜明けには花市を開き、春には亭を飾るなど花見を催したと伝えられる。三〇余の種類があり、「花王」洛陽の牡丹に同じく、「花の宰相」揚州の芍薬は天下第一を誇る。
3、日本では牡丹と同じく桃山期障壁画にみられるが、江戸期には園芸・栽培の流行もあり、展示会なども盛行したと伝えられる。
4、重色紙皿・茶碗は銹絵陶法である。

媚態迎風媚②
乾山省旱（印）尚古・陶隠

疊々迎風媚

疊々迎風媚　乾山省㫖（印）尚古・陶隱

疊々として風を迎えて媚びたり
（重々として日に映じて鮮やかなり）

【出典】疊々迎風媚　重々映日鮮
「百花門」『圓機活法』十九『詩學大成』九

【大意】風に媚びるが如く、花の思わしげな姿が面白い。

【語釈】
疊々　積み重なる様子。「重々」と一対。
媚　従う・妖媚・美しい。
重々　重なるさま・層々。深く思う様子や露のはらはらと落ちる音の意もある。
映　映る・曝す。「映日」は日に映えるさま。

【参考】
1、出典は芍薬を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。
2、長方額皿は銹絵陶器法である。

一枝開暖日　千葉照明霞

一枝開暖日
乾山省㫖（花押）
「爾」字型（印・裏）
乾山・深省

千葉照明霞
乾山省（印）乾山・深省

【読み下し】
一枝暖日に開き　千葉明霞を照らす

【出典】
一枝開暖日　千葉照明霞
「百花門・芍薬附樓子芍薬」『圓機活法』十九
「花木門・樓子芍薬」『詩學大成』九

【大意】
暖日一枝芍薬が開き、重なる花弁に陽が輝く。

【語釈】
一枝　ひと枝。多くのものの代表。梅に用いることが多く、禅門では悟道の意などに用いるという。
千葉　八重咲きの花。「千」は数多、「葉」には花弁を表す花葉、葉を表す緑葉の両意があり、花葉は一重・単葉、八重咲き・千葉の二種がある。
明霞　日の光を受けて輝く、艶めかしい。
照　照らす・光る・輝く。

【参考】
1、出典は芍薬を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。
2、やさしい春光に美しく映える芍薬の容色をいう。白い花を金芍薬、赤い花を木芍薬、千葉のものを小牡丹と分けるが（『本草綱目』）、白・紅・紫色があり、牡丹とともに両絶と賞玩された。根には沈静、沈痛の働きがあるという。
3、長方皿・向付は銹絵陶法である。長方皿裏面には緑釉がある。

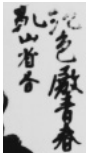
窈窕留餘春

窈窕留餘春　乾山省㫖（花押）「爾」字型（畝紅濃露に醉う）窈窕として餘春を留む　畝紅醉濃露　窈窕留餘春
『圓機活法』十九『詩學大成』九『全唐詩』

芍薬を詠じた唐代柳宗元「戲題階前芍薬」五言律詩。『圓機活法』『詩學大成』『全唐詩』所収。奥床しい芍薬が残り少ない春を咲き乱れる。「畝」は嫋やか・しなやか。「ああ」など歎美の詞。「畝紅」は傾いた紅い芍薬をいう。「濃露」はしっとりと露に湿り、「窈窕」は心情・外貌ともに美しい、時には男子の外貌の美をいうこともある。「餘春」は晩春をいう。

＊王観（生没年不詳）字達叟、江蘇省南通縣の人。宋代熙寧年間（一〇六九―七七）に揚州江都縣事を務め、『揚州芍薬譜』『冠柳集』を著す。

絶色殿青春



絶色殿青春
乾山省旱　印なし

（濃香白晝に薫じ）　絶色青春に殿たり（後駆）

濃香薫白晝　絶色殿青春

「百花門・芍薬附樓子芍薬」『圓機活法』十九
『詩學大成』九

【大意】
春の終わり深い香を放ち艶めかしく芍薬が咲く。

【語釈】
濃香　深い香り・濃密な香。「濃」には露の多い意もある。
白晝　真昼・昼中。太陽が真上にあり映ずる陰のないことからいう。
薫　香気を発する・匂いを出す。
絶色　極めて美しい色・秀れた容色。絶世の美人など。
青春　春。春を三期に分け青春・仲春・季春とするが、陰陽五行説では方角として東方、色では木の盛んな青の季節を表す。ここでは春の終焉、初夏芍薬の花の盛り。
殿　後駆・後ろ。後陣など最後尾について敵を防ぐこと。

【参考】
1、出典は芍薬を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。
2、「殿」は宮殿ではなく、春の終わりを締め括る意、春が往き初夏、豊かな花を咲かせる芍薬の見事さの意である。栽培種には「花香殿」と名付けた品種があり、華やかな百花咲き乱れる春が過ぎ、ひとり遅れて芍薬が咲く。春花の「しんがり」をいうが、中国では中華民国となる一九一二年まで太陰暦を用いており、暦月と四季の寒暑は結びつかないとされる。
『花壇綱目』（延宝九年刊・一六八一）には三二種の芍薬の記録があるという。
3、角皿は銹絵陶法である。

芳叢獨歩蜀江春

芳叢獨歩蜀江春
乾山省旱（花押）「爾」字型

（裝卽董稱す西洛の景）　芳叢獨歩す蜀江の春

裝卽董稱西洛景　芳叢獨歩蜀江春

「百花門・芍薬附樓子芍薬」「圓機活法」十九

【大意】
蜀の錦のように咲き乱れる芍薬は、並ぶものもなく美しく、独り春を代表する。

【語釈】
董　正す・蔵める。堅固。
芳叢　花の咲く草むら。芍薬の咲き乱れる景。
獨歩　誰一人で歩く・単歩。非常に秀れ他に並ぶもののないことをいう。
蜀江　蜀の地を流れる錦江をいう。「蜀」は三国時代に劉備によって建国された国である。今日の四川省一帯西方の地の古称。「蜀の成都に錦を濯ぐの江有り」（白居易）とあり、「蜀江錦」と称し錦江の流れに糸を晒して織り成した錦は美しく、転じて美麗な錦の喩。「蜀江春」は蜀の錦に喩えていう美しい春の景色。

【参考】
1、出典は芍薬を詠じた七言詩。『圓機活法』所収。「芳叢」は蘭や菊の詩句にもある。
2、「蜀江」は白居易の長恨歌にも、
蜀江水碧蜀山青
聖主朝朝暮暮情
とあり、深々と緑を湛えた錦江、映ずる青々とした山の美しさが詠じられた。
蜀は三国時代、劉備、諸葛亮（孔明）らの建てた国である。四川・雲南・貴州一帯を領有。農業を奨励、少数民族との関係を改善、が、二六三年魏によって亡ぼされた。
3、輪花皿は銹絵染付の陶法である。

蜀江錦の一例

＊「蜀江錦」は錦織りの文様の一つである。四川省蜀国に産する錦織を称し、日本には聖徳太子愛蔵「法隆寺錦」が伝来する。「蜀江春」は「霞滿蜀江春」など全唐詩にもある。

芙蓉

―中国―

芙蓉は葵科の落葉灌木、原産地は東アジア・中国とされ、亜熱帯地方に多く分布。蓮を芙蓉と称したことから漢名は木芙蓉、和名は漢名の音読みから木芙蓉、西洋名コットンローズ、学名ハイビスカスは古代ギリシャまたラテン名に由来する。季節は秋を代表し、茎は白毛密生・直立、葉は掌状に三尖・七尖、縁に鋸歯がある。夏に繁茂、秋に白・淡紅・紅色の五弁の単葉・千葉花が開き、朝咲き夕べに凋むが、朝は白色、しだいに薄紅、夕べに紅色に変ずる品種を酔芙蓉という。寒に強く、薬用・観賞用が栽培、異名としては拒霜（落葉しても実の殻が落ちないことから）・天英・秋華・錦城・醉客などがある。漢代「華木」の名で知られ、樹皮の利用（『長物志』）、六朝以後観賞花となるが、江淹（四四四―五〇五）の「草木頌十五首」、唐代には池塘に種えて酒客を招き晩秋の雅趣に酔うなど白居易の詩が残る。艶なること蓮花に等しく、君子の品格に喩えられるが、絵画では黄筌・黄居宗・徐熙・趙昌・牧谿らの院体画、水墨画が残り、題画には「一路栄華」（芙蓉に鷺）、「榮喜（貴）萬年」（桂花を添える）、「芙蓉翠鳥」（翡翠を配す）などがある。

―日本―

いつ頃から日本にあったものか、自生種、渡来種、詳しいことは不明である。中国では宋代頃から観賞花として栽培、『万葉集』には名はないが、室町時代に庭植え花の一種となり、花や葉は薬用に使われたという。樹皮は剝いで籠や網などの細工物、製紙材料、染料にも用いたが、異名には木芙蓉・地芙蓉・木蓮・拒霜・山楮などが伝えられる。

繁華不占春光早　冷淡寧甘晩節遅

繁華不占春光早
冷淡寧甘晩節遅
（印）乾山、尚古・陶隠

繁華不占春光早
乾山省㬉
（花押）巾着型

冷淡寧甘晩節遅
乾山省書
（印）尚古・陶隠

【読み下し】
繁華春光の早きを占めず　冷淡寧ろ甘んじて晩節遅し

【出典】
一味涼飈激轉西　園林草木半枯萎　①
繁華不占春光早　冷淡寧甘晩節遅
日映絳紗西子咲　露沾紅粉大眞啼　②
當時獨自魁秋好　可怪遊人尚不知
「百花門・芙蓉花」『圓機活法』十九
徐時用詩「百花門・芙蓉花」『詩學大成』八

【大意】
春の陽は思いのままにならない。むしろじっくりと秋を待って花を咲かせるの意か。

【語釈】
繁華　沢山の草花の繁り咲くさま。
春光　春の日の光。春景色。
占　占める・欲しいままにする。
冷淡　あっさり・執着しない。
寧　寧ろ・いっそ・即ち。何ぞ・いずくんぞと読み疑問詞に用いることもある。
晩節　老年・末年。晩年の節操。

【参考】
1、出典は明代徐時用の芙蓉を詠じた七言律詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。両書には「涼・凉」①「絳・縫」②の異字がある。涼は涼の異体字。
2、「芙」は「富・栄・夫」に通じ、吉祥「富貴栄華」、夫が朝廷に重んじられるなど時めくことを寓意する。
3、四方火入・角皿類は銹絵、茶碗は銹絵染付の陶法である。図では芙蓉の葉には切れ込みを入れる。

繁華不占春光早
乾山省㬉
（印）尚古・陶隠

冷淡寧甘晩節遅
（以下二点）
乾山省㬉
（印）尚古・陶隠

乾山紫翠
淡省毫
（花押）「爾」字型

輕盈凝暁露　爛熳倚烋（秋）風

輕盈凝暁露
乾山省㫖（印）
尚古・陶隠か

爛熳倚烋風
乾山省㫖（印）
乾山・深省

輕盈凝暁露に凝り　爛熳として烋（秋）風に倚る

輕盈凝曉露　爛熳倚秋風　①

『詩學大成』八『圓機活法』十九

芙蓉の花が朝露に湿り、秋風に揺れ誇らしげだ。

【語釈】

輕盈　か弱く、嫋やかな容姿の形容。
凝　氷る・凝らす。「凝露」は露を結ぶ意。
爛熳　「熳」は「漫」に同じ。六朝以後誤用されたというが「漫」が正しい。光り輝く・花などが咲き乱れるさまをいう。
倚　寄る・任せる・誇る。

【参考】

1、出典は芙蓉を詠じた五言詩。『詩學大成』『圓機活法』所収。両書には「凝・疑」①の異字がある。早朝の清しい芙蓉、秋風に揺らぐ花の風趣・風情をいう。類似の詩句には明代陳淳*「素質倚秋風」がある。「輕盈」「爛熳」は芙蓉の詩に多く、冷風、霜を拒み柔らかな花を咲かせる。
2、角皿はともに銹絵陶法である。下段の作品類は同讃作品である。

【大意】

秋も深まり艶やかな芙蓉が酒気を帯びたように風に揺れる。（力なく美しい姿がなよなよとしている。）

【語釈】

秋老　深まり行く秋・晩秋・秋景色。
醉容　酔態・酒に酔った姿。
芳姿　美しく好ましい姿。香りの好い花。
西風　西の風・秋風。「西風錦」は芙蓉の異名。
倚　寄る・凭れる・誇る。

【参考】

1、出典は芙蓉を詠じた七言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。芙蓉は栽培はらくであるが侭にならない芯の強さがあるという。
2、『紅楼夢』には「倦倚西風夜已昏」とある。西風に花は凋むなど、比喩に用いることが多い。
3、長方皿は銹絵陶法である。

芳姿無力倚西風

芳姿無力倚西風
乾山省㫖
（印）乾山か

（秋老いて芙蓉醉容に似たり）
芳姿力無くして西風に倚る

秋老芙蓉似醉容　芳姿無力倚西風

「百花門・芙蓉花」『圓機活法』十九

『詩學大成』八

輕盈凝暁露
乾山省㫖（印）
尚古・陶隠

爛熳倚烋風
乾山省㫖（印・裏）
乾山・深省

乾山省㫖（花押）
「爾」字型（印）
尚古

（底）乾山

乾山省（花押）
「爾」字型

陶工乾山省
七十才造之
（印）尚古

豔蕚芳姿

豔蕚芳姿
乾山省毫（逆印）尚古・陶隠

豔（艶）蕚芳姿
「百花門・芙蓉花」『圓機活法』十九

艶やかな芙蓉の容姿をいう。「蕚」は「萼」の俗字。花弁の外側の萼をいうが、花弁や花房を表すこともあり、「艶蕚」は芙蓉の花の意。「芳姿」は美しい姿、「芳」は美しいものの喩。

出典は芙蓉の大意を表す四言句。『圓機活法』所収。「紅萼芳姿」は「薔薇花」にもある（『圓機活法』十九）。長方皿は銹絵陶法である。

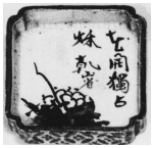
輕盈凝暁露
乾山省㫖　印なし

＊徐時用（一四二八―九九）字時用、号謙齋、宜興の人。明代景泰五年（一四五四）の進士。張弼撰『張東海先生集』には「寄徐時用」として五言律詩がある。

＊陳淳（一四八四―一五四四）字道復・復甫。号白陽山人、江蘇省長洲の人。明代文徴明のもとで書画を学び、山水画、花鳥画の名手とされた。「草書千字文巻」のような端正な書、「草書七言律詩軸」（ともに東京国立博物館）のような大字の狂草など、名作が残る。

＊『紅楼夢』は別名『石頭記』『金玉緣』、清代曹雪芹、続作高鶚による長編小説である。封建社会の崩壊と支配階級の矛盾を描き、古典小説の傑作とされる。洗練された言語に特色があるという。

花開獨占烋　晩豔獨占烋



花開獨占烋　乾山省（印・裏）　乾山・深省

晩豔獨占烋　乾山省扈（印）　乾山・深省

（芳艶最も風流）花開きて獨り
烋を占む　（芙蓉乃し木と成り）
晩豔獨り烋を占む（春に嬌ふ）

【出典】
芳艶最風流　花開獨占秋
『百花門・芙蓉花』『圓機活法』十九『詩學大成』八
芳艶最風流　花開獨占秋　芙蓉乃成木
晩艶獨嬌春
『圓機活法』十九『和語圓機活法』五

【大意】
艶麗、風雅、衆花枯れたのち花を咲かせ秋を独占。

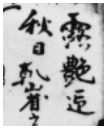
【語釈】
芳艶　芳しく艶麗な容色。
風流　世俗を超脱した趣。風雅、高尚。美風の名残りの意もある。
獨占　独り占め・占有する。「獨占秋」蘭詩に多い。
晩艶　遅咲きの花。多く菊をいう。
乃　乃ち・そこで・かくて。強意に用いる。
木　かつては荷花（蓮）を芙蓉と称し、葵科灌木芙蓉を地芙蓉・木芙蓉と称した。
嬌　艶めく・驕る・高ぶる。

【参考】
1、出典は芙蓉を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』『和語圓機活法』他所収。多くの花が枯れる秋に独り芙蓉がゆゆうと花を咲かせる趣きをいう。君子の品格に喩え、霜をはねのけ花咲く深い清楚な風情を賞玩。
2、入角四方皿、重色紙皿では銹絵陶法である。重色紙皿では「嬌春」を「占烋」としている。

花開獨占烋　乾山省扈　印なし

晩豔獨嬌春　銘なし
（花押「爾」字型か）

露艶迎秋日



露艶迎秋日　乾山省扈（印・裏）　乾山・深省

露艶秋日を迎へ（仙姿曉霜を拒む）
露艶迎秋日　仙姿拒曉霜　①
『百花門・芙蓉花』『詩學大成』八
『圓機活法』十九

【大意】
秋を迎えて霜にも負けず艶なる芙蓉が花開く。

【語釈】
露艶　艶美なことを露わす。「露醜」とすれば醜いことを露わす意。
仙姿　仙人、仙人のような俗を離れた秀逸な姿。
曉霜　明け方の霜。拒は拒む・応じない・防ぐ。

【参考】
1、出典は芙蓉を詠じた五言詩。『詩學大成』『圓機活法』所収。両書には「露・霞」①の異字がある。秋を迎えて花咲く芙蓉の風情をいう。
2、入角四方皿は銹絵陶法である。

金殿當頭紫閣重

金殿當頭紫閣重　印不明

金殿當頭紫閣重　仙人掌上
玉芙蓉　太平天子朝天日
五色雲車駕六龍
（王建「宮詞百首」『全唐詩』）

頭に黄金の殿があり紫の閣がそれに連なる。まさに仙人の掌上に咲く玉花のようだ。朝に天子が太陽を拝すれば、五色の雲で作られた車駕を六頭の龍が引くとした意であるが、唐代*王建の芙蓉を詠む七言絶句を出典とする。『全唐詩』所収。*王建「宮詞百首」は艶麗な宮中生活を詠じた詩歌集であるが、誇張、頽廃的、が、広く人々に親しまれ、同詩は一八九六年国歌に指定されたという。

*王建（？―八三一頃）
唐代詩人、字仲初、河南省許昌（潁川）の人。大暦一〇年（七七五）の進士、秘書郎、陝州（河南省）司馬、辺境に従軍、陝西省咸陽に晩年を送る。韓愈門下、新楽府運動を推進、張籍とは「張王」と評された。『王司馬集』がある。

翠幄臨池結絳囊

翠幄臨池結絳囊
乾山省㫖（印）乾山・深省

翠幄池に臨んで絳囊を結ぶ
（多情長く伴う菊花の芳）

【出典】
翠幄臨池結絳囊　多情長伴菊花芳
「百花門・芙蓉花」『圓機活法』十九
翠幄臨流結絳囊　多情常伴菊花芳　①
誰憐冷落清秋後　能把柔姿獨拒霜　②
劉珵「拒霜」『佩文斎詠物詩選』下

【大意】
池塘に咲く紅の芙蓉、帷を巡らしたように艶やかだ。（菊香とともに秋冬の寂しさを分かつ。）

【語釈】
翠幄　緑の垂れ絹・帷・幔幕の類。ここでは青々と葉を繁らせた芙蓉の喩。「幄」は四枚の布を合わせ四方をすっぽりと囲う所からの名称。古代伏羲・女媧の創作に成ると伝承。「帳」は主に寝台用の帷をいう（『倭漢三才図会』）。
絳　赤・深紅色。芙蓉を朱華という。
囊　袋。物を入れて蔵めるもの。
多情　物の哀れを感ずることが強い。「多情仏心」は多情、即ち仏心の意。

【参考】
1、出典は宋代劉珵の「拒霜」と題した七言絶句。『圓機活法』『全芳備祖』『佩文斎詠物詩選』他所収。「池・流、長・常」①「憐・怜」②の異字。拒霜は芙蓉の異名。霜の降りる秋冬花を咲かせる所からの名であるが、本来は錦葵科に属する木芙蓉のことであり、芙蓉は蓮花を表した。
2、池水辺の亭には日光を避けるため藍色絹の幔幕、風雪を除けるために紫絹の帷帳が施されたという。舟や店舗は麻や木綿の暖簾類を使用したと伝えられる（『長物志』）。

＊劉珵（生没年不詳）宋代の人。字純父、熙寧五年（一〇七二）殿中丞となり、元佑三年（一〇八八）蘇州に移る。『宣城集』（三巻）が残る。

風翻萬疊霞

風翻萬疊霞
乾山省㫖（印）乾山・深省

風翻万疊霞　乾山省（印）乾山・深省

【読み下し】
（露は濯う于（千）團の錦）　風は翻る萬疊の霞

【出典】
露濯于團錦　風翻萬疊霞　①
「百花門・芙蓉花」『圓機活法』十九『詩學大成』八

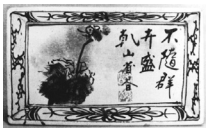
【大意】
（錦のような花園が露に湿り、）芙蓉の花が風に翻り重なり合う。

【語釈】
濯　濯ぐ。汚れを去って清める。
于　「乾」に同じ。渇く・干す。「千」とすれば数多・盛んに繁る意となり、広々とした畑、菌の意。
團　「圃」の本字。菜園・野菜畑。庭園・野などの意味も含む。
錦　錦織のように美麗、鮮やかなものの喩。芙蓉には「西風錦」の異名がある。
風翻　風にひらひらと舞う・風が翻す。
萬疊　山や波が幾重にも重なる。萬重・千重。
霞　日の光を受け空が赤く見えることを絳霞というが、夕陽に染まり燃え立つような芙蓉の花の美景を喩える。

【参考】
1、出典は芙蓉を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。両書には「于・千」①の異字がある。
2、右上段長方皿、上段角皿・向付は銹絵陶法である。

風翻万疊霞　乾山省㫖（花押）「爾」字型

不隨群卉盛



不隨群卉盛
乾山省㫖
（印）乾山・深省

群卉の盛なるに隨わず（獨り占む九秋の芳）

不隨群卉盛　獨占九秋芳

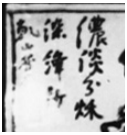
「百花門・芙蓉花」『圓機活法』十九
『詩學大成』八

【大意】
秋、凋落する草花に随わず花を咲かせる。（独り秋期を満喫する。）

【語釈】
群卉　「卉」は「卉」の俗字。もと「䔧」に作る。草の総称。多くの草花。「群花」「衆花」は沢山の花の意。
隨　付き随う・添う・続く。
九秋　秋の九〇日。三年の歳月の意もある。
芳　美しいものの喩。花や香気、好ましい名声や誉れをいう。

【参考】
1、出典は芙蓉を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。衆花散る秋に花咲く風情ある芙蓉の容色をいう。「独占」は芙蓉の詩に多い。
2、長方額皿、下段長方皿は銹絵陶法である。

濃淡分秡染絳紗



濃淡分秡染絳紗
乾山省㫖　印なし

（曉に看れば玉の如く暮には霞の如し）濃淡秡（秋）を分けて絳紗を染む

【出典】
曉看如玉暮如霞　濃淡分秋染絳紗
「百花門・芙蓉花」『圓機活法』十九

【大意】
朝には白い蕾が夕方には霞を帯びたような紅の花を咲かせる。秋を迎え濃く淡く染め分けた薄衣のように色づいてゆく。

【語釈】
濃淡　濃い所と薄い所。濃く淡く。
絳紗　赤い色の薄衣・紗。「絳」は大紅色。「絳霞」は赤い色の霞をいい、秋の夕暮れに同じく赤く染まる芙蓉に喩える。

【参考】
1、出典は芙蓉を詠じた七言詩。『圓機活法』所収。類似の詩句には「曉妝如玉暮如霞　濃淡分秋染此花」（「木芙蓉」『廣群芳譜』）がある。
2、朝に白色、午に薄紅、夕べに紅色に変わる酔芙蓉の艶やかさを酔人に喩え、濃淡重なり合う花の美しい風情を詠ずる。
日本には沖縄、九州に自生種があるという。木葉花実ともに木槿に似るが、中国では池辺に植える姿が好まれ、唐代詩人は水に臨んで植えるべしとその風情、情趣を賞玩した。
3、角皿は銹絵陶法である。

風前呈冷艷

風前呈冷艷
乾山省㫖　（印）尚古・陶隱

風前冷艷を呈し（霜後清芳を散ず）

風前呈冷艷　霜後散清芳

「百花門・芙蓉花」『圓機活法』十九
『詩學大成』八

吹く風に清楚な白い花が揺れ、（霜の降りた寒気の中で香気を発す。）「風前」は風の吹く前、吹き当たる所。「冷艶」は冷やかな美、雪や白い花の形容である。「清芳」清らかな好香、「散」は放つ・入り乱れるなどの意。芙蓉を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。

芙蓉図『三才図会』

水仙

―中国―

水仙は彼岸花（曼珠沙華）科の多年草、原産地は地中海沿岸である。暖かな海浜地・湿地を好み、名の由来となるが、漢名は水仙、和名はその音読みから水仙、西洋名のナルシサスはギリシャ神話のナルキソスに因むという。季節は冬を代表し、辣韮状の鱗茎から細長い線状の葉、葉の中から花茎が直立、先端には白・黄色の六弁の花が開く。花形は酒盃に似るが、大きさは簪の頭ほど、白い花弁、中央には皿状の黄色の副冠、蘂がある。早咲きは一一月に開花するが、栽培は薬用・観賞用、千葉種もあり、中国では十大名花の一つとする。湖北・湖南・浙江省に多く分布、黄水仙はヨーロッパが原産地である。異名には金盞銀臺・玉玲瓏・雅客などがある。

水仙は水中の道者、川の神の意も含むが、人面魚身、神話中の河伯（馮夷）を伝え（『後漢書』）、八種の鉱物・八石（仙薬）を服したことから水中の仙、他説によれば黄河に転落溺死、天帝の命によって黄河の神となるなど、戦国時代は楚の屈原が汨羅に身を投げ水仙となり、三国時代魏の曹植は水仙の風情、芳香を洛水の神宓妃に擬え「洛神賦」を著した。宋代黄山谷（魯直）は七言律詩に次のように詠ずるが、

凌波仙子生塵韈　水上盈盈歩微月　（中略）
山礬是弟梅是兄

水仙を仄かな月光のもと緩やかに歩く神女の姿に喩えるなど、花の咲く順序を梅の後、山礬（沈丁花）の前に開花するとし、早春を代表する草花とした。山礬は掟花・沈丁花、野中に多く、葉は灰として染料に用いるなど、礬は不用の意から山谷が「山礬」と名付けたという。

明代は多く室内において観賞、冬季沢山に植えたものを選択し極上花を鉢に移し机辺に置くとある（『長物志』）。宋代楊万里は「千葉水仙花」の詩序に、金盞とは深黄の盃、単葉花の中央にある黄色の副花冠を表し、銀臺は盃臺、白色の花弁をいうとする。『本草綱目』にも花の状、これを重んじ真水仙の名を付けたとあり、千葉花は盃の形を作さず、『遵生八牋』は単葉を水僊、千葉を玉玲瓏と称するなど、単葉花を貴しとした。絵画では揚補之の水仙図が知られ（『松斎梅譜』）、現存する最古の図は南宋末期趙孟堅（一一九九―一二六四？）による水仙図巻という。題画には以下のようなものがある。

「凌波僊子」・「洛神賦」を基とするが、水に所縁のある仙女、女神
「歳寒仙侶」・梅竹石を配する
「群仙扶壽」・松の下に群生する水仙を描く
「金盞銀臺」・花形を基にする

―日本―

日本へは平安末期に渡来した。遣唐使が薬草として持ち帰ると推定されるが、『万葉集』にはなく、室町期の『下学集』や謡本、茶会記、花書などに水仙華・水仙・雪中花の名がみられる。『倭漢三才図会』によれば江戸期にはすでに西洋種の水仙も知られており、巷間にはギリシャ神話の逸話なども伝えられていた。南面、海岸・岸辺に生育、産地では遠州・駿河・河州の船橋・紀州の松江などの名が残る。

異名には雪中花・雅客・皎草・総咲水仙・庭木などがあり、野生化した品種を日本水仙と称するという。

翠袖黄冠玉作神　奕前奔後独迎春
水晶宮裡朝元客　香醉山中得道人

翠袖黄冠玉作神
（上）乾山省昏（印）乾山・深省か
（下）乾山省昏（印）乾山・深省か

奕前奔後独迎春
乾山・深省（上）乾山省昏（印）乾山・深省（下）乾山省昏（印）乾山・深省

水晶宮裡朝元客　香醉山中得道人
（上）乾山省書（逆印）尚古・陶隠
（下）水晶句　乾山省昏（印）尚古・陶隠

【読み下し】
翠袖黄冠玉を神と作す　奕前奔後独（獨）り春を迎う
水晶宮の裡朝元の客　香醉山中得道の人

【出典】

翠袖黄冠玉作神　桃前梅後獨迎春
水晶宮裡朝元客　香醉山中得道人
羅襪輕盈微歩月　氷肌冷淡迴離塵
何時携上紫宸殿　乞與宮侮作近隣

顔潛庵詩「百花門・水仙花」『圓機活法』十九
『詩學大成』九

玉潤金寒窈窕身　翩々翠袖挽青春
水晶宮裏神仙女　香醉山中得道人　①

葛天民「水仙花」『全芳備祖』

【大意】
緑葉、冠の如き黄色の蘂、玉のように潔い精神をもつ。梅花後桃李前に開花、専ら独り春を楽しむが、朝元閣を訪う如く、山中において水仙の香に酔う隠者たちの意か。

【語釈】
翠袖　緑色の袖。水仙の葉の表徴。
黄冠　白い花弁・黄色の芯・蘂、水仙花をいう。草で作った冠の意であるが、野人・道士が被るものから転じて彼らを表徴、「黄冠子」は道士をいう。日本でも元政は白衣に黄顔と評したが、「黄」は大地、陽光、中和の色として貴ばれた。もとは「王」。磨く、立派にする、達成するなどの褒めたり貴ぶ折りの美称。「玉精神」は潔い美しい心をいう。
水晶　無色透明の石英。水の精のように美しいものの喩となり、「水晶宮」は水晶をもって飾った宮殿。「水精宮」。
朝元　「朝元閣」「隆聖閣」。「玄元」の廟に朝することであるが、玄元は唐代老子に贈り祀られた尊号である。「朝」は朝見する。
客　旅人・外来者。
得道　道に適う。道者は不老不死の道術を会得、仏者は戒・定・慧の三つを修業、悟りを開くことをいう。
道人　俗を逃れた人、道を修めた隠者の仲間。

【参考】
1、出典は明代顔潛庵の七言律詩。『圓機活法』『詩學大成』『全芳備祖』所収。聯句「朝元客・神仙女」①の異字がある。宋代葛天民の七言律詩「水仙花」を基とし、劉貢父も類似の詩を詠ずる（次頁下段）。
2、水仙花を道人の高潔さに喩えるが、「歳寒友」ともいわれ、水仙は寒い季節、困苦な境遇において頼りとなる友とされる。
3、「神仙」は道家の不老不死術を得た変化自在の仙人を称し、「神仙女」も水仙花の喩とされる。水仙は花の仙、柏は樹の仙、霊芝は仙境に生ずるとして「三仙」と称えられる。
4、額皿・角皿・長方皿・重色紙皿は銹絵陶法である。

同讃作品と出土陶片

翠袖黄冠玉作神
乾山省昏（印）尚古・陶隠

翠袖黄冠玉作神
乾山省書（印）尚古・陶隠
内藤町遺跡出土

翠袖黄冠
乾山省昏（印）陶隠

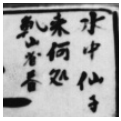
＊顔潛庵（生没年不詳）『圓機活法』に多く詩が掲載、明代嘉靖から萬歴年間の人と推定。王世貞、僕陽傳とは同期であろうとされている。
＊葛天民（生没年不詳）北宋末南宋代の人。字撲翁（朴翁、号無懐、浙江省紹興（越州山陰）の人。はじめ僧籍にあり、のち還俗、義錯と称した。西湖の畔に住したという。『無懐小集』が残る。

奕前奔後独迎春
乾山省昏（印）乾山

奕前奔後独迎春　乾山省昏（印・裏）乾山・深省

水晶宮裡朝元客　乾山省昏（印）尚古・陶隠

水中仙子來何処　翠袖黄冠白玉英



水中仙子來何処　乾山省㫖　印なし

翠袖黄冠白玉英　乾山省㫖（印）尚古・陶隠

翠袖黄冠白玉英　乾山省（花押）巾着型

水中の仙子何の処（處）よりか來たる　翠袖黄冠白玉の英

【出典】

水中仙子來何處　翠袖黄冠白玉英

「百花門・水仙花」『圓機活法』十九『詩學大成』九

水中仙子來何處　翠袖黄冠白玉英
報道幽人被渠惱　著詩送興老難兄

朱熹・朱子・晦庵「用子服韻謝水仙花」
『朱子文集』九『全芳備祖』『廣群芳譜』五十二

【大意】

水中の仙女のように美しい花は何処より来たるか。緑の衣(葉)に黄色の冠(しべ)、花片は真白だ。

【語釈】

水中仙子　「仙子」は仙女、水仙花をいう。水中の仙子は春秋代の呉の伍子胥、楚の屈原、周代趙の琴高などの喩である。舟中にいる妓女を「水仙子」ともいう。

翠袖　水仙の葉の表徴。

黄冠　水仙花の表徴。黄色の冠。草花で作った冠から転じて道士の喩となる。『礼記』によれば「野夫は黄冠す、黄冠は草服なり」とあり、官を辞した人物は民間田野の庶民の用いる野服を着し人に対することを礼とした。官服に対していうが、隠逸の人は必ず着用したと伝承する。

白玉英　「英」は花びら。玉のような水仙の美称。葉は黄色、六弁の単葉の白花を称して「金盞銀臺」という。

【参考】

1、出典は宋代朱熹の「用子服韻謝水仙花」と題した七言絶句。『圓機活法』『詩學大成』『朱子文集』『全芳備祖』『廣群芳譜』他所収。水仙には「玉蕊花」の異称もあるが、玉蕊は玉の精、神仙の食すものとされる。水仙の喩となった伍子胥は春秋時代の人である。楚に生まれ父と兄を平王に殺され呉国へ逃れるが、のち呉王を助け楚を伐ち、讒せられて命を終える。

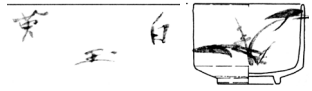
2、「水中撈月」は水中に映じた月を捉える意であるが、李白は酒に酔い水中の月を捉えるべく溺死。禅林では無駄なことの意としている。

3、角皿・額皿は銹絵、茶碗は銹絵染付である。

乾山風陶器出土例

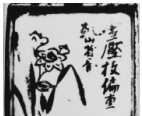
水中仙子來　銘なし　尾張藩上屋敷遺跡出土

銘（永中）仙子來　銘なし　豊島区巣鴨町遺跡出土



白玉英　銘なし　新宿区市谷甲良町出土

雪壓枝偏重



雪壓枝偏重
乾山省㫖　印なし

雪壓して枝偏重　出典は不明。「壓」は抑える・崩す・迫る。「偏重」は一方に偏る・片方のみを重んずる意であるが、積もった雪に水仙の葉が折れ曲がるなど、絵画的な描写である。「雪壓」は水仙を詠じた詩に多いが、芭蕉の俳句にも「初雪や水仙の葉のたはむまで」とある。

＊劉貢父（一〇三一―八九）水仙を詠じた七言絶句に同様の詩句がある（『広群芳譜』）。梅に遅れ桃や李の花よりも早く咲くとする。
早於桃李晚於梅。
冰雪肌膚姑射来。
明月寒霜終夜静。
素娥青女共徘徊。

趙福元「梨花詩」にも玉のような心に雪のように白い膚をもつとの表現がある。

＊琴高は水中仙子・仙人とされる。周代趙の人というが、よく琴を鼓し、鯉に乗って水中に入った故事が伝承する。

＊伍子胥（？―前四八四）春秋時代呉国の武将。楚国に生まれ、字子胥、名員、申に封せられたことから申胥ともいう。呉王闔閭を助け、直言、諫言によって夫差を補佐、が、諫めは容れられず、のち死を命ぜられた。

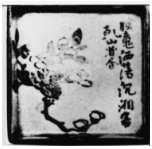
＊芭蕉（一六四四―九四）江戸前期の俳人。幼名金作、名忠右衛門・宗房、俳号桃青・芭蕉、伊賀上野の人。藤堂家料理人であったが、良忠に俳諧も以って仕え、その死とともに退き、延宝年間江戸に出る。深川に草庵を結び、旅を旨とし、俳諧を文学へと押し上げる。

淡貭（質）耽寒月　清芬媚晩風

淡貭耽寒月　乾山省昼
（印）尚古・陶隱

清芬媚晩風　乾山省
（印）尚古・陶隱

騒魂洒落沉（沈）湘客
玉色依稀捉月仙



騒魂洒落沉湘客
乾山省昼
印なし（図は海棠）

玉色依稀捉月仙
乾山省昼
（印）尚古・陶隱

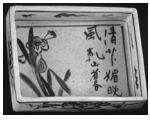
【読み下し】
淡貭（質）寒月を耽しみ　清芬晩風に媚ふ

【出典】
淡貭耽寒月　清芬媚晩風
「花木門・水仙花」『詩學大成』九

【大意】
淡き色は冬の月に好ましく、清い香りは夕暮れの風に乗ってやさしく漂う。

【語釈】
淡　淡い。執着心のない、名利に駆られないなどの意。
貭　「質」の本字。持ち前・生まれつき。
寒月　冬の月。「寒魄」に同じ。
耽　耽る・嗜む・楽しむ。ものごとに深いこと・樹木の繁り重なる様子をいう。
清芬　清い香り。転じて芳ばしい徳行などの意となる。
晩風　日暮れ、夕方の風。
媚　従う・艶めく。

【参考】
1、出典は水仙を詠じた五言詩。『詩學大成』所収。水仙の香、人物の徳行をそれとなく表徴。
2、西洋名ナルシサスは、ギリシャ神話、川の神と水の精との間に生まれたナルキソスに因むが、水に映じた自らの姿に恋して一本の水仙花になったという。風雅な佇まい、幽やかな芳香は、古来東西を問わず親しまれた。
3、長方皿はともに銹絵陶法である。



清芬媚晩風
乾山省昼　印なし

雨洗娟々浄　印不明
（竹）参照）

【出典】
騒魂洒落沈湘客　玉色依稀捉月仙
「百花門・水仙花」『圓機活法』十九『詩學大成』九

騒魂灑落沈湘客　玉色依稀捉月仙（前句略）
却笑涪翁太脂粉　誤將高雅匹嬋娟
劉克莊（後村）『後村居士詩』『廣群芳譜』

【大意】
水仙花は屈原の清廉、潔白なことは水面に月を捉えようとした李白を偲ばせる。

【語釈】
騒魂　詩人・文士の魂・屈原の精霊をいうか。
洒落　さらりと早く落ちる意からさっぱりとした心・蟬りなくの意。「灑落」に同じ。
湘　湖南省の古名。湘水は湖南省霊陵縣西で瀟水と合流、瀟湘八景、舜帝妃娥*皇・女英の故事が伝わる（湘水に投身、女神となる）。「客」は旅人、ここでは湘水汨羅に身を投げた憂国の詩人屈原をいう。
沉　「沈」の俗字。沈む・耽る。
玉色　玉の色。不変にして潔白・行いが正しく立派なこと、美しい容貌の形容。
依稀　紛らわしいほどによく似る・彷彿。
捉月　水に映ずる月を捉える。晩年李白が安徽省采石山に遊び酒に酔い水中の月を捉えようとして溺死した伝説に因む。亭の名。
仙　詩仙と称された李白を表す。

【参考】
出典は南宋代劉*克荘「水仙花」と題した七言律詩。『後村居士詩』『圓機活法』『詩學大成』『廣群芳譜』『全芳備祖』『中国歴代詠花詩詞鑑賞辞典』他所収。聯句の一部は海棠図にみられる。

＊娥皇・女英は舜帝妃、伝説の姉妹。舜を助け理想的な指導者に導くが、九疑山に巡狩、崩去した舜を湘水に弔い慟哭、斑竹の由来となる。
＊劉克荘（一一八七―一二六九）南宋代詩人、名灼、字潛夫、号後村居士、謚は文定、福建省莆田の人。淳祐六年（一二四六）進士に及第、『南岳稿』中『落梅』によって筆禍事件を起こし官職を失うが、のち要職に戻り、龍図閣学士となる。江湖派の筆頭、『後村先生大全集』がある。

椿（山茶花）

―中国―

日本の椿は中国の山茶花に相当、日本の山茶花は中国の茶梅に当たるという（『倭漢三才図会』）。紛らわしいが、中国の椿は「ちん」、栴檀科の香椿（チャンチン）、漆の類に属し、日本の椿とは異品種である。高く聳え、樗（神樹）に似るとされ、『荘子』「逍遙遊」にいう八千椿・大椿のことをいうとする。

山茶は山茶科の常緑喬木・灌木である。原産地は南方山中、中国・南朝鮮・日本に分布する。漢名は山茶花、和名は葉に光沢のあることから艶葉木・椿・海石榴、西洋名のカメリアは宣教師、東洋植物の採集者であったチェコスロバキアのカメル（一六六一―一七〇六）に因むとされている。季節は春を代表し、葉は互生、楕円形、葉裏に毛があり、晩秋白・紅・淡紅・絞りなど五弁の単葉・千葉の花を咲かせる。初夏に若葉を摘み熟て茶に用いるともいうが、玉のような花が群がり咲く宝珠花、杜鵑花に似た躑躅茶花、花帯青い海榴茶花などの種類があり、異名は月丹・鶴丹・玉茗・海紅・一捻紅などが伝えられる。

唐代には未だ珍しく、李徳裕（七八七―八四九）の山荘には「番禺山茶」が植えられていたというが、宋代になって普及、観賞用が栽培され、詩歌には梅堯臣らが詠じたことが始まりとされる。『群芳譜』には一名曼陀羅とあり、葉は茶に属し飲用になるところからの名称であり、『洛陽花木記』『全芳備祖』にも記されている。四川省蜀に産する蜀茶（川茶）、雲南省の滇茶（南山茶・和名唐椿）、また雪中淡紅色の花を咲かせる酔楊妃が佳品とされ（『長物志』）、絵画では南宋代李嵩、明代呂紀の山茶花図、日本では曾我直庵、光琳などの花鳥図屏風がある。

―日本―

漢名山茶、和名椿（「椿」は国字とされる）の歴史は古く、福井県三方五湖の縄文遺跡からは石斧の柄、櫛などが見つかり、古代から身近にあった樹木であることが証された。日本原産ともいわれ、木質の堅牢緻密なことから道具類や日用品の細工物、種子は油、枝葉は灰とし染色などの媒染剤に活用。薬用のほか、冬期にも葉は枯れず濃緑色を保つこと、花のぽろりと落下する様子から、呪力を蔵した樹木であると信じられた。悪霊払いの儀式や行事に活用、『古事記』『日本書紀』にも特殊な花樹であったことが記されており、『万葉集』にも歌が残る。山中・丘陵地に生育、江戸時代には観賞用の栽培が盛行、京都では宮家を中心に椿ブームが起きるなど、日野資勝（一五七七―一六三九）は挿木・接木、新種創出の名手とされた。二代将軍秀忠も椿花を愛玩、元和から寛永年間には武家の庭植えにもて囃されたといわれている。品種も増大、『百椿図』なども著され、地方においても椿の霊力、神木を伝える物語が生まれてゆく。藪椿は山椿のこととされる。

山茶花（漢名茶梅）との厳密な区別はなく、椿花とは久しく混同、明確になるのは室町期の『尺素往來』と伝えられる。江戸期、園芸品種は五〇余種にのぼるとされ、椿・山茶花の相異も理解、春を盛りとする椿花に対し山茶花は冬の花、樹木葉花とも椿に似るが、総体として小形であり、花は扁平、花弁は一枚づつ散る特色が明らかになる（『倭漢三才図会』）。異名には葉の厚いことから厚葉木、海の向こうから渡来した柘榴の意から海石榴、木実木・かたし、朝鮮名「冬柏」からつばき、光沢のある葉の意から艶葉木などの名が残る。

寶珠買断春前景　宮粉粧成雪裡花

寶珠買断春前景
乾山省
（印）尚古・陶隠

宮粉粧成雪裡花（巻）

（上）乾山省昏（印）
尚古・陶隠（下）乾山
滚省（花押）「爾」字型

【読み下し】
寶（宝）珠買い断う春前の景　宮粉粧い成す雪裡の花

【出典】
消盡林端萬點霞　藥綠葉襯瑶華　①
宝珠買断春前景　宮粉粧成雪裡花（以下略）
白山茶詩「百花門・山茶花」『圓機活法』十九
瞿存斎詠白茶花「百花門・山茶花」『詩學大成』八

【大意】
春前、椿を買い求める人々。雪中はや粧いをなした玉の如き花が咲き始める。

【語釈】
寶珠　「寶」は俗字。貴重な珠の意。美しい花の表徴であるが、山茶の一種に「寶珠山茶」と称し花の群がり咲くものがある。
買　買う・応ずる。通説では唐代「春」は酒の意「買春」とは酒を買う意であった。
宮粉　宮廷人の用いた粉白粉。山茶花には「宮粉茶花」「宝珠花」「捻紅」などの異称があり、文人らは「宮粉」は表面的、皮相の美を表すとした。
雪裡　「雪裏」に同じ。雪の中。

【参考】
1、出典は瞿*存斎の白い山茶花を詠じた七言律詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。両書には「藥・蔭蔭」「襯・現」①の異字がある。
2、雪中に咲き始めた白い山茶花の清楚な美しさをいうが、山茶花（椿）は春を盛りとし、茶梅（山茶花）は冬を盛りとする。
3、額皿・重色紙皿は銹絵、六角火入は銹絵染付の陶法である。

常冒雪霜（霜雪）開

常冒雪霜開
乾山省昏（印）
乾山・深省

常冒開霜雪（開）
乾山省昏（花押）
「爾」字型（印・裏）
乾山・深省

（曾って冬春の改まる無し）
常に霜雪（雪霜）を冒して開く

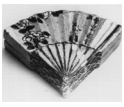
【出典】
南國有佳樹　華居亦玉杯　曾無冬春改
常冒霜雪開　①　梅聖*愈『百花門・山茶花』
『圓機活法』十九『詩學大成』八

【大意】
曾無冬春改　常冒雪霜開　『圓機活法』十九
季節は巡り、雪霜を凌ぎ山茶花が咲く。

【語釈】
霜雪　霜と雪。潔白で厳しい心。「風雪霜」は艱難辛苦を恐れぬことに用いられる。
冒　冒す・向こう見ずに進む。また覆うの意。「冒霜」「雪冒」は霜や雪を凌ぐの意。

【参考】
1、出典は宋代梅*聖愈（堯臣）の山茶花を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。両書には「改・政」「霜雪・雪霜」①の異字があり、乾山焼では「開」の位置に変動がある。
2、寒冷期、雪霜を凌ぎ咲く山茶花の力強さをいうが、「さんざか・さんちゃか」とも呼ばれ、玉椿・臘梅・水仙・山茶花の四花を雪中開花の四友という。古くは「津葉木」の字を当てたとされ、光ある木、春光を寓意する。
3、角皿・長方皿は銹絵陶法である。

乾山省昏（印）
乾山



乾山省（印）
尚古

同讃作品と出土陶片

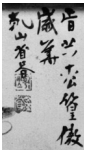
常冒開　新宿区尾張藩上屋敷遺跡出土

宮粉粧成
雪裡花
乾山省昏
（印）尚古・
陶隠

＊瞿存斎・瞿佑（一三四一―一四二七）明代文学者、字宗吉、名佑、号存斎、浙江省杭州銭塘の人。筆禍により陝西省へ流されたが、詩詞、小説を得意とし、多くの閨房、風月を語る。『存斎詩集』『帰田詩話』ほかが残る。

＊梅聖愈（一〇〇一―一六〇）宋代詩人、字聖愈、名堯臣、号宛陵先生、安徽省宣城（宛陵）縣の人。科挙に落第、歐陽脩の推薦によって尚書郎官員外郎に至り、ともに北宋前期の詩文革新運動に尽力する。宋詩の祖とされるが、韓愈、孟郊を学び、伝統を尊重。現実的な政治や社会、小動物を取りあげ人間社会への諷刺を多く残す。『宛陵先生集』がある。科挙の試験官となり、その折の合格者に蘇軾兄弟がいた。

肯蕋奈篁傲歳華



肯蕋奈篁傲歳華
乾山省昻（印）乾山・深省

（群芳散り盡して山茶羨れ）
肯なるかな蕋奈篁歳華に傲る
　群芳散盡羨山茶
　肯蕋奈篁傲歳華
「百花門・山茶花」『詩學大成』八

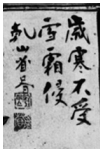
【大意】
衆花散り、寒中、山茶花が咲く。まさに松竹に劣らぬ強さを誇る。

【語釈】
群芳　多くの花・衆花。美人・賢人の喩。
山茶　木名。硬く厚い濃緑の葉をつけ、春季白・紅色の花を咲かせる。日本の椿であるが、山茶花はそれに比し樹木・葉・花・実ともに小さい種類をいう。
羨　溢れる・余る。羨む。
肯　宜・なるほど・承知してなど肯定の意。「惹」の俗字。花のしべ、花の集まるさま。
蕋　松と竹。
篁　年月。「華」は日月の光気とされ光陰をいう。春景色を表すこともある。
歳華
傲　誇る・屈しない。自らの質の違いを誇る。

【参考】
1、出典は山茶花を詠じた七言詩。『詩學大成』所収。松・竹と同じように寒気に耐え花を咲かせる芯の強さをいう。
2、日本では安*楽庵策伝が『百椿集』を著し、画讃「百椿図」（図巻）が描かれ、徳川二代将軍秀忠もことのほか椿が好きであったと伝えられる。
3、角皿は銹絵陶法である。

椿図『光琳百図』後編上

歳寒不受雪霜侵



歳寒不受雪霜侵
乾山省昻（印）乾山・深省

（春早くして横に桃李の妬を招く）
歳寒して雪霜の侵すことを受けず

【出典】
誰將金粟銀絲鱠　簇釘朱紅菜椀心
春早横招桃李妬　歳寒不受雪霜侵
楊誠斎詩「百花門・山茶花」『圓機活法』十九
『詩學大成』八

【大意】
春の代表桃李を前に、寒中花を咲かせ、松・竹に同じくめでたい花木だ。

【語釈】
桃李　桃と李。兄弟の喩、また桃李を植えれば夏は木陰に涼を得、秋は実を採り食を楽しむことができるなど、報答の喩にも用いられる。
妬　他の秀れたものを羨み憎む。
歳寒　冬・老年・逆境。艱難に遭遇してもめげないこと。
侵　侵す・凌ぐ・損なう。他の領分に分け入ること。

【参考】
1、出典は南宋代楊誠斎（萬里）の山茶花を詠じた七言絶句。『圓機活法』『詩學大成』所収。冬の厳しさ、対する椿の強さ、美しさをいう。
2、唐代、李徳裕（七八七―八四九）の山荘には「番禺山茶」が植えられていたという。が、普及するのは宋代とされ、『長物志』には四川省蜀の蜀茶（川茶）、雲南省の滇茶（南山茶）が好しとある。
3、『万葉集』には「奥山の八つ峯のつばきつばらかに　けふは暮らね大夫のとも」（大伴家持）、「我が門の片山都婆伎まこと汝　我が手触れなな地に落ちもかも」（物部広足）などがある。
4、角皿は銹絵陶法である。

＊安楽庵策伝（一五五四―一六四二）室町末期江戸初期の浄土宗僧侶。飛騨高山城主金森長近弟。諡日快。慶長一八年（一六一三）京都誓願寺五五世となり、寺内竹林寺草庵を安楽庵と号し『醒睡笑』などを著す。

＊秀忠（一五七九―一六三二）家康三男、徳川幕府二代将軍。文禄四年（一五九五）浅井長政娘於江与を妻とする。慶長一〇年（一六〇五）将軍となり、娘千姫は豊臣秀頼妻、和子は後水尾天皇の女御となる。

立花は室町期、京都六角堂僧侶が供花をもとに創案したことに始まるが、茶の湯の盛行もあり、江戸期は立花、花の観賞が盛んになる。なかでも椿（山茶）の賞玩は御所における後水尾院、近衛信尋、門跡寺院、江戸では秀忠の花好きが知られており（『武家深秘録』）、城内吹上花壇には種々の花木草が栽培されていたという。花の愛好は将軍家から大名家、徐々に庶民間へと拡散するが、日本初の園芸書は延宝九年（一六八一）刊『花壇綱目』（水野元勝著）とされる。

千苞猶帶雪　数朶笑迎風

千苞猶帶雪
数朶笑迎風
乾山深省亳
（印）乾山、
尚古・陶隱

乾山省昏（印）
尚古・陶隱

乾山省昏（印）
乾山・深省

乾山省昏か（印）
乾山・深省

【読み下し】
千苞猶お雪を帶ぶ　数朶笑いて風を迎う

【出典】
千苞猶帶雪　数朶笑迎風
「百花門・山茶花」『圓機活法』十九『詩學大成』八

【大意】
多くの蕾が雪を被る。が、春風を受け数枝の花が開き始めた。

【語釈】
千苞　沢山の蕾。「苞」は包む意「蕾」に同じ。
猶　まだ・やはり、なお云々の如しの意。
朶　花のついた枝や茎。一房。
笑　喜び口を開けて笑う意。古字は「咲」であり、花の蕾の開くことをいう。

【参考】
1、出典は山茶花を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。雪中未だ堅い山茶花の蕾が柔らかな春風を受け数花開いた喜びをいう。
2、火入・長方額皿・長方皿などは銹絵陶法である。図・讃・銘・印などには微妙な相異がある。

同讃作品

千苞猶帶雪
乾山省（印）
尚古・陶隱

乾山省昏
（印）尚古・
陶隱

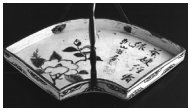
乾山省昏
（印）尚古・
陶隱

数朶笑迎風
乾山省昏（花
押）「爾」字
型

数朶笑迎風　乾山省昏
（印）乾山・深省

乾峯
印不明

葉硬經霜緑　花繁映日紅



葉硬經霜緑
乾山省昏（印）
尚古・陶隱

花繁映日紅
乾山省昏（印）
尚古・陶隱

葉硬くして霜を経て緑に
花繁りて日に映じて紅なり

【出典】
葉硬經霜緑　花繁映日紅　①
「百花門・山茶花」『詩學大成』八『圓機活法』十九

【大意】
山茶花の葉は硬く霜に耐えて緑を増す。花は日射しを受けてなお紅の色を深める。

【語釈】
硬　硬い・強い。山茶類の葉は硬く厚く濃い緑色を呈する。
映　日射し・映える・曝す。

【参考】
出典は山茶花を詠じた五言詩。『詩學大成』『圓機活法』所収。両書には「硬・嫩」「繁・映」「日・雪」①の異字がある。類似の詩句には「山家映日紅」（『點鐵集』）がある。

蒼枝老樹昔誰種

蒼枝老樹昔誰種
いっぱいに葉をつけた山茶花の老木は誰が植えたのであろう。陽に輝き赤い花が沢山の枝を囲む。「蒼枝」は青々とした緑葉をいっぱいにつけた枝をいう。出典は山茶花を詠じた宋代曾鞏の七言絶句。『圓機活法』『和語圓機活法』所収。

蒼枝老樹昔誰か種えし
照耀して萬朶紅相圍む

蒼枝老樹昔誰種　照耀萬朶紅相圍　乾峯　印乾山扶桑か
山茶花開春未歸　春歸正値花盛時　蒼枝老樹昔誰種　照耀萬朶紅相圍　曾鞏*
「百花門・山茶花」『圓機活法』十九

＊曾鞏（一〇一九―八三）宋代詩人。字子固、諡文定、江西省南豊縣の人。嘉祐二年（一〇五七）蘇軾・蘇轍兄弟とともに進士に及第。その折の試験官の一人が梅堯臣であった。文名高く、歐陽脩に認められ、地方、中央官を繰り返したのち史館修撰から中書舎人となる。散文にすぐれ、唐宋八大家の一人である。詩文集『元豊類稿』が残る。

勁節不催岷嶺雪　芳姿偏擬建溪風

勁節不催岷嶺雪　芳姿偏擬建溪風

乾山省㫖（印）　尚古・陶隱

勁節催（摧）まざり岷嶺の雪
芳姿偏へに擬（挺）る建溪の風

【出典】
勁節不催岷嶺雪　芳姿偏擬建溪風　①
「百花門・山茶花」『詩學大成』八『圓機活法』十九
『廣羣芳譜』四一

【大意】
寒気に負けぬ強さは、四季を通じ溶けることのない岷山の雪のようだ。建溪の風がひと吹き、白い花は雪を被せたように美しい。

【語釈】
勁節　「勁」は強い・健やか、屈しない操・世俗を超えた美しさをいう。「勁草」は強い草の喩えとともに節操の堅い士の喩。
催　「摧」に通じ、阻む・挫く・砕く、滅ぼすなどの意。
岷嶺　四川省、甘粛省に跨る山脈、岷山の峰。連峯千里、四季を通じ積雪がある。
芳姿　美しく艶やかな姿。
擬　擬える・真似る・形どる。「挺」は抜け出る・聳える。「偏」は一途にの意。
建溪　茶の名所、福建省建甌縣をいう。転じて茶の異名。

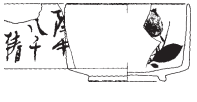
【参考】
1、出典は山茶花を詠じた七言詩。『詩學大成』『圓機活法』『廣羣芳譜』所収。両書には「催・摧」「擬・挺」①の異字がある。四季を通じ凋まない山茶花の強さは世俗を超えた文人の喩。白花・白雪・潔白な心が一つになる。
2、椿は中国の山茶花、山茶の一種であるが、茶に似て薬用にされるという。
3、向付・長方皿は銹絵陶法である。

勁節岷嶺雪　乾山省㫖（印）陶隱

芳姿偏擬建溪風　乾山省㫖（印）尚古・陶隱

乾山風陶器出土例

（□）中八千椿
千代田区溜遺跡出土



□中八千
椿　新宿区尾張藩上屋敷遺跡出土

（□）中八千（椿）
新宿区尾張藩上屋敷遺跡出土

【出典】
大椿八千歳　上古有大椿者
以八千歳爲春　八千歳爲秋
荘遊還「君道門・聖壽」『圓機活法』七
荘子曰「樹木門・椿」『圓機活法』二十二
椿木何其古　春秋歳八千
「百木門・椿」『詩學大成』十一
「君道門・聖節」『詩學大成』十二

【語釈】
八千椿　人間界の八千年が大椿の一春、一秋に当たるとしてその長壽を表す語。

【参考】
1、出典は不明。『荘子』*（「逍遙遊」）に、
上古有大椿者　以八千歳爲春
八千歳爲秋
とある。楚国の南に冥霊という木があり、五百年を春として生長繁茂、五百年を秋として落葉するが、太古の昔大椿という木は八千年を一春、八千年を一秋とし、八千歳を以って歳としたという。人間界には及びもつかない長寿であるが、小知は大知に、小年は大年に及ばないことの教えとし、生命の永遠なることを願う象徴とする。荘子は、人間社会の束縛を離れ絶対的な自由の精神、自然に則した魂の安心を求めたとされる。
2、椿は『日本書紀』中景行天皇の土蜘蛛征伐、『延喜式』の正月儀式厄払いに用いられたことから、日本でも早くから邪鬼祓いの役割を果す。『詩林良材』にも「祝壽総論」の故事にある。

*荘子（生没年不詳）
戦国時代思想家、名周。宋国の蒙、今日の河南省商丘東北辺りの人。漆園の役人になったとされるが、若くして隠遁。楚の武王の招きを退け、老子の哲学「道」を継承。貧窮のなかで絶対的無爲の精神を主張。『荘子』を著し、「内篇」七篇は荘子自作と伝えられる。

蔦

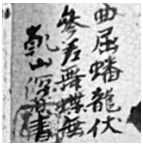
―中国―

蔦は葡萄科の蔓性落葉木、山野に自生、樹木・岩壁・建物・石垣などに這って生育。秋に紅葉する地錦、落葉しない冬蔦（木葛）がある。漢名は烏蘞苺、和名は伝うの意から蔦、西洋名はアイビー、学名のパルセノシサスはギリシャ語が語源とされる。秋を代表し、夏に黄緑色の五弁の花が咲き、一枝一鬚、葉と対生して巻きひげが出る。先端の吸盤が枝分かれし周囲の樹木や岩石に吸着するが、葉は単葉、掌状に切れ込みがあり三尖五尖、秋に落葉、葡萄に似た実をつける。冬夏ともに青く茎節から鬚根を伸ばし石などに絡みつく絡石は、日本では定家の墓石に生えたことから定家葛。異名には五葉苺・五爪竜・常春藤・龍葛・龍草などがあり、絡石は耐冬・石竜藤・雲丹・雲花・懸石という。

―日本―

中国では古くから茎や葉は薬用。日本でも薬用また樹液を煮つめて甘味料などの食用としたが、山林や丘陵地に生育、同じく地錦（甘葛）、絡石（定家葛）の二種に分類した。古く葉は長楕円形、初夏に香りある小さな白い花を集散して咲かせる絡石を蔦としたが、『万葉集』には別れの比喩に蔦の蔓の分かれるさまが詠じられ、平安時代は甘葛の名称が使われていた。巻きひげが伸び、樹石や壁面に絡みつくことから屋敷の景観、庭の雅趣に栽植されたが、鬚蔓、紅葉などに趣きがあり、宗達をはじめ琳派絵師の得意とした画題であった。駿河国宇津の山を舞台とした「蔦の細道」、和歌に関係し、蔦紅葉の美しさ、名残りの風情が賞翫され、早期には「ほと」「ほや」、異名には甘葛・止止岐・蔦紅葉・松無草・甘茶蔓などがある。

曲屈蟠龍伏　参差舞蝶垂



曲屈蟠龍伏　参差舞蝶垂
乾山深省書（印）尚古
光琳画

（根基）曲屈して蟠龍伏し
（葉蔓）参差として舞蝶垂る

【出典】
倚托高松長緑枝　草中孰興間芳奇
根基曲屈蟠龍伏　葉蔓参差舞蝶垂　①
帯雨含烟供興趣　刺簷覆屋助詩詞
清陰翠影真堪羨　却興凌霄一様宜
『百草苑・蘿』『圓機活法』十八

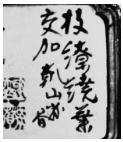
【大意】
曲がりくねる蔦の繁みはとぐろを巻いた龍のようだ。長短垂れる蔓に茂った葉はまるで蝶が舞っているようだ。

【語釈】
根基　土台・基。家督の意もある。
曲屈　曲がりくねる・縮む。
蟠龍　蟠っている（とぐろを巻く）龍・未だ天に登らない龍。
参差　長短不揃い。「参」は「参」の略字、三者が立ち並ぶ意。

【参考】
1、出典は蔦（羅）を詠じた七言律詩。『圓機活法』所収。乾山焼では七言詩中「根基・葉蔓」①を省略、五言詩とした。
2、蔦の生い茂る風趣をいう。しばしば龍の姿に喩えられるが、季節は春、色は青色、蒼龍は春分に天に昇り、秋分に淵に入るという。未だ天に昇らない龍を「蟠*龍」というが、水を好むものを「蜻龍」、火を好むものを「火龍」と称する。
3、乾山の「乾」は陽卦、天を指すが、龍を表徴、望み大いに通る意とされる。
4、角皿は銹絵陶法である。大きく描かれた図に対し、讃は小さく残された空間に纏められた。

＊蟠龍は、月潭禅師の『義山稿』「含玉軒記」に「義山蟠龍巌下」、「寄高泉和尚」には「蟠龍岩下」とある。

枝繚繞　葉交加



枝繚繞　葉交加
乾山省旱（印）乾山・深省

枝は繚繞　葉は交加
枝繚繞　葉交加
「百草門・蘿」『圓機活法』十八
「百草門・藤蘿」『詩學大成』十一

【大意】
枝はくねくねと曲がり、あちらこちらに葉が入り乱れる。

【語釈】
繚繞　纏わり繞る・くねくねと曲がるさま・湾曲した様子。
交加　入り交じる・入り乱れる。

【参考】
1、出典は蔦の大意を詠じた六言句。『圓機活法』『詩學大成』所収。類似の詩句には唐代李山甫の七言律詩がある。
*煙含細葉交加碧（劉員外寄移菊）『佩文斎詠物詩選』下）
2、入角長方皿は銹絵陶法である。

濃陰蔽庭砌

濃陰蔽庭砌
乾山省旱（印）陶隠

濃陰庭の砌を蔽い（新蔓簷檻に入る）
濃陰蔽庭砌　新蔓入簷檻　①
「百草門・藤蘿」『詩學大成』十一
『圓機活法』十八

【大意】
庭の砌に蔦が茂り濃い陰を作る。（新たな蔓は軒や手すりへと伸びる。）

【語釈】
濃陰　濃い陰・深い陰。
砌　砌・軒下や階段の敷石。階段の階歯を支えるため斜めに嵌め込まれた細長い石をいうこともある。
蔽　蔽う・被せる。
簷檻　家の廂や軒、手すり。

【参考】
1、出典は蔦を詠じた五言詩。『詩學大成』『圓機活法』所収。両書には「砌・戸」「檻・楹」①の異字がある。
2、茶碗は銹絵陶法である。

烋（秋）色寄喬木

烋色寄喬木
乾山省旱　印不明（尚古か）
烋（秋）色喬木に寄せ（畫影遠山を籠む）
秋色寄喬木　畫影籠遠山
「百草門・蘿」『圓機活法』十八

蔦を詠じた唐代許*渾の五言律詩。『圓機活法』『全唐詩』所収。両書には「木・樹」「影・陰」の異字がある。草木の凋落する季節、秋の象徴、紅葉した蔦が木々に絡まり遠くの山々の秋を彩る情趣をいう。「落葉」は戦国時代の屈原の頃、「紅葉」は唐代頃から文学の題材になったという。「遠山」は遙か遠くの山、「籠」は籠める・包括する。
丸皿は色絵陶法である。

光琳　蔦図画稿
（小西家文書）

光琳　蔦図画稿
（小西家文書）

光琳画稿に残る蔦図である。扇面、丸文など、用途に合わせ意匠の転換がみられるが、扇面は宗達画にあり、貼付屏風の下絵であろうか、丸文は寸法からも漆芸・盃の意匠であると考える。

在拂？
尾張藩上屋敷跡遺跡出土

有拂？
尾張藩上屋敷跡遺跡出土

*李山甫（生没年不詳）
唐代詩人。咸通年代（八六〇―七三）、進士試験に不第。文筆雄健、七言律詩にすぐれ、『李山甫詩』『李山甫賦』などがある。
*許渾（七九一？―八五四？）
唐代詩人、字用晦、江蘇省丹陽の人。苦学し、四〇歳を過ぎて太和六年（八三二）進士に及第、監察御史、刺史を歴任、善政を布く。晩年は潤州丁卯橋の畔に隠居、律詩にすぐれ、山水詩、懐古詩を得意とするなど、『丁卯集』が残る。

葵（立葵）

―中国―

葵は葵科の湿草類、二年草・多年草があり、原産地は地中海沿岸である。漢名は葵、和名葵は日に向かう性質から仰日、また朝鮮語の阿郁の音に由来、西洋ではコーレッドメロウ、ホリホックという。季節は夏を代表し、秋葵は六、七月、冬葵は八、九月、春葵は正月に種子を植えるが、古く葵は冬葵を意味していたという。今日いう葵は戎葵（立葵）であり、花葵、漢名蜀葵のこととされる。種類は五〇余種、蜀葵・黄蜀葵・錦葵（銭葵）などに分けられるが、蜀葵は日に向かい茎が直立、緑色有毛、葉は糸瓜に似て五尖七尖、鋸歯があり、花は木槿に類似、五、六月に白・淡紅・濃紅・紫色の五弁の単葉・千葉の花を咲かせる。黄蜀葵（土呂呂葵）は六月に開花、朝開いて午に凋む六弁の大輪花、秋を思わせる黄色によって秋葵、土呂呂葵は日本において製紙技術にその粘液を糊材としたことに因るという。錦葵・銭葵はその名の如く五銖銭の貨幣ほどの小さな淡紅・深紅色の花をつけ、葵の中でも低く群がる特性がある。紅蜀葵は紅葉葵・風車の名で知られるが、原産地は北米、西番葵は日本名向日葵、同じく北米原産、中国へは明末頃に渡るとされる。異名には露葵・喝菜・戎葵・荊葵・側金盞花などがある。

中国・朝鮮では早くから薬用・食用。古来葵は冬葵を指し（『詩経』）、六朝頃から「百菜之主」として盛んに食された蔬菜という。唐代末期に観賞用の戎葵（蜀葵）が栽培、四川省蜀の名花となるが、日本においては立葵の文字を当てる。戎葵・立葵は西蜀に産するものを第一とし（『長物志』）、漢代『爾雅』、六朝期には晋傳玄（二一七―七八）の「蜀葵賦」、唐代岑参（七一五？―七〇）の詩歌が残る。南宋頃から画題となるが、絵画には立葵（戎葵）が多く、程槃は花の三〇客を選択、葵を「忠客」としたこともあり、「忠孝雙全」（長寿・忘草の異名をもつ萱草を配する）・「忠孝聯芳」（蝶・鶏・石などを添え不老を表徴）などが描かれ、『宣和画譜』には唐代辺鸞・五代梅行思・宋代丘慶餘・徐崇嗣・黄居寀・趙昌らの葵図があり、宋代には団扇など、明代には別して好まれた画題とされる。日本では狩野探幽、琳派の絵師が取りあげ、光琳、乾山など黄蜀葵、立葵図、草花図屏風が伝えられる。

―日本―

中国、また朝鮮から渡来したとの両説がある。奈良時代には中国における「百菜之主」冬葵を葵としており、薬用・食用、『万葉集』には次のような歌一首がある。

梨棗黍に粟次ぎ延ふ田葛の　後にも逢はむと葵花咲く

黍は「君」、粟は「逢」、葵は「逢ふ日」の意に掛けられたが、平安時代は冬葵の栽培も行われ（『延喜式』）、『枕草子』には「からあふひ」（唐葵）の名がみられる。賀茂の神事に使われた二葉葵（賀茂葵）も親しまれたが、二葉葵は葵といっても立葵の種類ではなく、馬鈴草科に属する寒葵の仲間という。葉の形が葵に類似、名の由来となるが、冬期も緑、一株に必ず長い柄を持つ二枚の葉の生ずることが特色である。春には葉の間に小さな淡赤色の花をつけるが、徳川氏の紋章「三葉葵」も同じく二葉葵を基本としたものという。江戸期には観賞用の栽培も進み、立葵が葵の名で知られてゆくが、異名には唐葵・蜀葵・大葵・一丈紅・形見草などがあり、絵画では探幽、琳派の好んで取りあげた画題である。

霞豔錦葩

霞豔錦葩
乾山省書（逆印）尚古・陶隱

霞豔（艶）錦葩

霞艶錦葩

「百花門・紅葵」『圓機活法』十九
『詩學大成』九

【大意】
紅の立葵、霞を帯びてなお艶やかだ。

【語釈】
霞豔　「豔」は「艶」の本字。霞は空気中の水滴の変化によって空がぼんやり、また陽光に照らされ赤く見える現象をいう。春は霞、秋は霧とするが、ここでは葵花の美しく咲く様子の形容。
錦葩　麗しい花弁・花。「錦」は美の喩。

【参考】
1、出典は紅葵の大意を詠じた四言句。『圓機活法』『詩學大成』所収。立葵は蜀葵、平安時代の呼称唐葵のことである。古く蜀（成都）の名産は「錦」であり、蜀江は成都を流れる川であるが、同地域は絹織物の産地であった。「蜀江錦」として知られるが、四角・八角形を基準としてそれらを繋ぎ合わせた文様である。「錦華」は美しい錦をいう。
2、葵は大別して三種類を基本とするが、
　一、食用、薬用として珍重された蔬菜の葵。盛唐以前の葵はすべてこれであるが、根を庇う、慎重なこと、信頼に足る君子の喩えから、のち皇帝への忠誠心の喩えにも用いたという。
　二、観賞用の蜀葵（立葵・花葵の類）。五〇種ほどの種類があるとされる。
　三、向日葵の類。アメリカ原産、中国へは明代以後に移植されたと伝承する。
3、絵画には唐代辺鸞「葵花図」、五代梅行思「蜀葵子母鶏図」、宋代徐崇嗣「夏葵図」、黄居寀「寫蜀葵花図」、趙昌「萱草蜀葵図」などがある。
4、角皿は銹絵陶法である。

側臉笑薫凧（風）

側臉笑薫凧
乾山省昏（印）陶隱

（香を抱きて暑雨を含み）臉を側けて薫凧（風）に笑う（笑く）

【出典】
抱香含暑雨　側臉笑薫風
「百花門・黄葵」「紅葵」『圓機活法』十九
「花木門・黄葵」『詩學大成』九

【大意】
（雨は葵の花の香を含み、）南風に揺れ陽に向かい首を傾げる。

【語釈】
暑雨　炎暑に降る雨・蒸し暑い雨。
側臉　横顔・側面。傾いた葵の花の形容。
薫風　南の風・芳ばしい温和な風。

【参考】
1、出典は葵を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。「臉」は顔、「瞼」はまぶたをいう。「側臉」「玉臉」「紅臉」などはいづれも「笑」に結びつく。
2、太陽に向かい首を傾げる葵花の様子は宋代司馬光*の七言絶句「初夏」にもある。
　四月清和雨乍晴　南山当戸転分明
　更無柳絮因風起　惟有葵花向日傾
3、『詩経』は娘の美しさを錦葵の花に喩えたが、錦葵は彩りに観るべきものがあるとし、階に植えるを好しとした。一体に立葵は広々とした場所が良く、広庭、籬の下を適するという（『長物志』）。
4、茶碗は伊万里地色絵陶法である。

冷豔浄如金

冷豔浄如金
乾峯　印不明
芳姿渾似臘
冷艶浄如金
「百花門・黄葵」
「圓機活法」十九
「詩學大成」九

芳姿渾（こんぜん）て臘（ろう）に似たり
冷豔浄（じょう）くして金（きん）の如し

見事な容姿は蠟の如く、澄んだ美しさは黄金のようだ。「渾」は濁る・混じる、完全であるなどの意。「臘」は蠟か。美しい葵花の形容となる。「冷豔」は白い花・雪の形容、「如金」は金さながらの意。

---

*司馬光（一〇一九―八六）宋代政治家。字君実、諡文正・太師温国公、山西省夏縣涑水郷の人。宝元元年（一〇三八）の進士。御史中丞となるが、王安石の新法に反対し退官。洛陽郊外に独楽園を設け隠居、『資治通鑑』を著した。哲宗代に復帰するが、新法廃止後、病没した。『司馬文正公文集』がある。
乾山焼には「独楽園記」記した大鉢・火入がある。

薔薇

―中国―

薔薇は薔薇科の蔓性落葉灌木、常緑種もあり、自生、栽培種がある。漢名は墻蘼、和名は薔薇、西洋名のローズはラテン語、ギリシャ語に由来する。季節は夏を代表し、分枝して叢生、茎蔓ともに短い棘に被われ、葉は複葉、円みのある小葉には鋸歯があり、花は白・淡紅色、五弁の単葉・千葉、四、五月頃に開花する。薬用には風熱を除き、殺虫、吹出物、口内の瘡に効力があるとし、大きな花を咲かせる仏見笑（法相花）、小さな花の木香薔薇、一年を通じて開花する月季花・長春花に大別される（『本草綱目』）。木香は中国西南地方を原産地とし、枝は蔓状、棘は無く葉には鋸歯、裏に有毛、花は晩春に開花する。長春花（日本名庚申薔薇）は四川省・雲南省を原産地とし、四季を通じて開花するが、異名には山棘・刺花・買笑・牛棘・牛勒など、詩には六朝中期斉の謝朓（四六四―九九）、唐代高駢（八二一―八七）、絵画には五代頃から描かれ始め、「富貴長春図」・長春花と牡丹、「不老長春図」・松を添えるなどの図がある。

―日本―

日本への渡来時期は不明である。『万葉集』には「荊」、平安時代は『古今集』『枕草子』『源氏物語』に「そうひ」、鎌倉期には定家の『名月記』に「長春花」の花名がみられる。室町時代『下学集』、江戸時代『倭漢三才図会』に花の分別、牡丹茨の和名もあり、花弁は香料として「薔薇露」、宮廷、寺院、公家の庭木のほか、多くの人家に植えられていたという。異名には荊（茨）・棘牡丹・棘花・薔薇などがある。

一架長條萬朶春

一架長條萬朶春
乾山省㫖（印）尚古・陶隱

一架の長條萬朶の春（嫩紅深緑小窓匂し）

【出典】

一架長條萬朶春　嫩紅深緑小窓匂
「百花門・薔薇花」『圓機活法』十九『詩學大成』八

一架長條萬朶春　嫩紅深緑小窓匂
只因根下千年土　曽葬西川織錦人
裴説「薔薇」『全芳備祖』『古今事文類聚』『全唐詩』

【大意】

棚いっぱいに咲いた薔薇が芳しい春の香りを漂わせる。（一枝にて春は充分だ。小窓は濃い緑葉と柔らかな紅花に蔽われた。）

【語釈】

一架　棚いっぱい。薔薇の一枝に春は充分の意。
長條　長い枝。「萬朶」は数多の枝。
嫩紅　柔らかな見目好い紅の色。「嫩葉」は若葉、「嫩芽」は若芽、「嫩枝」は若い枝。
匂　至る所。遍し・行き渡っている。

【参考】

1、出典は薔薇を詠じた唐代裴説*の七言絶句。『圓機活法』『詩學大成』『全芳備祖』『古今事文類聚』他所収。

2、類似の詩句には唐代高駢*「山亭夏日」に、
緑樹陰濃夏日長　樓臺倒影入池塘
水精簾動微風起　滿架薔薇一院香

とある。夏の日池に楼台が映り、簾が動いてそよ風を伝え、棚一杯の薔薇の芳香が満ちるとするが、一架・満架、いづれにしても一枝にて春は充分とした意である。禅林では現成底をいう。

3、一枝に春を寓する詩句には「梅花一枝春」「梨花一枝春」などがある。

4、角皿は銹絵陶法である。

＊裴説（生没年不詳）
唐代詩人、桂林の人。天祐三年（九〇六）科挙に及第、状元となる。

＊高駢（八二一―八七）
唐代詩人、字千里、幽州北京西南の人。軍人の家柄であり武術、乗馬に長じ、節度使を歴任、渤海郡王に封ぜられたが、部下によって殺される。詩は五〇首余が残るという。

紅刺青莖巧様粧　連春接夏正芬芳

紅刺青莖巧様粧
乾山省昻（印）尚古・陶隱

連春接夏正芬芳
京兆乾山滾省　於東叡輦寺昻昼之
（印）尚古

連春接夏正芬芳
乾山省昻（印）
乾山・深省

連春接夏正芬芳
乾山省昻（印）
陶隱

【読み下し】
紅刺青莖巧様粧　春に連なり夏に接して正に芬芳

【出典】
紅刺青莖巧様粧　連春接夏正芬芳
新含麗色懸高架　密佈清陰覆小堂
濃似猩猩憑露染　輕如燕燕逐飛翔
幾回白晝看明媚　疑是買臣歸故郷
「百花門・薔薇花」『圓機活法』十九
丘濬詩「百花門・薔薇花」『詩學大成』八

【大意】
紅の花、青い茎には棘があり巧みな粧い、春の終わり夏にかけてまさに香気が充ち満ちる。

【語釈】
紅刺　宝石の名。薔薇の形容。
青莖　青々とした茎。
巧　巧み・手柄・出来上がり。
様　仕様・様子・形。
粧　「妝」の俗字。粧い・容づくる。
連春　春に続き、接夏は夏に接する・近い意。
芬芳　盛んに香る花の香気。

【参考】
1、出典は薔薇を詠じた明代丘濬の七言律詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。類似の詩句には「連春接夏」を詠じ合い、唐代張籍*・劉禹錫による以下のような五言排律がある。
似錦如霞色　連春接夏開　（禹錫詠）
張籍『薔薇花聯句』・裴白劉『佩文斎詠物詩選』
2、薔薇は古代メソポタミア、ペルシャ地方の主要な花であったという。紀元前一二世紀には記録にみられ、上流階級の独占する所、庶民には他の花同様縁のないものであったとされる。
3、日本では仏見笑を牡丹茨、北宋代から観賞花となる月季花・長春花を庚申薔薇と名付けたというが、木香薔薇は刺が多く、長い蔓を棚に絡ませ花の時を楽しむとされる。林野、川岸に自生する野薔薇も艶、香は濃厚という。
4、詩歌は香り高い薔薇の風趣をいうが、乾山焼薔薇図茶碗は色絵陶法である。落款があり、「輦寺」とある。高貴な人物の居寺、ここでは輪王寺宮公寛法親王の寛永寺を表すが、「輦」は「鳳輦」、天子の乗り物、手に提げ腰の辺りで支えて運ぶ腰車をいう。中国では夏王朝に作られたとされ、漢代までは馬や牛に牽かせる乗物、六朝頃から隋代に至り担ぐ輿が優勢、宋代には北宋の士大夫らは「人を以って畜に代えず」と、馬・驢馬に乗り、南宋代には乗らざるはなしというほどに活用されたと伝承する。隠者は多く驢馬に乗り、老いて輿、山人は籃輿（駕籠）に乗ったという。
5、『宣和画譜』によれば五代胡擢「単葉月季花図」、宋代丘慶餘「月季玳瑁図」、徐熙「長春図」、趙昌「錦裳月季図」、易元吉「寫生月季図」などがある。「長春」は永遠なる榮をいう。
6、長方額皿・角皿・長方皿は銹絵、茶碗は色絵陶法である。

乾山焼薔薇図茶碗の意匠と光琳薔薇図画稿（小西家文書）

---

*張籍（七六八？―八三〇）唐代詩人、字文昌。安徽省和縣の人。貞元一五年（七九九）進士に及第、官は秘書郎から国子博士・国子司業に至る。韓愈とともに文学改革運動を推進、文章、詩歌にすぐれ、「韓張」と評された。

海棠

—中国—

海棠は薔薇科の落葉灌木、原産地は中国である。四川省蜀、嘉州に多く、江南産の品種を南海棠という。漢名は海棠梨（海外から渡来した棠）、和名は漢名の音読みから海棠、西洋名はクラブアップルであるが、季節は春を代表し、古くは実海棠、今日では桜花に似た花海棠をいう。実海棠は葉・花ともに春開き、秋になって小さな林檎のような果実（梨果）が黄色に熟し食用となる。花海棠は樹が灰色、節目が多く、枝は紫色を帯びて繁茂、葉は硬く楕円形、赤味を帯びる。四月から五月にかけて淡紅・紅色の五弁六弁の花が開くが、花柄は長く房状に垂れるなど、垂糸海棠とも称される。異名には海紅・名友・睡妃・醉春・花中神仙などがある。

古来、四川省成都では花といえば海棠を表すという（『鶴林玉露』）。花中神仙の異名をもつが、西晋代石崇（二四九—三〇〇）は金谷園に満開の海棠を楽しみ、唐代楊貴妃の美酒に醉う姿を「豈に是れ妃子の醉へるならんや、海棠の睡り未だ足らざる耳」（『太真外傳』）など形容、以後イメージは楊貴妃の逸話が本居、院体画にも描かれた。

—日本—

海棠は室町時代文明年間（一四六九—八七）、中国から実海棠が渡来した（『下学集』）。古書にはなく、江戸時代二葉海棠と呼ばれた品種があり（『倭漢三才図会』）、日本でも栽培は行われたと推定される。一説に花海棠の古名を実海棠としたものもあり、品種にそれほど厳しい区別はなかったものと推測。眠花・南京海棠・花海棠などの異名がある。

日高春睡足

日高春睡足
乾山省旱（印）
（印）陶隱

日高春睡足
乾山省旱（印）
尚古・陶隱

日高くして春睡足る（露冷かにして暁粧遅し）

【出典】
日高春睡足　露冷暁粧遅
「百花門・海棠花」『圓機活法』二十『詩學大成』八

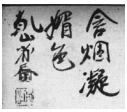
【大意】
はや陽も高く、春夜の睡りも充分だ。

【語釈】
日高　太陽が高く昇る・日中。
春睡　春眠。春は日も永きが故に昼睡りが出る。
暁粧　早朝にする化粧・朝化粧。

【参考】
1、出典は海棠を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』『全芳備祖』他所収。唐代李*郭「長安少年行十首」（『全唐詩』）に「日高春睡足　帖馬賞年華」とある。
2、色は淡く重なる花がみな下に垂れる垂糸海棠の風情を詠じたものである。「妃*子醉態」など、再拝も叶わぬほどに醉いの醒めきらない楊貴妃に、「睡り未だ足らざるのみ」と玄宗皇帝の述べた故事に因るが、海棠を「睡花」（睡れる花）と称することの理由ともなる。
3、湖北省黄州に左遷された蘇軾は、
林深霧暗暁光遅
日暖風軽春睡足
と詠じたが、七言排律には「定恵院の東に寓居す、雑花山に満つ。海棠一株有るも、土人貴きを知らざる也」とあり、海棠は蜀国の花。蘇軾は蜀国出身、文学の主題とされるのは宋代以後のことという。
4、長方皿二枚は銹絵陶法である。

＊李郭（生没年不詳）唐代宰相李程之の子。甘粛省秦安西北の人。元和一〇年（八一八）の進士。『全唐詩』には一八首所収。
＊妃子は楊貴妃（七一九—五六）、唐代玄宗皇帝妃、楊太真である。山西省永楽の人。もと玄宗息寿王妃であったが、天宝四年（七四五）貴妃となり、一族の栄華繁栄をもたらす。従兄楊国忠（？—七五六）は宰相となるが、安禄山（？—七五七）の変により四川に逃れる途次、馬嵬において殺害された。

含烟凝媚色



含烟凝媚色
乾山省旱（印）
尚古・陶隠

烟を含みて媚色を凝らし（雨を帯びて微紅を浥す）
含烟凝媚色　帯雨浥微紅
「百花門・海棠花」『圓機活法』二十
『詩學大成』八

【大意】
艶やかな花が、雨に湿り赤く染まる。

【語釈】
含烟　霞・煙が立ち込める、またその景。
媚色　麗しい姿。艶めかしい色。
凝　奇を好んで心を凝らす・凍るの意から固まるなどの意。
微紅　ほのかな赤色・奥深い紅。

【参考】
1、出典は海棠を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。清代、曹雪芹*の小説『紅楼夢』には「海棠未発」として類似の詩句「煙凝媚色春前萎　霜浥微紅雪後開」がある。
2、『遵生八牋』には「海棠花七種」とあるが、『群芳譜』には四種が掲げられ、貼梗海棠（和名木瓜）・垂糸海棠（花海棠）・西府海棠（実海棠）・木瓜海棠（唐木瓜・花梨）がある。
古来詩・酒・琴を友とした詩人・文人には雅趣あるものとして、花の重みに耐えきれず咲く花海棠の可憐な姿が好まれた。
3、長方皿は銹絵陶法である。

好風傳馥郁

好風馥郁を伝へ（凡卉芬芳を愧ず）
好風傳馥郁
凡卉愧芬芳①
（百花門・海棠花」『圓機活法』二十『詩學大成』八）
好風傳馥郁　凡卉愧芬芳
爛熳雪成瑞　蕤蕤女有薔
（程*金紫・敦厚『海棠譜』『全芳備祖』『廣群芳譜』）

（上右）好風傳馥郁乾峯（印）乾・扶桑乾か（上左）好風傳馥郁乾峯　新宿区市谷田町遺跡出土

快い風が芳しい香りを運び、香気は多くの草花を圧倒するとした意。馥郁は盛んに好い香りの漂うさま。凡卉は草花・大概の草木。芬芳には芳しい香り、立派な功績などの意もある。愧は恥じる・辱める・咎めるの意である。
出典は海棠を詠じた南宋代程*金紫（敦厚）の五言排律。『海棠譜』（宋・陳思撰）『圓機活法』『詩學大成』『全芳備祖』『廣群芳譜』他所収。翻刻には「芳・菲」①の異字がある。
角皿・出土品長方皿ともに乾峯作。長方皿は京都・信楽土、「乾峯」銘、印は判読不能であるが、縁には乾山焼二代猪八様式の外側手描き花、型摺り七宝文様、内側手描き点々文様があり、乾峯銘「峯」の下部を消せば「山」、印も「扶桑乾山」とも読み取れる。

＊曹雪芹（一七二四頃―六三頃）文学者。乾隆帝代の人。名霑、号雪芹、原籍は遼寧省。南京からのち北京に移る。祖父曹寅は康熙帝の乳兄弟とされ富裕であったが、雍正帝代、叔父曹頫が罪を得て以来没落、貧窮の身となるという。古典小説『紅楼夢』を著すが、未完のまま没し、続編は高鶚が執筆する。

＊程*金紫・敦厚（一一六四―一二四二）南宋代の人。字子山、四川省眉山の人。紹興五年（一一三五）の進士、校書郎、起居舎人兼侍講、中書舎人などの官職に就く。詩は『全宋詩』に一六首があるという。

上段角皿の銘と印章
乾峯　印（上）乾山か乾峯か（下）扶桑乾峯か

百合・萱草

—中国—

百合は百合科の多年草鱗茎植物、原産地は中国東北部、北半球北方から亜熱帯地方に自生。漢名は根が重なる、百合病に益する意から百合、和名は風に揺れる意から百合、西洋名のリリーはラテン語名、ギリシャ語に由来する。地中の鱗茎が伸びて直立、葉は互生、細長く、夏に白・黄・淡紅・赤・紫色、斑文様の六弁の単葉・千葉の花を咲かせ、蒜脳藷・強瞿・連珠・紅百合・番山丹などの異名がある。萱草（萱花）は百合に似るが、百合科きすげ属の多年草、野原や堤、溝の辺りに多く生育。中国では奥庭に植えて賞玩、花を眺め、身につけることにより憂いを忘れるなど（『神農本草経』『詩経』）、萱草、忘草の名がある。朝に開き夕べに凋み、単葉・千葉、葉は二列に束生。忘憂・丹棘・宜男草・療愁・鹿剣のほか、夕方に芳香を放ち、夜合花とも呼ばれる。「背」は「北堂」、母屋の北側に位置する婦人の居室を称し、老婦人を母堂・萱堂、萱草には「宜男」の異名、男子出生を願う意があるという。絵画では宋代林椿の画帖に百合図、南宋代は毛益、明代は李在、陳淳など、画題には「宜男百合」「宜男多子」「忠義双全」などがある。

—日本—

渡来時期は不明である。地下の鱗茎が重なり合う所から百合、茎が細く高く伸び大きな花が風に揺れる姿から「ゆる」、朝鮮語の音の転化など諸説があり、『古事記』には山由利、『日本書紀』には百合、『万葉集』には由理・百合などとした和歌が残る。中国の思想を踏襲、憂いを忘れさせる花として衣の紐に結びつけるなど、観賞花は江戸中期になって栽培された。百合は由流・由理、萱草は忘草の異名がある。

春風（風）北堂上　真樂自溶々

春風北堂上　真樂自溶々

乾山省冪（印）乾山・深省

春風（風）北堂の上　真樂自から溶々

春風北堂上　真樂自溶溶

「百草門・萱草」『圓機活法』十八『詩學大成』十一

【大意】北堂の上を吹く春風、真のよろこびに浸るなどの意か。

【語釈】春風　「風」は「風」の古字。春風。和らぎ暖かなことから恩恵の深い喩に用いる。

北堂　主婦の居所。多く士大夫の家は南に面して堂があり、奥中央に室、左右に房、その東房の北半分を北堂と称し主婦の居所であったという。母屋の北側、転じて主婦また母の意にも用いられる。

真樂　真の楽しみ・あるが任の楽しみ。戦国時代列子「仲尼」に以下のようにある。

無樂無知　是眞樂眞知

溶々　水の盛んに流れるさま、心の広くゆったりすること。

【参考】

1、出典は萱草（百合）を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。

2、萱草には、

萱草忘憂草也（『説文解字』）

合歓は忿を蠲き、萱草は憂を忘る（『文選』）

焉得諼草　言樹之背　願言思伯　使我心癉（『詩経』）

など、憂いを忘れさせる「諼草」の異名がある。夫の帰りを待つ妻の憂いを忘れさせる花として植栽、母を萱堂と称すること、その齢を忘れるほどに長寿を祈る意など、孝行の象徴とも考えられた。百合には百種ほどの品種があり、巻丹は鬼百合、秋に六弁、黄味を帯びた紅色に黒い斑点のある花、車百合もこの一種、山丹は姫百合、春に六弁の朱花を咲かせる。

3、角皿は銹絵陶法である。

＊列子（前四五〇頃—前三七五）戦国時代思想家。河南省鄭国の人。『列子』の著者であるが、同書は散逸、不明なことが多く、現行本は晋代の偽書とされる。「無為にして治まる」など黄老思想に裏づけられた哲学・主張を骨子とし、唐代に顧みられたが、注釈書は東晋代張湛による『列子注』が伝えられる。

＊百合は『遵生八牋』に二種あるとい う。「紅紋香淡者」を百合、「紫色三香濃者」を日開夜合者」夜合花とする。

辛夷（木筆花）

―中国―

辛夷は木蓮科の落葉喬木である。中国・朝鮮の温帯暖帯地方、日本に分布。但し中国の辛夷は原産地中国、木蓮科木蓮に属し、一般に木蓮・木蘭と称するものである。日本の辛夷は木蓮科朴木属、漢名辛夷・木筆、和名辛夷・木筆花・拳、西洋名マグノリアはフランス人の植物学者マグノルに因むとされる。季節は春を代表し、樹は高く伸び三、四丈、枝はよく茂り小枝を折ると香気がある。葉は先端が尖った卵形、花は二月頃、葉に先立ち枝頭に一つづつ白色五弁の花をつけるが、蕾の先が鋭く尖り筆の穂先のような形状から木筆花と呼ばれている。柔らかな毛が密生、開花すると蓮花に類似、単葉・千葉、白・淡紅・淡紫色の種類があり、蘭のような芳香を放つ。拳の字を当てることは蕾の形が人の拳に似ていることによるが、葉は花が落ちて後に生育する。異名には木筆・辛雉・侯桃・房木・迎春・望春などがある。

―日本―

日本にいつ渡来したかは不明である。蕾は薬用として鼻病、頭痛の治療に効力があり、花は香料、木材は道具・細工物に活用する。『万葉集』にはみられないが、『延喜式』に蕪夷とあり、各地の山野、栽培も行われており、江戸時代には花を賞美し処々の人家に植えられたという（『倭漢三才図会』）。地方によっては春の農作業の開始を知らせる花、豊作、大漁を予知する花として身近にあったことが伝承し、異名には山蘭・辛雉・拳・山木蓮・種播桜・芋植花などがある。

密葉繁枝

密葉繁枝

銘なし　印なし

密葉繁枝

密葉繁枝

「百花門・木筆花又名辛夷」『圓機活法』十九『詩學大成』八

繁った枝に葉が密集、芳香を放つ。

【語釈】

密葉　葉が密集していること。

繁枝　繁った枝。「辛夷」は木筆花の別名。

【参考】

1、出典は木筆花の大意を詠じた四言句。『圓機活法』『詩學大成』所収。

2、木筆花は文人趣味書『遵生八牋』*に、花は外紫内白く蓮のようであり、蕋は筆のように尖る故に木筆の名があるとし、一名望春、俗名猪心、本可就接玉蘭とある。『長物志』*にも白木蓮を玉蘭、紫色を木筆花と称し、母屋の前に数本を植え、花の時の絶景を楽しむとあるが、古人はこれを辛夷と称したという。

3、玉蘭は、白居易の七言絶句に白木蓮を玉蘭と称し、容色のすぐれた所を取りあげて、かつて「木蓮」を女郎であったとする説がある。「女郎」とは女ながら男子の才を具えた者であり、逸話によれば「木蓮」と称した女子が、父に代わり男装して戦さに臨み無事帰国。『樂府』に「木蓮辞」が残るという。日本においても女郎は吉野太夫など、文事・芸事にすぐれた花街の女性を称したもの。上臈の訛ともいう。

4、角皿は銹絵陶法である。

上図は『芥子園畫傳』の白木蓮図である。讃には白居易の七言律詩があり、玉蘭・白木蓮の逸話を伝える。

一方で白木蓮は身分の高い人のものとした意識もあったという。

＊『遵生八牋』（一九巻）明代高濂（生没年不詳）の著した文人趣味の随筆書である。一六世紀末萬歴一九年（一五九一）の自序があり、養生術を主体として、不老長生、隠者百人の事蹟を記す基礎的文献とされている。

＊『長物志』（一二巻）明代一七世紀前半、文震亨（一五八五―一六四五）の著した文人趣味書である。衣食住、嗜好、書画の嗜みなどを明記、貴公子然とした文人の生き方を伝える。

燕子花

―中国―

燕子花は文目（阿夜米）科の多年草である。中国東北部・朝鮮・北シベリア・日本に分布するが、栽培種もあり、漢名は紫色の花が燕の子に似た所から紫燕（燕子花）、日本では杜若（蔫生薑）・劇草（馬藺）の文字を当てた。「燕子花」は花汁を布に摺りつけ染める掻付花の行事に因むとされ、西洋名はアイリス、季節は夏を代表する。湿地を好み水辺に生育、茎は直立、葉は細長く剣状、根元近くで茎を包む。花は濃紫・白色、中央に黄色の筋のある外の花弁三片は下に垂れるが、内の花弁三片は直立して先が尖る。あやめ・花菖蒲・射干・鳶尾などの種類があり、燕子花・花菖蒲は水中・湿地、あやめは乾いた土に生育する。『宣和画譜』にはみられないが、日本では江戸期光琳など琳派絵師らの得意とした画題であった。

―日本―

燕子花は各地の池沼、水辺に生育する。『万葉集』には大伴家持の着襲狩（燕子花を摺りつけ染めた衣を着て山野に薬草を摘む行事）を詠じた「かきつはた衣に摺りつけ丈夫の　着襲ひ狩する月は来にけり」がある。掻付花の名の由来、濃紫色の染料であったことがわかり、平安時代は『伊勢物語』在原業平東下りの一節に三河国八橋の名所が知られる。室町期には謡曲（杜若）に脚色されたが、江戸時代は和歌・物語・絵画のほか種々の工芸品の文様に取り上げられ、紋章の図案としても意匠化された。異名には杜若・花君・貌花・貌佳草・山茗荷などがある。

釵裙影散歛游塵　稍見溪波金皺皴

釵裙影散歛游塵　稍見溪波金皺皴
月色花香誰主顧　一斎抛擲付吟人

（底）乾山　印なし

釵裙影散歛游塵　稍見溪波金皺皴
月色花香誰主顧　一斎抛擲付吟人

頼山陽「嵐山二首」『山陽詩鈔』七

【語釈】
釵裙　簪と裳。婦人、ここでは燕子花。
歛　のぞむ・あたえる・ものを乞う。
稍　漸く・ややなど少しずつ度を増す意から「稍見」は次第に見えることをいうか。
溪波　谷川のさざ波。燕子花は溪流に生ずることから花弁の彩り、縮れを形容するか。
皺皴　しわ。皮が弛んで細かい筋のできること。畫法の一つで米元章の得意とした描法。
抛擲　抛つ・捨てる・顧みない。

【参考】
1、出典は頼山陽*「嵐山二首」（『山陽詩鈔』・天保三年序）とした内の一首である。他の一首には、
行到嵯峨日已斜（ゆくいたればさがにひはすでにななめなり）
嵐山一半暮煙遮（らんざんいっぱんぼえんさまる）
醉眸未必没分曉（すいぼうまだかならずぶんぎょうをぼっせず）
暗處松杉明處花（くらきところしょうさんはかあるきところはなは）
とあり、嵯峨嵐山の夕景をいうが、頼山陽は文化文政時代の人である。乾山とは凡そ百年余の時代差があり、同詩句を用いることはあり得ない。模倣を証すが、同工房は琳派様式草花図を多く作陶。粘土・顔料・釉薬の相異、乾山銘の「山」の小さな書き方、それに釉薬を施すことにも特色があり、抱一ら江戸における琳派顕彰時代に関わりがあると推定する。
2、『楚辞』「九歌」には以下のようにあり、
采芳洲兮杜若（ほうしゅうのとしやをとり）　将以遺兮下女（まさにいしょにおくらんとす）
杜若は藪茗荷、芳しい香草とされている。陰暦五月五日端午に用いる石菖蒲は強い芳香が悪月とされる五月の疫病を防ぐとしたものである。「菖蒲」は「尚武」、字音が通じ武人に親しまれた。
3、水指は色絵陶法である。

＊頼山陽（一七八一―一八三二）江戸後期儒者。字子成、名襄・久太郎。号山陽・三十六峰外史。父は広島藩儒春水であり、学問、詩文に長じ、江戸、のち京都に移り私塾を設ける。『日本外史』『日本外政記』、自選集『山陽詩鈔』などが残る。

上段水指　乾山銘

蓮（はす）

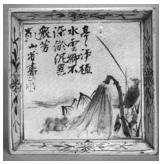
―中国―

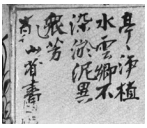
蓮は睡蓮科の多年生水草、原産地はインド・中国。暖帯・熱帯地方の池沼に生育。漢名は蓮、和名は蓮（はちす）（蜂巣）、西洋名はロータスである。根は藕（はすのめ）、茎葉を荷（か）、実を蓮（はす）と呼ぶが、藕芽が生育し地下茎が生じ、茎から節ができる。節からは二茎が生じ、一茎の葉は水面に浮かび浮葉となり、泥中の藕荷（ぐうか）が成長して蓮根（れんこん）となるが、他の一茎は藕荷（ぐうか）といい水上に伸びて立葉となり、葉は水面に浮かぶ大きな水葉と空中葉に分派、六、七月に白・紅・淡紅色の一六、二〇弁の花を咲かせる（芙蕖（ふきょ）・水芙蓉（すいふよう））。朝に開き夕べに凋むが、異名には蓮藕（れんぐう）・水芙蓉・風露良、梵語に因み芬陀利花（ふんだりか）などがある。初夏、江南には咲き乱れていたとされ、花が実を結び、芯からは再び芽が出て造化の転生を止めないなど、釈迦は妙理の喩としたが、汚泥から生じ汚泥に染まらぬ不染の心、水中にあって水下に没せぬ蓮は清く屈せぬ精神の表徴となる。西方浄土は神聖な蓮池と想定、寺の境内には池を造り、極楽浄土の世界を象徴。唐代前は艶なる情、女性の面影、宋代以後に士大夫らの高雅な道理を表徴する意に用いられる。蓮の露は人間の比喩、「一葉観音」「蓮臥観音」などの画題、宋代以後は「茂叔愛蓮図」「四愛図」「四友図」「風月三昆図」ほか、南宋以後に牧谿の「枯蓮葉図」など一つの典型が定まってゆく。

―日本―

『古事記』『万葉集』、『延喜式』には蓮の藕（ぐう）（蓮根）の貢進がある。実は蓮肉（れんにく）・石蓮子（せきれんし）・水芝（すいし）、根は藕・藕糸菜（ぐうしさい）などと称し、薬用・食用、荷葉（かよう）（葉）は包み物や盛り物に活用、芙蕖・芙蓉（ふよう）（花）は不老、心を静める働きがあると役立てられた。異名には荷葉・浮葉（ふよう）・露堪草（ろたんそう）などがある。

亭々浄植水雲郷　不染淤泥異衆芳





亭々浄植水雲郷　不染淤泥異衆芳
乾山省書（印）尚古・陶隠

亭々として浄く植つ水雲の郷
淤泥に染まらず衆芳に異なる
亭亭浄植水雲郷　不染淤泥異衆芳
丘瓊山詩『圓機活法』二十『詩學大成』九

【大意】
泥中に根を張り、花葉を繁らせ、しかも泥に染まることがない。（発展・繁栄の寓意。）

【語釈】
亭々　真っ直ぐに立つ・聳え立つ。
水雲郷　水と雲の美しい里・水辺の村・田舎。
不染　染まらない。ここでは泥に入り泥に染まらない高潔な人格の喩。
淤泥　泥・ぬかるみ。
衆芳　多くの芳しい花・あらゆる花。

【参考】
1、出典は蓮花を詠じた明代丘濬の七言律詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。省略したが、両書には「賞・負」の異字がある。蓮は『寒山詩』に、
　我自観心地（われおのずからこころをみる）　蓮花出淤泥（れんかいでよどをいでず）
とある。淤泥を俗世間、心の平安を得た寒山の心情を蓮の花に喩えるが、仏家では地獄で仏の慈悲を仰ぐことを「火坑中有蓮」という。青蓮は心の清廉に寓意する。蓮花の讃辞は宋代周茂叔の「愛蓮説」が名高く、蓮の君子、菊の隠者、牡丹の富貴に寓する意は多くここに源をおく。
2、白居易は「池上二絶」と題し白蓮の美しさを詠ずるが、白蓮の根は美味、蓮実（秋に丸い実をつける）は紅花が佳く、蓮実採りは女人の仕事。採取の歌や「採蓮曲」が伝わるという。
3、日本では平安期、浄土教の教えもあり、蓮は仏陀の誕生とともに花開き、西方浄土を主宰する阿弥陀如来の坐する蓮台、浄土こそ四色の蓮花の生ずる池であるとして寺院の池中に蓮が植えられた。
4、額皿は銹絵陶法である。

＊インドでは、蓮に関する観念は仏教以前から存在していた。ビィシュヌー神など創造意欲の象徴、世の中の根底にあるものと考えられていたが、仏教と共に仏陀・菩薩をブラマーに擬え蓮華から生まれたとする。

伝牧谿　蓮図部分（根津美術館）

石竹（瞿麦・撫子）

―中国―

石竹は瞿麦科の多年草である。原産地は中国。温帯から暖帯地方に分布、栽培種もある。漢名は瞿麦・石竹、和名は漢名の音読みから石竹、西洋名はダイアンサス、ギリシャ神話に由来するという。瞿麦よりいくらか大きく、季節は夏を代表し、茎は束生直立、葉は対生、先が尖り線形、根元近くで茎を包んで莢となる。薄い緑色に特色があり、初夏に白・淡紅・紅・淡紫色の刻歯のある五弁の花を咲かせる。異名には大蘭・繍竹・巨句麦・青龍鬚・南天竺草などがある。

瞿麦、石竹の区別がいつ明確になったかは不明である。瞿麦は『神農本草経』にも名が残り、早くから薬用として活用、観賞用の栽培は六朝頃からとされているが、唐代には石竹も詩歌、衣裳文様に使われ、宋代『群芳譜』など花譜に現れる。『長物志』には萱草の添え物とある。

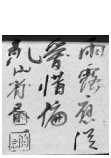
―日本―

日本へは奈良時代末に中国から渡来。瞿麦は秋の七草の一つとされ、『万葉集』には石竹・瞿麦・奈泥之故などの文字がある。古くは厳しい区別はなく、石竹は中国渡来の唐撫子、日本種を倭撫子、川原に自生する河原撫子、四季を通じて咲く撫子を常夏と称し、瞿麦・石竹を分けたことは江戸時代のこととされる（『倭漢三才図会』）。正保・寛文年間（一六四四―七三）に阿蘭陀石竹などの西洋種も加わり、観賞用の栽培、園芸が流行。瞿麦・石竹ともに各々和種・外来種の判別が明確になったという。産地は丹波・紀伊・伊予などがあり、異名には唐撫子・石竹・瞿麦・日暮草、また大和国における無き子を思う親の物語（『莫傳抄』）から片身草の呼名がある。

風霜不放飄零早　雨露應従愛惜偏

風霜不放飄零早　乾山省

昼（印）尚古、陶隠



雨露應従愛惜偏　乾山省

昼（印）尚古、陶隠

【読み下し】

風霜放さず飄零すること早し　雨露従す應し愛惜の偏なるに

【出典】

退公詩酒樂華年　欲取幽芳近綺筵
種玉亂抽青節瘦　刻繪輕點絳華圓
風霜不放飄零早　雨露應従愛惜偏
已向美人衣上綉　更留佳客賦嬋娟

王荊公詩「百花門・石竹花」『圓機活法』二十

【大意】

風霜に従い早々に花は落下。雨露愛惜のままに任すべしの意か。

【語釈】

風霜　風と霜。年月。貞固にして辛苦艱難を恐れぬことをいう。

飄零　木の葉が翻り落ちる・ひらひらと落ちる落魄れることの意もある。

應　当たる・受ける・応える。推量助詞として「まさに云々すべし」の意となる。

従　従う・ほしいまま・合わせる。

愛惜　愛し惜しむ。粗略にしないこと。

【参考】

1、出典は石竹花を詠じた宋代王安石*の七言律詩。『圓機活法』『廣羣芳譜』他所収。

2、撫子は『大和本草』に愛すべきその容色の可憐さから付けられた名とするが、万葉時代の人々も好んで邸の庭植えにして親しんだと伝えられる。

3、長方皿は二枚とも銹絵陶法である。

＊王安石・荊公（一〇二一―八六）宋代政治家・詩人。字介甫、号半山、諡荊国公・王文公、江西省臨川また江寧（江蘇省南京）の人。慶暦二年（一〇四二）進士に及第、神宗代に宰相となり政治改革を断行、反対派には司馬光、歐陽脩、蘇軾らがいた。元豊二年（一〇七九）江蘇省南京の鏡山に隠棲。詩文にすぐれ、唐宋八大家の一人。『臨川先生文集』がある。

（二）竹木・その他：竹・松・檜・桐・柳・楓・茶・筍・葡萄・茄子

竹
―中国―

一、生態

一、竹は禾本科（稲科）の多年生常緑植物の総称である。草でも木でもない特異な植物とされ（『本草綱目』）、薬用・食用、観賞用として栽植、原産地は東南アジア・中国河南。インドほか東洋諸国、北米大陸、日本の南部に多く分布。漢名は竹、和名の竹は朝鮮語に由来するとされ、西洋名はバンブーである。季節は夏を代表し、高さは数㍍に及ぶもの・数十㌢の低いもの、太い・細い、いずれも密生して竹林を為し、茎は地下で横に這うもの、地上に伸びるものの二種に分かれる。地下茎の芽が肥厚したものが筍である。筍は皮を脱皮しながら地上に伸びて竹となるが、竹茎（桿）に節が生じ、節には枝、枝にはさらに節、節に葉が生ずる。枝は二本、葉は三枚と決まりはあるが、茎の中は空洞、形成層のないことから棹は生長しても太くならない。繰り返し起きる地下茎の無性の広がりから繁殖するが、時として（六〇年に一度）有性の繁殖により稲に似た黄緑色の花が咲き実を結んで竹は枯れる。衰弱、筍を生育させる勢いの失せるためとされているが、伝説ではこの実が鳳凰の好む篌である。自然穀とも呼ばれ、小麦のような実であるが、中国では竹米と称し食したという。竹液を絞った竹瀝、筠を削りとった竹筎、竹葉などは薬用となり、地下茎の筍は食用、竹の皮・籜は編んで笠や草履、包み物に用い、竹茎は笛の素材として活用される。

中国には四〇〇種ほど、世界には千種ほどの種類があるという。笹は細竹、小形の竹の総称である。密生群生、棹も細く、竹との相異は皮の脱皮の有無にあり、皮を剝ぐ竹に異なり、笹は多くつけたまま成長するなど、葉には毛があり、花の咲くこともあるという。

二、竹・笹の種類

（一）孟宗竹類：孟宗竹は中国原産。武夷山に多く、春に筍が生まれ食用となる。茶褐色の皮には毛が密生、棹は直立丈も高く、節には二本づつの枝がつく。日本へは元文頃に渡来、筍の代表格となる。

① 紫竹・黒竹は春に生長、秋頃から棹に斑点、やがて紫、黒色になる所からの名称である。江蘇・浙江省に多く生育、色を活かして筆軸、竹垣、飾り窓の装飾などに用いられる。

② 苦竹は和名真竹・河竹。男竹・雄竹と称し、諸処にあり、種類も多い。地下茎は太く長く、筍の皮には紫斑がある。初夏に伸びて棹は二〇㍍の高さに及ぶが、伸縮性の小さなことから最も広く活用され、尺八などの楽器、工芸、細工物、包み物などの材料となる。

③ 湘妃竹・斑竹も真竹の類。金明竹も真竹に属する。淡竹に似るが、葉は大きく疎ら、棹の色が黄味を帯びて溝に緑の筋のある美竹である。江蘇・浙江・福建・江西省に多く、日本では天然記念物に指定されたが、銀明竹は棹が白く溝は緑色、西寧に産し、筍は太く歯切れがよく美味という。

④ 淡竹は白竹ともいう。中国原産。諸処にある。丈は高く棹の上部の一側に溝がある。節の下に白い粉のあるものもあり、葉はやや小

く、筍の皮は紫色、頂きにはびん毛があり、食用とされる。

⑤　呉竹も淡竹の一種、呉国から渡来、大きくならず葉も細かく、庭院などに適するという。

⑥　観音竹も淡竹の類。叢生、枝は柔らかく下垂し葉は細かい。楊柳に似て揺れる姿に雅趣があり、多く観賞用に植栽される。

⑦　布袋竹は節の間の狭い部分が膨らむ所から名付けられた。筍は美味、撓る所から釣り竿などに用いられる。

(二) 蓬莱竹類：蓬莱竹は慈姥竹・慈孝竹ともいう。地下茎がなく株立ち、叢生。蓬莱飾りや古く皮（甘膚）を削って縄を綯い火縄に用いた。

(三) 女竹・雌竹類：女竹は和名の男竹に対して付けられた名である。篠竹の仲間、小形の竹の意である。筍には苦みがあり、生長しても棹の皮は落ちず葉先が垂れる。柔らかなこともあり笛や笊・団扇の骨などになるが、箱根竹と称するものは竹行李を作るのに用いられる。

①　寒山竹は枝の上部の節からさらに枝が分かれ葉が出じ密生する。枝葉ともに上向きに生えることから箒に適し、寒山拾得図の箒を手にした拾得の姿から付けられた名である。

②　根笹は山野、川端、道などに群生する。春に筍を出し低く這うように繁殖する。

(四) その他

①　矢竹は弓矢に作られる所からの名称である。同種には節間が長く葉の深青色の篠竹・長節間竹がある。

②　業平竹は長節間竹に似た枝の短い葉のすらりとした竹である。美しい姿を平安時代の貴公子業平に擬したものである。

③　鳳尾竹は鳳凰竹とも称される。江西省に多く、高さ六尺余り、棹も細く葉も細かくよく繁る。下辺の枝葉が少なく、揺れる姿が鳳凰の尾を揺らす姿に似たところからの名称である。

(五) 笹類

①　馬篠（隈笹）は群生する常緑笹。野生化したものが多く、高さは一メートルほど、枝先には五、七枚の大きな葉をつけるが、冬には葉の周囲に白い隈取りのできることから隈笹の名で呼ばれる。

②　焼葉篠は丈が短く、葉の周囲が焼け焦げたような笹である。

③　児篠も丈は短く、葉は細長く白色の糸筋のあるものをいう。

④　五枚篠は丈短く濃緑色、茎ごとに葉が五枚ずつ生ずる笹である。

⑤　粽笹は山地に多く群生。葉が広く粽などの包物に用いられる。

⑥　阿亀笹は飾り物を吊り下げるために活用した笹とされる。伝承では浅草酉の市でお多福を吊り下げたことが始まりという。

竹は薬用、食用、観賞用、工芸品にも応用されたが、紙の代用として竹簡なども久しく使われ、釣り竿、焚木、悪魔除けの爆竹などにも用いられる。盛り土をして小高い台地に植えること、水を巡らせ橋を架け、竹林中に坐臥すればさながら古人の思いに同じくするなど、なかでも孟宗竹は山居に好く、街中には繁り易く葉も大きく屋敷を囲むに適するという護基筍（護基竹）、粉竹（淡竹）・筋竹（金竹）・斑竹（真竹）・紫竹（黒竹）などを好しとした（『長物志』）。異名は、多く四季を通じ緑を保ち節目正しい姿によるが、君子・処士・湘君・此君・抱節君・吟風・寒玉・勁直・龍孫・七賢などがある。

二、故事・逸話・図像化

青々と繁り、風に臨んでさやさやと鳴る竹は、天高く真っ直ぐに伸び、節目正しく、幹中は空。腹中何物もない君子に擬える。高潔、俗気のない気品、人格の喩えとなるが、詩人文人の親しんだ樹木の一つ。『詩経』においては君子（祖先の霊）を祀る祝物、前漢代下役時代「竹

皮冠」を被っていた劉邦など高祖の地位に就いてからも被り続けた逸話のほか、三国時代呉の孟宗の筍伝説、魏・晋代の七賢人、竹を此君と称し「何ぞ一日も此の君無かるべけんや」と邸に植えた王徽之の故事、唐代には王維の「竹里館」、宋代司馬光の獨樂園「種竹斎」など、古来竹に纏わる伝承は多く残る。白居易も洛陽の履道里におき「池上二絶」を詠じているが、

山僧対棋坐　局上竹陰清
映竹無人見　時聞下子声

と、竹林に碁を打つその音の響く静けさを楽しんだ。竹は高雅、超俗、その情調には不可欠の風流を蔵し、梅・菊・蘭とともに四君子、松・梅とは三友など、なかでも絵画では「つけたて法」による墨一色の墨竹・墨梅・墨菊・墨蘭などは高踏的、独自の風趣を留めてゆく。

竹を描くことは六朝時代に始まった。が、画題となるのは唐代のことであり、『竹譜詳録』には、王右丞（王維）、蕭協律（蕭悦）・僧休夢・李頗、宋代には黄筌父子・崔白兄弟・呉元瑜などの名が残る（『芥子園画傳』）。初期は鉤勒（輪郭線を用いること）、填彩技法（輪郭線の内部に色を塗ること）、白描による竹図であるが、没骨法、水墨による竹図は昭覚寺の休夢が古く（『益州名画録』）、宋代文同（与可・一〇一八―七九）が現れ、奥義、その画訣を「高松疏月を漏らし、落影地に画けるが如し」とした。一枝を取り月夜にその影を素壁に照らせばその真形を得ると評されたが（郭熙）、竹図が世に知られるようになったのは文同画に蘇軾が題祓を添えて以来のことという。熟視、胸中に成る竹を得てはじめて筆を執るが、墨竹画は書の筆法にも似る。以後文人の嗜み、精神の表徴として広く波及。「与可畫竹図」「蘇軾畫竹図」のほか、詩人杜甫が竹をみて馬上に作詩する姿を描く「子美看雪竹図」などが画題となる。

『宣和画譜』には、唐代：辺鸞「花竹禽石図」、蕭悦「風竹図」「筍竹図」、五代：郭乾暉「竹石百勞図」「柘竹雑禽図」「竹木鶏鷹図」・黄筌「竹石鳩子図」「筍竹碧青図」「雪竹文獣図」「竹鶴図」、宋代：黄居寀「竹禽図」「竹鶴図」「雀竹図」・徐熙「雪竹図」などがある。

南宋代には牧谿の描く「竹雀図」「竹鳩図」、揚補之の「墨竹図」が伝世する。竹は竹林、竹垣、編戸など、閑寂な環境を描き出す。

―日本―

中国から渡来、が、詳しい時期については不明である。本州各地、九州、沖縄の山麓、河原に生育。早くから栽植も行われ、地下茎の芽である筍は食用として貴ばれた。小竹・細竹は篠と称し、竹の聚りを篁というが、『古事記』には「竹葉」、『万葉集』には、

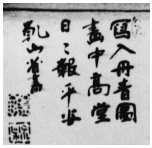
我がやどのい笹群竹吹く風の
音のかそけきこの夕べかも　（大伴家持）

と、葉ずれの音の寂しい夕暮れ、

烏梅の花散らまく惜しみ我が園の
竹の林に鶯鳴くも　（少監阿氏奥島）

と梅と鶯を配した歌もあり、多くは枕詞、祭事、祭具、神霊の宿りを示す意などに用いられた。神事、薬用、食用、庭園の景や建築資材、楽器、日用品の素材としても活用されたが、平安時代は日本最古の物語『竹取物語』が著され、室町期には文学、謡曲などの芸能、茶の湯道具、数寄屋建築、造園用具の素材となり、竹葉には防腐作用のあることから料理の盛り物、包み物、容器などに応用された。木とも草とも分類し難く、日本では千尋草・川玉草・石母草・角柱・吾友などの異名がある。

寫入丹青圖畫中　高堂日々報平安



寫入丹青圖畫中　高堂日々報平安
乾山省書
(印)乾山(逆)尚古・陶隠
寂明

寫入丹清圖畫中　高堂日々報平安
乾山陶隠書　印なし
法橋光琳(花押「寿」型
(裏)家兄法橋光琳所畫不可渉疑
路者也　乾山深省畫之(花押「巾着」型

光琳　竹図画稿(小西家文書)

【読み下し】
寫し入る丹青(清)圖(図)畫の中(裏)①高堂日々平安を報ず

【出典】
一團清氣逼衣冠　老嫩風晴五萬竿
幹長付隨龍化去　實垂惟待鳳來喰
春添稚子斑衣濕　暮倚佳人翠袖寒
寫入丹青圖畫裏　高堂日日報平安
夏桂洲(かけいしゅう)詩「畫畫門・畫竹」『圓機活法』十八
夏桂洲詩「圖畫門・畫竹」『詩學大成』二十

【大意】
竹を描く。これで高堂は日々平安。何事もない。「竹報平安」は、魔除け・吉祥・家書平安(便り)などの比喩。

【語釈】
丹青　赤・青など絵具の顔料になる石。転じて絵具・彩色。「丹青子」は畫工をいう。
圖畫　絵画・描き写す。宋代には圖畫を司る役所圖畫局があったという。
高堂　立派な家・広間・表座敷。人家の敬称。
平安　穏やかで無事なこと・安穏。竹は風雨にあっても枝は撓むが折れることはなく「平安」の寓意。爆竹など大きな音をたてて邪気を除く悪魔除けの意もある。

【参考】
1、出典は畫竹を詠じた明代夏桂洲*の七言律詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。乾山焼には「丹青・丹清」「中・裏」①の異字がある。
2、禅林では「真性」は絵に描くことはできないとして『十牛図』に「丹青畫(ちょうがかく)不成(ふせいず)」とある。絵画では水墨竹、宋代士大夫文*同を名手とする。
3、角皿は二枚とも銹絵陶法である。

竹図『名公扇譜』(張白雲選)(『八種画譜』中)

竹図蘇軾筆意『唐詩畫譜』(『八種画譜』中)

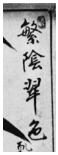
＊『八種画譜』は、中国明代、万暦から天啓年間(一五七三―一六二七)に版行された画譜の通称である。命名は日本において為されたものと推測。画譜：『唐詩五言畫譜』『唐詩六言畫譜』『唐詩七言畫譜』『古今畫譜』『名公扇譜』『梅竹蘭菊四譜』『木本花鳥譜』『草木花詩譜』以上八種、画題：山水・人物・走獣・花鳥・花卉図、讃：五言・六言・七言中の二句・四句、書体：大字・細字、楷書・行書・草書・篆書・隷書、形式は帖・扇面などに纏めたものである。画題、様式ともに明代末期の特徴を示すとされ、日本へは江戸期に渡来。寛文一二年(一六七二)初の和刻本、宝永七年(一七一〇)重版が行われるなど、元禄五年(一六九二)刊『公益書籍目録』に初めて『八種画譜』の名が現れるという。一七世紀、日本では粉本とする、本朝画譜作成の刺激とするなど、明版、和刻本ともに広く活用。正徳二年(一七一二)序、享保六年林守篤著『畫筌』、享保二〇年(一七三五)橘守國著『扶桑画譜』などが刊行された。同時に中国からは『芥子園畫傳』(五巻・康熙四〇年間に刊行)が渡来、理論、画法・描法の図解、解説があり、珍重された。

＊夏桂洲(かけいしゅう)・夏言(げんげん)(一四八二―一五四八)字公謹(こうきん)、諡文愍(ぶんびん)。江西省貴溪縣の人。明代正徳年間(一五〇六―二一)の進士。六卿、大師となるが、意に添わず退官。詩集『桂州集』を著す。

＊文同(ぶんどう)(一〇一八―七九)宋代官僚・詩人。字与可(よかん)、号石室(せきしつ)・笑笑先生。四川省永泰の人。皇佑年間(一〇四九―五四)の進士。地方官を歴任、詩文書画に長じ、任地名から文湖州とも呼ばれ、『丹淵集』を残す。蘇軾は従兄弟、その画法は「竹を描くに必ず先づ成竹を胸中に得て、筆を執りて熟視する」として「成竹」は以後事前の心構えを表す語となる。竹葉の表裏を墨の濃淡で表現、写生、が、写意を重んじ、画風は「湖州竹派」と称された。

＊畫は「畫」の本字、「画」は略字である。乾山は屡々俗字「畫」を用い、やきもの・絵画にはさらに書・畫の略字・俗字「昼」「昼」を用いている。

繁陰翠色



繁陰翠色
乾山深省書（印）乾山（逆）尚古・陶隠
法橋光琳画
繁陰翠色
繁陰翠色
「竹木門・竹」『圓機活法』二十二
『詩學大成』十一

【大意】
竹叢が青々とした涼しい陰をつくる。

【語釈】
繁陰　茂陰。繁った木の陰。竹陰。
翠色　青々とした緑色、竹の色をいう。

【参考】
1、出典は竹の大意を詠じた四言句。『圓機活法』『詩學大成』所収。直立した竹幹、爽やかな葉の繁りをいうが、文人らが涼陰に集い清談に花を咲かせる。繁陰は竹の影、翠色は竹の色。
2、唐代王維*は陝西省藍田縣に輞川荘を営み、竹林には「竹里館」と称する別棟を設けていた。「自適」と題した五言絶句には、

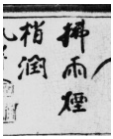
獨坐幽篁裏　弾琴復長嘯
深林人不知　明月來相照

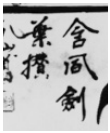
とある。「竹里館」にあって独り坐し、琴を弾じ詩を口ずさむが、誰も知らず、ただ明月だけが訪れるなど、詩中の画、画中の詩と評した蘇軾の言が彷彿とする。竹を好み蘇軾も、食する肉は無くとも、竹は住まいに不可欠とし、竹がなければ俗となり、俗人は医者でも治せぬと喝破した。
3、王維は水墨画の先駆者、南宗画の祖とされるが、輞川荘は長安東南、秦嶺山脈東段北麓にある別荘である。則天武后代宋之問（六五六？―七一二）の「藍田山荘」の跡とされ、一帯を輞川と称したという。四四歳から一二年間を費やしたが、詩書画を楽しみ、信仰（仏教）を深め、「輞川図巻」を残すなど、のちに蘇軾は「味摩詰之詩　詩中有画　観摩詰之画　画中有詩」と評価した。
4、角皿は銹絵陶法である。

『八種画譜』竹里館図

＊王維（七〇一？―六一）唐代詩人。字摩詰、山西省永済、祖籍は太原。四四歳、陝西省終南山麓藍田の輞川荘に脱俗閑雅な暮らしを送る。

拂雨煙梢潤　含凧（風）剣葉攢





拂雨煙梢潤　乾山省
昼（印）尚古・陶隠
含凧剣葉攢　乾山省
昼（印）尚古・陶隠

【読み下し】
雨を拂いて煙（烟）梢潤い　凧（風）を含んで剣葉攢る

【出典】
拂雨烟梢潤　含凧剣葉攢　①
「竹木門・竹」『詩學大成』十一『圓機活法』二十二

【大意】
雨を払う竹の梢がもやにけぶり、群がる剣の如き鋭い葉が風に揺れる。

【語釈】
煙梢　靄にけぶる梢・霞み、「煙」は「烟」に同じ。「煙葉」は葉の繁るさまをいう。
潤　潤う・湿り気を帯びる。
含凧　風を孕む・風を含む。
剣葉　剣のような形をした鋭い葉。
攢　「攢」の俗字。集まる・集める。ここでは竹葉の群がり繁る様子。「篁」は竹の集まり。

【参考】
1、出典は竹を詠じた五言詩。『詩學大成』『圓機活法』所収。両書には「雨・水」「攢・寒」①の異字がある。
2、雨後の清々しい竹の風情をいうが、「雨煙」は雨に漂う靄、「風煙」は風に漂う靄。「煙雨」は靄のようにけぶる春雨をいう。「銀梢」は雪の積もった竹、「含風」は「含芬」「含露」などと同じく風・香・露などを帯びることをいう。
3、南北朝代斉・梁の虞子陽の五言古詩には、

含風自颯颯　負雪亦猗猗

とある。
4、長方皿は二枚とも銹絵陶法である。

含凧剣葉攢　乾山省昼
印なし

＊虞子陽・虞羲（生没年不詳）南朝斉・梁の詩人。字子陽・士光、浙江省余姚の人。『文選』所録、「詠雀將軍北伐」はよく知られる。

雨洗娟々浄　風吹細々香

雨洗娟々浄
風吹細々香
乾山陶隠深省
書（印）乾山（逆）
尚古・陶隠
光琳（花押）「寿」

雨洗娟々浄
乾山省昏（印）
尚古・陶隠

雨洗娟々浄
乾山省昏（印）
乾山・深省

風吹細々香
乾山省昏（印）
乾山・深省

雨洗娟々浄
乾山省昏（印）
乾山・深省

風吹細々香
乾山省昏（印・裏）乾山・深省

【読み下し】
雨洗うて娟々として浄（清）く　風吹いて細々として香し

【出典】
緑竹半含籜　新梢纔出牆　色侵書帙晩
陰過酒樽涼　雨洗娟娟浄　風吹細細香
但令無翦伐　會見拂雲長
杜詩云「竹木門・新竹」『圓機活法』二十二
杜詩「竹木門・新竹」『詩學大成』十一
杜甫・少陵「嚴鄭公宅同詠竹得香字」
『杜詩註解・五言律　七『佩文斎詠物詩選』下
『廣群芳譜』八十四　『全芳備祖』『禅林語句鈔』

【大意】
竹の葉が雨に洗われ清々しい。風に吹かれてさやさやと鳴る。

【語釈】
娟々　清く美しい、憂い哀しむさまにもいう。
細々　軽やか・細々としたさま。

【参考】
1、出典は竹を詠じた唐代杜甫の「嚴鄭公宅同詠竹得香字」と題した五言律詩。『圓機活法』『詩學大成』『杜詩注解』『全芳備祖』『廣群芳譜』『佩文斎詠物詩選』他所収。類似の詩句には「梅」、『古今地書集成』「卜筭子」宋代向子諲の五言詩がある。
2、雨に洗われ風に吹かれて爽やかな竹の風情をいうが、洗うものは俗世間の汚れの意である。
宋代文素編『如淨和尚語録』にも「雨洗娟娟浄　風吹細細香」とある。如淨は天童山景徳寺の僧、が、詳しいことは不明である。
3、角皿・額皿・長方皿は錆絵陶法、火入は錆絵染付である。

同讃作品と出土陶片

雨洗娟々浄
風吹細々香
乾山深省昏
（印）尚古、
陶隠

雨洗娟々浄
風吹細々香
乾山深省書
（印）尚古・
陶隠

（雨）洗（細々）浄
印不明　新宿区
白銀町遺跡出土

含風自颯々

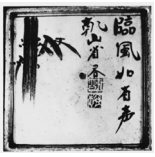
含風自颯々
乾山省昏（印）乾山・深省
風を含んで自（おのず）から颯々（さつさつ）
（雪に負（そむ）いて亦猗猗）
含風自颯颯　負雪亦猗猗
「竹木門・竹」『圓機活法』二十二

出典は竹を詠じた南朝斉虞羲の五言古詩「見江邊竹」。『圓機活法』『廣群芳譜』『全芳備祖』他所収。竹枝が揺れ、さやさやと葉が音をたてる意。「颯々」はさっと吹く風の形容。「猗猗」美しく盛んな様子をいうが、『詩経』には「瞻彼淇奥、緑竹猗猗」とあり、緑竹は青茅と木賊、青々と豊かに生い茂るさまを「猗猗」という。「猗」はああ・美しいの意である。
長方額皿は錆絵陶法である。

＊杜甫（七一二―七〇）唐代詩人。字子美、湖北省襄陽の人。長安の郊外杜陵西に住し玄宗代検校工部員外郎となるが、安禄山の変に遭遇、成都に移る。叙事詩、律詩に長じ、李白の「詩仙」に対し「詩聖」と仰がれる。
＊向子諲（一〇八五―一一五一）字伯恭。号鄉林居士。江西省清江の人。宋代元符三年（一一〇〇）「以恩補承寿郎」、致仕して臨江に閑居、『鄉林集』を著す。
＊文素・范質（九一一―六四）宋代政治家。字文素。長興四年（九三三）進士に及第、五代郭威に仕え蕭国公に封ぜられたが、宋の初代皇帝太祖（趙匡胤）を補佐、魯国公に封ぜられる。『范魯公集』が残る。

雨洗娟々浄　風吹細々香　乾山深省書（冠帽印）
乾山、（印）尚古・陶隠
光琳（花押）「寿」型
雨洗娟々浄　印不明

臨風如有声



臨風如有声
乾山省㫖（印）
乾山・深省

臨風如有声
乾山省㫖
印不読

（日に向かいて本と影無し）風に臨みて声あるが如し
向日本無影　臨風如有聲
「書畫門・畫竹」『圓機活法』十八『詩學大成』二十

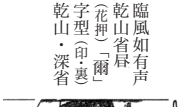
【出典】
疊葉興高節　俱従毫末生　流傳千古譽
研鍊十年情　向月本無影　臨風疑有聲　①
吾家釣臺畔　似此両三莖
方干・玄英先生「方著作畫竹」『廣群芳譜』『全唐詩』

【大意】
陽に向かい影もなく、風にさやさやと鳴るのみ。

【語釈】
向日　太陽に向かう。「向月」は月に向かう。
本　もと・元より。その因って起こる所。
臨風　風を受けて。「風竹」は竹葉が風に吹かれ、「竹泉」は竹声、泉に似るとし、若竹は風吹けども「龍吟」は不聞という。

【参考】
1、出典は畫竹を詠じた唐代方干の「方著作畫竹」と題した五言律詩。『圓機活法』『詩學大成』『廣群芳譜』『全唐詩』他所収。翻刻には「向日・向月」「如・疑」①の異字がある。
2、画中の竹の風韻を詠じたもの。三昧を表し、禅林では月を見る時は月のみ、声を聴く時は声のみに心を向けることを「なりきる」という。「竹の声」は六朝時代、斉の謝朓*の五言古詩に「月光疏已密　風聲起復垂」とある。
3、角皿・長方皿は銹絵、茶碗は楽焼である。

臨風如有声
乾山省㫖
（花押）「爾」
字型（印・裏）
乾山・深省

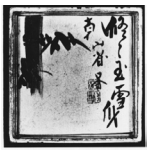


臨風（如）有（声）銘なし
文京区東京大学構内遺跡出土

＊謝朓（四六四―九九）南朝斉の詩人。字玄暉、河南省陳郡陽夏の人。山水詩の先駆者謝霊運とは同族である。一九歳で出仕、尚書史部郎となったが、始安王擁立に同意せず、誣告され、獄中に没するという。山水詩に長じ、竟陵王の文壇に加わり竟陵八友の一人、『謝宣城集』が残る。

凛々氷霜節　修々玉雪身

凛々氷霜節
乾山省㫖（印）
乾山



修々玉雪身
乾山省㫖（印）
尚古・陶隠

凛々たり氷霜の節　修々たり玉雪の身
凛凛氷霜節　修修玉雪身　①
『詩學大成』十一『圓機活法』二十二

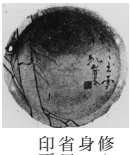
【出典】
凛凛冰霜節　脩脩玉雪身　便無文興可
自有月傳神
楊萬里・誠斎先生『全芳備祖』「竹」『廣群芳譜』

【大意】
寒気にも色を変えない強さ、雪中にも屹然として天高く伸びる竹の清しさをいう。

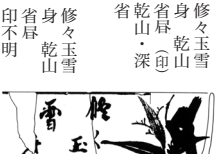
【語釈】
凛々　凛然。寒さが凍み入る・心が引き締まる。
氷霜　氷と霜。厳しい寒気の喩。「氷」は「冰」の俗字。「節」は礼節・節操・節度。
修々　整っている様子。風の音の形容や操志の堅固なることの喩。「修竹」は長い竹。
玉雪　雪。潔白、物の清らかな喩。竹の潔さをいう。

【参考】
1、出典は竹を詠じた南宋代楊萬里*の五言絶句。『詩學大成』『圓機活法』『全芳備祖』『廣群芳譜』他所収。翻刻には「修修・挺挺」①の異字がある。
2、向付・角皿・額皿・輪花皿は銹絵陶法である。同讃作品と出土陶片

修々玉雪身　乾山省㫖（印）
乾山・深省



修々玉雪身　乾山省㫖
印不明



修々玉雪（身）
新宿区尾張藩上屋敷跡出土

＊楊萬里（一二七―二〇六）南宋代詩人。字廷秀、号誠斎、諡文節、江西省吉安市の人。紹興二四年（一一五四）二八歳で進士に及第、范成大とは同期である。性剛直、ために屢々左遷、のち中央に戻り秘書監となるが、正心誠意の学に努め書斎を「誠斎」と名付けたという。自然を師として清新、幽玄、風趣豊かな詩句が多く、晩年は郷里に隠棲、『誠斎集』を残す。

勁直忠臣節　孤高烈士心

勁直忠臣節
乾山省㬰（印）
乾山・深省

乾山省㬰（印）乾山

孤高烈士心
乾山省㬰（印）
乾山

乾山省（花押）「爾」字型

【読み下し】
勁直忠臣の節　孤高烈士の心

【出典】
勁直忠臣節　孤高烈士心
「竹木門・竹」『圓機活法』二十二『詩學大成』十一

【大意】
天空に屹然として立ち、礼節を知る節を誇る。気高いことは節操を守る烈士のようだ。

【語釈】
勁直　強く正しい。
忠臣　真心を尽くす家臣、忠誠の臣、慎み深い。
節　竹の節・礼節・節度。限りあることを教える。
孤高　並ぶもののない高さ、精神の気高さ。
烈士　利に動じず威に屈しない節義を守る男子。烈子の起こりは烈女にあったという。

【参考】
1、出典は竹を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。宋代女流詩人朱淑眞（五〇余歳没）の五言絶句「直竹」（『新注朱淑眞断腸詩集』）には、

勁直忠臣節　孤高烈女心
四時同一色　霜雪不能侵

とあり、烈士に変わり烈女とある。
2、天に向かって屹然と挺立、竹は茎中空にして、土中にある内より節あるとし、孤高な精神を貴ぶ君子・文人の心に叶うとする。
3、絵画では竹に節あることを人の節操あることに喩えて「修筠抱節」、風に吹かれて撓む強さを「清風高節」と題して描かれる。
4、角皿・向付・鉢目皿は銹絵、丸皿は色絵陶法である。

＊朱淑眞（生没年不詳）
北宋末南宋初期の女流詩人。号幽棲、安徽省の人。浙江省銭塘に生活したと伝承するが、詩集は南宋代魏仲恭が編集、詳しい伝記は知られておらず、市井にあって本志を得ぬまま才気を秘め胸中の思いを詩歌に託した女性とされている。

勁直忠臣節　乾峯
印不明

堅剛君子節　冷淡古人風

堅剛君子節
冷淡古人風
乾山深省毫（印）
尚古・陶隠

堅剛君子節
乾山省㬰（印）
乾山・深省

（雪の裏）堅剛君子の節（花の前）
冷淡古人の風

【出典】
堅剛君子節　冷淡古人風
「竹木門・竹」『圓機活法』二十二『詩學大成』十一
雪裏堅剛君子節　花前冷淡古人風　①
「竹木門・竹」『圓機活法』二十二『詩學大成』十一

【大意】
（雪中）堅く力強い姿は君子の節操、（花の前）さらりとして執着のないさまは古人の風格。雪は困難、花は人心を誘う華やかな中、自らを失うことのない君子をいう。

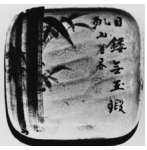
【語釈】
堅剛　強くて堅い。
君子　徳の高い立派な人・品位ある人・人格者。かつては祖霊神を意味し、竹のほか梅・菊・蘭・蓮も君子の仲間である。
冷淡　あっさりして物事に拘りのないこと。
古人　昔の人・故人。「風」は風格・気質・姿。「古人風」は竹に花の艶なく冷淡な趣き故にとされている。

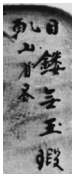
【参考】
1、出典は竹を詠じた五言・七言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。やきものでは「雪裏・花前」①が省かれている。
2、類似の詩句には明代高遜志の五言絶句「卷石不盈尺　孤竹不成林　惟有歳寒節　乃知君子心」（『題畫詩類』）があり、竹に節のあることを逸人の節操あることに喩え、中空にして節、葉軽くして君子の風とする。竹の実は古来鳳凰の食とされ、「歳寒節」は竹を評する成語である。
3、角皿は各々色絵・銹絵陶法であるが、絵画にも同讃「冷淡古人風」の詩句がある。

絵画　竹図
「冷淡古人風」

竹子節　銘なし　新宿区市谷甲良町遺跡出土

日（月）鏤無玉瑕





日鏤無玉瑕
乾山省昼（印）乾山・深省か

日（月）は鏤ばむ瑕無き玉
（風は弾ず調べざる琴）

月鏤無瑕玉　風弾不調琴　①
「竹木門・竹」『圓機活法』二十二『詩學大成』十一

【大意】
歳月は美しい竹を育て、（琴がなくとも風がやさしい音を奏でるの意か。）

【語釈】
鏤　刻む・鏤める。鐘飾り。
玉瑕　玉の瑕。「玉」は荀の意にもなり、一点の傷もなく成長した美しい竹を表すか。
「瑕」は傷・誤りなどの意。
弾　奏でる・かき鳴らす。
調　調べ・音色・節。「調琴」は琴を演奏することをいう。

【参考】
1、出典は竹を詠じた五言詩句。『圓機活法』『詩學大成』所収。乾山焼とは「日・月」①の異字がある。
2、中国でも、やきもの、文房具に同一詩句を見出すが、広く一般に親しまれた詩句であったことがわかる。
3、鉢目皿は銹絵陶法である。

唯（惟）有歳寒姿

唯有歳寒姿
乾山省昼（印）尚古・陶隠

（能（欲）く冬を凌ぐ性を識る）
唯（惟）だ歳寒の姿（知）有り

能識凌冬性　惟有歳寒姿
（虞世南）「竹木門・竹」『圓機活法』二十二

【大意】
寒気に耐える本性は、艱難にも節操ある姿を保つ。

【語釈】
能　よく・よくすと読み副詞・動詞の活用。できるの意。「凌」は凌ぐ・超える・上回る。
歳寒　寒い季節、老年。逆境・乱世など艱難に遭遇してもめげないこと。「歳寒三友」は冬期に友とするべき松・竹・梅をいう。友として賞すべきは山水・松竹・琴酒。

【参考】
出典は竹を詠じた虞世南*の五言律詩「欲識凌冬性　唯有歳寒知」。『圓機活法』所収。「欲・能」「知・姿」、やきものとは「唯・惟」の異字がある。霜雪に耐える竹の裏*さ力強さ、品格ある君子、文人のあるべき姿の喩。丸皿は色絵陶法である。

□□玉削成

□□玉削成　乾山省昼
（花押）「爾」字型

翠嬝青枝玉削成　脩然誰識此君情

詩句全体が不明、出典には、金代李*獻能の律詩には、

涓涓粉節霜勾出　矗矗烟梢玉削成

（『丹陽観竹宮中移賜』『廣群芳譜』八十五）とある。

風來弄好音

風來弄好音　京兆紫翠八十歳寫
乾山（月の上りて清影を分かち）風來たりて好音を弄す

月上分清影　風來弄好音
『圓機活法』二十二『詩學大成』十一

出典は竹を詠じた宋代王*禹偁の五言律詩「黄州新築小竹樓記」。『圓機活法』『詩學大成』所収。『槐記』（山科道安）にもあるが、明代方登の五言絶句「秋晩」には「月出不逢人　風来弄修竹」とある。折れることなく揺らぎつつ葉の折々音あることを「風竹」というが、「竹葉」は酒の異名、古くは酒を醸し出す折り竹葉を入れ清潔に見せる所からの意とされる。「風來」は気まぐれに吹く風。

風來弄
好音
乾山省
昼（印）
尚古

絵画
竹図
「風來弄
好音」

＊李獻能（一一九〇―一二三二）金代の官僚。字欽叔、山西省永済の人。貞祐三年（一二一五）の進士、翰林院に一〇年、修撰となるが、金の哀宗代（一二二三―三三）蒙古との戦いに陝州に逃れ権左右司郎中、命を終わる。

＊虞世南（五五八―六三八）唐代の書家。字伯施、浙江省余姚*縣の人。王羲之七世の孫智永に筆法を学び、初唐の書風形成に力を尽くすが、楷書（眞書）にすぐれ、書風は謹厳鷹揚、文章にも長じ『北堂書鈔』の編者である。

＊王禹偁（九五四―一〇〇〇）宋代詩人。字元之、山東省鉅野の人。興国八年（九八六）の進士。翰林学士、知制誥を歴任、が、屡々左遷、社会の矛盾と人々の苦難を多く詠じた。『小畜集』がある。

松

―中国―

一、生態

一、松は松科の常緑針葉喬木の総称である。中国・東アジア・南千島・サハリン・日本に分布。北半球には九〇余種の松樹があるという。常緑・落葉針葉樹に分けられるが、漢名は群木の長であることから「公」松、和名は長寿、行く末を待つなどの意味から松、西洋名はパインである。季節は春を代表し、幹は黒・赤・灰褐色、屈曲、節が多くごつごつとして樹皮には鱗状の割れ目があり、枝の先には二針三針五針の束生した葉をつける。数年して短枝ごと落葉するものもあり、春に花茎が伸び花が咲き、秋から翌春に実を結ぶが、松毬（松ぼっくり）は熟成して種子を飛ばす。大別して針葉二本の黒松・赤松、五本の五葉松・朝鮮松（海松）・這松などに分派、松の樹液が松脂である。日に熔け土中に落ちて千年が経つと琥珀となり、老松の余気が根元に固まり伏苓・松腴（猿の腰掛科の菌核）になるが、湿気を悪むなど、植栽は立春、秋分後が適するという。雌雄があり、雌木は色も淡く幹も小さく、葉もいくらか柔らかいとし、異名には衆（粢）・五大夫・青玉・積翠・龍髯などがある。

二、松の種類

（一）黒松は海岸近くに生育する。自生、栽植、樹皮は灰黒色、亀裂が生じて剥げ落ちるが、葉は二針の束生、花は晩春、実は翌年の秋に熟す。荒々しい所から雄松の名があり、観賞樹・盆栽のほか、防風・防潮・防砂林として活用、建築用材、紙材、燃料などに用いられる。

（二）赤松は山野に生育、北方では海岸にもあるという。自生、栽植、芽の鱗片、樹皮の赤い所からの名称であるが、黒松の雄松に対して雌松と称し、樹皮は亀裂が生じて薄く剥がれ、葉は二針の束生、花は晩春、実は翌秋に熟す。建築用材、紙材、やきものの燃料などに用いられる。

（三）五葉松は別名姫子松、山地に生えるが、庭木、盆栽としても栽培される。樹皮の亀裂は密、葉は五針の束生、軟らかく、花は晩春、文理が細かく密なことから加工も容易、家具や建築用材に使われる。

（四）朝鮮松は亜高山帯に生育、朝鮮に多いことからの名称という。栽植もあり、高木、樹皮は薄く灰褐色、葉は五針の束生、花は春、実は食用になる。漢名は海松である。

（五）這松は高山帯に生育。低木、地を這うように伸び群生するが、樹皮は黒褐色、枝は赤褐色、葉は五針の束生、花は初夏に開き、実は翌秋に熟すという。

（六）落葉松は亜高山帯の乾いた土地を好むという。霜後落葉するが、葉は淡緑色の五針七針、細く軟質、花は新葉とともに春に開く。建築用材、紙材、樹脂は油、樹皮は染料などに利用される。

二、故事・逸話・図像化

「松」の文字は黄帝代蒼頡が創したという。「松は百木の長にして猶公のごとく、故に字は公に随う」（『群芳譜』）とあり、群木の長「公」、古字「衆」の略字、秦始皇帝泰山狩巡中折からの暴風雨を松樹の下に禦いだことから呼称爵位「五大夫」、唐・宋代には杭州西湖の北側に九里に及ぶ松並木のあったことが伝えられる。常緑、松・柏は子孫繁栄の象徴である。古来松は霜雪にあって色を変えず、変化に対して己れの節操を貫く貞木。「歳寒」として孔子の言には以下のようにある。

子曰歳寒　然後知松柏之後凋也

群木凋落してのち、松・柏は独り残る。試練に耐え抜き、己れを保つ

が、順境から逆境に至りはじめて人は小人、君子の別がわかるとする（『論語』）。寒い時候は乱れた世に擬え、松・柏は君子の節操、高潔、閑雅な人格を表徴するが、『史記』には百木の長、『神農本草経』には松脂の薬効「軽身延年」とある。四時常青、不老長寿の象徴であり、南朝梁の陶弘景（四五六―五三六）は庭院に多くの松を植えその松濤を欣然として聴いたという。六朝以来詩人・文人に愛されたが、松は雅の一興、『長物志』にも最も高貴な樹木とある。

絵画は唐代寺観の壁画に始まり、山水画の一部であったが、會昌年間（八四一―四七）長安の寺院内南壁に松樹、北堂内西壁には山水が描かれたという（『歴代名画記』）。単独の松樹・石・岩など、画題となるのは水墨画の流行に随うが、五代頃には墨梅・墨竹・墨松の「三友図」が生まれ、松竹梅蘭を描き「四友図」、松竹梅菊石を配し「五清図」、秦始皇帝の故事に因み「五大夫」、高士を添えて「松下高士」「松下観月」、松鶴を描き「一品大夫」、水仙を群生させ「群仙拱壽」、南天とともに描いて「蒼松壽古」、薔薇を配し「不老長春」、牡丹を描いて「不老富貴」、その他松原・松林・浜松図、雪松図、日本では和歌や謡曲を典拠として「老松」「子日遊」「雅松」図などがある。

―日本―

松は久しきを保ち大樹となる「不老長寿」、色を変えぬ「不易不変」の象徴、厳冬にも落葉せず霜雪に耐えて常緑を保つなど、詩歌、絵画、染織、工芸、多くの細工物の文様として親しまれてきた。中国では最も人気のあった樹木とされ、日本にもその思想、民族信仰、行事などが伝播、齢万年、常磐の平安、節操堅固、神の宿る依代などの栄樹として受容した。『古事記』には久久能智の木神が現れ、聖樹として墓所の邪気を払い貴族の墓守りとすること、『日本書紀』には景行天皇代（在位七一―一三〇）倭建命（日本武尊）が東国平定に赴き途中尾津崎（桑名）にて松の根元に腰の剣を置き忘れた逸話が残り、帰途剣は取り戻すが、思いを歌に託し、

尾張にただ向へる尾津の崎なる一つ松あせを一つ松
人にありせば太刀はけましをきぬ著せましを一つ松あせを

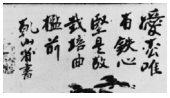
と、松に呼びかけ、松を待つに掛けて妻を偲ぶ。『万葉集』には、

八千種の花は移ろふ常磐なる　松のさ枝を吾れ結ばな（家持）

と色を変えぬ松の節操を自らに喩え、平安期には『古今集』、物語、『延喜式』には松脂の貢進があり、歳神を迎えるための門松、松飾りなどの習俗も伝えられる。春日若宮大社には神の来臨を祈り影向の松と猿楽の伝説が残り、神の依代松樹のもと屋外では猿楽が催されたが、しだいに舞台は屋内へと移り、背景とする鏡板には松樹が描かれた。柱に結ぶ拝み松、俵に挿して五穀を守る歳徳神、千代の松ヶ枝は時を超えて永劫につづく権力の象徴となり、皇家、貴族、江戸時代には徳川家、大名家、儒学に結びついて孤高の精神、厳正な人格に擬えた。小松は独立・気品、老松は君子の徳を表すが、毅然とした心の貴族を表徴するなど、一七世紀日本でも松樹は人間のあるべき姿に結びつく。松脂は不老仙薬の一つ、実は延命を司るなど、薬用、食用、庭園の主役として観賞用、建築用材、工芸品・細工物、松明・薪などの燃料となるが、染織・書籍・漆芸・陶磁器などの図柄としても定着、異名としては日本でも五大夫・木公・十八公・翁草・常磐草・物見草・鏡草などが伝えられる。

菊には露、紅葉には川、松の風格を育てるのは風という。

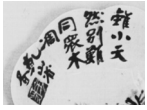
愛松唯有鉄心堅　是故栽培曲檻前



愛松唯有鉄心堅　是故栽培曲檻前
乾山省書（印）尚古・陶隱

愛松　唯だ鉄心の堅きに有り
是れの故に栽培す曲檻の前

雖小天然別　難同衆木凋



雖小天然別　難同衆木凋
乾山省書（印）陶隱

小なりと雖も天然の別なり
衆木に同じくして凋み難し

雖小天然別　難同衆木凋　①

「樹木門・小松附栽松」『圓機活法』二十二
『詩學大成』十一

【出典】

愛松唯有鉄心堅　是故栽培曲檻前
但使深根常得地　寧憂直幹不扶天
枝柔便欲成龍化　葉小終堪待鶴眠
莫謂斯時材短小　他年高立五雲邊

「樹木門・小松附栽松」『圓機活法』二十二
徐瓊泉詩「百木門・栽松」『詩學大成』十一

【大意】

松を愛でるは不変にして堅固な性、それ故にこそ曲りくねった囲いに植える。

【語釈】

鉄心　堅固な心・不動の意志。「鉄心石腸」「鉄石心腸」は松の節操、その不変なることをいう。「鉄」は「鐵」の俗字。
栽培　植物など植え培う。転じて人材の養成。
曲檻　曲りくねった囲い・勾欄。

【出典】

雖小天然別　難將衆木同　侵僧半牕月
向客一襟風　枝拂行苔鶴　聲分叫砌蟲
如今來堪看　須待雪霜中

杜筍鶴「題唐興寺小松」『佩文斎詠物詩選』下『全唐詩』

【大意】

小松ながら生来の素質に随い、寒中多くの樹木が凋落するなか枯れることはない。

【語釈】

天然　自然・生まれつき・天性。
別　辨える・異なる。各々。
衆木　多くの樹木。「衆」は多くの物や人の意。
凋　衰える・凋む。損なう。

【参考】

1、出典は小松を詠じた唐代杜*筍鶴の「題唐興寺小松」と題した五言律詩。『圓機活法』『詩學大成』『全芳備祖』『廣群芳譜』『佩文斎詠物詩選』『全唐詩』他所収。翻刻には「難・誰」「同・將」「凋・同」①の異字がある。
2、若松の瑞々しい美しさと力強い本質をいうが、杜筍鶴は「夏日題悟空上人院」として以下のような七言絶句を残している。
安禪不必須山水　滅却心頭火亦涼
など、外事よりは内事、克服すべき心の理を表し、唐末期の混乱した時代、清新、平明、質朴な詩風を残すとされる。
3、輪花皿は伊万里地色絵陶法である。

【参考】

1、出典は徐*瓊泉の松を詠じた七言律詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。松樹は隠者の目印として愛されたが、南朝梁*道士陶*弘景は句曲山に隠棲（『隠逸伝』）、松風を愛でその声を聴くことに欣然として楽しむという。
2、松は直、棘は曲、真実は各々そのものに露われるとし、禅林では「松直棘曲」というが、松と柳は剛柔の処世訓を表徴、風雪に耐える二つの姿、試練に処する二つの態度を示すとする。
3、翠色は毎年霜雪の苦難に耐えて保たれるが、「青松」を君子の徳、高雅な節操の喩、「青林」は隠士の松、「白石」は白芋の意から仙人の食糧を表徴する。種竹栽松、曲欄石径は園亭の体。
4、乾山焼角皿は銹絵陶法である。

＊徐瓊泉の詳しいことは不明である。
＊陶弘景（四五六―五三六）南朝梁の道士。字通明、号華陽隠居、丹陽郡秣陵（南京）の人。老荘哲学、葛洪の神仙論、儒家、仏家の思想を合流、医学にも通じ『神農本草経』を整理、『本草経集注』七巻を著した。
＊杜筍鶴（八四六―九〇四？）唐代詩人、字彦之、号九華山人、安徽省太平縣石台の人。杜牧の庶子といわれ、四六歳にして大順二年（八九一）進士に及第、唐末の戦乱を体験し五代梁の太祖に仕えるという。詩は杜筍鶴体と称されたが（『滄浪詩話』）、現実社会の困難を反映、『唐風集』が残る。

窓月か
尾張藩上屋敷跡出土

千古不凋存勁節　四時長見布清陰

千古不凋存勁節　四時長見布清陰
乾山省書（印）乾山、尚古・陶隠

千古不凋存勁節　乾山省昼（印）尚古

千古不凋存勁節　乾山省昼（花押）

「爾」字型
四時長見布清陰
乾山省昼（印）尚古・陶隠（二枚とも）

【読み下し】
千古凋（周）まざる勁節を存す　四時長く見る清陰を布くことを

【出典】
亭亭老翰倚危岑　烟雨蒼茫黛色深
千古不凋存勁節　四時長見布清陰
雪晴澗底蒼龍蟄　月冷巣中白鶴吟
掛向堂前披翫久　無由共托歳寒心
『詩學大成』二十　嚴介谿詩「書畫門・畫松」『圓機活法』十八

【大意】
古来松は試練に耐える節操をもち、四季を通じて変わらぬ緑陰を布く。

【語釈】
千古　遠い昔・永遠・永久。心や情の極まる意。
不凋　衰えない・凋まない。
勁節　強くて屈しない操・節操。
四時　四季。朝・昼・夕・夜をいうこともある。「四時花」は牡丹・蓮・菊・山茶花など季節を代表、季節に咲く花をいう。
長見　長い間見る。秀れた見識の意もある。
清陰　涼しい陰・美陰。「清陰」「濃陰」「緑陰」などは多く松に用いる詩語である。
布　施す・広げる・行き渡る・配る。「布陰」は日陰を布き広げる。

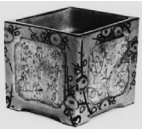
【参考】
1、出典は畫松を詠じた明代嚴*介谿の七言律詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。
2、寒季にも凋まぬ松樹の天然の強さを賞するが、松の樹齢は凡そ三〇〇年。不老不死に関しては秦代始皇帝の崩御に伴い殉死を逃れた宮女毛王姜の逸話、山中に隠れ松の実を常食として三〇〇歳の長寿を保つ男女に出会った樵夫の話などが伝えられる（『列仙傳』）。長寿・萬年は松の常緑・不変の寓意。
3、乾山焼の松図は、唐松・笠松形式の二種類を基本とする。書は茶碗、重色紙皿、角皿、獅子香炉、また絵画にも同讃があり、模倣品四方火入（三点）には二面を一組として四面に松・梅図、それに伴う詩句がみられる。松には「四時長見布清陰」、梅には「暗香断續來凧外　疎影横斜傍水涯」とあり、嚴介谿「松」詩、丘濬「梅」の七言律詩二句が刻されている（ともに『圓機活法』『詩學大成』所収）。火入は額縁形式、七宝文様を施したもの、無地、梅枝を散らしたものなどそれぞれに相異はあるが、陶法は銹絵、赤・白・緑、金色顔料を用いた色絵、鉄と呉須釉による銹絵染付などである。

同讃作品

千古不凋存勁節
四時長見布清陰
乾山省書　印なし

四時長見布清陰
（暗香断續來凧外
疎影横斜傍水涯）
乾山省（印）
陶隠

四時長見布清陰（暗香断續來凧外　疎影横斜傍水涯）乾山省（印）陶隠



四時長見布清陰（暗香断續來凧外　疎影横斜傍水涯）乾山省（印）陶隠

絵画　松図
「千古不周存勁節　四時長見布清陰」八十一老漢紫翠滚省昼昼

四時長見布清陰
乾峯　印判読不可

*嚴介谿・嚴崇（一四八〇―一五六七）明代政治家、詩人。字惟中、号介谿、江西省分宜縣の人。弘治一八年（一五〇五）進士に及第、翰林学士となるが、不法を問われ致仕したという。書室を鈴山堂と称し、『鈴山堂集』四〇巻を撰す。

老枝傲霜雪（雪霜）

老枝傲霜雪
（上）乾山省昻（印）乾山・深省
（下）乾山省昻（印）乾山

老枝傲雪霜
乾山省昻
（印）尚古・陶隠

【読み下し】
老枝霜雪（雪霜）に傲り（偃蓋虬龍走る）

【出典】
老枝傲霜雪　偃蓋走虬龍　①
「書畫門・畫松」『圓機活法』十八『詩學大成』二十

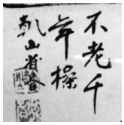
【大意】
松の老枝は霜雪にも枯れず緑を保つ。曲がりくねりまさに龍のようだ。

【語釈】
老枝　古枝・年を経た枝。老松。異名は「龍鱗」。
霜雪　心の潔白で厳しい喩。
偃蓋　伏せた笠。伏せた笠のような形状をした松をいう。転じて「偃蓋山」は松の異名。
虬龍　両角のある龍の子（みづち）とするが、曲がりくねった樹木の喩。松の小枝。

【参考】
1、出典は畫松を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。乾山焼には「霜雪・雪霜」①の両方がある。
2、「歳寒傲霜雪」など、松の老枝の力強さ、精神力をいうが、類似の詩句には杜甫詠「題李尊師松樹障子歌」と題した次の七言排律がある。
　陰崖卻承霜雪幹　偃蓋反走虬龍形
3、「雪竹風松」は詩では清いことの喩えとなる。李尊は、玄宗帝代の道士、画家。松図が知られる。角皿・鉢目皿・丸皿は銹絵陶法である。

光琳　松図画稿
（小西家文書）

不老千年操



不老千年操
乾山省昻（印）乾山・深省
老いざり千年の操（常に青し四季の容）

【出典】
不老千年操　常青四季容
「書畫門・畫松」『圓機活法』十八『詩學大成』二十

【大意】
千年の操を保ち、青々として老いることがない。為政者の長寿は「仁」の証しであり、仁は人を思いやる意とする。

【語釈】
不老　不老不死、極めて長壽、老いないこと。老松は別名「蒼龍」「龍鱗」ともいう。
操　志・節操。四季色を変えない松の青さを節操ある人物、試練に耐え抜く喩とする。
容　姿・形・様子。立居振舞。

【参考】
1、出典は畫松を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。試練にあっても志高く長生する松の逞しさをいう。人の節操あることの喩。
2、類似の詩句には亭々たる老松の翠色を変えぬめでたさ、不断の真を誇り、
　松樹千年翠　不入時人意
平等中の差別、己の本質を知り次のようにいう。
　松無古今色　竹有上下節
3、日本では正月子の日、野辺に小松を引く行事があり、千年の寿を祈るためとされている。
4、長方額皿は銹絵陶法である。

絵画　松図
不老千年操　華洛逸民
紫翠渓省八十一歳昻昼

＊「李尊師松樹障子歌」は杜甫が李尊師より贈られた松図に対し謝意を詠じたものである。李尊は唐代長安近郊玄都観に居した道士、のち官を辞し華山に帰り李泌を名のるが、松図に巧みであったことが伝承する。

大栽雪霜翰

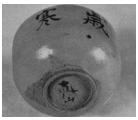
大栽雪霜翰　乾峯印なし
大なる栽（蔡）雪霜（霜雪）の翰（歳久しくして寒（大）材と爲る）
大栽霜雪翰　歳久爲寒材（『圓機活法』二十二）
老松を詠じた杜甫の五言律詩。「大栽」は「大哉」の意か、大いなるかなと読み、優れた、偉大なことを称える辞か。「翰・幹」は俗字、本字は「榦」、木の幹また「蔡」の意に同じ。「歳久」は年月の経過、「大材」は秀れた器能、才能ある人物をいう。

幾經（経）霜雪操　不改歳寒心

幾經霜雪操
乾山省（花押）「爾」字型

不改歳寒心
乾山省書（印）乾山・深省

同讃作品
（上）乾山省昼（印）尚古・陶隠
（中）乾山省昼（印）乾山・深省
（下）歳寒　乾山（高台内）



乾山省昼
印なし（二枚とも）

【読み下し】
幾ばくか経たり霜雪（雪霜）の操、①
歳寒の心を改めず

【出典】
幾經霜雪操　不改歳寒心
「樹木門・老松」『圓機活法』二十二『詩學大成』十一

【大意】
幾千年霜雪に堪え、信念を変えることがない。

【語釈】
幾　幾ばく・何がし。ぼんやりとさせる時に用いる語。
霜雪操　固い節操・心の潔白で厳しい喩。霜雪にも凋まず、貧窮に志しを守る意。
不改心　心を変えない・動じないこと。
歳寒　寒い季節・逆境。艱難にあってもめげないこと。寒気に耐える松樹の本性をいう。
子曰歳寒然後知松柏之後彫也（『論語』）
とあり、世の乱れにも喩える。

【参考】
1、出典は老松を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。乾山焼には「霜雪・雪霜」①とある。草木の凋落する冬期独り色を変えず堂々として立つ老松は、事変に遭遇、少しも態度を変えない君子の節操ある心に同じくする。
2、「不改歳寒心」「歳寒不改心」の相異はあるが、類似の詩句には以下がある。
終身執此調　歳寒不改心　*鮑令暉（南朝）
歳寒終不改　勁節幸君知　李*嶠・巨山（唐）
虚心不改歳寒意　為有清風是故人　商*輅（明）
また梅堯臣は「雪霜操」を竹に寓し、
方持雪霜操　不敢倚春風　梅堯臣（宋）
など、色を変えぬ操の堅固なことを賞す。
3、「歳寒」は「歳寒三友」に代表される。「三友」は『論語』に「益者三友・損者三友」とあり、正直・忠実・見聞広き人を益の友、便辟・便佞・善柔の人を損の友とする。
白居易は「北窓三友」として琴を弾ずれば酒を呼び、酒を飲めば詩を吟ずるとして琴酒詩を三友としたが、蘇軾は文同の画讃に梅竹石を挙げ、梅は寒なれど秀、竹は瘦せたれど寿、石は醜なれど文とし、清代『咳餘叢考』（趙翼）には郷に君子なければ山水を、里に君子なければ松竹を、坐に君子なければ琴酒を友とするとした。
4、絵画では松竹梅図を三友図として南宋時代、馬遠の描いたものが知られ、同頃から「三友」の称が現れ始めるという。
「松」の称に関しては、
長青不老　松以静延年
歳寒知松柏之後彫
「竹」の称は、
竹稱君子　竹有君子之道四焉
竹因虚受益
「梅」の称は、
冰肌玉骨乃梅萼之清奇
瓊姿玉骨物外佳人　群芳領袖
などとある（『吉祥図案解題』）。
5、茶碗は色絵、向付、長方皿類は銹絵である。

乾山風陶器出土例
歳寒心　銘なし
千代田区大坂和泉伯太藩上敷跡出土

---

*鮑令暉（生没年不詳）南朝宋の人。謝霊運・顔延之とともに「元嘉三大家」の一人とされる。鮑照（四一二？―六六）の妹である。詩賦に優れ、『香茗賦集』が伝えられる。
*李嶠（六四五？―七一四？）唐代政治家・詩人。字巨山。河北省（趙州）贊皇の人、龍朔年間（六六一―六六三）の進士。則天武后代要職を歴任。玄宗代、事に坐して左遷、遼寧省に没するが、詠物詩に優れ『李嶠雑詠』は日本においても広く流布した。
*商輅（一四一四―八六）明代政治家。字弘載、諡文毅公。浙江省の人。正統一〇年の進士。『商文毅公集』が残る。
*馬遠（生没年不詳）南宋代画家。字遙父、号欽山、山西省永済の人。五代続く画院画家の家柄。山水画に長じ、馬一角と呼ばれた構図に特色がある。人物・花鳥画も描く。

幾經霜雪操　乾峯
印不明

曙天風瑟々　静日雨凄々

曙天風瑟々
乾山省昏
印不明・陶隠か

静日雨凄々
乾山省昏（印）乾山・深省（二枚とも）

【読み下し】
曙天風瑟々　静日（夜・静・坐）雨凄々①

【出典】
曙天風瑟瑟　静夜雨凄凄
『樹木門・松』『圓機活法』二十二『詩學大成』十一

曙天風瑟々　静坐雨凄々　獨憩依為舍
閑行繞作蹊
『全芳備祖』『古今事文類聚』二十三

【大意】
夜明けの空に寂しい松風、もの悲しく雨が降る。

【語釈】
曙風　夜明けの風・暁風。
瑟々　物寂しいさま。風の音や寂しい色（碧色）の形容。
静日　静かな日。「静坐」は端坐。
凄々　物悲しく痛ましい・身に浸みて冷やか、寒々としたことの形容。風雨の激しく寒冷な様子にもいう。松風の音（声）など。

【参考】
1、出典は松を詠じた唐代白居易*の五言排律。『圓機活法』『詩學大成』『全芳備祖』『古今事文類聚』他所収。翻刻には「夜・静・座」①の異字があり、乾山焼では「日」とする。風雨に音を立てながら耐える松の物哀しい情景である。
2、長方額皿・長方皿・角皿は銹絵陶法である。茶碗は銹絵、色絵の別がある。

静日雨凄々
（上）乾山省（印）尚古・字型
（下）乾山省（花押）「爾」

四時黛色老蒼々

四時黛色老蒼々
乾山省昏（印）尚古・陶隠

（壑に聳え霄に昂りて百尺長し）
四時黛色老いて蒼々

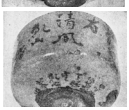
【出典】
聳壑昂霄百尺長　四時黛色老蒼蒼
髪絲蓊鬱籠烟霧　皮玉嶙峋傲雪霜（以下略）
『樹木門・松』『圓機活法』二十二『詩學大成』十一

【大意】
壑に聳える丈高き松、四季の巡りに色を変えず、老いてなお盛んとした意であり、松を高風亮節、高尚な人格と堅い節操に擬える。

【語釈】
聳壑　「壑」は「叡」、谷に聳え立つこと。
霄　天・空、みぞれ、雲の意もある。
黛色　眉墨の色・眉墨のような色。
蒼　青い。草の繁るさま。「蒼蒼」は盛ん、また老いたさまをいう。

【参考】
1、出典は陳*王道の松を詠じた七言律詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。
2、茶碗は色絵陶法である。

朝暮有清風（風）



右図は三浦*乾也造の茶碗である。出典は松を詠じた唐代儲*光羲の五言古詩「石子松」。『圓機活法』『詩學大成』『廣群芳譜』『佩文斎詠物詩選』他所収。四季緑を保ち、朝夕の清風が松を揺らす意。

朝暮有清風（風）
墨水逸民天禄堂乾也
摹造之　印不明
冬春無異色
朝暮有清風（『圓機活法』『詩學大成』）

＊白居易（七七二―八四六）唐代詩人。字樂天、号香山居士・酔吟先生、山西省太原のち陝西省渭南に移る。貞元二六年（八〇〇）の進士。宰相武元衡暗殺に関し究明書を上書、越権行為を咎められ江州司馬に左遷、以後杭州・蘇州刺史を歴任、刑部尚書に至り致仕。風諭・感傷詩などが多く残る。

＊陳王道の詳しいことは不明である。『圓機活法』『詩學大成』『全芳備祖』などに詩がある。

＊三浦乾也（一八二一―八九）幕末の陶工。江戸銀座生、伯母の夫、陶工井田吉六のもと養育、修業。浅草において五代目乾山を名のる吉原名主西村貘庵と出会い、乾弥・乾也を名のり、袋物屋丸屋利兵衛の援助を得て細工物の腕を磨く。

＊儲光羲（七〇六？―六三？）唐代詩人。山東省兗州また江蘇省鎮江の人という。開元一四年（七二六）進士に及第、安祿山の変後、強要され官職に就くが、乱平定後は広東省嶺南に左遷、同地に没する。五言古詩にすぐれ、田園や山水を詠じその名が知られる。『儲光羲詩集』がある。

堅心勁節

堅心勁節　銘なし　印なし

堅心勁節

堅心勁節

「樹木門・松」『圓機活法』二十二

『詩學大成』十一

不動の精神と強い節操は俗を超越。

【語釈】

堅心　堅い心。不変不動の精神。

勁節　強く屈しない志・節操。世俗を超えた美しさ。

【参考】

1、出典は松の大意を詠じた四言句。『圓機活法』『詩學大成』所収。松樹の本性を賞する意である。

2、元代袁士元著『満庭芳』には「最好堅心勁節」の詩語があるという。

日本でも松を詠じ「十八公の榮は霜の後に露はれ　一千年の色は雪の中に深し」とした源順*の歌がある。

3、角皿は銹絵陶法である。図は狩野元信風の筆致であるが、松図は中国六朝時代に始まり、唐代中期に独立した画題、五代において水墨画松図が完成したといわれている。

秦始皇『絵本寶鑑』

「始皇御狩の時俄かに雨ふりしに松の陰に立寄給ふ　そのとき松枝をたれて雨をふせぎしかば　松に大夫の官をさづけられしとなり」（『絵本寶鑑』）

秦王朝の創始者始皇帝（前二五九―前二一〇）は紀元前二二一年全国を統一。法律を定め、文字・度量衡を統一。帝王として即位の印・天地を祀る大典に則り五岳泰山に上るが、折からの暴風雨に松樹の下、難を逃れる（『史記』）。謝して爵位五大夫を授けたとするが、唐代一五歳の王維は墓所を訪い、松風の寂しいひびきは爵位を得た松の哀悼かと五言律詩を詠じている。

千尋直幹三冬緑　一畝濃陰六月寒

千尋直幹三冬緑　一畝濃陰六月寒

乾山滾省昼（印）陶隱・尚古

千尋の直幹三冬緑に　一畝の濃陰六月寒し

千尋直幹三冬緑　一畝濃陰六月寒

『圓機活法』二十二　『詩學大成』十一

【大意】

高く真っ直ぐに伸びた松樹は冬の間も色を変えない。枝は広がり濃い木陰は夏の間も冷ややかである。

【語釈】

千尋　「尋」は長さの単位。ほぼ両手を広げた長さであるが、古代中国では一尋を八尺として八千尺。転じて極めて高いことや深いことの形容。「亭々」も聳え立つ姿。

直幹　「幹」は「幹」。まっすぐに伸びた幹。

三冬　冬季三ヵ月の間。孟冬・仲冬・季冬。

畝　田畑の畝また田畑。日本の「一畝」は太閤検地の単位によると三〇歩（坪）。

濃陰　緑の木々が濃い木陰を作る。

六月寒　六月にも暑さなく、松陰は涼しいとした意。

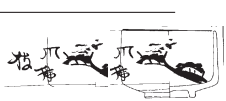
【参考】

1、出典は松を詠じた七言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。類似の詩句には宋代王令*の「大松」と題した七言律詩がある。

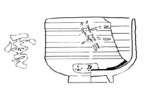
十尋瘠幹三冬緑　一畝濃陰六月清

2、松には「松風六月寒」「繁陰六月寒」「濃陰五月寒」などの成語があり、松樹の雄々しい姿と夏にも枝をしっかりと張り涼を招く豊かな緑が詠じられる。松のある所は松風の声ありとし、心の浄いことに擬える。

3、四方火入は銹絵染付の陶法である。



風拂枝か　銘なし　新宿区尾張藩上屋敷跡出土



雪松無新竹　銘鳩山　新宿区南町遺跡出土

＊袁士元（生没年不詳）元代学者。字彦章、浙江省の人。翰林國史印検閲官などを務め、別野には菊花数百本を種え、自ら菊村学者と号したという。『瞞庭芳』を著した。

＊源順（九一一―八三）平安時代歌人・学者。天暦七年（九五三）文章生となり、辞書（百科事典）、『和名類聚抄』を作成、家集『源順集』を残す。撰和歌所内裏昭陽舎「梨壺五人」の一人である。

不識炎天熱　門深大古風

不識炎天熱　門深大古風
乾山省旨（花押）「爾」字型

炎天の熱きを識らず　門は深し
大（太）古の風

不識炎天熱　門深太古風　①
「樹木門・松」『圓機活法』二十二

【出典】
沿湖九里松　竹客憶袁公　不識炎天熱
門深太古風
五言古詩（散句）郭功父「松」『全芳備祖』

【大意】
松のおかげで夏の焼けつく暑さを知らない。構えはゆったりと太古の風格。

【語釈】
炎天　夏の焼けつくような暑い空。「炎暑」「炎熱」は夏の厳しい暑気をいう。
不識　知らない・知らせない。
大古　太古・大昔。

【参考】
1、出典は松を詠じた宋代郭*功父の五言古詩。『圓機活法』『全芳備祖』所収。乾山焼では「大・太」①の異字、また古字「深」には誤りがある。
2、松は古来夏の炎暑を防ぐとされるが、ここでは唐代杭州刺史であった袁*仁敬が、杭州洪春橋（行春橋）から霊隠山門にかけ、九里にわたる道沿いに植林した松をいう。防風・防雨、湖に沿い、雄偉壮観な「九里松」は銭塘十景、詩歌に詠われ、「山雨」「松濤」などの詩語が伝わる。
3、茶碗は銹絵陶法である。

勁色不改舊

勁色不改舊
乾山省旨（花押）「爾」字型

勁色舊きを改めず（芳心誰れと與にか榮う）

勁色不改舊　芳心誰與榮　①
「樹木門・松」『圓機活法』二十二『詩學大成』十一

【出典】
無能常閉閤　偶以静見名　奇姿来遠山
勿似人家生　勁色不改舊　芳心與誰榮
喧卑豈所安　任物非我情　清韻動竿瑟
諸此風中聲
柳宗元・子厚・河東『廣群芳譜』六十九

【大意】
松は不変の緑を保ち、凋落することがない。困難を耐え抜く節操を誇る意。

【語釈】
勁　強い・美しい。「勁松」は霜雪にも凋落しない松。転じて貞臣の喩。
舊　「旧」の古字。久しい・昔。
芳心　美しい心。他人の深い志の敬称。
與　共に・仲間になる。従う。

【参考】
1、出典は松を詠じた唐代柳宗元「酬賈鵬山人郡内新栽松寓興見贈二首」と題した五言古詩。『圓機活法』『詩學大成』『廣群芳譜』他所収。翻刻には「誰與・與誰」①の異字がある。
松の性は、万木凋れても常盤の緑を保つが、雪が積もり、その時になりはじめて本性がわかるとした意である。霜雪にあっても色を変えず、それを貞節に擬えて貞木とする。
2、茶碗は銹絵染付の陶法である。乾峯にも同讃の角皿（下段）がある。

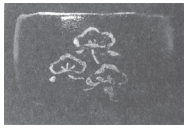
＊王令（一〇三二―一五九）宋代詩人。字逢原、河北省大名の人。早くに両親を失い江蘇省蘇州に移る。学問に長じ、王安石に認められ、『論語注』『孟子講義』などを著すが、二八歳で病死。古風、豪放、気魄のこもる詩歌を残す。『広陵先生文集』がある。

＊郭功父（生没年不詳）字巧父、名祥正、号浄空居士、當塗の人。若くして詩名があり、梅堯臣はその詩李白の後身と為すと評したという。宋代熙寧年間（一〇六八―七七）に節度判官、殿中丞などの任にあたり、のち青山に隠棲、『青山集』が残る。

＊袁仁敬（六六三―七三三）唐代政治家。開元一三年（七二五）杭州刺史。その間三年に渉り洪春橋から霊隠寺山門までの九里の道程、松を植えるが、「九里松」として今日に伝えられる。

勁色不改舊　乾峯
印不明

微風吹幽松



微風吹幽松
乾山　印なし

微風幽松を吹く
微風吹幽松　近聴聲愈好
寒山『寒山詩』

【読み下し】
（安身の處を得んと欲せば　寒山は長く保つ可し）
微風幽松を吹き（近く聴けば聲愈好し　下に斑白の人有り　喃喃として黄老を讃む　十年帰ることを得ず　来たりし時の道を忘却す）

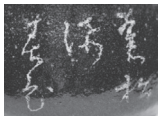
【出典】
欲得安身處　寒山可長保　微風吹幽松
近聴聲愈好　下有斑白人　喃喃讃黄老
十年帰不得　忘却來時道
五言古詩　寒山『寒山詩』（寛永一〇年刊）

【大意】
ひっそりと茂る松にそよ風が吹く。（近づくほどにその音は心地よい。）自然の声、あるがままを好しとする境地をいう。幽松と道家、仏家の精神の繋がりがわかる。

【語釈】
幽松　ひっそりと茂る松。周囲が暗く感ずる景。
斑白　白髪混じりの頭髪・ごま塩頭の老人。
喃喃　くどくどと語る、また読書の声。
黄老　黄帝と老子。道家の祖とする黄帝や老子などの隠遁思想を説いた書物をいう。

【参考】
1、出典は唐代寒*山の五言古詩。『寒山詩』『全唐詩』『碧巌録』『月江正印禅師語録』他所収。雪*竇頌、圓*悟評唱にも引用されたとし、身心の安定は人間の無心無欲にあるという。寒巌山中、それを得るべく寒山は松の木陰で道家の書物を読み一〇年を過ごしたとあるが、悟道した人の妙なる心境、目前現成底の妙趣をいうとする。
2、茶碗は楽焼である。

蒼松満春色



蒼松満春色
乾山　印なし

（陰陰として禁中清し）　蒼松
春色満つ

【出典】
陰陰清禁裏　蒼翠満春松
五言排律（散句）陸贄（唐）「禁中春松」
『佩文斎詠物詩選』下『広群芳譜』七十

【大意】
厳かな禁中、蒼々とした松に春香が満ちる。

【語釈】
蒼松　青松。高雅・節操・君子の徳を表す。
春色　春の景色。

【参考】
出典は唐代陸*贄の「禁中春松」と題した五言排律か。「松・翠」の異字があり、若松の新鮮な美しさ、新年の喜びを祝う意か。「蒼松壽古」など、南天を壽星（南の空に現れる寿星）に擬して描く謎語画題もある。茶碗は楽焼である。

乾峯　印不明

上図は明代高啓の七言律詩「梅花九首」「誰向江南処々栽」を讃に用いた入角長方額皿（右）である。乾峯は同讃「誰向（江）南処々栽」を松図角皿（左）に転用したが、「江」の脱字、乾峯銘「峯」が乾山銘に紛れ易いなど（山）の強調）、その特徴が現れる。画讃作品が多く、乾山焼の定着した二代猪八時代に活躍した人物と推測する。江南は、「江南一枝春」など梅花一枝を描き春を報ずる意とする。

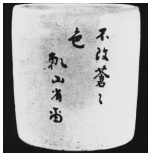
＊寒山（生没年不詳）唐代詩僧。貞観（六二七―四九）また大暦年間（七六六―七九）の人。天台山中翠屏山に隠棲。寒巌・寒山子・貧子とも称し、国清寺拾得との親交が伝承。詩風は後世に大きな影響を与えたとする。

＊雪竇重顯（九八〇―一〇五二）宋代雲門宗禅僧・中興の祖。字隱之、名重顯、遂州の人。仁鉄上人、智門光祚に謁し、翠微峯のち雪竇山に住し、『雪竇頌古』『祖英集』を著す。

＊圓悟克勤（?―一一三五）北宋から南宋代にかけての臨済宗禅僧。字無著、俗姓駱、蜀成都の人。五祖法演の法を継ぎ『碧巌録』を著し、門下には大慧宗杲、虎丘紹隆がいる。墨蹟は一休禅師から参禅の証として珠光が受理、茶の湯の掛物として第一位とされる。

＊陸贄（七五四―八〇五）唐代の政治・政論家。字敬輿、浙江省嘉興の人。一八歳で進士に及第、翰林学士、中書舎人、同平章事となり、弊政を改め改善に努力するが罷免される。文章にすぐれ、上奏文の模範となり、『翰苑集』が伝えられる。

不改蒼々色



不改蒼々色
乾山省（花押）「爾」字型

蒼々の色を改めず（枯れ難し鬱鬱たる枝）

不改蒼蒼色　難枯鬱鬱枝

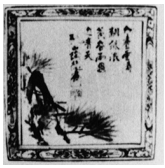
『樹木門・松』『圓機活法』二十二『詩學大成』十一

【大意】
老木ながらも青々として色を変えない。（老松のどっしりと枝を張る力強さよ。）

【語釈】
蒼々　草木の青々としたさま・盛んなこと。老松の意もある。
鬱鬱　樹木の鬱蒼として繁っている様子・盛んなさま。「欝」は俗字。

【参考】
1、出典は松を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。凋落することなく長生する松の力強さをいう。
2、類似の詩句には隋代李*徳林「詠松樹」に「歳寒無改色」、白居易には「一束蒼蒼色」「不見鬱鬱松」の詩句がある（『佩文斎詠物詩選』『全唐詩』）。

白晝雲濤翻緑浪　黄昏雨過近青天



白晝雲濤翻緑浪　黄昏雨過近青天
乾山陶隠書（印）乾山、尚古・陶隠

白晝（日昼）雲濤緑浪を翻し
黄昏雨過ぎて青天に近し

【出典】
亭亭百尺聳雲邊　時有風來撼翠巔
白昼雲濤翻緑浪　黄昏雨過近晴天　①
危巣涼透鶴驚舞　幽澗寒生龍起眠
幾度西窓欹枕聽　恍如仙佩響珊然　②
丘瓊山詩「樹木門・松聲」『圓機活法』二十二『詩學大成』十一

【大意】
日中の濃陰、日暮れて雨も止み清々しい。

【語釈】
白晝　白昼。日中。「白」は日光の照る意。
雲濤　遙か天際に見える波。雲を波に喩える。松の詩に多くみられる
緑浪　青々とした波。草や米麦の葉のうねり。
黄昏　夕ぐれ・たそがれ。
青天　晴れた青空。清明な人の喩。

【参考】
1、出典は松聲を詠じた明代丘濬の七言律詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。両書には「日・日」「緑・翠」①「聴・听」②の異字がある。
2、白昼の入道雲とざっと降る雨、夕暮れ時に澄んだ空に松樹が活き活きと清々しいが、艱難の後の喜び、争いの後の平安に喩えられる。「亭亭」「百尺」は高く聳える松樹の詩語に多く用いられる。
3、額皿は銹絵陶法である。

乾山風陶器出土例

印月未（成陰）
銘なし
新宿区尾張藩上屋敷跡出土

印月未
新宿区尾張上屋敷跡出土

（風を渡って微しき韵有り）　月を印じて未だ（陰を成さざり）「渡風微有韵　印月未成陰」（樹木門・小松附栽松）『圓機活法』『詩學大成』

微は密か・奥深い。韵は「韻」、響き・調子、趣きなど。印は印・為す。ここでは月光に映ずる印影。出典は小松を詠じた五言詩。

*李徳林（五三一―九一）隋代政治家。字公輔、諡文、博陵安平の人。秀才として知られ、開皇九年（五八九）南朝陳の滅亡後桂國公となり、同一〇年懐州刺史となる。隋は南北朝三〇〇年の歴史を統一。大運河を開鑿し、南北を運河で結ぶ大事業を成し遂げた。

絵画　松図
「不改蒼々色」京兆紫翠漢省八十一歳寫

檜（ひのき）

―中国―

檜は檜科の常緑低木・喬木。原産地は中国北部・西部地域。漢名は檜・扁柏、和名は檜、西洋名サイプレスはギリシャ語に由来する。が、中国の檜は日本の桧（たなぎ）（柏杉）属檜柏（ひばく）、扁柏は柏木（このてがしわ）（児手柏）属の柏木に当たるとされ、『本草綱目』に混同、『倭漢三才図会』も誤伝するなど、檜、扁柏は同一樹と考えられた。檜は曲枝、柏は直枝、檜は常緑低木、樹皮は赤褐色、縦に裂け目、葉は小枝に密集、それらには鱗片状また針状の両種があり、絵画では多く山水図、竹木図などに描かれた。

―日本―

日本の檜（ひのき）は日本の特産である。東北から屋久島の山地に分布、火起しのために擦り合わせた火の木の意からの名称という。枝も幹も曲がっており、植林は檜を尾根側、杉を谷側に植えるとされ、樹皮には裂け目、枝は互生、葉は鱗片状、小枝に密集、春に花、晩秋には種子が飛ぶ。木質は緻密、耐朽性、芳香もあり、建築材料、工芸品、樹皮は屋根の檜皮葺（ひわだぶき）に活用されるが、出雲国須佐之男命（すさのをのみこと）の退治した八頭八尾の八俣大蛇（やまたのおろち）には蘿（ひかげ）と檜（ひ）と椙（すぎ）が生えており（『古事記』）、一説によれば未だ日本には浮宝（うくたから）（船）のない所から、命（みこと）は鬚髯（ひげ）を抜き杉と為し眉毛を抜き櫟樟（よとう）（楠）胸毛は檜と為るなど、杉と櫟樟は浮宝、檜は瑞宮（みずみや）の材、宮殿の材となり（『日本書紀』）、神に纏わる神聖な樹木、神の宿る社や宮殿、仏閣建築最良の資材となった。『万葉集』人麻呂の歌に、

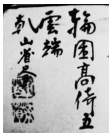
古にありけむ人も我がごとか　三輪（みわ）の檜原（ひばら）にかざし折りけむ

とある。三輪山の檜林、その檜を髪挿（かざし）にしたこと、檜は「ひ」と詠み、異名には檜葉（ひば）木・真木（まき）・富草（とんぐさ）・三間草（みつまぐさ）・香柏（こうはく）・ぱちぱちなどが伝えられる。

＊羅念庵（らねんあん）（一五〇四―六四）明代地図学者、洪先（こうせん）とも称した。字達夫、号念庵、諡文荘、江西省吉水の人。嘉靖八年（一五二九）進士に及第、翰林院修撰となり、図観史、天文地誌、禮楽典書ほか多くの書物編纂に関与する。『念庵集』が残る。

＊『乾山遺墨』は文政六年（一八二三）数寄者大沢永之（一七六九―一八四四）の尽力を得て絵師酒井抱一（一七六一―一八二九）が刊行した乾山画三四点、書四点、陶器五点を集成した遺墨集である。

輪囷高倚五雲端



輪囷高倚五雲端

乾山省旦（印）乾山・深省

輪囷（りんぐん）として高く倚（よ）る五雲（ごうん）の端（はし）

（密葉婆娑（みつようばさ）として翠團（すいだん）を作（な）す）

【出典】

輪囷高倚五雲端　密葉婆娑翠作團　①

材大可同天地老　色堅不畏雪霜寒　②

陰籠白鶴雲邊宿　影動蒼龍月下蟠

帯得山川烟霧氣　看團秋意逼吟壇

羅念庵「樹木門・檜」『圓機活法』二十二

『詩學大成』十一『十竹斎画譜大全』墨華譜

【大意】

大空高く曲がりくねりまさに仙人の居る五色の雲に届くようだ。（葉は繁茂し縁の固まりを為す。）

【語釈】

輪囷　高大、屈曲したさま。「困」は倉庫、穀物を入れる円形の倉の意である。

倚　寄る・凭（よ）れる。誇る。

五雲　青・白・赤・黒・黄の五色の雲をいう。その変化をみて吉凶を占ったが、仙人の居所を暗示する

端　はし・果て・末。正に是れの意もある。

密葉　密生している木の葉。婆娑は葉の乱繁。

團　聚まり・固まり。「団」は略字。

【参考】

1、出典は檜を詠じた明代羅念庵*の七言律詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。両書には「困・困」①「可・肯」②の異字、『十竹斎画譜大全』には円内に檜図、「題檜」と題した同讃がある。

2、聯句二句、

材大可同天地老（ざいだいかどうてんちのおいしなり）

色堅不畏雪霜寒（しきけんふいせつそうのかんをおそれず）

以上は、『乾山遺墨』「雪檜図」にみられる。

3、入角四方皿は銹絵陶法である。

桐

―中国―

桐は玄参科、梧桐は梧桐科の落葉喬木である。原産地は中国。西南諸島に分布、野生もあるが、栽培種が多く、朝陽の当たる東向きの土地を好む。漢名は桐・梧桐、和名は伐採後直ちに芽を出す習性、木理（木目）の美しさから桐・梧桐、西洋名はポロウニャと称し、シーボルトの支援者オランダ王女の名に因むという。季節は夏を代表し、高さは一〇㍍に及び、新枝や葉には柔らかな毛が密生、長い柄をもつ葉は大きく三尖五尖の浅い切れ込みがあり、四、五月頃に淡紫色の筒状五弁の花を咲かせる。花数に因り五七桐・五三桐の呼称があり、芳香を放ち、秋になって卵形の実を結ぶが、熟すと殻が割れて種子が飛ぶ。木肌は白く白桐とも呼ばれるが、湿気を吸わず、琴や瑟などの楽器類、家具、種々の細工物に用いられる。梧桐は亜熱帯地域に多く、幹に節はなく直立、樹皮の青いことから青桐ともいう。葉は大きく長い柄、柔毛はなく、花も黄白色の五裂の花序が集まり咲く。実は未熟のうちに割れて正円の種子が落ちるが、伝説では鳳凰の宿る樹とされ、木目の細かく固く締まったところから楽器に好しとされている。異名には泡桐・白花桐・紫花桐・青如狼狸・小義・栄榔・五同桐などがある。

『詩経』（大雅「生民之什・巻阿」）には梧桐は鳳凰の集う木とある。山の東に朝陽が上り、繁茂した梧桐に宿る鳳凰は祖霊の降臨を告げて鳴くとされ、聖王の出現を知らせる瑞鳥、桐は人に変異を知らせる特異な樹木と考えられた。『荘子』（秋水）にも「發於南海　而飛於北海　非梧桐不止　非練實不食　非醴泉不飲」とあり、『淮南子』（山訓）には「見一葉落　而知歳之將暮」とある。鳳凰と梧桐の結びつき、秋を迎えて葉は黄ばみ一枚づつ落下、その落つること他樹より早く、天下の秋を先駆けて知らせるなど、哀感、侘びしさは「一葉葉一声声」、大きな葉に落ちる雨音によって深められた。絵画においては唐代陳閎の梧桐図がある（『宣和画譜』）。画題は桐に鳳凰図を専らとするが、明代には徐渭（一五二一―九三）の「雑花図巻」、崔子忠（？―一六四四）の「雲林洗桐図」、仇英の「桐陰清話図」などがある。

―日本―

日本へはいつ渡来したかは不明である。中国における鳳凰伝説、神の依代とする思想が伝播、飛鳥時代から禍を防ぐ樹木と信じられた。龍が住むとの逸話、南方水辺のない土地に桐木七本を植へ福を招くとした言い伝えなどもあり、『万葉集』にはみられないが、日本古来の六絃琴（倭琴）は対島の結石山産の桐を用いたなど、藤原房前に贈った書状（大伴旅人）があるという。平安時代には『源氏物語』の桐壷淑景舎の庭に植えられた桐、鎌倉時代には後鳥羽上皇が紋章と成し、尊氏に下賜（足利家紋章）、桃山時代には豊臣家の家紋となったが（五三桐）、五七桐は皇室のみの使用である。江戸時代には赤坂山王下溜池には桐畑があったとされ、薬用・観賞用、木材は耐湿、耐乾、粘堅ではないところから箪笥などの家具・調度品、琴をはじめ種々の楽器、履物などの細工物に活用された。樹皮は染料、枝は炭、葉は薬用、虫除けなどに利用、『倭漢三才図会』によれば油を絞り漆の代用に用いた油桐は江州・美濃に多く産したという。土佐光起、狩野常信、永徳らの絵画が伝世。異名には一葉草・花桐・白桐・青如狼狸などがある。

亭々直幹出雲林　應是栽培歳月深
明月枝頭雙鳳宿　黄瓢金井催烟色
翠覆銀床垂午陰

亭々直幹出雲林　應是栽培歳月深
黄瓢金井催烟色
乾山陶隠書（印）

明月枝頭雙鳳宿
乾山省昼（印）
尚古・陶隠

黄瓢金井催烟色
乾山省昼（印）
尚古・陶隠

翠覆銀床垂午陰
乾山省昼（印）
尚古・陶隠

【読み下し】

亭々たる直幹　雲林に出ず　是れ栽培歳月の深なる應し　明月の枝頭雙鳳宿し（清風葉底一蝉吟ず）黄金井に瓢へって烟（秋）色を催し　翠銀床を覆って午陰に垂（落）る（謂ふ莫れ斧斤來たって伐り取ると　良材待ち留めて瑶琴と作す）

【出典】

亭亭直幹出雲林　應是栽培歳月深
明月枝頭雙鳳宿　清風葉底一蝉吟
黄瓢金井催秋色　翠覆銀床落午陰
莫謂斧斤來伐取　良材留待作瑶琴

状元舒芬「樹木門・梧桐」『圓機活法』二十二
舒芬詩「百木門・梧桐」『詩學大成』十一

【大意】

大空に桐の木が聳え、歳月の長きを知らせる。明月に照らされ、枝先には番の鳳凰が宿り、（清風が吹き葉の下にいた蝉が鳴く）秋には色づいた葉が井戸端に落ち、天下に秋を知らせ、夏には青々とした葉が井桁を覆い木陰を作る。（伐採するとは言わないでくれ、良材を待って宮中の琴を作るとした意か。）

【語釈】

亭々　高く聳え立つ様子・美しいさま。人格の高い形容。孤立不羈。
直幹　直に伸びた幹。「幹」は「幹・幹」の本字。
栽培　植える・培う。人材の養成にも用いる。
明月　晴れた夜の清く澄んだ月・十五夜月。
雙　二羽の鳥・番。二つ並んで秀れたもの・兄弟の喩。「雙鳳」は一対の鳳凰。鳳は雄、凰は雌とされるが、想像上の瑞鳥であり、あらゆる鳥類の美と威厳を象徴、梧桐に棲み竹実を食して醴泉を飲むという。羽毛は五色、声は五音、天下泰平の折に出現、飛べば群鳥これに従うとするが、聖人が世に出る折りそれに応じて現れるとされ、禅林では大悟した人の喩えとなる。
井　井戸を覆う四角の囲いを井桁、丸い囲いを井筒と称し、美しく飾りを施した井欄の意。紅葉した桐の葉が井戸の周囲に散り黄金色に染まった秋色の意もある。
銀床　銀・白銀で飾りを施した井桁また井水。
午陰　日中の木陰。「垂」は下垂・なんなんとす。

【参考】

1、出典は舒*芬の梧桐を詠じた七言律詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。乾山焼とは「垂・落」の異字がある。「状元」とあるが、宋代以後の科挙試験首席合格者をいい、進士第一の及第者、士大夫最高の栄誉を表す。
2、類似の詩句には李*白の五言詩に、
　梧桐落金井　一葉在銀床
韓愈にも桐葉の落下を詠じて、
　霜風侵梧桐　衆葉著樹乾
　空階一片下　琤若摧琅玕
とある。落ちた桐葉（人物）、存在の大きさをいう。
3、梧桐（青桐）は、秋のはじめ他の樹木に魁け葉を落とし、秋の訪れを告げる木であるが、『淮南子』には「一葉落つるを見て歳の將に暮れんとするを知る」とあり、小を以って大を、近きを以って遠きを明らかにする意となる。立派に伸びた桐の木を人材に喩えることもあり、「桐君」は琴の意である。
4、桐と鳳凰は、桐を帝、鳳凰を賢人・聖人の喩とし、賢帝の出現に賢士が来たるとする意。
5、角皿・額皿・長方皿は銹絵陶法である。

＊舒芬（一四八四―一五二七）明代詩人。字国裳、号梓溪先生、江西省進賢の人。正徳年間（一五〇六―一二）科挙に合格、状元。翰林院史館修撰となるが、武宗の巡遊を諫め、廷杖を受ける。
＊李白（七〇一―六二）唐代詩人。字太白、号青蓮居士、甘粛省、のち四川省青蓮郷に移る。天宝元年（七四二）玄宗妹の推挙によって翰林供奉となるが、二年後長安を去る。
＊『淮南子』二一巻は『淮南鴻烈』ともいう。前漢代淮南王（高祖の孫）を中心に劉安、蘇飛、李尚ら学者の討論を編集。儒教尊重の武帝に対し、諸家の思想、社会・歴史の変遷、神話、伝説などを纏めた百科事典的書である。後漢代には許慎らにより注本が著されたが、日本には奈良時代に渡来、『日本書紀』開巻に影響を与えた書とされる。

翠覆銀床垂午陰
印は扶桑乾峯か
乾峯

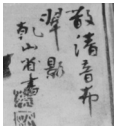
翠葉洗朝露

翠葉洗朝露
乾山省昼（印・裏）乾山・深省

翠葉洗朝露
乾山省昼（印）
乾山・深省か

翠葉（色）朝露に洗い（清陰午階に當る・清陰當午の階）

散清音　布翠影



散清音　布翠影
乾山省書（逆印）尚古・陶隱

清音を散じ　翠影を布（鋪）く

散清音　鋪翠影

『圓機活法』二十二『詩學大成』十一

【出典】

翠葉洗朝露　清陰當午階　①

「百木門・梧桐」『詩學大成』十一
「樹木門・梧桐」『圓機活法』二十二

猗猗井上桐　花葉何衰衰　下陰百尺泉
上聳凌雲材　翠色洗朝露　清陰午當階

五言古詩（散句）　歐陽脩（宋）
「桐花」『廣群芳譜』七十三『全芳備祖』

【大意】

桐の葉が朝露に洗われ清々しい。（昼には階段に緑陰を布く。）

【語釈】

翠葉　緑葉。「翠」は青々とした緑・縹色。
清陰　涼しい陰・美陰。
午　時刻では正午、「當午」は太陽が真南にきたことをいう。「午階」は昼の日射しが階段に当たっている様子をいい、「午陰」は日中の木陰の意である。
當　当たる・覆う・向き合う。

【参考】

1、出典は梧桐を詠じた宋代歐陽脩の五言古詩。『詩學大成』『圓機活法』『廣群芳譜』『全芳備祖』他所収。翻刻には「葉・色」「當午・午當」①の異字がある。類似の詩句には牡丹の詩に「千葉照明露」とある。
2、長方皿は銹絵陶法である（地は緑色）。

【大意】

秋、桐の葉が音を立てて散り、夏には周りに濃い緑陰を布く。

【語釈】

清音　清らかな音・澄んだ音色。
翠影　青々とした緑の影。
鋪　敷く・連ねる・設ける。

【参考】

1、出典は梧桐の大意を詠じた六言句。『圓機活法』『詩學大成』所収。乾山焼とは「布・鋪」の異字がある。豊かに繁る桐の葉の葉ずれの音と濃い緑陰を布く特性をいう。
2、葉は黄ばみ一枚づつ地に落ちるが、白居易「晚秋閑居」と題した七言絶句には、

地僻門深少送迎
披衣閑坐養幽情

とあり、秋も深まり訪れる人もない閑居に、散り敷く桐葉を踏みながら散策する姿を詠じた。
3、梧桐は青桐とも称し、葉は大きく直立、広庭に植えれば緑陰翡翠の如しとあり（『長物志』）、実の核は嫩らかく食用、茶に入れる風習もあったとされる。岡桐は山岡に生育、油を採取することから油桐の異名があるという。
　桐は一般に「桐を削り琴を為り、縄糸もて弦をつくる」とされ、古来琴の素材とされていた（『藝文類聚』）。
4、長方皿は銹絵陶法である。図は狩野探幽筆絵手本などに類似の図がある。

秋庭不掃任攜藤杖
閑躅梧桐黄葉行

＊歐陽脩（一〇〇七―七二）宋代学者・政治家。字永叔、号醉翁・六一居士、江西省吉安市の人。天聖八年（一〇三〇）の進士。知制誥となり新政を推進、翰林学士、史館修撰となり『唐書』を編纂。王安石とは相容れず隠居。唐宋八大家の一人。北宋文学の革新に尽力、詩話の魁けを成す。『欧陽文忠公集』『六一詩話』『洛陽牡丹記』などがある。

＊狩野探幽（一六〇二―七四）江戸初期絵師。名采女・守信、号探幽斎・生明・自蓮子。狩野孝信の長男である。弟は安信。秀忠代元和三年（一六一七）徳川幕府御用絵師となり、寛永一二年（一六三五）江月宗玩より探幽斎の号、同一五年法眼に叙されるが、明暦二年（一六五六）江戸大火によって家屋敷は焼失。が、寛文二年（一六六二）法印叙任、江戸狩野派様式の創始者となる。粉本・縮図が種々残る。

春花媚金井

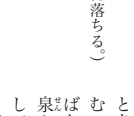
春花媚金井
乾山省昼（印）乾山・深省（二枚とも）

春花金井に媚び（秋葉墜銀牀に墜つ）
春花媚金井　秋葉墜銀牀　①
「百木門・梧桐」『詩學大成』十一『圓機活法』二十二

【大意】
春、桐花は金井に散り、（葉は秋、銀床に落ちる。）

【語釈】
春花　春華・春の花。
金井　井桁に美しく飾りを施した井戸。
媚　喜ぶ・従う・艶めく。
銀床　銀・白銀などで飾りを施した井桁またその井水。
墜　落ちる・落とす・失う。「墜葉」は落葉。

【参考】
1、出典は梧桐を詠じた五言詩。『詩學大成』『圓機活法』所収。両書には「花・光」①の異字がある。
2、宋代張*文潛の「七夕歌」には、
人間一葉梧桐飄
蓐収行秋回斗杓
とあり、梧桐は鳳凰の宿る木、鳳凰は甘泉を好むことから井戸脇に植えるが、「井梧」は井戸ばたの梧桐・青桐をいう。井戸は鳳凰の好む醴泉を意図するが、『和語圓機活法』には古詩として「井梧花落盡　一葉在銀床」とある。
3、『倭漢三才図会』によれば、「井」は周代の土地制度に礎があり、農民は九〇〇畝の田を井の字形に九等分し、中央は共同面、他の八面は八家各々に耕作することが定められていた。「井」は地を穿ち水を取ることであるが、井の中に点を入れる「井」は水を汲む釣瓶を象っているとし、井戸に物を投げ入れた時の音を「止牟布利」と表すという（『説文解字』）。大きく深みのある鉢、日本のどんぶり鉢の語源である。
4、長方皿は銹絵陶法である。



春苕媚金井　乾峯
印なし

＊張文潛（一〇五四―一一一四）字文潛、号柯山、楚州淮陰の人。宋代熙寧六年（一〇七三）の進士、起居舎人後屢々左遷。蘇軾門下、黄庭堅（山谷）・秦観らとともに四学士の一人となる。詩賦・散文に長じ、『宛丘集』がある。

□葉連金井

□葉連金井
乾山省昼　印なし

（密）葉金井に連なり（根を分かちて玉池を蔭う）
密葉連金井　分根蔭玉池
「樹木門・梧桐」『圓機活法』二十二
「百木門・梧桐」『詩學大成』十

【大意】
繁葉が井戸端を包み、根はしっかりと周りを蔽う。

【語釈】
密葉　密生した木の葉。ここでは繁茂した桐葉。
連　連なる・集まる。及ぶ。
玉池　美しい池。「玉」は美称。
蔭　草木に覆われて日の当たらない場所。木陰・日陰。

【参考】
1、出典は梧桐を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。乾山焼では「密」の字が判読不可。
2、類似の詩句には「野色連金井」（宋代呂渭老の「千秋歳」）、「分根蔭玉池　欲待高鸞集」（南朝梁沈約*「詠孤桐詩」『初學記』）などがある。
3、角皿は銹絵陶法である。

梧桐重実□鳳凰

桐梧重実□鳳凰
法橋光琳画
（底）乾山
印なし

梧桐は実を重ねて鳳凰を□（招）くの意か（出典不明）。梧桐は青桐。宮苑に植えられることの多かった落葉樹とされる。類似の詩句には、
不植梧桐争得鳳來　（『禅林句集』）
とあり、禅林では力の備わっていない所には賢人、英傑は集まらないとした意に解釈する。
また桐を切ってしまえば鳳凰を招くことは困難として「没有梧桐樹　難招鳳凰來」とある。

＊呂渭老・滏老（生没年不詳）北宋から南宋代の人。字聖求、浙江省・嘉興の人という。徽宗皇帝代宣和年間（一一一九―二五）の朝士とされる。
＊沈約（四四一―五一三）南朝梁の文学者、字休文、謚隱公、浙江省徳清の人。梁の武帝（蕭衍）代に尚書令となり、『晋書』『宋書』『高祖紀』などを編纂、「竟陵八友」の一人。「四声八病説」を提唱、唐代近体詩の平仄、離別詩などの基盤になったと評される。『沈隱侯集』がある。

柳

―中国―

一、生態

一、柳は柳科の落葉喬木・灌木、原産地は中国北方。朝鮮、日本など温帯・亜熱帯地方に分布する。湿地を好み、山野・田地・池沼川の周辺に生育、栽培種もある。漢名は楊・柳、和名は矢を作る木の意から柳、西洋名はウィロウである。季節は春を代表し、楊と柳に分派、楊は低木、枝は上に向き短く硬く強靱、葉は線状、円みのあるもの、先の尖ったものがある。池や川岸に育ち、庭木にも栽植されるが、木肌が細かく矢柄・楊枝、行李・箆などの細工物、梁や桁などの建築資材に用いられる。柳は高木、枝は細く柔軟、葉は皮針形、縁に鋸歯があり、霜雪に強く雨に湿って糸のように下垂する。木肌は細かく細工物に適し、趣きのある姿から庭木・並木・街路樹として栽植、早春に新芽が生じ、蓼花のような緑黄色の穂花をつける。花が終わると白い絮が風にのって飛散するが、柳絮と称し、晩春の中国北方の景物である。枝を土中に挿し込むとやがて柔らかな新芽が生まれ、観賞用・薬用、毒気のないことから調理道具にも活用される。

二、楊・柳の種類

(一) 楊類

① 水楊は日当たりの良い山野の水辺を好む。落葉低木。枝は短く、葉は丸みを帯びて先が尖り、葉より先に花が咲き絮を飛ばす。花穂が猫、犬の尾の如き猫楊、狗児楊も同種であり、強く靱、矢柄に適す。

② 白楊は和名赤芽柳、落葉高木。幹はやや白く、葉はやや大きく円みを帯びて先が尖る。花より先に葉は伸びるが若葉は赤褐色、赤芽柳の名の由縁である。撓り、堅直なことから楊枝、梁や桁に使われる。

③ 杞柳(行李楊)は朝鮮から渡来。落葉低木。細長い葉の裏面は白味を帯び、花穂は葉より先に開く。牛車などの轂、皮は剥いで行李や籠・箆、『孟子』には杯を作ったことが記されている。

(二) 柳類

檉柳(垂糸柳)は糸垂柳(之太里柳)、落葉高木。枝は長く下垂、地面につけば再生するといわれ、皮は赤味、皮針形の葉の裏面は白味を帯びる。葉は互生、伸びきらぬうちに花が咲く。山林、庭木・街路樹などに適し、柳といえば糸垂柳を指すという。雲龍柳も同種であるが、その他樺太柳・絹柳・山猫柳・岩柳・芝柳などがあり、異名には蒲柳・青楊・赤楊・独揺・三眠柳などがある。

二、故事・逸話・図像化

一、楊柳は冬に枯れ、春を迎えて一斉に芽を吹くことから生命力の象徴となる。松・柏は色を変えぬ所から永遠を象徴、貴族の墓所に多く植えられ、柳は庶民の墓地に多くみられる。古来栄枯盛衰、人生の儚いことの喩えとなり、邪気を払う呪力があると信じられたが、軒先や門、髪に挿し、禁火の寒食節後清明節には柳の枝を以って新たな火を起こす風習があり、上巳の節会、禊ぎ後に細柳圏と称し病を辟くため柳枝の圏を受ける、また旅人を見送る際には柳枝を折って環に結び(同心結)別れる人に贈る折楊柳の習わしなどが伝承する。環を還の意に託し必ず戻る、旅中の疲れた魂を繋ぎとめる意などがあり、霊力によって旅人の守りになると信じられた。枝は地に着けば再び木に成り、古来その生命力の強さが辟邪の力に結び付いたものといわれている。

柳の新芽は人の眼に喩えて「柳眼」、柔らかな枝は眉に喩えて「柳眉」、また綿毛をつけた柳の種子を柳絮という。早春葉の出る以前の黄花に対し、空を舞う白い綿は雪の如く晩春の中国北方の景物として知られるが、『詩経』にもあり、六朝頃から詩歌にも詠じられた。

二、官柳と称し、宮城の内外に柳を植えることは春秋・戦国時代に遡る。役所の管轄下、水溝をはじめ各主要道路の両側には無数の柳が植えられたが、柳並木は、隋代煬帝の築いた華北黄河と華中淮河を結ぶ大運河一三〇〇里の両岸にある御道が名高い。唐代には寂れたというが、劉禹錫の七言絶句「楊柳枝詞」には以下のようにある。

煬帝行宮扑水浜　　数株残柳不勝春
晩来風起花如雪　　飛入宮墻不見人

都大路を彩る街路樹、長安の柳は元稹、岑參も詠じたが、送別の意「渭城曲」には王維の七言絶句「送元二使安西」が伝えられ、

渭城朝雨浥軽塵　　客舎青青柳色新
勧君更尽一杯酒　　西出陽関無故人

「春夜洛城聞笛」に、

誰家玉笛暗飛声　　散入春風満洛城
此夜曲中聞折柳　　何人不起故園情

「折柳曲」は李白の七言絶句

とあり、曲を奏でる笛の音に望郷の念を深くした想いが詠じられた。

三、『群芳譜』は柳は生じ易い木と記している。『長物志』は上下そのまま挿し木をすれば楊となり、上下を逆に挿し木をすれば柳になるというが、水辺に植え柔らかな枝が水面を掠める趣きを好しとした。柔軟な枝の姿態から媚めかしい柳腰などの語も生じ、垂柳の一種、西湖柳（和名御柳）は聊か俗、白柳、風柳ともに見るべきものは無いと評した。矢を製したこともあり「矢の木」などの異名もある。

絵画では六朝代晋の顧愷之による「洛神賦図」が古いとされる。「竹林七賢人図」など、山濤（二〇五―八三）・劉伶（生没年不詳）図には柳が配され、春山水を描いて「柳桃山水」、桃や鴨を加え「柳桃賜宴」「柳桃舞鴨」、鷺を配して「一路栄華」「一路功名」、鶯を添えるなど「柳鶯便面」「柳浪聞鶯」などの画題が残る。

―日本―

日本へは奈良時代に渡来、『日本書紀』には以下のようにあり、

稲蓆川副楊水行けば　靡き起き立ち其の根は失せず

など、川に沿って生うる楊、流れに任せて靡いたり起きあがったり、『万葉集』にも楊・柳は、

山の際に雪は降りつつしかすがに　この河楊は萌えにけるかも
春の日に張れる柳を取り持ちて　見れば京の大路し思ほゆ

とあり、新芽の萌え出た柳の枝を手に取れば奈良の都大路が思われるとある。楊柳の判別も明らかであり、楊は未だ雪降る早春の川辺に生うる川楊、柳は唐の長安、奈良の平城京など、都に植えられていた街路に立つ垂枝柳を表すが、『文選』などの影響もあり、中国宮廷、民俗習慣をそのまま受容。傾城の入口や川端、村落の境界線、邪気を払う意からは家や門、髪にかざし、環に結んでは旅人の無事を願い、新年には楊箸を用い、餅の花を飾り、無病息災、豊年豊作を祈願した。異名には風見草・川根草・秋知草・春薄・遊草などがある。

三月長安柳　春風吹暮天
苍（花）飛玉溝水　葉傍漢宮煙

三月長安柳
春風吹暮天
乾山陶隱書
（印）乾山、尚古・
陶隱

苍飛玉溝水
葉傍漢宮煙
乾山省書（印）
乾山（逆）尚古・
陶隱
光琳筆

花飛玉溝水
葉傍漢宮煙
乾山尚古叁
深省昻　印なし
正徳年製（底）

三月長安の柳（やなぎ）　春風暮天（しゅんぷうぼてん）を吹（ふ）く
苍（はな）（花）は飛（と）ぶ玉溝（ぎょくこう）の水（みず）　葉（は）は傍（そ）う漢宮（かんきゅう）の煙（けむり）（烟）

【出典】

三月長安柳　春風吹暮天　花飛玉溝水
葉傍漢宮烟　繞岸猶堪折　臨流更可憐
故園無限樹　寒落戰場邊
（何景明詠長安柳・樹木門・柳）『圓機活法』二十一

花飛御溝水　葉傍漢宮煙
五言詩（散句）何景明・大復　木譜柳二
『廣群芳譜』七十七

【大意】

春がすみ、花咲く長安に柳が芽吹き、日暮れの空に枝が揺れる。雪のような柳花が禁中の堀に舞い、葉は宮殿の傍ら靄に霞む。（陽春の気配）

【語釈】

三月　陰暦三月。上巳の節句の頃。
長安　陝西省西安市の古称。前漢代高祖（劉邦*）が秦を滅ぼし紀元前二〇二年に王朝を設立、周代の封建制、秦代の郡縣制を取り入れ全国を統治、後漢代になり一時洛陽に都したが、漢・隋・唐代に渉り政治・経済・文化の中心地として繁栄した。唐代は東西一〇㌔、南北八㌔ほどの条里が整備、日本の平安京の模範となるが、宋代、都は開封（汴京）へと移された。
暮天　夕暮れの空。
飛花　散る花。柳絮。晩春から初夏にかけて種の表面の白毛が風に乗り雪のように舞い飛ぶさまをいう。北中国の春の風物。
玉溝　「御溝」に同じ。禁中の堀。「御溝水」は禁裏の苑中にある溝（川）。
傍ら　そば。
漢宮　漢王朝の後宮（宮殿）。西安郊外にあった。
煙　「烟」に同じ。靄。

【参考】

1、出典は長安の柳を詠じた明代何*景明の五言律詩。『圓機活法』『廣群芳譜』所収。乾山焼とは「煙・烟」の異字がある。類似の詩句には、
　滿街楊柳緑絲煙　畫出長安二月天
また「春風三月柳　吹暗大同城」（徐*禎卿）「暮春三月風日研　乱折花枝送酒船」（曾*懐渭）などがある。柳は春を代表するが、柳といえば枝垂柳のことであり、「折れない」精神、柔らかな線はなごやかさの表徴となる。
2、三月の長安は霞の棚引くなか花が咲き春柳が揺れる。元稹、岑嗣らの詩にもあるが、絵に描いたような景色であり、古に想いを馳せ、柳に囲まれた漢宮の春姿を詠ずる。風に乗って雪のように軽くとぶ柳の花は「柳絮」と称され、実が熟し、種子の綿毛が晩春の頃に盛んに飛ぶなど、北中国の春の風物といわれている。
3、老子は、柳の好まれた理由としてただ直に伸びるのみではなく、やがて生成の始源へと帰り来たることによるとした。去りゆく人に無事を祈り再来を期し、柳枝を贈る習わしの本居であるが、柳は古来植え易い樹木とされている。
4、額皿・角皿・香合、重色紙皿・長方皿は銹絵陶法である。

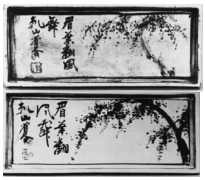
同讃作品

花飛玉溝水　乾山
省昻　印なし

花飛玉溝水　乾山省昻
（印）陶隱（尚古印は消え
たか）

＊劉邦（前二五六―前一九五）前漢王朝の創立者。字季。江蘇省沛の人。秦の都咸陽を占領、秦代の厳しい法を除き、人民の支持を獲得、楚漢の争いにおいて項羽（前二三二―前二〇二）を滅ぼし、中国を統一。長安を都に定め旧貴族を抑え、農を重んずる政策を成功させる。
＊何景明（一四八三―一五二一）明代文学者、字仲默、号大復山人、河南省信陽の人。弘治一五年（一五〇二）進士に及第、中書舎人、陝西省提学副使となる。文学の復古を主張、「前七子」の一人となる。唐代の李白・杜甫に擬え、明代李夢陽と合わせ「李何」と評された。『大復集』がある。
＊徐禎卿（一四七九―一五一一）明代官僚。字昌穀、呉縣の人。弘治一八年（一五〇五）の進士。大理左寺副となる。
＊懐渭（一三一七―七五）明代禅僧。字清遠、号竹庵、大欣禅師傳法懐渭。俗姓魏、江西省南昌の人。笑隱大訥和尚法門嗣子。

眉葉翻風舞　絲條映日垂



眉葉翻風舞
乾山省昼
（印）尚古・陶隱（二枚とも）

絲條映日垂　乾山省昼（花押）「爾」字型

【読み下し】
眉葉翻って風に舞い　絲條日に映じて垂る

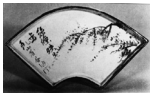
【出典】
眉葉翻風舞　絲條映日垂
「樹木門・柳」『圓機活法』二十二『詩學大成』十一

【大意】
柳の新枝が風に舞う。日に輝き色糸をさらすが如くだ。

【語釈】
眉葉　美しい眉のような柳条。「眉柳」は細い眉。美人の形容。
絲條　細い柳枝。「柳絲」は糸のように枝垂れている柳枝。
映日　日に照る・日に映える。「映日果」は無花果の異名。

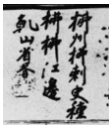
【参考】
1、出典は柳を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。春風に黄色の新芽をつけた細い枝が舞い、柔らかな日の光に幾筋もの糸のように撓む風趣をいう。「糸」は「思」に通ずるとされ、暗示の意がある。白居易の「長恨歌」「楊柳枝」など、「眉葉」「絲條」は楊・柳に多く使われる詩語である（『詩林良材』）。枝が垂れどこか弱々しいさまをいう。
2、『百癡禪師語』第二十六（清代・超宣等編）「題澹禪人柳軸」には以下のように類似の詩句ある。
眉葉翻風舞　絲條映日青
3、長方皿は銹絵、筒向付は銹絵染付の陶法である。

眉葉翻風舞　乾山省昼
（印）尚古・陶隱



絲條映日垂　乾山省昼
（印）尚古・陶隱

柳州柳刺史　種柳柳江邊



柳州柳刺史　種柳柳江邊
乾山省昼（印）陶隱

柳州の柳刺史　柳を種ゆ
柳江の邊

【出典】
柳州柳刺史　種柳柳江邊
「樹木門・柳」『圓機活法』二十二『詩學大成』十一

柳州柳刺史　種柳柳江邊　談笑為故事
推移成昔年　垂陰當覆地　聳幹會參天
好作思人樹　慚無恵化傳
柳宗元「種柳戯題」『柳河東集』四十二

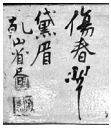
【大意】
柳州に赴任、柳刺史が柳江の畔に柳を植えたとした意である。（柳刺史は柳宗元。）

【語釈】
柳州　唐代の州名。広西省馬平縣柳州市、チワン族自治区内中央部。
刺史　中国古代制度の官名。地方官。漢代初期に始まり、地方長官として郡守の下一三州に各一人が配せられたが、魏晋代以後地方最高長官となり、隋・唐代は州知事。宋代になり官名は残るが廃止された。
種柳　柳を植える。「種花」は花を植える意。
柳江　川の名。源を貴州省に発する福淥江。

【参考】
1、出典は柳を詠じた唐代柳宗元*の「種柳戯題」と題した五言律詩。『圓機活法』『詩學大成』『柳河東集』『廣群芳譜』『全芳備祖』他所収。
2、柳宗元は永州司馬（湖南省）、一〇年後更に未開地柳州刺史に左遷、同地方の文身（刺青）・雑居・迷信などの風俗を改め、学校再開、善政を布き、四七歳の生涯を終える。「寒江独釣」など超俗の名吟を残し、唐宋八大家の一人である。
3、長方皿は銹絵陶法である。

＊柳宗元（七七三―八一九）唐代詩人・文学者。字子厚。山西省運城（河東）の人、貞元九年（七九三）の進士。王叔文（七五三―八〇六）らの提唱した順宗の政治革新に参加、失敗して湖南省永州に左遷、次いで柳州刺史となり、同地に没した。文学に長じ、山水詩にすぐれ、古文復興、腐敗した政治社会を詩・論に著す。「封建論」「天説」『柳河東集』などが残る。

傷春翠黛眉



傷春翠黛眉

乾山省㫖（印）尚古・陶隱

（日を弄ぶ黄金の色）春を傷す翠黛の眉

【出典】弄日黄金色　傷春翠黛眉

「樹木門・柳」『圓機活法』二十二『詩學大成』十一

【大意】（いきいきとした柳の新枝。）春を悩ます美人の眉のようだ。

【語釈】
弄　弄ぶ・巧みに扱う・戯れる。
黄金　純金・こがね。薄黄色の柳の新芽。柳の一種に「黄金柳」と称する柳がある。
傷　傷つける・悩ます・憂へる。「傷春」は春を傷むとした意から暮春をいう。
翠黛　緑の黛・美人の眉。眉墨で描いたような遠山の景「文君の黛は遠山の似し」（『文選』注）など、山、樹木の青黒い色。ここでは新芽をつけた春柳の軟らか枝をいう。

【参考】
1、出典は柳を詠じた五言詩句。『圓機活法』『詩學大成』所収。立春の頃、芽吹き始めた新柳は見るからに弱々しく、枝葉は佳人の眉を思わせ、髪を梳るようにそよぐとした意か。「青眼翠眉」「浅緑軽黄」は若い柳の色をいう。
2、唐代*王貞白「新楊柳詩」三首に「征人去日曾攀折　泣雨傷春翠黛殘」とあり、白居易にも「翠黛眉低斂」の詩句がある。
3、長方皿は銹絵陶法である。

梭風万縷垂

梭風万縷垂

乾山省㫖（印）乾山（花押）「爾」字型

（日に困じて三眠足り）風に梭して万縷垂る

困日三眠足　梭風萬縷垂

「樹木門・柳」『圓機活法』二十二『詩學大成』十一

【大意】（三度眠り三度起き、一日が終わる。）風の吹くままに糸のような柳枝が揺れる。

【語釈】
困　極まる・乏しい。
三眠　三度眠る。『三輔故事』「三眠柳」には、漢苑中柳　狀如人形　曰人柳　一日三眠三起とあり、『圓機活法』「温叟詩話」にも「三起三眠」など、漢の苑中には人に似た柳があり一日に三度倒れ三度起きたとする故事が伝わる。
梭風　横糸を通す機織り道具の梭を、吹く風に見立てたもの。
万縷　沢山の糸・糸筋のように細く長いもの。ここでは柳枝。

【参考】
1、出典は柳を詠じた五言詩句。『圓機活法』『詩學大成』所収。柳枝を縦糸、吹く風を横糸に見立て揺れる景色を詠ずるが、類似の詩句に唐代劉禹錫の七言絶句「千條金縷萬條絲」がある（『広群芳譜』）。
2、日本においても詠法、表現に細い柳枝が風に揺れる風情が多く、「青柳の糸」など枝を糸に見立て、「髪の玉柳」など緑の黒髪、「柳の稲筵」など稲穂の波の形容がある。
3、鉢目皿は銹絵、向付は銹絵染付の陶法である。

---

*王貞白（生没年不詳）唐代の人。字有道、信州永豊の人。乾寧年間（八九四―九七）の進士。校書郎となる。詩に長じ、羅隱、方干、貫休らとの唱和が知られ、『霊溪集』が残る。

梭風萬縷垂　乾山省（花押）「爾」字型

陌上垂楊柳　折來欲寄誰

陌上垂楊柳　折來欲寄誰
乾山省昻（花押）巾着型

陌上楊柳垂る　折り來って誰れに寄せんと欲するや

【出典】
陌上垂楊柳　折來欲寄誰　柔條初帶媚　密葉遠含滋
未喚具聞怨　先令郢客悲
只愁飄絮劇　容易度芳時
侍郎徐學謨折柳詩「樹木門・柳」『圓機活法』二十二

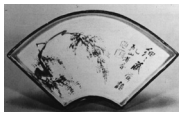
【大意】
畦の柳、折り来たって贈る意であるが、人の別れに枝を折ること、離別の情を繋ぐものとする。

【語釈】
陌上　「陌」は耕地の間の道。畦道の辺・道ばた・街道。「陌上人」は通りすがりの人の意である。
楊柳　川柳。葉が大きく枝は強いが脆い。枝垂れ柳・糸柳。葉が細かく枝は弱々しく垂れる。「柳陌」は柳の畦道。
寄　贈る・委ねる。心を傾ける。

【参考】
1、出典は柳を詠じた明代徐學謨*の「侍郎徐學謨折柳詩」と題した五言律詩。『圓機活法』所収。破線を施した聯句二句「柔條初帶媚　密葉遠含滋」は『乾山遺墨』中、絵画の讃にある。唐代戴*叔倫にも「堤上柳」とした句があり、唐・宋詩には「堤上楊柳」は屡々詠じられた。
2、「柳」は「留」の音に通じ、旅立つ人を留むる意を含むが、別離に柳の枝を折り環にして「環」を「還」の意、再び戻ることを願うなど送別の情も託される。柳には「千條、送行色」などの成語がある。
3、茶碗は銹絵染付の陶法である。

＊徐學謨（一五二一―九三）明代政治家・文学者、字叔明・子言、号太室山人、蘇州の人。嘉靖二九年（一五五〇）の進士。兵部主事、禮部尚書などに任じられ、『春秋億』『世廟識餘録』『徐氏海隅集』などを著す。
＊戴叔倫（七三二―八九）唐代詩人。字幼公、江蘇省金壇縣の人。撫州刺史、容管経略使となるが、帰隱への願望強く、晩年は道士を志したという。辺塞詩、叙景・叙情詩にすぐれ、『戴叔倫集』が残る。

細々蔵鶯語　垂々伴客衣



細々蔵鶯語
（上）乾山省昻
（印）乾山・深省
（下）乾山省昻
（印）尚古・陶隱

垂々伴客衣
（上）乾山省昻
（印）乾山・深省
（下）乾山省昻
（印）尚古・陶隱

【読み下し】
細々として鶯（鶯）語を蔵し　垂々として客衣を伴う

【出典】
細細蔵鶯語　垂垂伴客衣　①
「百木門・柳」『詩學大成』十一『圓機活法』十二

【大意】
枝の中には鶯が住む、柳糸がそれを繋ぎとめるなど、柳に鶯、旅人の想いを慰める意がある。

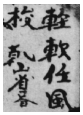
【語釈】
細々　軽やかな様子をいう。
鶯語　鶯の囀る声。「鶯舌」も鶯の鳴き声。
蔵　蔵す・隠れる・潜む。
垂々　垂れ下がるさま・次第に。
客衣　旅で着る衣服・旅衣。客袖。
伴　連れ・伴侶。侍る。白居易には伴侶の意から「花伴」など「老いては遊冶を辞し花伴を尋ね、病みては荒狂の旧酒徒に別る」とした詩がある。

【参考】
1、出典は絲柳を詠じた五言詩。『詩學大成』『圓機活法』所収。両書には「伴・絆」①の異字がある。伴うまた絆は物をつなぎ止める意に用いるが、柳が風に靡く音、鶯が隠れているのではなど、林の中で囀る鶯はまるで「春鶯囀」を弾じているように聞こえるとある（『和漢朗詠集』）。春只中、ゆらゆらと定まりなく揺れる柳は、また定まりなく行く旅人の慰めとなる。
2、長方皿・扇面皿・入角四方皿・丸皿など、図中の点々は新芽を表し、陶法は銹絵、下段筒向付は銹絵染付である。

細々蔵鶯語　乾山省昻
（花押「爾」字型）

細々蔵鶯語　乾山省昻
印不明

輕軟任風梭



輕軟任風梭
乾山省昏（印・裏）乾山・深省

（蕭踈雨織に隨い）輕軟風梭に任す
蕭踈隨雨織　輕軟任風梭
「樹木門・柳絲」『圓機活法』二十二
『詩學大成』十一

【出典】
葉葉新長約黛蛾　絲絲輕軟任風梭
啼鶯便学歌喉囀　知是春来舞意多
七言絶句　韓琦（宋）「再賦柳枝詞二闋」
『廣群芳譜』七十七

【大意】
糸のような柳が風になびき、雨を帯びてしなやかに撓む。

【語釈】
蕭踈　草木の葉などが落ち寂しく疎らなこと、がらんとして清致のある様子。
雨織　機織りの糸筋のように降る雨。雨の糸を機糸に見立てる。
輕軟　軽く軟らか。柳の撓むさま。
梭　おさ・杼。横糸を通すために用いる機織りの道具。

【参考】
1、出典は絲柳を詠じた宋代韓琦*の「再賦柳枝詞二闋」と題した七言絶句。『廣群芳譜』所収、「葉葉・絲絲」を省いた五言詩句は『圓機活法』『詩學大成』所収。
2、乾山焼は五言詩に従うが、詩句を補うべく図には柳枝を描き「糸」を表し、新芽を添える。柳枝を縦糸に、風が梭となり春の景物を織りなすものと想定する。
3、入角四方皿は銹絵陶法である。

＊韓琦（一〇〇八―七五）宋代政治家。字稚圭、号懇叟、河南省安陽の人。天聖年間（一〇二三―三二）の進士。有司諫、陝西省安撫使、枢密使などを歴任、范仲淹（九八九―一〇五二）とは同期である。『安陽集』が残る。

細葉復迎春

細葉復迎春
乾山省昏（印）　乾山省昏（印）
陶隱　尚古・陶隱

（長條還って舊に似たり）
細葉復た春を迎う

【出典】
長條還似舊　細葉復迎春
「樹木門・新柳」『圓機活法』二十二『詩學大成』十一

【大意】
（長い柳の枝が伸びて地に帰り一巡）新芽が芽吹きまた春を告げる。

【語釈】
長條　細く長い枝。
還　立ち帰る・古巣へ戻る。廻らす。再び。
舊　昔・古くから・久しい。
細葉　柳の新葉。細かい葉。
復　繰り返す・戻る・報いる。

【参考】
1、出典は新柳を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。「長條」「細葉」は唐代以来柳詩に多く用いられる。
2、「桃は夭夭、柳は依依」など、水に随い流れる花片、軽々と風に吹かれる柳枝は、春の景物として早くから代表的な組み合わせとなる。
3、重色紙皿・長方皿は銹絵陶法である。

柳緑花紅

柳緑花紅　乾山昼　印なし

柳は緑花は紅
花紅柳緑
「時令門・春」『圓機活法』一

緑の春柳、紅の花々、映じ合う色鮮やかな春色をいう。

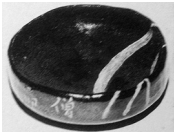
【語釈】
柳緑　春の新緑。柔らかな新芽がやがて青々とした柳の葉に成長する。
花紅　春咲く紅い花。桃や杏。
時令　年中行事・時節。

【参考】
1、出典は春の大意、四言句。『圓機活法』所収。類似の詩句には蘇軾の七言詩「柳緑花紅眞面目」、元代王子熙*の七言絶句（「上都柳枝詞」『廣群芳譜』）に以下のようにある。

　　儂在南都見柳花　花紅柳緑有人家
　　如今四月猶飛絮　沙磧蕭蕭映草芽

2、禅林では柳は緑、花は紅の意は自然のまま、一つ一つの物の姿が法界の顕現であると説く。柳は道を求める修行者の友とされる。
3、茶碗は楽焼である。

僧叩



僧叩　乾山画　印なし

（鳥は宿る池中（辺）の樹）①
僧は叩（敲）く（月下の門）
　鳥宿池中樹　僧敲月下門
「釋老門・詩僧」『圓機活法』九

【出典】
閑居少鄰竝　草徑入荒園　鳥宿池辺樹
僧敲月下門　過橋分野色　移石動雲根
暫去還來此　幽期不負言
賈島「題李疑幽居」『三体詩』

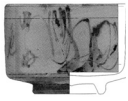
【大意】
（閑夜、鳥は池中の木立に宿り）僧がひっそりと月光に照らされた寺門を叩く。

【語釈】
池中　池の中。「池中樹」は池の中に立つ木立。
僧　梵語「僧伽」の略。仏道に入って道を修める者の称。心安からざるさま。
叩　叩く・啓発する。「敲」は打つ・叩く音。

【参考】
1、出典は唐代賈島*の「題李疑幽居」と題した五言律詩。『圓機活法』『三体詩』他所収。翻刻には「池中・池辺」①の異字があり、茶碗には「僧叩」の二字のみが記されている。楽茶碗は黒、背景のひっそりとした月夜に柳が浮かび、禅門を叩く僧の姿を彷彿させる。
2、禅林では現成底の妙景と解釈するが、賈島は同詩中「僧敲」か「僧推」か に迷い、驢馬に乗り思わず大尹（長官）韓愈の行列に突っ込んでしまったが、韓愈の勧めにより「敲」に決した逸話が伝わり、字句や案を練ることを「推敲」と称するが、その故事の本居とされる。
3、茶碗は楽焼である。

乾山風陶器出土例

（若青）山色好
銘なし　新宿区
市谷左内町遺跡
出土



（若青）山色好
銘なし　千代田
区飯田町遺跡出土

水柳か　銘な
し　新宿区坂
町遺跡出土

春色は乾山焼蓋茶碗・向付・汁次などに春*草を描いたものがある。茶碗蓋、胴部、見込みへと文様は移動、白化粧を施し山・山道とした上に春草を描くなど、器物の扱いを充分心得、鉄・呉須・色絵具を巧みに用いる。

＊王子熙・構子（生没年不詳）字継学、山東省の人。元の英宗代（一三二〇―二三）、翰林待制、のち中書参知政事となる。
＊春草文様は、野山に生うる春の草花を取り混ぜ意匠化したものである。杉菜：茎の節に葉が生じ叢生すると杉のようになる。土筆：杉菜と共に生える。形状が筆の頭に似る。蕨：一二三月に芽を出し、生長すると鳳凰の尾のようになる。蒲公英：花は菊に似るが、咲き終わると白い絮を飛ばし種を散らす。蓮華：春、苗が出て地を這い節から茎、花が咲く。菫：葉は根元に重なり茎はなく、花は下向きに咲く。葎：春に苗が出て八九月頃に花が咲く、などである。秋草文様もある。
＊賈島（七七九―八四三）唐代詩人。字閬仙（浪仙）、河北省范陽の人。僧籍にあり無本と号したが、韓愈に認められ還俗。科挙には及第せず、遂州・四川省長江の主簿に任じられる。詩にすぐれ、白居易、元稹らの平易性を斥け苦吟を重ね、推敲の人として知られるが、孟郊とともに「郊寒島瘠」と評された。『賈浪仙長江集』がある。

楓

―中国―

一、生態

一、楓は楓科の落葉喬木・灌木、中国・朝鮮・シベリアほか亜高山帯に分布する。が、漢名楓と和名楓には相異があり、秋に紅葉、葉が類似するなど、渡来時から誤認されたといわれている。日本では乎加豆良、葉が蛙の掌のように裂けていることから蝦蟇手（鶏冠木）、西洋名はメイプルであるが、季節は秋を代表し、中国の楓は満作科の落葉喬木、南方の高山に生育、高く聳える大樹である。枝が弱く風に揺らぐことから楓の文字を当てたとするが、葉は対性、切れ込みがあり先が尖り三角形、春に白色の花を咲かせる。秋霜後に葉は紅色に染まり落葉する。異名は楓楓という。日本の楓は蝦蟇手木・蝦手、晩秋に葉が赤や黄色に変わる紅葉づの意から鶏冠木（鶏頭樹）の文字が当てられた。葉は対性、晩春葉より先に小さな黄色の花を咲かせ、翼果と称する翼のある果実が生じ種子を飛ばせる。高木・低木、葉に切れ込みのあるもの・ないもの、掌状の五尖七尖九尖・卵形・長楕円形、縁の鋸歯の有無など、秋に紅葉・黄葉するものなどに分けられる。

二、楓の種類（葉の深く分裂したもの（一）、浅いもの（二））

（一）① いろは楓は山地に分布する落葉喬木、栽植もある。葉は七尖に分裂、それを「いろはにほへと」と数えたことから名付けられたが、春に花、翼果がつき、秋に紅葉する楓である。

② 山紅葉（野楓）も山地に自生、落葉喬木。栽植もあるが、柄は長く葉はやや大、花は葉よりもわずかに早く開花する。

③ 羽団扇楓は落葉喬木。葉形が天狗の持つ羽団扇に似たところからの名称である。月下に落葉を楽しむとして名月楓の別名もある。

④ 麻葉楓（深山紅葉）は低山地に生育する落葉小高木。葉は五尖、切れ込みが麻の葉に似るが、花は短い総の形をした総状花序である。

⑤ 峯楓は高山の低地に多い落葉低木・小高木。葉の裏面脈ぞいに褐色の軟毛があり、花は夏、小さな品種を小峯楓という。

⑥ 麻幹花は落葉小高木。麻の茎皮を剝いだ麻幹に似たことからの名称という。葉裏の脈ぞいに淡褐色の軟毛があり、花は夏に咲く。

（二）① 板屋楓は低い山地に生える落葉喬木。葉は対性、五尖、切れ込みが浅く鋸歯がない。板屋根を葺いたように繁茂し、名の由来となるが、花は晩春、黄ばむが紅葉しないことから常葉楓、蔦黄葉の別名もあり、楽器や板細工に適するという。

② 鉄楓は木の黒いところからの名称とされる。落葉喬木。葉には鋸歯、若葉には軟毛があり次第にとれる。花は総状花序、夏に開花する。

③ 花楓（天然記念物）は落葉喬木。葉に先だち春に赤い束生の花をつける。葉は浅い切れ込み、鋸歯、秋に紅葉、山間の湿地を好む。

④ 瓜楓は落葉小高木。茎が瓜に似るとされ、葉の切れ込みはほとんどなく縁には鋸歯がある。箸や細工物に使われる。

⑤ 細柄楓は落葉喬木。花柄の短いことによる名称である。葉の分裂はなく、花は総状花序、下垂して晩春に葉と同じ頃に咲くという。

⑥ 円葉楓・一葉楓は落葉喬木。葉が丸みを帯びて切れ込みがなく、初夏に花、秋に葉が黄色に染まる。

⑦ 山柴楓は落葉喬木。紅葉せず枯葉のままに冬を越す。薪にされるところからの名称であり、葉は対性、春に小さな花が咲く。果序

の形から千鳥の木とも呼ばれるという。その他、三手楓は落葉喬木。葉は小形、三つの深い切れ込みをもち、薪や炭、細工物に用いられる。梶楓は別名鬼紅葉。落葉喬木。梶の葉に似た葉形から名付けられたが、唐楓は中国原産の落葉喬木。江戸時代享保年間（一七一六―三六）に渡来したという。樹皮は黄味を帯び、葉は三尖、浅い切れ込みがある。目薬の木は落葉喬木。長者の木とも呼ばれ、葉は複葉、先が尖り長楕円形、樹皮を剝いで煎じ、洗眼に活用したと伝えられる。

二、故事・逸話・図像化

楓は『楚辞』「招魂」に宋玉の作として以下のようにある。

皐蘭被徑兮斯路漸　湛湛江水兮上有楓

楓樹は黄河以南揚子江流域に多くみられ、戦国時代楚の境界地であったこの辺りは紅葉の美しいことで知られていた。漢代宮殿にもあり、霜後、黄や紅に染まり落葉する楓樹は早くから詩人文人らの愛した花木の一つであった。が、これらの楓樹は今日いう和名の楓ではなく、別名楓香、吹く風に揺れるところから楓の文字が当てられた。

紅葉には紅葉・黄葉の別がある。中国では六朝期から唐代前期頃までは黄葉、唐代中期から紅葉が多く使われるようになったされ、紅葉は紅く染まる蝦手・鶏冠木の類、黄葉は黄色に染まる桐・銀杏などの落葉樹をいうとする。杜牧の七言絶句「山行」には、

遠上寒山石径斜　白雲生処有人家
停車坐愛楓林晩　霜葉紅於二月花

霜に打たれ色を変えた楓葉が、春の盛りの花よりも紅鮮やかだとある。『宣和画譜』にはないが、宋代頃には画題として「丹楓呦鹿図」「秋山遊鹿図」「楓鹿図」などがある。

―日本―

日本の特産種、中国、他国から渡来したものがあり、山地に自生、園芸種もある。植物名に「もみじ」はなく、もみじは秋になり草木の黄葉・紅葉することをいう。多くは楓に代表されるが、古くはかつら・をかつら、奈良時代には黄葉の清音、平安時代に紅葉の文字を当て濁音になるが、一説に六朝から盛唐までの詩文に倣い「黄葉」、『白氏文集』などその後に渡来した晩唐頃の表現を倣い「紅葉」を用いたとされる。

『古事記』では楓・香木の文字を当て、神聖なる桂の意、『万葉集』では黄葉を用い（人麻呂の歌序）、

大船の渡の山の黄葉の　散りまがいに妹が袖　さやにも見えず

楓を蛙手としたものに（大伴田村大嬢）、

我がやどに黄変蝦手見るごとに　妹をかけつつ恋ひぬ日はなし

平安期には身に沁む秋の侘びしさを奥山の紅葉と妻恋う鹿の声に、

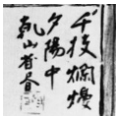
奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の　声聞くときぞ秋は悲しき（猿丸太夫）

屏風に描かれた紅葉を題に、在原業平には以下の和歌がある。

千早振る神代もきかず龍田川　からくれなゐに水くくるとは

『源氏物語』には紅葉賀の観楓の宴。室町期には謡曲の『紅葉狩』など、春の花に対して黄色、紅に染まる楓、蔦は秋の景観、情念を彩るものの一つであった。見立てとしては錦に喩え、紅葉重ねの衣裳や紅葉笠、紅葉合わせの遊びなども考案されたが、江戸時代には和歌や物語、それらを絵画化した情景や図柄が流行、種々の工芸図案に活用された。観賞、薬用のほか、楓は建築用材、楽器などの製作にも使われており、異名には毛美知・秋つ葉・紅葉・妻恋草・錦草などがある。

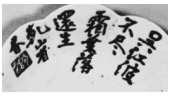
千枝爛熳夕陽中



千枝爛熳夕陽中
乾山省旱（印）陶隱

（幾ばく樹か飄零す秋雨の裡（裏））
千枝爛熳たり夕陽の中

呉江波不尽　霜葉落還生



呉江波不尽　霜葉落還生
乾山省旱（印）陶隱

呉江の波尽（盡）きず
霜葉落（謝）ちて還た生ず　①
呉江波不盡　霜葉謝還生

『圓機活法』二十二『詩學大成』十一

【出典】
天留佳景畫難同　玉露凋残葉畫紅
幾樹飄零秋雨裡　千枝爛熳夕陽中
呉江恍若晴霞照　楚岸渾如野火烘
回首不知光景換　等閑零落逐西風
唐荊川詩「樹木門・楓」『圓機活法』二十二『詩學大成』十一

【大意】
（ひらひらと秋雨のなか紅葉した木の葉が舞う。）爛漫と夕陽に耀き美しい。

【語釈】
飄零　木の葉がひらひらと落ちる様子。「零」は草葉などが枯れて落ちるさまをいう。
裡　「裏」に同じ。うち・中。
千枝　「千朶」。多くの枝。「千枝爛」は唐代李賀の名句「河陽歌」の一部。

【大意】
果てしなく満々とした呉江の流れ、落下した紅葉（木の葉）もやがてまた生き返るのだ。

【語釈】
呉江　呉江と淞江。太湖から流れる最も大きな川であるが、俗に蘇州河と称している。
杜牧　「杜秋娘詩并序」には、
呉江落日渡　瀾岸緑楊垂
とある。杜秋娘は江蘇省鎮江の人。杜牧は旅先で秋娘の数奇な運命を聞き、その境涯に詩を作るが、「娘」は一般に女性に対する称という。
霜葉　霜のために紅や黄色になった葉。紅葉。
謝　凋む・衰える・落ちる。この世を去る意。
還　再び・また・立ち戻る。
爛熳　「爛漫」に同じ。煌びやか。

【参考】
1、出典は楓を詠じた明代唐荊川の七言律詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。両書には「裡」「裏」の異字がある。紅葉は地に落ち、天は冷風、夕方の時雨が一過、一層心にしみる情景である。落葉は落ちる、哀れ、悲しみを表徴する。
2、長方皿は銹絵陶法である。絵画とは「枝」「般」の異字がある。

絵画　紅葉図画讃
「幾樹飄零秋雨裡　千般爛熳夕陽中」

【参考】
1、出典は楓を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。乾山焼とは「落・謝」①の異字がある。
2、呉江の楓は、日本におけるもみじと竜田川の関わりに似るが、徐々に詩句として定型化。「楓」は「封」に同音。侯爵に封ぜられるとした意がある。杜甫の七言律詩「登高」に、
無辺落木蕭蕭下　不尽長江滾滾來
とある。呉国は春秋時代の列国の一つであり、揚子江下流沿岸を領有していた。六世紀、朝鮮半島を経て日本へ渡来した最古の漢字音「呉音」は、この呉地方において使われていた発音である。今日も多く仏教語にみられる。
3、輪花皿は伊万里地色絵陶法である。

＊李賀（七九〇？―八一六？）唐代詩人。字長吉、河南省宜陽の人。韓愈に認められ、奉礼郎となるが、のち辞職、帰郷し二七歳の若さで没する。佳句が浮かぶと下男の背負う袋に投げ込むなど逸話が伝わる。
＊唐荊川（一五〇七―六〇）は順之とも称した明代兵書著述家。字應德、号荊川、謚襄文、常州の人。嘉靖年間（一五二一―六七）右僉都御史などを務め、倭国に対抗した英雄とされる。彼の「日本刀歌」は日本において知られたという。『荊川集』が残る。
＊杜牧（八〇三―五二）唐代詩人。字牧之、号樊川、陝西省西安の人。太和二年（八二八）進士に及第、史部員外郎、地方官から中書舎人に至る。揚州において風流三昧、風流才子と呼ばれたが、着眼力、造句の巧みさから晩唐随一の詩人と評された。『樊川文集』がある。
＊呉音は五、六世紀前後大陸・半島から渡来した漢字音をいう。『論語』『千字文』ら、仏教経典、易・暦・医学書などがあり、百済を経由したこともあり「百済音」ともいう。一いち・人に」にん・下げなどが一例。

一夜起霜風　千林木葉紅

一夜起霜風
千林木葉紅
乾山省㫖（花押）「爾」字型

【読み下し】
一夜霜風起こり　千林（水邊）の木葉紅なり　①

【出典】
一夜起霜風　千林木葉紅
「竹木門・紅樹紅葉」『圓機活法』二十二
『詩學大成』十一

【大意】
霜と風、一夜明けると、木葉が一斉に赤く染まる。

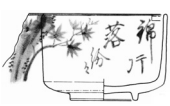
【語釈】
霜風　霜と風。寒冷の訪れをいう。
千林　多くの木々・千樹。秋に紅葉する楓の総称。「晩林紅」とすれば夕陽に照らされ、林も紅の意となる。
紅　鮮やかな赤色。ここでは紅葉する木の葉をいう。

【参考】
1、出典は紅樹を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。乾山焼には「千林・水邊」①とした二手がある。楓は日本種とは相異するが、もみじは紅葉する木々の総称とされる。
2、杜牧の七言絶句「山行」には、
停車坐愛楓林晚（ていしゃのぞんあいふうりんのくれ）
霜葉紅於二月花（そうようこうおにがつのはなよりもくれないなり）
とある。晩秋の黄昏時、楓の木立は春に咲く花より鮮やかとした風趣をいうが、類似の詩句には以下がある（夜・夕）「木葉・墜暁」の異字）。
一夕起霜風　千林墜暁紅　無端遂流水
流向武陵東（『圓機活法』『詩學大成』『樊川文集』）
王建「牡丹」五言排律にも次のようにある。
一夜輕風起　千金買亦無（『廣群芳譜』三十四）
3、茶碗は銹絵染付の陶法である。

一夜起霜風　水邊木葉紅　乾山省㫖（印）尚古

漢音は七世紀以降遣唐使らがもたらした隋・唐代、長安・洛陽で使われていた音。唐音は一二世紀以降禅僧、商人らが伝えた宋・明・清代の長江下流に伝承した発音とされる。呉・漢・唐音の相異は明・明・明などである。

乾山風陶器出土例



錦片落紛々
銘なし　萩藩毛利家屋敷跡出土

（錦片）落紛々
銘なし　新宿仲の町遺跡出土（根来組屋敷跡）

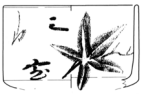
【読み下し】
（霜刀紅葉を箭り、）錦片落ちて紛々たり

【出典】
霜刀箭紅葉　錦片落紛々
「樹木門・楓」『圓機活法』二十二

【大意】
（霜が降り紅葉した葉が舞い落ちる。）錦のように色鮮やかだ。

【語釈】
霜刀　光る霜を刀に見立てる・霜のように光る鋭い刀。冷たい秋風をいう。
箭　弓矢の意であるが、ここでは切るの意。
錦片　美しく紅葉した木の葉。「錦」は美の喩。「片」は薄く平らな物を数える語。
紛々　入り混じって乱れるさま。多い・衆多。

【参考】
1、出典は楓を詠じた五言詩。『圓機活法』所収。霜がおり、秋風が吹き、刀のように紅葉を切り落とすが、地面には錦のように落葉が散り敷かれたとした意である。
2、出土品は大半が武家屋敷跡から出土した乾山風陶器（茶碗）陶片である。



三室山　銘なし　文京区日影町出土

*三室山は、奈良県生駒郡斑鳩町竜田にある山である。山麓を竜田川が流れ、古く紅葉・時雨の名所として知られるが、三室は神の座（かんなび）する所の意である。（歌枕）神南備山。

*三室山・紅葉図のある所から情景は日本と推定したが、出典は不明である。三室山・竜田川は古来紅葉の名所である。早くから和歌にも詠われ、「三室山秋の木の葉のいくかへり　下草かけてなほしぐるらむ」（前右兵衛督爲教）、「あらしふく三室の山の黄葉は　竜田の川のにしきなりけり」（能因法師）などがある。

茶

―中国―

一、生態

茶は山茶科の常緑灌木。原産地は中国、東インド・アッサム地方。東南アジア・日本などの温暖な山地に分布。漢名は茶・茗、和名は漢名の音読みから茗・茶、西洋名はティーである。花は秋、葉は春から初夏を代表し、自生、栽培もあり、種子から育て三年ほどで嫩葉を摘むことができるという。葉は互生、長楕円形、縁には鋸歯、光沢があり、飲茶用の葉は節分後四八日から八八夜頃まで葭簀を施し、「二十四気」中穀雨（現四月中旬）の前五日頃に摘み採った嫩葉を上物とする。次いで後五日、さらに再五日に摘んだ葉を良しとするが、それを蒸し、焙り、発酵させ、時には塩、生薑などの香辛料を加える。大雑把には手で揉み固めたものが団茶、臼で挽き粉末にしたものが碾茶、揉んで棒状にしたものが煎茶であるが、中国茶は常緑低木、枝も太く葉も大きく、タンニンの多いことから苦みが強く苦茶と呼ばれ、アッサム茶は常緑高木（栽植には低木状に作る）、葉はやや薄く先が尖り、インド、セイロン地方に生育する。タンニンが多く紅茶となるが、大方茶葉はこれらの二種が中心であり、品種、生産地、飲茶の風習に随って製法なども相異する。異名には檟・茦・蔎・龍芽・瑞草・代酒従事・不夜侯などがある。

二、故事・逸話・図像化

一、茶は神農代に始まり、漢代頃から飲茶、晋代・六朝期には薬用として南方の人々に愛されたという。南方に生育。栽培は揚子江沿いに広がり、飲茶の風習も久しく南方に限られたが、唐代には北方へと普及、禅宗の発展が大きな役割を果たしたという。渇きを癒し眠気を除くものとして飲用されたが、山東省泰山の霊巌寺降魔師に始まり、風習は僧俗を問わず長安、洛陽の都へと伝播、城市には茶坊、茶肆などが出現したと伝えられる。名茶が作られ、良茶は課税の対象となるが、福建省の茶は朝廷にも供されたと伝承する。

二、茶の歴史、製茶・飲茶法は唐代陸羽・鴻漸（？―八〇四）の『茶經』に詳しい。「茶者南方之嘉木也」とし、茶の源から一〇項目、道具・用具・茶器・製茶法・飲茶法・逸事・産地・茶の図などが纏められた。

（一）茶の造り方

茶葉は二月から四月までの晴天の早朝に摘み、竹籠に入れて持ち帰る。甑（蒸籠）に入れて蒸し、臼に入れて杵で搗き、承（台）の上で鉄製の規（型）に入れて固めるが、円・四角・花型にした団茶（餅茶）を簀子の上で乾燥させ、乾いた団茶は孔を開け竹串に通し、焙（焙炉）で炙る。貯蔵には竹で編み紙を張った「育」が用いられた。

（二）茶の煮立て方

鋏で団茶を撮み、返しながら火に炙り、気の散らないよう熱いうちに紙囊（紙袋）に入れ、寒えてから碾を用いて粉末にし、羅にかけて合蓋に移す。湯を沸かす燃料は木炭、薪ならば桐や櫪。水は山水を上、江水を中、井戸水を下とし、湯の沸き具合は第一に魚眼のような湯玉が生じ微かな音、第二に縁に連珠のような湯玉が生じ、第三は波浪のような沸騰音を目安とする。水量に合わせ第一沸の折り釜の中に塩少々を入れるが、第二沸では湯を一瓢汲み出して置き、竹筴（竹箸）で釜の湯を勢いよくかき回しそこへ適量粉末にした茶を入れる。湯の煮えかえるのを待ち先に汲み出した一瓢の湯を釜に戻すが、これに

よって沸騰は納まり「茶華」を損なうことなく湯とともに飲むという。

（三）茶の飲み方

釜中で煮た茶の粉末は表面に浮く「華」、少し大きい「沫」、底に溜まる「茶滓」に分離する。飲むのは華と沫、三碗までは続けて飲み、ひどい渇きの時以外はそれ以上は飲まないとする。茶は浅葱色（白緑色）、故に碗は越州窯の青磁を好しとし、赤・黒く見える白磁・褐色磁器は不適であった。河南省小室山に隠棲した玉川子・盧仝（七九〇？―八三五）は「茶歌」（諫議孟幾道から贈られた新茶を謝して）を残すが、一碗は喉や口を潤し、二碗は憂いを去り、三碗は腸に沁み渡り、四碗で軽く汗をかき平素の不平は消え失せるが、五碗肌骨も清々しく、六碗では仙人になったような気分になる。七碗はもはや不要とするが、同歌は日本においても多くの茶人に親しまれた。

茶室の起源もここにあると考えるが、寺院には茗所があった。茗所とは茶寮のこと、茶寮は山斎の側に構える小さな寮をいうが（『遵生八牋』『考槃餘事』『長物志』）、道具を設え、童僕を置き、幽居に備えるとする。日本における茶室の本拠、侘茶の本居もこの辺りにあると思うが、茶を描いた図は見当たらず、人物を描き、『後素集』（狩野一渓・重良）には「陸羽烹茶図」（陸羽）、「東坡海南烹茶図」（蘇軾）、渓水を取り茶を煮る「敲氷煮茶図」などの画題がある。

―日本―

原産種、中国からの渡来種がある。記・紀、『万葉集』にはなく、遣隋使・遣唐使がもたらしたとし、平安期には近江坂本・畿内・丹波・播磨などに茶園があった（『延喜式』）。弘仁年間（八一〇―二三）には近江志賀唐崎、梵釈寺に参詣した嵯峨天皇に僧永仲は茶（団茶）を献じたとあり、鎌倉期、明庵栄西（一一四一―一二一五）は中国から茶種を伝え、佐賀背振山に植栽、明恵上人（一一六三―一二三二）はその種子を得て後鳥羽上皇より下賜された梅ヶ畑栂尾高山寺に植えたとする。宇治にも移植、今日の日本茶の元となるが、室町初期には闘茶が流行、栂尾茶を本茶、地方の茶葉を非茶と称し、飲み分ける競いごとが盛行する。義満時代、宇治の茶園（七つ）は本茶の産地として名をあげるが、義政時代には今日につづく茶の湯が成立（書院の茶）、下京では数寄屋の茶、桃山期には千利休（一五二二―九一）が侘茶を大成。武家の茶は古田織部、小堀遠州、京都では金森宗和が「姫さび」を雅趣とした。

茶は眠気を覚まし頭や目を清々しくさせるめざまし草である。中国からは唐代の団茶・飲茶法が伝播、奈良時代には引茶の節会が始まり、大極殿における季御読経中（四日間）、二日目には仏前に供えた茶が衆僧に施された。鎌倉期には栄西、道元が宋代抹茶法を伝えたが、茶礼が成立、施茶は寺院や僧侶を中心に大衆化の道を歩む。江戸期は黄檗禅の移入もあり、新たな煎茶の飲茶法が伝えられた。茶の湯は以後抹茶道・煎茶道が盛んになるが、煎茶の製法には、蒸しと炒りの二手があり、葉の酸化酵素の働きを抑え、変色や劣化を防ぐために行われる。徐々に古式の釜炒り法は蒸し式に変化、今日では蒸し時間の長短により浅蒸し、深蒸しなどと呼ばれている。中国には碾茶を餅にして日に晒し腰壷などに入れて持ち歩き、行く先々で湯を注いで飲む蝋茶、小児の瘡を治すとして竹筒に茶の粉末を入れ泥中に置き時を経て取り出し搗いたのち熬る孩児茶、葉の形が茶に似た皐蘆を揉み砕いて湯を入れて飲む皐蘆（南蛮茶）などがあるという（『倭漢三才図会』）。染料としても活用、異名には草人木・目覚草などがある。

茶鐺香煮雪　硯墨暖生雲

讃拡大図

茶鐺香煮雪　硯墨暖生雲
客散開門笑　苔堦鳥篆文
乾山陶隱書

(甲)乾山、尚古・陶隱

茶鐺香しく雪を煮たり　硯墨暖にして雲を生ず　客は散じて門を開いて笑う　苔堦鳥篆の文

【出典】
茶鐺香煮雪　硯墨暖生雲
客散開門笑　苔堦鳥篆文
濮陽傳「訪李衡小集」「飲食門・茶」『圓機活法』十五

【大意】
積もる雪を煮て名茶を楽しみ、墨を摺って山水画を描く。時移り清談も終わり門を開ければ客は笑みを残して去ってゆく。階段には篆書のような鳥の足跡が残る。

【語釈】
茶鐺　茶釜・鑵子。直接火にかけることから銅で造られたものが多い。
香雪　茶の異名。雪を水の代用としたことに因む。香りある雪の意もある。
硯墨　硯と墨。「硯屏」は硯の前に立てる塵除けの衝立をいう。
雲　湿り気。盛んなことの喩。「暖生雲」は仏教詩に多い表現。
開門　門を開く。「開門笑」とは、
　荷策知君待　開門笑我遅（皎然*）
　出門一笑大江横（黄庭堅）　など、
門を出て気分を変える意に用いられる。
苔堦　苔むした階段・きざはし。
鳥篆　鳥の足跡。古人の篆書の文字に似ている所からの称。

【参考】
1、出典は茶を詠じた明代濮陽傳の五言絶句。『圓機活法』所収。友を訪い清談、飲茶を楽しむ詩句であるが、一句に茶、二句に詩、三句に談、四句に書の意を含め、雪と雲、鳥の足跡と篆書など文人の清雅の集いを象徴する。
2、濮陽傳（生没年不詳）の詳しいことは不明である。姓は濮陽、諡は傳、廣徳の人かと推定されるが、李天植、王世貞らとの交友から隆慶・萬暦年間（一五六七―一六二八）に活躍、『圓機活法』の編者とされている（仁枝忠）。
　乾山焼にも、山水図額皿「酒楼」・暮鴉図角皿「鴉」・梅華文注子「茶」など濮陽傳の詩讃があり、主題とした「禅僧・行脚僧・道士・隠者・隠士・高傑・訪友」他、草花竹木、禽獣など、詩句の選択は乾山個人の関心にも繋がりがあろう。
3、茶は、漢代「茶」から「茗」に転じたという。古代は葉茶を煮てそのまま喫する茶粥の形式であったとされ、飲茶の風習は、茶葉の生育、栽培の行われた南方に限定、北方へは唐代になり伝播したという。製茶・飲茶方法が考え出され、喫茶の場所・道具・作法も工夫、精神性を大事とするなど、宋代には士大夫精神のあり方とともに詩にも詠じられるようになってゆく。
4、唐代白居易は、茶はよく悶を散ずるというが（廬同）、その効果は少なく、萱草は憂いを忘れさせるというが（『茶経』）、ききめは微にして、酒にはかなわぬと詠じたが（『白氏文集』『和漢朗詠集』）、宋代茶は梅堯臣、黄庭堅*など、産地、効用、精神など多角的に詠うことが多くなる。梅堯臣は「聞進士販茶」と題した七言古詩を残すが、
　山園茶盛四五月　江南竊販如豺獺
とあり、科挙に合格、進士、また官僚となった者の茶の密売関与を非難、不正行為、彼らの表裏ある態度を批判した。当時茶は中国では専売品であった。需要の拡大は密売を招くなど、喫茶の風習の盛行であったことを裏づける。
5、水注、また瓶掛は色絵陶法である。詩讃を施し、梅花文を散らし、周囲には襷文を描くなど、文人趣味を意識した意匠である。

＊皎然（七―二〇？―？）唐代禅僧、姓は謝。字は清昼、浙江省呉興の人。謝霊運の同族という。詩に長じ、霊徹、『茶経』著者陸羽、書家顔真卿らとの交友が知られ、『詩式』『詩議』『詩評』などの詩論を著した。詩集『皎然集』が残る。

＊黄庭堅（一〇四五―一一〇五）北宋代詩人・書家。字魯直、号山谷道人。涪翁、江西省分寧の人。治平四年（一〇六七）の進士。国子監教授、校書郎、起居舎人などを歴任、政争に巻き込まれ、蘇軾と同じく屢々左遷、宜州（湖北省）に没する。詞詩にすぐれ、日本の五山僧に親しまれたが、書は豪放、気骨あるが行書・草書が伝えられる。『山谷集』『山谷琴趣外編』などが残る。

通圓（円）

通圓
（底）乾山　印なし

通圓

右、宇治橋の東に在り。傳え言うに、近世宇治橋の邊りに通圓法師という者あり。茶店を宇治川の側に構え、茶を諸人に施して結縁と爲す。近世、人有りて、茶店を其の跡に構え茶を賣り、往来の人の便を得る。而して茶店の中に棚を設け、古の通圓が像を置く。故に通圓茶屋と稱す。中華の茶を賣る家に廬同が像を置き、肉を屠するの家に樊噲が像を安ずること、之れの類か。耶か胡蘆を發するに堪えたり。

黒川道祐『雍州府志』九　貞享三年（一六八六）刊

【出典】

通圓茶店

通圓茶店在世宇治橋東　傳言近世宇治橋邊有通圓法師者　構茶店於宇治川側　施茶於諸人爲結緣　近世有人構茶店於其跡賣茶　往来人得便　而茶店中設棚置古通圓像　故世稱通圓茶屋　中華賣茶家置廬同像　屠肉家安樊噲像　之類乎　耶堪發胡蘆

黒川道祐『雍州府志』九　貞享三年刊

【語釈】

通圓　狂言の一つに「通圓」がある。宇治橋供養のために茶を点て死んだ僧侶の話であるが、「通圓茶屋」の名が伝承し（『宇治川両岸一覧』）、宇治橋のたもとには通行人に茶を売る店があったという。

結縁　世を救うために仏・菩薩が衆生に縁を結ぶ、また仏道に入るための縁を結ぶこと。

廬同　（七九〇？―八三五）。唐代詩人。号玉川子、河北省范陽また河南省済源の人。小室山に隠棲、李白の詩に傾倒、朝廷、政治を譏る詩が多く残る。茶を好み、「茶詩」は後の茶人に大きな影響を与えた。

屠　畜類などを殺し裂くこと。

樊噲　（？―前一八九）。漢代沛の人。犬を捕獲する屠狗を業としていたが、劉邦に従いその腹心の将となる。秦を攻めて功あり、鴻門の宴に項羽の謀士范増に殺されかけた劉邦を帷中に突き進んで守り、敵将項羽は「壮士なり」と賞し、酒と豚の生肉を与えた逸話が残る。のち劉邦からは舞陽侯に封ぜられた。

胡蘆　からからと笑う声にいう語。瓢箪。

【参考】

1、作品は未見であるが、陶法は銹絵と推測、讃は黒川道祐*著『雍州府志』を参照。讃が同一か否かは確認できていない。

2、通圓と称した人物には数人がおり、初代は平安末期の武人源三位頼政（一一〇四―八〇）の家臣、古川右内。隠居後太敬庵通圓政久と称したことに始まり、のち通圓を名乗る者が出現、宇治橋を守り茶を呈したとされる。茶の湯の流行期秀吉時代には宇治橋三の間の名水が知られていた。千利休の考案による釣瓶水指が伝世するが、江戸期には京都随一の分限者那波*素順、正斎兄弟が傲慢不遜、武家の真似事を咎められ、処罰として宇治橋架け替えを命じられた。通圓茶屋も折々幕府の手により普請されたと伝承するが「通圓」の意は、世間、出世間、何れへも出没自在の意とされる。

一服一銭一生涯

一服一銭一生涯　高遊外*
乾山模之　印なし

一服一銭一生涯、高遊外

高遊外は売茶翁柴山元昭・月海を想定。鎌倉期中国から渡来した飲茶法は日本に茶礼（茶の湯）を生み、施茶は寺院・僧侶を中心に大衆化の道を歩む。応永一〇年（一四〇三）、東寺南大門前には茶一服を銭一文で飲ませる者のあったことが記録に残る（『東寺文書』）。

『職人尽歌合』明暦三年

---

*黒川道祐（？―一六九一）江戸初期の歴史家。字道祐、名玄逸、号静庵・遠碧軒、広島、安芸の人。父は寿閑と称した藩医、母は堀杏庵の娘、自らも医家を継承、林羅山、堀杏庵に学ぶが、延宝元年（一六七三）官を辞して京都に在住、『雍州府志』『日次紀事』などを著した。

*那波素順（一六三三―九七）「京一番の有徳者」（『町人考見録』）とされた金融業那波一族の出身。素順（九郎左衛門祐伯・義山）は乾山と同じく直指庵独照禅師に参禅するなど、習静堂に集い詩を呈し、残された『義山艸稿』によれば書にも巧みであったことがわかる。那波正斎（一六三三―九二）は義山異母弟、十右衛門祐竹である。

*高遊外（一六七五―一七六三）肥前の人。江戸中期に渡来した煎茶法は日本に茶の大衆化を広めたが、一一歳で仏門に入り、五七歳頃還俗。高遊外は、京都において茶具を担い路傍に売茶、売茶翁と呼ばれたという。寺社門前・境内、橋のたもとには茶店が多くあったとされている。

僧は「一鉢生涯」、一鉢を生涯と為すとする。

筍

―中国―

筍は竹の地下茎の芽が生長したものである。竹の分布地に従うが、漢名は筍、和名は筍（竹の子）、西洋名はバンブー・シュート、季節は春を代表する。筍は雌竹に生じ、一旬（一〇日）と六日で土中に子をもち、妬母草の異名がある。地上に芽を出し一日に一メートルは伸びるとされ、二、三ヵ月後には竹となる。皮には毛の有無、斑点の有無、頂上に鬚毛の有るか否かなど、品種に因り相異するが、雌竹の根上の第一枝は必ず双生になっているという。食用には真竹（苦竹）・孟宗竹・布袋竹・淡竹・寒山竹・寒竹などがあり、地中にあるものを冬筍、地上に頭を出し始めた嫩い筍を鞭筍、冬筍を美味とし、掘り出す折にも硬くなることを避け、風のない日、早朝、露の上がる以前の筍を掘るという。異名には竹萌・竹子・竹旬・初篁・龍孫などがある。

故事の筆頭は「二十四孝」の孟宗と筍の逸話であろう。「孟母三遷」は子供を育てる環境を大事とする母の思い、「孟母断機」は孟子が修業半ばにして帰郷、母は織っていた機織りの布を断ち切り、何事も志半ばで止めることは使い道のない布に等しいと身をもって解らせた故事。「孟宗泣筍」はその母の病中、願いを叶えるべく季節はずれの雪中に母の欲する筍を探し求める逸話である。『詩経』「韓奕」には、周代諸国平定に出立する韓奕送別の宴に、鼈・膾鯉・竹の子・蒲の芽が饗されるなど、筍を食した例が早くも記され、白居易も筍を好み「食筍詩」と題した五言絶句を残している（「此州乃竹郷　春筍満山谷　山夫折盈槍　搶来早市鬻」）。

絵画では、『宣和画譜』に黄筌の「筍竹碧青図」「筍竹雛雀図」「筍竹鶉雀図」「筍竹湖石図」、黄居寀の「筍竹図」「竹筍雛雀図」、徐崇嗣の「筍竹雙兎図」などがあり、牧谿の蔬菜図巻にも筍がみられる。

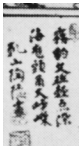
―日本―

日本では太加無奈・筍・竹の子などの文字を用いた。畿内、西国、なかでも京都山城嵯峨の筍を第一とし、第二は丹波、第三は若狭・豊後、次いで筑前・安芸の名を掲げる（『倭漢三才図会』）。短く太く、地中に埋まったものを好しとするが、日本でも多く淡竹・寒山竹・布袋竹などが食されたという。筍の皮を籜と称するが、真竹の籜は黄味を帯びて暗黒色の斑点があり、淡竹は赤味を帯びる。笠や履き物、包み物に利用されるが、竹笛と称する甘膚は火縄などに用いられた。

『古事記』『日本書紀』には、伊弉諾尊が妻の伊弉冉尊を追って黄泉国に入り、禁を破って妻の死骸を見て驚き逃げ帰る際、追っ手に向けて黒御縵・黒鬘を投げつける。それは蒲子・蒲陶（葡萄）と成り、湯津瓜櫛を投げつけると笋・筍に化した話が載せられている。鬘は髪飾りに使われたが、蔓延することから生命の木とされ、長寿を願って髪に飾る意、長く垂れ下がる意によって両耳の脇で束ねた古代成年男子の髪形をいうとも伝承。櫛は瓜形、竹製であったことから筍の生じた由縁となるが、伊弉諾尊は最後に桃の実三個を投げて難を逃れる。桃は仙木、邪鬼を払う霊力があり、中国では門上に貼る桃符（お札）や桃人（人形）、弓や杖などが作られていた。

『万葉集』には竹や篠、小竹を詠じた和歌がある。が、筍の歌はなく、平安期になり親竹・子竹、親子の比喩に用いられる。笋・筍の文字を用いて「じゅん・しゅん・たかんな」などと称している。

霧豹文斑輕点染　海龍頭角大峥嶸



霧豹文斑輕点染　海龍頭角大峥嶸
乾山陶隠書（印）乾山、尚古・陶隠

霧豹文斑輕く点（點）染す
海龍頭角大いに峥嶸

【出典】
乾坤一夜震雷聲　驚起林間凍笋生
霧豹文斑輕點染　海龍頭角大峥嶸
玉標未上雲霄去　金甲先承雨露榮
指曰南薫吹作竹　好看丹穴鳳來鳴
楊淙集古「竹木門・笋」『圓機活法』二十二

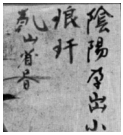
【大意】
まさに筍は豹のような文様、海龍のような頭角を誇る。

【語釈】
霧豹　「霧」は軽く細かい、黒いものの喩。ここでは豹の毛皮の文様をいうが、南山の豹はその文様の損なわれることを恐れ、霧雨には穴に蔵れるという。このことから隠れ居て名を成す・隠居して仕えないなどの意となる。文斑は斑文。
点染　色取る、染める。豹や虎の毛皮をいう。
海龍　怪獣の名。楊萬里、陸游らの詩によって龍孫など筍の異名となる。
峥嶸　高く険しい・奥深い様子。厳寒。才勝れた、また歳月の積み重ねなどの意もある。

【参考】
1、出典は笋（筍）を詠じた明代楊*淙の七言律詩。『圓機活法』所収。雷鳴轟き、地を割り筍の生ずるさま、やがて鳳凰の来たる竹に生長する様子などをいうが、「解籜」は筍が皮を脱することである。
2、筍は孟宗に示される如く孝行・真心が天に通じ冬に筍の生じた故事、武王に逆らい首陽山に入り蕨を食し餓死した伯夷・叔斎兄弟の故事など、ともに「孝」「忠」を表徴する。
3、額皿は銹絵陶法である。

＊楊淙（生没年不詳）江西省清江の人。嘉靖から萬暦頃の活躍と推測。『圓機活法』の参閲者であり、『群書考索古今事文玉屑』などの編者と推定されている。詳しいことは不明である。

陰陽孕出小琅玕



陰陽孕出小琅玕
乾山省昻（印）尚古・陶隠

（妙に陰陽を孕んで自から小陽）
陰陽孕み出す小琅玕

【出典】
妙孕陰陽自小陽　陰陽孕出小琅玕
牛羊角鋭穿苔碧　虎豹皮斑裹玉黄　①
中少虚心含造化　外多粉節集氷霜
他時勢拂層霄外　定惹丹山彩鳳凰
夏鋭題笋「竹木門・笋」『圓機活法』二十二
夏鋭詩「竹木門・竹笋」『詩學大成』十一

【大意】
陰陽、万物を生ずる二気を含み小さな美しい竹（筍）があらわれた。

【語釈】
妙　奥深く計り知れない。
陰陽　天地間にあって万物を生ずる陰と陽の相対する二気をいう。無限なもの、大きな気を表す語。
小陽　立春の頃農耕の時節を示すために小さな土牛を造り祥福を分けるとした故事。周代の儀式に因ると伝承。
琅玕　竹の異名。本来は宝石をいうが、竹の茎の青色に似ることから美しい竹を表す。美しい文章の喩にもなる。

【参考】
1、出典は笋を詠じた夏*鋭の七言律詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。両書には「鋭・銑」①の異字がある。
2、天地のあらゆる恵みを受けて小さな玉のような筍の生まれ出ることをいう。
3、長方皿は銹絵陶法である。

＊夏鋭の詳しいことは伝わらない。

葡萄

―中国―

葡萄は葡萄科の蔓性落葉高木・低木である。原産地はアジア西部、温帯地域の湿地を好み、栽培植物としては最古とされ、古代ギリシャ、ローマ時代に遡る。『旧約聖書』にはノアが葡萄畑を作るとある。漢名はウズベキスタンの言語に由来、一説にはペルシャ語、フェルガナ方言の音訳字とも伝承、蒲桃・蒲陶・葡萄、和名は漢名の音読みから葡萄（えびかずら）、西洋名のグレープ・バインはラテン語に基づくという。季節は秋を代表し、中国へは前漢代に西域へ派遣された張騫（？―前一二四）がもたらしたとし、一方『神農本草経』は古く甘粛省には中国種が生育していたことを伝えている。枝には節があり中空、茎は対性する蔓によって生長する。葉は互生、掌状の浅い切れ込み、鋸歯があり、裏面に密毛が生えている。花は初夏、円錐形の花序に五弁の黄緑色の小花をつけるが、秋にはそこに珠のような果実が実り、房状に下垂して成熟する。色によって白色の水晶葡萄、紫色の紫葡萄、緑色の緑葡萄の品種に分かれ、形によっては細長いものを馬乳葡萄、円いものを草竜珠という。野生種には山葡萄・蘡薁（えびづる）があり、果実は小さいが生食、酒造、薬用のほか加工品に用いられる。異名には索桃・龍須・僧眼・蔓胡桃などがある。

葡萄は、前漢代、ギリシャから西域を通じ中国に渡来（中国種の認識は一部に限定）、「葡萄の酒有り、善き馬乳」（『史記』）など、すでに葡萄酒の親しまれていたことがわかる。『蜀本草』には「葡萄有似馬乳者」、『遵生八牋』には葡萄酒の製法があり、文人も好む酒の一種であった。

葡萄唐草など文様は六朝末期に成立、唐代には鏡の意匠に現れるが、日本へも舶載、奈良時代には軒平瓦の文様などにも使われた。絵画では、宋代趙昌の「葡萄枇杷図」「葡萄栗鼠図」、元代には日観（子温）の「葡萄図」、明代には徐渭の草花図にみられるが、日本では狩野探幽、松花堂昭乗、伊藤若仲などの粉本、絵画が伝えられる。

―日本―

中国から渡来したが、詳しい時期は不明である。平安末期には棚を設え栽培が始まったとされ、薬用・食用、後には酒造りが興り、蔓は縄作りなどに利用された。棚による栽培は日本独自の法ともいうが、古くは衣比加都良乃美・蒲桃・葡萄葛などの名で呼ばれ、北国には少なく、甲州産を第一として、次いで駿河、また河州富田林産を好しとした。保存法は摺れ合わないよう桶に入れ、風湿を避けて高所に置くとするが（『倭漢三才図会』）、山葡萄は野生種、衣比豆留・吾由美とも称し、四国から本州北方・北海道・サハリンなどの山中に分布。葉は秋に紅葉、花は五弁の黄緑色の小花、果実はえんどう豆程度の黒い小さな粒である。

古代、長寿を願い髪に飾った黒い蔓草、黒御縵（黒鬘）を投げて蒲子（蒲陶）が生まれたとあり（『古事記』『日本書紀』）、蔓草には呪術の意、鬘は頭髪のかつらに同義、当時の男子の髪形を表すともされる。天照大御神は、荒々しい須佐之男命には髪を解いて御縵に巻き男装武装して相対したと神話は伝える。謡曲では神事・修羅・女・狂・鬼畜物の演目五種のうち、三番目に演じられる女物には鬘物の別称がある。『万葉集』には蔓類の総称として葛はあるが、葡萄はなく、絵画では南北朝期玉澗、牧谿画を学んだ愚溪右慧（足利義詮・義満時代に活躍）が得意とした。異名には蒲萄・葡萄葛・蒲桃などがある。

竜鬚馬乳

竜鬚馬乳　銘なし　印なし

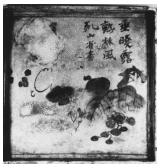
竜（龍）鬚馬乳

龍鬚馬乳

「百果門・葡萄」『圓機活法』二十一

『詩學大成』十

垂暁露　熟烝風



垂暁露　熟烝風

乾山省書（印）乾山・深省

暁露に垂れ、烝（秋）風に熟す

垂暁露　熟秋風

「百果門・葡萄」『圓機活法』二十一

【大意】

葡萄の蔓は龍の鬚、酒は馬乳のように美味。

【語釈】

竜鬚　「竜」は「龍」の古字。龍のひげ。よい相貌をいう。「鬚」は顎のひげ。「鬢」は耳際の毛。「髭」は鼻の下のひげ。「髯」は頬ひげである。

馬乳　馬の乳。古は葡萄の実を表し、酒を製した。葡萄の異称。

【参考】

1、出典は葡萄の大意を詠じた四言句。『圓機活法』『詩學大成』所収。

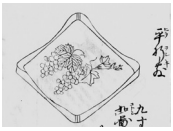
2、「龍鬚・馬乳」は唐代韓愈の七言絶句にも、

若欲満盤堆馬乳　莫辭添竹引龍鬚（『古今事文類聚』）

とある。一般に美味なることを龍と馬を用いて表現し、葡萄の蔓と果実を表すが、元代、臨済宗禅僧即休*契了の和僧愚中周及に与えた偈には「龍鬚馬乳顆纍纍」とあるとされ、「顆」は粒、「纍」は纏わるの意という。

3、詩は秋の風趣を伝えるが、垂下した房状の実によって龍珠の名称、葡萄酒など西域からもたらされた美酒の神秘性、それに酔いしれる異国情趣などが興味の対象になったとされる。

4、角皿は銹絵陶法である。



葡萄図平折敷『献立指南』元禄九年刊（一六九六）

【大意】

夏、朝露に湿り、秋風とともに熟成する。

【語釈】

暁露　「暁」は「曉」の俗字。朝露。

垂　垂れる。朝露が滴るように葡萄の実の垂れるさま。

熟　実る・熟れる。果実などが善く生育する。

【参考】

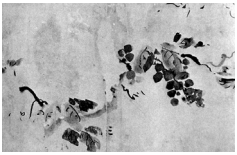
1、出典は葡萄の大意を詠じた六言句。『圓機活法』所収。黄山谷の七言律詩には「夜愁風起瓢星去　暁喜天晴綴露珠」（『全芳備祖』）とある。

2、葡萄は早くから好まれた果実である。代表的な成語には以下がある。

一名馬乳　或名水晶
露滴馬乳　風起龍鬚

3、角皿は銹絵陶法である。

葡萄図　日観*筆　元時代　サンリツ服部美術館



葡萄縮図　狩野探幽

葡萄図は、北宋代に始まり（『宣和画譜』）、南宋代廉*布の描く図が残る。元代には日観による水墨画が伝世、墨の濃淡により枝・蔓・葉を軽く、果実をくっきりと描写するなど、日本では南北朝期画僧愚溪右慧が得意とした。玉澗、牧谿の画風を学び、形似から写意へと、下垂する蔓を横に流すなどの特徴がある。

竹葡萄図　雪村

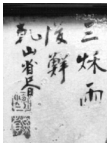
＊即休契了（一二六九―一三五〇）元代禅僧。姓名不明。徑山虎巌休の法嗣。日本から入元した愚中周及は曹源寺月江正印に参じ、金山（徑山）に上り即休禅師に謁したという。

＊愚中周及（一三三四―一四〇九）室町期の臨済宗禅僧。美濃岐阜の人。夢窓疎石に師事、一九歳で入元、曹源寺の月江正印に参じ、金山に上り即休契了の法を嗣ぎ、帰朝して足利氏の帰依を得る。

＊日観（生没年不詳）宋末元初の画僧。字仲言、号知歸子・日観、諡子温、江蘇省松江の人。宋の滅亡後杭州西湖の瑪瑙寺住したとされ、水墨画に長じ、葡萄図を得意とした。

＊廉布（生没年不詳）宋代士大夫・画家。字宣仲。山水画、墨梅・墨竹・古木などに巧みとされる。

三秋雨後鮮



三秋雨後鮮
乾山省㫖（印）乾山・深省

（九月霜前に熟し）三秋（秋）雨後に鮮やかなり
九月霜前熟　三秋雨後鮮

「百果門・葡萄」『圓機活法』二十一『詩學大成』十

【大意】
（陰暦九月霜の降りる前に実が熟し、）秋の三ヵ月雨に洗われ色も鮮やか。

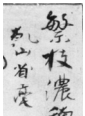
【語釈】
九月　「くげつ」とも読み一年の第九の月また九ヵ月をいう。
霜前　霜が降りて万物の枯れてしまう前。二十四節気では陰暦九月中気に霜降となる。
三秋　秋三ヵ月、九〇日間の意から九秋ともいう。初秋・中秋・晩秋の三秋。三度の秋、三年の意もある。
雨後　雨の降った後・雨上がり。
鮮　鮮やか・新しい・潔い。

【参考】
1、出典は葡萄を詠じた五言詩。『圓機活法』『詩學大成』所収。花は五弁、四、五月頃に開き、花後房状の果実をつけるが、陰暦秋三ヵ月して豊かに熟す葡萄の新鮮さをいう。雨は露、露は葡萄の果実とも考えられ、霜によって痛めつけられる前に熟すさまの意。
2、「三秋」は「九秋同慶」など秋の豊作を喜ぶ意にも用いられる。角皿は銹絵陶法である。

葡萄図　大岡春卜*
『和漢名画苑』寛延三年（一七五〇年刊）

葡萄図は中国水墨画、伝統画題の一つである。日本でも画僧、絵師ほか、工芸では高台寺蒔絵、織部焼に描かれ、江戸時代、画譜には定型化した図が専らとなる。子孫繁栄、家内安泰など吉祥の意から広く巷間に人気を得た。

繁枝濃穂



繁枝濃穂
乾山省毫（逆印）尚古・陶隠

繁枝濃穂（はんしのうほ）
繁枝濃穂

「百果門・葡萄」『圓機活法』二十一

【大意】
よく繁り、色よく熟した葡萄の見事さよ。

【語釈】
繁枝　繁った枝。沢山の枝。
濃穂　たわわに実をつけた葡萄の房。「濃」は葡萄が色濃くよく熟し、「穂」は稲などの実の結ぶ意であるが、豊かに実をつけた葡萄の房。

【参考】
1、出典は葡萄の大意を詠じた四言句。『圓機活法』所収。豊かに蔓を伸ばし実をつけた葡萄の見事さ、本質の貴さをいう。
2、葡萄酒は西域からもたらされた酒であるが、中国でも早くから製造、唐代王*翰は七言絶句「涼州詞」に以下のように詠じている。

葡萄美酒夜光杯（ぶどうびしゅやこうはい）
欲飲琵琶馬上催（ほっいんびわばじょうさい）
酔臥沙場君莫笑（すいがさじょうくんばくしょう）
古来征戦幾人回（こらいせいせんきじんかい）

葡萄の美酒を玉杯に注ぎ、飲もうとすれば早く飲めよと琵琶が馬上でかき鳴らされる。荒涼としたこの砂漠に酔いつぶれても君よ笑ってくれるな、かつて戦場から幾人の者が生きて帰ったというのかとある。葡萄も琵琶も西域から伝えられたもの、涼州は甘粛省武威市とされ、前漢時代武帝が匈奴を追い払い設けた都市である。シルクロードの一部であるが、唐代には西域統治の基地となり、荒涼として草木のないことでも知られていた。辺境の防衛拠点、異国情趣溢れた辺塞都市であったという。
3、長方皿は銹絵陶法である。

---

*大岡春卜（一六八〇―一七六三）江戸中期の絵師。名愛翼・愛董、号雀叱・翠松、大坂の人。狩野派、明清画に学び、大覚寺門跡性応法親王の庇護を受け、同寺坊官、法眼となる。画本作家としても知られ、『明朝紫硯』『画本手鑑』『画巧潜覧』などを著し、『芥子園畫傳』を翻案した色摺版画が伝えられる。

*王翰（六八七？―七二六？）唐代詩人。字子羽、山西省太原の人。景雲元年（七一〇）の進士、宰相張説（六六七―七三〇）に認められ重用、が、蠹落、酒を好み、名馬を飼い、言動が派手であったことから張説失脚後、河南また湖南省道州へ左遷、任地において没したという。絶句に長じ、辺塞詩にすぐれ、「涼州詞」は名作として広く愛誦されている。

茄子

―中国―

茄子は茄子科の一年草、熱帯では二年草、原産地はインドである。熱帯から温帯地に生育、中国、ペルシャ、北アフリカからヨーロッパへと伝播。漢名は茄子、和名は茄子また中酸実の略から茄子、西洋名は形状からエッグ・プラントという。季節は夏を代表し、二月に種子を蒔き、夏から秋に果実を収穫、茎は高さ二、三尺に伸び、葉は互生、やや大きな楕円形、夏に浅い切れ込みのある五裂の紫色の花を咲かせる。萼の中には蔕があり、蔕は果実（茄）を包み込み、茄は肥大して茄子となる。紫茄・青茄・白茄、扁平・丸・長茄子などの形状、小さな茄を沢山つける錫杖茄、蔓をもつ藤茄（丁香茄）、その他渤海茄、蕃茄などの種類がある。二十四気中小満（現五月下旬）前後に摘み取るが、食用、薬用、異名には落蘇・七斑・紫瓜・崑崙瓜・草鼈甲などがある。中国へはチベットから崑崙山脈を経て渡来したという（『斉民要術』他）。

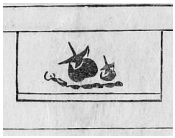
―日本―

日本へは奈良時代に中国から移入、「正倉院文書」『万葉集』また『延喜式』には栽培、利用法があり、古くは奈須比・薮茄子・落蘇などと呼ばれていた。江戸時代には品種改良、調理、薬用方法も種々考案。『夫木和歌抄』には「秋茄子はささのかすにつきまぜて　よめにはくれじ棚に盛るとも」（『倭漢三才図会』）とあり、糟に漬けた秋茄子のうまさはのちに嫁に食わすなとした諺の本居となった。茄子は茎・葉・花も紫色の濃淡で統一、深みのある艶、形状の面白さなど、俳句、狂歌、絵画、工芸の文様意匠にも応用された。

是一個銕昆崙　不落吹拂不動

是一個銕昆崙　不落吹拂不動

日本乾山省（花押）巾着型



『雪月集』　茄子図

【読み下し】

是れ一個の銕昆崙　吹いても落ちず、拂えども動ぜず　（出典不明）

【大意】

まさに鉄の塊、吹く風にも落ちず動ぜず。（情・識到り難く、分別し難き心地をいう。）

【語釈】

銕　「鐵」の古字。「鉄」は「鐵」の俗字。

崑崙　茄子の異名。鉄丸。「昆侖」に同じ。中国西方にある霊山。西方楽土、西王母の住む処とされ、周の穆王もここに宴を張ったと伝承。玉の産地、黄河源、今のヒマラヤ山脈に連なる外辺の山地をいう。仏家では動揺しない・真の大丈夫、「鉄崑崙」を仏心の尊さに喩える。

不動　煽動するものに対して動かされない心。

【参考】

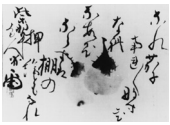
1、出典不明。『芝田録』『全芳備祖』には、隋煬帝改茄子　為崑崙紫瓜

とある。隋代煬帝が大業四年（六〇八）、茄子に崑崙紫瓜の名を付けたとされ（『長物志』）、漢代に蔬菜、栽培は宋代に始まるとする。禅林では、崑崙嚼生鐵・崑崙劈不開・崑崙著鐵袴など、鉄丸崑崙を情識到り難く、分別し難き心地の形容、不動心を表徴、崑崙山が鉄の袴をはいて動けぬ喩など妙悟の見事さと解釈する。

2、江戸時代「一富士二鷹三茄子」の初夢は、富士山は類い希なる高さ、鷹は掴み取り、茄子は成すの意から縁起が良いと図像化された。光琳の絵画、紋章にもあり、三茄子・三割茄子・五茄子・葉付丸茄子・茄子桐などの図案が残る。

3、四方水指は銹絵陶法、崑崙・昆崙の異字。

光琳　茄子図画稿（小西家文書）



乾山絵画　茄子図画讃

参考文献

野崎誠近『吉祥圖案解題』「支那風俗の一研究」平凡社一九四〇年刊
牧野富太郎著・本田正次編『原色牧野植物大図鑑』北隆館一九八二年―八三年刊
木村陽二郎監修『図説草木辞苑』柏書房一九八八年刊
『図説花と樹の大事典』「植物文化研究会雅麗」柏書房一九九六年刊
前野直彬編『唐詩鑑賞辞典』東京堂出版一九七〇年刊
『宋詩鑑賞辞典』東京堂出版一九七七年刊
島田修二郎・入矢義高監修『禅林画賛』毎日新聞社一九八七年刊
王伯敏著・遠藤光一訳『中国絵画史事典』雄山閣出版一九九六年刊
陳夢雷編『古今図書集成』一七〇〇―二五年完
小林宏光『中国の版画』「唐代から清代まで」世界美術双書　東信堂一九九五年刊
佐藤武敏『中国の花譜』東洋文庫六二二　平凡社一九九七年刊
小杉放庵・公田蓮太郎『芥子園畫傳』アトリエ出版社一九七三年刊
大槻幹郎『八種画譜』「解説」美之美出版一九八七年刊

訂正事項

本誌『人文科学研究』四五号「乾山の伝記―年譜を礎として―」
二三頁二三行『町人考見録』（誤）―『町人考見録』（正）
本誌『人文科学研究』四七号「乾山焼　画讃様式の研究（一）山水・人物・禽獸」
八二頁最下段八行「嘉吉・萬暦」（誤）―「嘉靖・萬暦」（正）

おわりに

花を愛でることはいづれの文化でも富裕層の特権であった。

仏教の渡来した六朝期には中国にも供花が始まり、唐代に観賞、文人の擡頭する宋代には、文房において詩を詠み、書・画を嗜み、読書に疲れて庭をめぐるなど、草花竹木は士大夫らの暮らしに密着、明代にそれらの趣味は形式化された。様式はそのまま隠棲時代の乾山の日々に重ねられるが、「習静堂」には禅堂付近に嘉樹参差、茶室近くに松・竹・梅・柳、裏庭花壇には菊や鶏冠（鶏頭）、畑には落蘇（茄子）・土芝（里芋）が種えられていた（『習静堂記』）。建物と配置物、池・橋、亭に至るまで中国文人の志したものに随うが（『長物志』）、万般を異朝に範を見出し、元禄初期隠士として覚悟を決めた緒方深省・乾山の姿が浮かぶ。四季の草花は読書に疲れた心を和ませ、茄子や里芋は救荒の策として文人の備えであった。「煨き得て芋頭熟すれば、天子も我に如かずと」など、王者の楽しみも兼ねており、種まき、水遣

り、草取りにも乾山のやさしさが伝わってくる。光琳意匠、生家の呉服反物にも草花は満ち、隣家仁清窯には色彩豊かな色絵陶が溢れていた。墨一色の対局は色絵である。表現者は直観力、努力と忍耐が求められる。乾山兄弟は幼少時「能」を学ぶ。長兄藤三郎・宗鑑は書家、次兄光琳は絵師となり、乾山は文人として詩を詠み、「記」を著し、禅を学ぶ。相異はあるが、三者に共通したものは古典である。古典は究めるべき志ある者の必ず行き着くところである。奇抜なものはいづれ厭きられる運命にある。古典は一流、一流は個性的にして普遍的、時代の波に磨き洗われ耐え抜いたものである。

乾山焼もやきものの古典となった。

本稿掲載に当たり、出光美術館・梅澤記念館・東京国立博物館・鉄竹堂資料館・根津美術館・藤田美術館・大和文華館・洛東遺芳館・楽美術館・黎明教会・大徳寺・各遺跡調査会・ＭＩＨＯ　ＭＵＳＥＵＭ・ＭＯＡ美術館・フリア美術館・ボストン美術館・ホノルル美術館・モントリオール美術館・ヴィクトリアアンドアルバート博物館・クリーブランド美術館・ギメ東洋美術館・アメリカ国立自然史博物館・シアトルアジア美術館・大英博物館・台北故宮博物院・ネルソンアトキンス美術館・フィッツウィリアム美術館・プリンセスホッフ工芸博物館・メトロポリタン美術館・ロイヤルオンタリオ博物館。文献、図書に関しましては大阪府立中之島図書館・国立国会図書館・東京大学東洋文化研究所図書館・一橋大学図書館・広島市立図書館・早稲田大学図書館・国際基督教大学図書館のみなさまに多大なお力添えを頂いた。ＩＣＣ所長佐野好則氏、美添真樹氏、山口京一郎氏、土屋宗一氏のご理解、常に変わらぬ思いやりに深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

by Zen monk painters Tesshu Tokusai and Gyokuen Bonpo. From the late 14th century, these subjects came to exhibit brushwork and compositional traits distinct from their Chinese models. Furthermore they were now painted as small hanging scrolls in order to fit the newly evolved Japanese tokonmoma. Imported Chinese handscrolls were cut into sections for the same reason. In this compact format, ink flowers subsequently became a popular subject for tea ceremony display (*chagake*).

From the mid-17th century, connoisseurship of Song-Yuan and Muromachi paintings became a central and self-legitimizing activity of the Kano family of painters. Their appraisals of are preserved in the form of annotated sketches or *shukuzu*. These sketches, which included floral subjects, subsequently served as school models under the name of *funpon*. In addition to serving as components for larger pictures, such models were readily transferable to small-format surfaces such as fans (*senmen*) and album pages (*gajo*). The range of possibilities and modularizing tendency can be seen in Kano Tsunenobu's (1636-1713) *Kara-e tekagami* and *Kara gakan*, albums of his copies of Chinese paintings.

From the late 17th century, as painting became a popular pastime, woodblock-printed painting manuals (*gafu*) began to circulate, initially in the form of Chinese editions or their Japanese reprints. From the 1720s Kano-school *funpon* were also collected into painting manuals, notably *Ehon shaho bukuro* (1720) and *Gasen* (1721).

Kenzan conceived his early efforts in this mode as a ceramic version of the literati-inspired "three perfections", that is, poetry, painting and calligraphy. Since these were produced in sets of assorted themes, his patrons surely associated them with the painting album; the thematic preferences, simple compositions, and "boneless" strokes could equally evoke the *chagake* or *gafu*. In short, there was no deficit of allusions, both classical and contemporary.

We should not neglect the fact these dishes were intended for practical use. The early collaborations of Korin and Kenzan were made in the comparatively large form of *suzuributa*, a square or rectangular tray used for serving snacks or sweets in intimate gatherings. However from the second decade of the 18th century, smaller round, square or rectangular dishes were produced in much greater numbers, presumably filling the role of *mukozuke*, a dish placed on the far side of the tray used for individual servings, or as side dishes to supplement a main serving. A few large sets remain, positioning them as stock items in the higher end of the food and entertainment industry. Even these, however, maintain an improvisational look central to the "literati" ethos. The users presumably enjoyed identifying the texts and images and trading their knowledge with companions.

Keywords: Edo-period Japanese ceramics; Ogata Kenzan; Kenzan ware; Rinpa; Chinese poetry in Japan
近世日本陶磁、尾形乾山、乾山焼、琳派、詩画軸、画讃、花鳥画

Abstract

Iconography of Kenzan Ware:
Chinese Poetic Themes (2): Flowering Plants and Trees

This article is the second of two installments covering the iconography of Kenzan-ware dishes decorated with monochrome painting and Chinese poetic (*kanshi*) inscriptions, or the so-called "*gasan*" style. The most celebrated of these specimens are the square dishes with poetry inscribed by Ogata Kenzan (1663-1743) and painting by Kenzan's older brother Ogata Korin (1658-1716). These were made in limited numbers in the late Hoei (1704-1711) and Shotoku (1711-1716) eras, but were mass-produced from the Kyoho era (1716-1736) though the middle of the eighteenth century. Collectively these works are recognized as the premier example of Kenzan's expression of the literati ethos.

The poetic and pictorial traditions of flowering plants and trees are centered around the mobilization of select species, using their fragrance, form, and seasonality as auspicious and moral symbols. Such deployments are in evidence as early as the Warring States era but gained critical mass among the scholar-official elite of the Northern Song dynasty. Plant allusions were not only aesthetically appealing; they became a political necessity in an age where direct moral criticism was difficult. Worship of literati heroes and their plant avatars became an iconographic system in the Yuan dynasty, as this group struggled to affirm its identity in the midst of Mongol domination. This sensibility was transmitted to medieval Japan and came to flourish in the Five Mountain or Gozan monastic culture. With the popularization of sinophilia in the 17th century, Chinese-derived floral codes became a staple of literary and artistic representation in Japan. Thus in a 1690 description of Kenzan's retreat, where author Gettan Docho likens the young Kenzan to the celebrated recluse Tao Yuanming, there is also an obligatory reference to (Tao's bio-alias) "chrysanthemums blooming on the fence" in the garden (*Gazanko*, 1690). In the form of poetry excerpts, these tropes were increasingly available in Japanese editions of Chinese anthologies; the most popular of these, the Wanli-era *Yuanji huofa* (J: *Enki kappo*), is the source for most of the inscriptions in Kenzan ware.

The painted decoration on these dishes also evokes a multi-layered tradition, which in a general sense we might call "ink flowers." Documents reveal how Northern Song literati dabbling in monochrome bamboo and plum came to be highly regarded as an expression of personal character and refinement. In the Southern Song and Yuan dynasties, ink flowers became firmly established as a mark of literati identity. At the same time, Chan-Zen painters were fond of creating ink impressions of plants and vegetables. Surviving paintings in the style of the Chan monk Muqi, or by the Yuan literatus Zhao Zhong, use the handscroll format to show a succession of ink flora against a blank background—called *kakizatsukan* or handscroll of miscellaneous flowers.

From the Kamakura period ink flowers came to be painted in Japan, notably